

# 島根県の民謡

民謡緊急調査報告書

島根県教育委員会

## はじめに

近年の急激な社会状況の変化により、古くから日本人に歌われてきた民謡は、急速な衰退を見せています。

本県では、昭和五十九・六十年年度の二か年にわたり県下に伝承されている民謡を調査し、報告書にまとめました。

本書が今後の民謡の保存、伝承や教育の場で少しでも役に立つことを願っています。

終わりに、調査にあたりご尽力いただきました調査委員、調査員各位、調査にご協力いただきました市町村教育委員会並びに保存会・伝承者等、県民の皆様に厚くお礼を申し上げます。

昭和六十一年三月

島根県教育委員会

# 凡例

- 一、本書は、島根県教育委員会が昭和五十九・六十年年度の国庫補助事業として実施した「島根県民謡緊急調査」の報告書である。
- 二、全体の構成は、調査の実施概要・島根県の民謡とその特色・調査民謡の概況・地区別調査民謡とその概観からなり、地区別調査民謡は市町村ごとにまとめたうえ種類順に掲載した。これらは、現地調査員から報告のあった調査票と録音テープをもとに、調査委員が整理しまとめたものである。
- 三、掲載した曲は、まず市町村番号を付したのち、曲名・伝承地・伝承者・調査員氏名・歌詞の順で記載した。伝承者が複数の場合は、他〇名と記した。長文にわたるなどの歌詞については、各地区調査委員の判断で途中略したものがある。またできるだけ常用漢字を用いるよう努めたが、もとより十分なものでないことをあらかじめ断っておきたい。
- 四、本書の執筆は、調査委員が分担して行い、編集は県教委文化課で行った。この校正に当たっては、酒井董美・金山浩子のお二人に多大なご協力をいただいた。記して謝意を表するしだいである。

# 目次

はじめに	
一、調査の実施概要	一
二、島根県の民謡とその特色	七
三、調査民謡の概況	一〇
四、地区別調査民謡と概観	一三
(一) 松江地区	一三
(二) 出雲地区	一〇〇
(三) 浜田地区	一〇一
(四) 益田地区	一四八
(五) 隠岐地区	三二九

# 一、調査の実施概要

## 1 調査の目的

島根県内には古くから伝承されてきた多くの民謡があるが、これらはそれぞれの地域の歴史や風土に根ざし、生活心情や生業の姿を伝える大切な文化遺産であり、今後とも長く伝えていくべきものである。

しかし、近年における産業や生活の急変によって衰微に瀕しつつある。

そこで、現在、何とか伝承されてきている民謡の実態を緊急に調査し、記録にとどめるとともに、その成果を地域の文化活動や社会教育、学校教育の場で生かし、今後の各種の利用に役立てるなど、その保存・伝承に資するようにすることを目的とするものである。

## 2 調査の対象

### (1) 調査地域

県内五十九の全市町村を対象とし、調査は便宜上教育事務所単位である松江・出雲・浜田・益田・隠岐の五地区に分けて実施した

(図1参照)。

### (2) 対象とすべき民謡

ア、それぞれの地域において古くから伝承されてきた民謡で、現在なお伝承されているもの(民謡の節まわしを忘れているもの

でも歌詞を記録しているものは対象とした。ただし、歌詞集に掲載してあるのみで伝承の全くとだえているものは除外した)イ、民謡の種類と分類は次のとおりとした。

### A 労作歌

a 農耕に関するもの(草刈り歌、田植え歌、田打ち歌、稲

刈り歌、麦打ち歌、粉挽き歌など)

b 山樵に関するもの(杣歌、木おろし歌、木挽き歌など)

c 漁撈に関するもの(船卸歌、船歌、網おこし歌、網曳き歌、鯨歌、浜歌、塩焚き歌など)

d 諸職に関するもの(大工歌、綿打ち歌、茶摘み歌、酒屋歌、油絞り歌、たたら歌、地搗き歌、紙すき歌、糸くり歌など)

e 交通、運搬に関するもの(木流し歌、船頭歌、馬子歌、牛追い歌、木遣り歌、橇歌、道中歌など)

### B 祭り歌、祝い歌

a 祭りに関するもの(神迎え歌、神送り歌、宮入り歌など)

b 祝儀に関するもの(嫁入り歌、家移り歌、酒盛り歌、年祝い歌など)

c 行事に関するもの(正月歌、鳥追い歌、亥の子搗き、もぐら打ちの歌、綱曳き歌など)

### C 踊り歌・舞歌

a 踊り歌・舞歌(神楽歌、盆踊り歌、風流歌、狂言歌な



ど)

D 座興歌

a 座興歌(酒宴の折の興歌の類 例「磯節」「博多節」など)

E 語り物、祝福芸の歌

a 語り物(瞽女歌など)

b 祝福芸の歌(万歳、大黒舞の歌など)

F 子守り歌

G わらべ歌

a 遊戯歌(鬼ごっこの歌、手まり歌、お手玉歌、絵かき歌、指遊び歌など)

b 唱えごと(占い、まじないなどのわらべ言葉)

(註) わらべ歌については、六十歳以上の人(大正の終わり頃までに生まれた人)の伝承しているものに限った。

ウ、留意した事項

① 職業的作詞、作曲家の創作にかかるもの、あるいは御当地ソングといわれる〇〇音頭の類は除外した。

② できるだけそれぞれの土地に根ざしたもの、また、それが本来の用途に近い機会に歌われているものを対象とした。

③ 同名曲がいくつかある場合は、近年の三味線、尺八、太鼓等の伴奏楽器入り以前のもの、また、お座敷歌化する以前のものを対象とした。

3 調査の内容

(1) 文書による調査

調査票による伝承民謡の調査

伝承民謡のそれぞれについて、次の諸事項を記した調査票により調査した。

- 名称 ○現地での歌の種類 ○伝承地 ○伝承者及び伝承状態 ○歌われる機会及びその日時、場所 ○歌う人の人数及び歌い方 ○歌う人の資格 ○歌の音楽的特色 ○歌に伴う楽器の有無 ○歌に伴う身体の動き ○歌詞 ○歌にまつわる由来等 ○録音の有無 ○採譜の有無 ○古文献及び参考資料

イ、風土等民謡の背景調査

調査地域の地勢風土、行政区画の変動、交通、産業の変遷に関連する民俗伝承(祭礼、年中行事その他)など民謡の背景を調査した。

ウ、従来の調査状況

従来の調査報告書、録音(テープまたはレコード)、採譜の状況を調査した。

(2) 録音テープによる収録

ア、録音対象

原則として調査票による調査の際に同時に録音を行うものとした。

イ、録音方法

収録テープはカセットテープを原則とし、そのテープは60分ものを使用した。テープは文化庁（東京国立文化財研究所）及び島根県で保管することとした。

ウ、収録時の配慮

① 収録技術

収録に当たっては、次の点に注意した。

- 自動車の騒音、扉の開閉音、人の足音、テレビ、ラジオの音、その他雑音の入らないよう場所について配慮した。
- マイクは外部マイクを原則とし、適切な音量で収録できるようにその位置、配置を配慮した。

② 演唱（奏）者への配慮

- 録音途中で歌詞等を忘れてたり、間違ったりしないように事前に十分思い出しておいてもらうようにした。
- 収録に当たっては単に歌だけでなく、それに伴う所作や踊り等の身体の動きも合わせて行ってもらった。

③ 民謡以外の挿入

- 将来の便を配慮し、各曲の頭に音又のA（イ）音を挿入した。

○ 民謡の名称、演唱（奏）者名のクレジットを挿入した。

エ、収録記録票の作成

次の諸事項を含む収録記録票を作成した。

- 名称
- テープ番号
- 伝承地域及び収録場所
- 収録年月日
- トラック
- カウント
- 速度
- 録音機名
- 演唱

（奏）者氏名・生年月日・性別・職業・住所・生地・環境・音楽的素養 ○備考（音楽的記事、身体の動きに関する記事）  
オ、市町村別の編集

録音テープの編集は、市町村別とした。

(3) 写真による記録

民謡の実演場面、特殊な楽器その他説明を要するものについては写真を作成し、調査票の写真の欄に添付した。

#### 4 調査の経過

昭和五十九年四月二十五日東京で開催された当年度民謡調査実施都道府県担当者打合せに出席して、文化庁から調査の説明と指導を受け、六月十三日、松江にて第一回調査委員打合せを開催し、調査内容及び実施計画について検討・協議を行った。その後、七月中に各地区調査員を集めて、地区ごとに調査説明会を開催し、現地調査に入った。翌年三月十九日には第二回調査委員打合せを開催し、それまでに提出された調査票・録音テープをもとに、調査経過報告及び今後の調査について協議した。第二年次目に入り、四月二十五日、文化庁開催の民謡調査実施都道府県担当者打合せに再び出席するとともに、八月六日、第三回調査委員打合せを開催して、調査報告書の作成及び録音テープの編集等について検討・協議した。その後、調査委員による現地調査も終え、昭和六十一年三月七日の第四回調査委員打合せにおいて、調査の最終報告及び調査報告書作成等の最終打合せをし、併せて調査の総括を行った。

## 5 調査の主体

島根県教育委員会

## 6 調査委員・調査員

調査委員七名、調査員五十六名を委嘱し、調査委員は各調査地区のとりまとめと執筆、テープ編集、および全体の総括を、調査員は各市町村ごとの現地調査を担当した。調査委員・調査員氏名と担当内容は次のとおりである。

主任 勝部 正郊 島根県文化財保護審議会委員、民俗学、松  
 調査委員 馬庭 悟 元高等学校教諭、声学、出雲地区担当  
 〃 山田 陽一 島根大学講師、民族音楽学、浜田地区担当  
 〃 大庭 良美 日原町歴史民俗資料館勤務、民俗学、益田  
 地区担当  
 〃 酒井 董美 松江工業高等学校教諭、民俗学、隠岐地区  
 担当  
 〃 牛尾三千夫 島根県文化財保護審議会委員、民俗学、総  
 括指導  
 〃 水野 信男 兵庫教育大学助教授、民族音楽学、総括指導

## 調査員

目次 翠 (松江)	小笠原好助 (浜田)
杉原 明 (出雲)	石川 寿保 (益田)
原 良橘 (出雲)	勝部 義夫 (大田)
清山 恒吉 (安来)	工通 忠孝 (江津)
加納恵美子 (平田)	袖本 静代 (鹿島)
矢田 秀雄 (島根)	福岡 佳章 (美保関)
岩佐 邦康 (東出雲)	安達 進 (八雲)
小室 隆寿 (玉湯)	馬田 実 (安道)
岩田 弘 (八束)	井上 明 (広瀬)
梶谷 範敏 (伯太)	植田 恒雄 (仁多)
糸原 正徳 (横田)	内部 文吉 (大東)
伊原 清 (加茂)	浅沼 博 (木次)
片寄 勇 (三刀屋)	黒角 高義 (吉田)
安食 重信 (掛合)	春日 智明 (頓原)
倉橋 清延 (赤来)	柳楽 文雄 (斐川)
田中 迪亮 (佐田)	山本 一男 (多伎)
森山 弘昌 (湖陵)	水師 重吉 (大社)
重田 保之 (温泉津)	勝部 義夫 (仁摩)
天津 角郎 (川本)	尾原 芳人 (邑智)
吉迫 静人 (大和)	栢野 芳武 (羽須美)
河野 頼人 (瑞穂)	吉田 健司 (石見)
松田 権 (桜江)	岡本 義則 (金城)

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 新井 卯市 (旭)   | 河野 勝己 (弥栄)  |
| 田中 幸雄 (三隅)  | 加藤 茂 (美都)   |
| 渡辺友千代 (匹見)  | 西田 謙三 (津和野) |
| 大庭 良美 (日原)  | 万瀬 幸雄 (柿木)  |
| 竹中 文雄 (六日市) | 重栖 真快 (西郷)  |
| 重栖 真快 (布施)  | 重栖 真快 (五箇)  |
| 重栖 真快 (都万)  | 淀 重美 (海士)   |
| 松浦 康麿 (西ノ島) | 長畑比古五郎 (知夫) |

7 調査の協力機関

地元市町村教育委員会

8 事務局

- |       |               |
|-------|---------------|
| 美多 定秀 | 島根県教育庁文化課長    |
| 永瀬 忠治 | 課長補佐          |
| 岩崎況一朗 | 文化係長 (昭和59年度) |
| 矢内高太郎 | 〃 (〃60〃)      |
| 卜部 吉博 | 文化係主事         |
| 吉川 広  | 〃             |
| 鳥谷 芳雄 | 〃             |

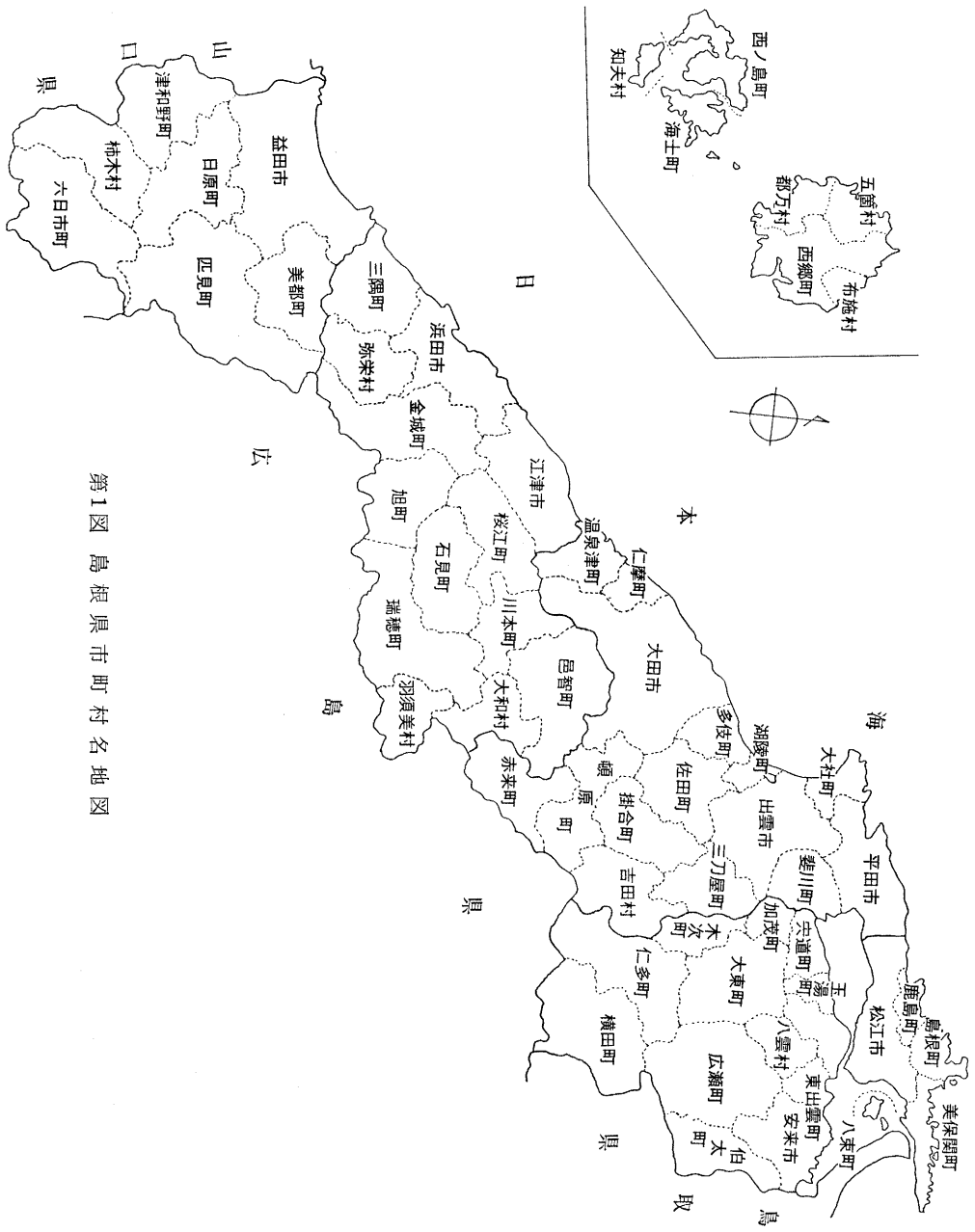
9 調査結果を利用するにあたって

本書は、古くから島根に伝承されてきた民謡の実態把握を目的とした、今後の学術研究に資するための報告書です。

本書には、古く伝承当時から使用されてきた用語がそのまま収録されていますので、その中には身体に障害のある方々などをべっ視した用語があります。

これらの用語の不適切な使用は、心身に障害のある方々などの心情を著しく傷つけたり、差別意識を助長していくことにつながります。

本書を学校教育、社会教育、または地域の文化活動のために利用される場合は、この趣旨を理解され、基本的な人権の尊重をさらにすすめていくための教材としてご活用ください。



第1図 島根県市町村名地図

## 二、島根県の民謡とその特色

### 一 位置づけ

本州の西北隅に位置する島根県は、その特色ある風土と歴史的系譜ともあいまって、ことのほか民謡の資源に恵まれている。文化的に見た場合も、島根県は、県東部の出雲、県西部の石見、そして離島・隠岐の三地域に分かれるが、これらの地域は、今日までそれぞれ固有の民謡を、はぐくみつづけてきた。このうち出雲は、出雲神話、出雲大社、それに最近のセンセーショナルな考古学的発掘物などが象徴的に物語るように、日本の古代文化と深いつながりを持っているが、現代にいたる長い歩みの中で、その古い伝統は不断に洗練され、新しくされた。八雲琴の出現、里神楽の八調子への変化、渡部お糸による『安来節』の完成などは、その典型例であろう。一方、県西部の石見は、あの柿本人麻呂伝説にも見られるように、これまた古来の文化的伝統に満ち満ちた地域であるが、出雲に比べると、その伝統の保存度は、ことに中国山地沿いの地域で良好である。その例としては、多様な仕事歌（労作歌）や、古風で優雅な六調子神楽などが挙げられよう。島根県のもう一つの地域、離島・隠岐は、かつて後鳥羽上皇、後醍醐天皇の流された島として、いわゆる都（みやこ）的伝統を温存してきた。ここには柳田・周圀説や、大陸芸能の残影なども観察される。たとえば隠岐国分寺蓮華会舞は、天平時代の外来楽「伎楽」の変容である。こうして、隠岐は離島特異の文化構造を持ち合わせている。

島根県では、このようにその三地域で、固有で多様な民謡が伝承されているわけだが、これらの民謡の中には、他地域や県外にまでまたがって展開してきたものも散見される。これは民謡の移動現象としてとらえられよう。島根県をめぐる昔からの民謡の通った道筋を考えしてみると、陸路ではまず、日本海に沿って東西に走る山陰道、ついで、中国山地をまたぐ山陽側への山越えの道がある。しかしそれにもまして重要なのは、近世に開かれた海路であろう。大阪の堺港から出て瀬戸内海を通り、関門海峡を日本海に抜け、島根県沖でもあちこちの港に寄港しながら北上し、東北・北海道の西岸まで行き来した北前船は、米や鉄、生活物資ばかりでなく、人や民謡をも運んだ。たとえば松江市に「ホーランエンヤ」という大きな船祭りがあるが、この櫓（ろ）こぎ歌のかけ声は、鳥取県の『貝殻節』や遠く北海道の『江差追分』にも、また江津市・祇園祭の「ホーラエッチャ」や、もつと離れたところでも、和歌山県の祭り歌などにも登場する。これはまさに「旅する歌」といえるだろう。ちなみに、一六世紀に初めて日本に上陸し、上方で改良されて今の姿になった三味線を、日本海側の各地に運んだのも、ほかならぬこの北前船であった。

海上交通とともに忘れてならない民謡の道筋は川である。中でも中国山地をつき抜けて、山陽側から日本海にそそぐ江川は、瀬戸内側の民謡をダイレクトに島根県側に運んだ。現在、江津市に岡山県白石島系の盆踊り歌が伝わっているが、これなども、江川を行き来した船によってもたらされたものであろう。

こうして島根県の民謡は、その周辺地域とも、いろいろな道筋を

経て、複雑に交錯しながら、伝承され、また創造されてきたわけである。

## 二 種目と内容

まず子どもの遊び歌としてのわらべ歌であるが、これには、松江市の「おんじょ（とんぼ）取り」の歌などに代表されるような、古くからの伝承歌が、今も聞かれる。現代の子どもたちも、いろいろのわらべ歌のレパートリーを持っているが、それらは、歌詞に身近な固有名や方言がひんばんに出てくること、また、その方言の抑揚がそのまま旋律に反映していることなどを通して、はっきりと地域的特色を示している。

次は仕事歌（労作歌）である。仕事歌は一般に、民謡以前の歌、民謡になりきらない歌として、生活の脈絡の中でたえず生まれ、消え、また伝承されつつ、ときには独立した芸術性の高い民謡へと発展していった。この仕事歌は、わらべ歌と同様、いわば最も生き生きとした、伝承と創造の両面を兼ね備えた歌としてとらえることができる。仕事歌は今回の調査でも、その収集対象の中心の一つとなった。島根県に見られる仕事歌も、かつての手仕事の種類に比例して多種多様だが、今は特に県内に特有のもののみに触れておく。

まず中国地方にのみ存在する田歌であるが、島根県でもそれは、各地の田植え祭りであつたわけてきた。出雲の田歌は備後のそれと、また、石見の田歌は安芸のそれと、それぞれ同系統で、ここにも中国山地を越えたタテ（南北）の交流が見られる。また中国山地沿いの地方

には、たたら歌があり、今日なお飯石郡吉田村、仁多郡横田町などに残る。たたら歌は、砂鉄溶鉱炉のためのふいごを踏む番子（ばんご）の歌である。島根県に特有の仕事歌には、これらに加え、酒造りの杜氏歌（主に但馬系）、紙すき歌、船歌、木びき・木やり歌などがある。このほかに特筆すべきものとして、石見の麦つき歌があるが、中でも、鹿足郡日原町の大庭良美氏の採集された麦つき歌は名高く、それは故町田嘉章氏によって、日本民謡大観・中国篇に収められた。

島根県ではさらに、宗教的祭礼に伴う舞や音楽・民俗芸能も豊富に見られる。その中で特に盛んなのは、里神楽である。これには、出雲の八調子神楽、その原型と思われる石見の六調子神楽、それに隠岐神楽などがあり、このうち後の二つは、とりわけ古型の伝承として注目される。

最後に娯楽歌・祝い歌を挙げる。これらは特に近世以降、三味線の伝来によって急激に発展した。三味線は前述のように、日本海に行き来した北前船によってもたらされたのだが、風待ちの港町への、この三味線の普及は、やがて、『安来節』『関の五本松』、『浜田節』『しげさ節』『どっさり節』『相撲取り節』などの、完成度の高い民謡を生んだ。なお、この娯楽歌・祝い歌の範ちゅうには、無伴奏の嫁入り歌や、特に石見地域に豊富な、盆踊り口説き歌なども入れられる。

## 三 調査結果と展望

今回の調査結果のあらましについては、各地区の調査委員の報告をご参照願うこととして、ここで筆者の感想を述べるにとどめる。

筆者もまた、松江市、大田市、江津市、益田市などの調査に参加したが、全体として、かつての民謡、特にわらべ歌、仕事歌が忘れられつつある反面、各地で高齢の古老がなお健在で、そのような古老から貴重な民謡を聞き出すことができた。たしかにフォークロアの世界では、民謡の量は無限である。そのような状況の中から今日の一面を取って、そこになお息づく歌を聞き、採録し得たわけで、その意味で今回の民謡発掘作業は意義深いものであったと思う。

かつて人々は、その暮らしのさまざまな場面で民謡をうたった。つまり一人ひとりが自らの歌を持っていたのである。そのような個性豊かな歌が、仕事の近代化、生活の変革、祭りの形がい化などで消えて行こうとしているのは、実に寂しいことである。歌を失ってしまった時代に生きる私たちにとって大切なことは、新しい世紀に向かって、かつてのこれらの生き生きした歌の宝庫をどうよみがえらせていくかを、真剣に考えることであろう。このようにして収集された民謡の宝庫が、単なる記録と回顧趣味に終わることなく、心の豊かさを取りもどすよすがとなって、歌の蘇生へ役立つことを、今回の調査に携わった一人として、願わずにはいられない。

(水野 信 男)



### 三、調査民謡の概況

このたびの民謡調査で最も多く記録されたのは労作歌であり、中でも農山村の田植え歌・草刈り歌・木挽き歌・白ひき歌などは特に多く記録された。反面、同じ労作歌でも踏鞠歌のごときは意外に少なく、わずか一曲にとどまっている。かつてあれほど盛んであったはずの踏鞠作業のとだえによって、今は歌も全く消滅に瀕した。このことは単に二つの歌には限らないが、民謡がたどる寂しい縮命とでもいえるだろう。また祝福芸の歌の一つで出雲・石見はもとより安芸・備後・伯耆と各地に、正月早々春のこぶれをもたらした大黒歌がある。これもまた五十年を待たずして今は歌われなくなってしまった。わずか一曲の報告にとどまっている。もちろん巡遊は行われてはいない。この二曲は例えば田植え歌のようにそれほど多くの人によって歌われた歌ではないが、この労作歌・祝福芸の歌も作業の能率を促進するとか慰安をあたえるという効果をもつ反面に、本来神事信仰に根ざした歌であることで、全く消滅せんとする今ここで再度振り返ってみる必要があろうかと思う。

踏鞠歌について

踏鞠歌というのは鉄の製練をするために炉の左右に天秤鞠を置き、これを踏んで炉に送風する番子の歌う労作歌である。三日三晩六人が二人一組で交代しながら踏み続ける。最初の踏み手を一番吹き、次の踏み手が二番吹きで普通十六交代であった。

この踏鞠歌については、このたびの調査にあたられた牛尾三千夫氏の「民謡雑記」<sup>註1</sup>に詳細に記されている。これによると、

「たたら歌は一たたら打ち終るのに十六の役歌があれば足りるので、最初の夜のヨモリ歌が五つ、翌日のアケオンに四つ、次のナカビに四つ、最後のデガネの日に三つという風に定まっている。それらの歌を列挙すれば、」

こうして箆<sup>こも</sup>の夜の歌を九つ、翌押の日の歌を四つ、中の日の歌を四つ、出鉄<sup>でかね</sup>の日の歌を三つが列挙してある。そして更に、

「この役歌以外に夜の九つ時が過ぎると『忍び歌』を歌う。そして夜明けの歌が後朝の恋情を歌っていることも田歌のそれと同じである。この歌を十三取り挙げ続ける。」

「最後のデガネの日に城を落した歌を歌うのは、たたら好結果を予言する祝福の意味からであろう。」

以上の抜き書きは氏が邑智郡中野村と日貫村での聞き書きであり、昭和十二年『民謡研究』創刊号所載のもので、踏鞠歌の概要である。次に、昭和三十七年のころの聴き書きと思われるが、仁多郡横田町での踏鞠歌について、

「次に私は昨年六月町田嘉章氏を中心としたNHKの中国地方の民謡調査に参加して、広島県山県郡芸北町、比婆郡高野町、島根県仁多郡横田町、鳥取県日野郡日南町の四カ所で踏鞠歌なるものを聞く機会に恵まれたが、これら四カ所の内島根県の横田町鳥上の靖国鈞に現在働いているという、嵐谷芳雄・嵐谷忠一兄弟の歌われたものだけに、かつて今から三十年近くも前、隣村の石見邑智郡日貫村（現石見

町)青笹の伝承者高橋梅吉老人のよく歌ってきかせてくれた踏鞠歌の韻律に似たものを感じる事が出来てうれしかった。」

昭和三十年代は私も奥出雲をはじめ、備後、安芸と民俗調査で各地の民謡に触れたが、その時聴取した踏鞠歌は極めて少なかったから、既にこの三十年代の段階で踏鞠歌は消滅寸前であったと言えよう。牛尾氏が記しておられるとおり、踏鞠歌にも恋情の歌も見られるが、これは作業を通しての心の慰安もあろうが、鉄のわきを祈る殖産にも似た詞章の歌であったかとも理解する。本来はより上質の鉄を吹かんとする金屋子神への祈りが、清浄な清めと願いをこめた詞章韻律とした歌であったに違いない。

転用した牛尾氏の多くの聞き書きは、他の多くの踏鞠歌記録と共に『美しい村』(昭和五十二年石見郷土研究懇話会刊行)に「民謡雑記」として載せられている。終わりに氏が示している「天狗の歌」を天明四年の『鉄山秘書』と飯石郡吉田村菅谷鐘と比較しよう。この間に七五調から七七七五への推移を指摘しておられる。

○夜ふけて来るは くらま天狗か 恐しや 天句しゃないが、われも大事の 身を忍ぶ(『鉄山秘書』)

△夜半夜半に 出てくるものは み山天狗か さておそろしや み山天狗か わしゃないけれど 人の大事な 目をしのぶ(菅谷鐘)  
この間わずか二百年にも足りない。

大黒歌

いつのころから歌いはじめられたかしかと分らない。とにかく正月ともなればどこからともなく姿を現し、また雪道に消えて行く。大

黒が行くと雪に閉された山里の家にも春が来る。大黒歌というのは大黒人が家々に、その歳のアラタマを付けに訪れて歌う歌というのが本義のようである。

上から下まで黒一式、頭は黒の御高祖頭巾、黒のコートには長着と紺の脚絆、白足袋に爪ご草鞋、手甲をつけた女性で、これが大正末年から昭和初年のころの大黒人であった。後にはコートがマントに変わってきたが、更に大正のころまでは蓑笠に頭巾の覆面であった。目だけを出して顔は覆い隠す。この頭巾をウエミンの頭巾といった。いかなる大家の門を潜っても、頭巾はもろん蓑笠コートは着けたままの天下御免の服装であった。もとは女性が扮した大黒であつたらしく、いわば神人であつたようである。昭和初年のころでも、時には男が女に扮した大黒が来るがあつた。

頭巾・マントで身をまとい、声色を使って女らしくするけれども、所詮は致し方ないことで、子供心にも不思議な中に滑稽ささえ感じた。大黒人は決して出自を語らず、歌以外には口をきかなかつた。迎える家でも強いて尋ねることもせず、寒さに堪えて正座を続け丁重に儀礼を尽した。福神に対する儀礼であつた。

採り物は長さ十二〜三センチ、幅約二〜三センチほどの真竹で作つた拍子竹、これで拍子を取りながら二人一組で掛け合いに歌を歌う。門に立って雪を払い土間に入るやいなや歌い始める。御免をこう言葉もない。家内では襖障子を奥まで開け、家族は上り端の間に正座して祝福を受けるのが習わしであつた。

大黒歌の構成は①序の段、②本歌の段、③納めの段からなつてい

て、伯耆・出雲・石見に巡遊したものを大別すると、伯耆系、出雲系、備後系の三系統と見ることができる。いずれも詞章・韻律に幾分の違いはある。しかし日本列島を通していわゆる「大黒歌」に類するものは多いが、その多くは三味線入りであったり、持ち込みものが多い見られたりするなど余興じみた門付けの類が多い。次の詞章は出雲系に属するものである。

(序の段) ヤット若大黒若恵比須、お家繁盛と舞いこみました

(本歌) これほどめでたいおん家さま なんの次第を申しましょ

小栗さまでは文の段を申します(前口上)

都室町せんだんや ごとうさえもんあき人が……

(小栗判官)

(納めの段) まずはめでたのおだいこく 末は鶴亀五葉松 お家繁盛と納めます

序の段で福神の来臨を宣げ、納めの段で祝いこめる結びである。本歌は語り物で浄瑠璃詞章である。三系統共「小栗判官」の語りを歌うを本旨とし、これを歌もなければ大黒の本領は全うされないと信じられてきた。すなわち小栗判官の蘇生譚に対する信仰であったといえる。三系統の中でも伯耆系は他の二系統に比較してテンポが極めて緩かった。

以上のような大黒巡遊は昭和十年代までで終わったように思う。実際には戦後三十年代まで見られたけれど、明治大正以来の歌の速度はいよいよ増し、服装・採り物に至るまで変化した。それに大黒人自身が持つ聖職観とでもいべき気持ちも薄れ、また迎える人々の態度も

極度に变化したから、歌も単なるリズムにとどまり、少くとも民俗歌謡としての本質は失われてしまった感さえあった。

それにしても取りあげた踏鞠歌・大黒歌は、まだどこかに伝承されているかも知れない。ともかくこのたびの調査で取りあげられたことは真に幸いであったというほかはない。まだこれ以外にも消滅寸前になっている歌、また既に消滅したと思われる歌が多く収録されていることは喜びにたえない。収録にあたられた方々の話によると、歌が佳境に入ると、これまで忘れていられた歌を思い出されて、思いがけない歌の収録ができたということであった。収録にあたられた方々の心遣いも並々ならぬことであったと思うが、また歌を伝承された方も昔取った杵柄というか、仕事や行事などそのものの中で自から歌ってこられた方ほどあって、録音を聴取していて、さすがに若々しい歌声に聞きほれるばかりであった。また、この調査が起因とはいえないかも知れないが、中には民謡の集録あるいは大会を催すなどして、保存と振興をはかれる町もあるかに仄聞もした。まことに慶賀にたえないしだいである。

(勝部 正 郊)

#### 参考資料

『美しい村』(牛尾三千夫著、昭和五十二年石見郷土研究懇話会刊)  
『出雲山間地帯における民俗歌謡の考察』(昭和四十年島根県高教連研究誌所載)

## 四、地区別調査民謡と概観

### 松江地区の民謡概観

#### (一) 松江地区

松江地区は、出雲の東部一帯で東は鳥取県に隣接する。島根半島・中海・宍道湖、それと奥出雲の多くを加えた二市十五町村からなる。東から山陰道に沿い安来市・東出雲町・松江市・玉湯町・宍道町と続き、中海を隔てて島根半島突端の美保関町・島根町・鹿島町、そして中海に浮かぶ八束町（大根島）、また奥山間の横田町・仁多町、中山間地の伯太町・広瀬町・八雲村・木次町・大東町・加茂町である。

この地区で最も多く収録されたのは童歌であり、これに続いて労作歌、座興歌、踊り歌であった。童歌の収録はかれこれ全市町村にわたっていたが、歌い手がいずれも明治・大正生まれでありながら、極めて明確に生き生きとした発声であった。おそらく幼少のころ脳裡に深く刻みこまれた結果であろう。童歌には特に高齢者を突然に若返らせる不思議さがあるようにさえ思えた。労作歌の大部分は田植えの歌で、今は廃れたが中国山間一帯は古くから大田植え・花田植えがにぎわった。いわゆる「囃子田」である。また同じ田囃子でもこれとは別に、どんな狭い山間の田植えでも、小太鼓一つに早乙女三人という歌い手の歌も聞かれた。このたび収録された歌は後者の方である。今では特別の催し行事以外は聞くすべもないが、長い年代を歌い継がれた歌だけに、よりよい収録がなされたことと思う。かつて中国地方各地で、わけても奥出雲の踏鞠場で歌われた歌に番子歌があった。収録は一曲という辛うじての数である。田歌に比して歌う人の数も場所も極度

に少いから、仕事がなくなればより早く歌が消えるのも仕方のないこととで、きわどい収録であった。次に踊り歌についてみると、多くが盆踊り口説きであった。既に精霊の魂呼び魂鎮めといった信仰は歌う人の意識からは知るすべもないが、今も盂蘭盆会の大衆慰安の余興として歌われている。踊り場、しつらい、踊り子、楽器などは明治・大正までさかのぼらなくてもかなりの変化が見られる。しかし同じ民謡であっても、前の田歌と違い行事という伝承上の歌の支えがあることは強みがある。座興歌は歌を覚えて五、六十年、今も盛んな安来節・関の五本松等は別としても多くの歌に古さを感じた。それは座興歌の多くが、いつの世でも、当世風の流行歌はやりうたを多く歌うためか、他の民謡に比較して新旧交代の速さにあるようにも思う。

さて、歌が進むにつれて調子が波に乗るとでもいうか、声に新鮮味も増し歯切れのよさもいよいよ増したが、ただその中に何とも言い表せない一抹の寂しさを感じた。それは既に現実の労作、行事から分離したというか、いわば歌のみがとり残された寂しさかもしれない。

次に市町村の集計を掲げる。

	労 作 歌				祭 歌	祝 い 歌	行 事 歌	踊 り 歌	踊 舞 歌	座 興 歌	語 り 歌	祝 福 芸 歌	子 守 り 歌	童 歌	計
	農	山	漁	その他											
松江				2					5	2					9
安来	4			3	1	2	4	7		13			1	10	45
鹿島								4							4
根根	1					3	2	1		4			1	17	29
美保関					11	2	2			3					18
東出雲	1			1										6	8
八雲					1								1		2
玉湯						1		6							7
宍道						1	2		4	8	2			1	18
八束				1	1	1		4		3				5	15
八瀬	3					1		3		3					10
伯太	3					1	1	4		9			4	7	29
仁多	27	1		8		5		6		3		1	5	7	63
横田	3			2				3		1			2	9	20
大東				1			1	1						1	4
加茂	1			2		1		1		1			1	2	9
木次				1				1					1	8	11
計	43	1		21	15	19	11	44	5	50	2	1	16	73	301

(勝部正郊)

# 松江地区調査民謡

松江1

名 称 ホーランエンヤ  
 伝 承 地 松江市大海崎町  
 伝 承 者 古藤 茂利 S 27年生  
 古藤 弘己 S 28年生  
 調査員氏名 岡崎雄二郎・中尾秀信

## 出船

(音頭) ホーランエンエーエヤサノサ  
 (権) サノエエーエエヨヤサノサツサ

## 中歌

(音頭) ホラホーサイサアー エヤホーエンヤ  
 (権) ホラホーサノサアー エヤホーエンヤ

## 本歌

(音頭) ホオーホエンヤ ホオーランエーエ  
 エヤサノサ エーエララノーランラ

## 流し権

(音頭) ヤアーンサアーホーオエー (掛け声) ヨイトサツサ  
 (権) ヤアンサーホーランエー (掛け声) ヨイトサツサ

## 早権

(音頭) ヤンサノエー ヤンサホーランエー  
 ヤサホーランエー

## 棹歌

## 入船

(音頭) チョイトサアセ ヤッシンヨイ  
 (権) チョイトサアセ ヤッシンヨイ

(音頭) サツサノエーエーヨヤサノサツサ

松江2

名 称 ホーランエンヤ  
 伝 承 地 松江市福富町  
 伝 承 者 野津 孝義 S 14年生  
 野津 美吉 S 13年生  
 調査員氏名 岡崎雄二郎・中尾秀信

## 出船及び進航中

(音頭) エーサンエー (権方) エエヤンエーエヤサノサ

(音頭) サアーノ (権方) エーエ ヨヤサノサ

## 踊り歌

(音頭) ホーオオ エンヤ

(権方) ホーランエーエ エヤサアノサ エーエーララノランラ  
 船の進航(踊りなし)

(音頭) ホーラホオーサノサア エヤホーエンヤ

(権方) ホーラホオーサノサア エヤホーエンヤ

## 流し権

(音頭) ヤンサーホーエー ヤサホーランエー

ヤサソーランエー

(權方) ヤンサーホーエー ヤサホーランエー

ヤサソーランエー

(音頭) ヨイトサツセ ヤツシンヨイ

(權方) ヨイトサツセ ヤツシンヨイ

船の後進(また) 帰港のとき

(音頭) ホーランエーヤ (權方) ホーランエーヤ

接岸のとき

(音頭) ヤンサノエーエ ヨヤサノサツサ

松江3

名 称 ホーランエンヤ

伝 承 地 松江市大井町

伝 承 者 野津 春美 S 27年生

野津 進 S 38年生

調査員氏名 岡崎雄二郎・中尾秀信

船出の歌

(音頭) エーエサンエー エヤーエーヨヤサノサア

(權) サノエーエーヨヤサノサノサ (音頭) ホーラン

(權) ヤツサノエーエーヨヤサノサツサ

船の進航(踊りなし)

(音頭) ホラーホーサノサア

エーンヤーホーエーヤ

(權) ホラーホーサノサア

エーンヤーホーエーヤ

(三回繰り返し)

準備体勢

(權) ヤツサノエーエー ヨヤサノサツサ

踊り歌

(音頭) ホオーオオーエーヤ ホーランエーエ

ヨヤサノサー エーエラノランラ

(数回繰り返し)

船の進航・流し權

(音頭) ヤーンサーノエー

(權) ヤサヤーノエー ヤサホーランエー

(音頭) ヨイトサアアセ ヤツシンヨイ

(權) ヨイトサアアセ ヤツシンヨイ

寝權

(音頭) ヤアーサーホーエー (權) ヤーサーホーランエー

(權) ハアーヨイトサツサ

船の後進と帰着のとき

(音頭) ホーランエンヤ (權) ホーランエンヤ

入港帰着

(音頭) ホーラン

(權) ヤツサノエーエー ヨヤサノサツサ

松江4

名 称 ホーランエンヤ

伝 承 地 松江市矢田町

伝 承 者 松浦 正巳 S 16年生

松浦 辰好 S 22年生

松浦 貢 S24年生  
調査員氏名 岡崎雄二郎・中尾秀信

船出の準備歌

(音頭) エーエサンエー (権子) エーサンエーヨヤサアーノサ

(音頭) ホーラ (権子) ヤンサアーノエーヨヤサアアーノサ

船の進航・權かき踊り歌

(音頭) ホーオオーエーヤ

(権子) ホーランエーエ エヤサアアーノサ

エーエーララノランラ

船の進行 (踊りなし)

(音頭) ホーラホーサアノサアア エヤホーエーヤ

(権子) ホーラホーサアアノサアア エヤホーエーヤ

船の進行 流し權

(音頭) ヤンサアアノエーエー ヤサヤアアノエーエー

ヤサアアノランエー

(権子) ヤンサアアノエーエー ヤサヤアアノエーエー

ヤサアアノランエー

船の進航を急ぐとき (早權)

(音頭) ホラホー (権子) エンヤラエー

(音頭) ヤレソ (権子) エンヤラエー

(音頭) ヨイトサアアセ ヤッシンヨイ

(権子) ヨイトサアアセ ヤッシンヨイ

船の後進また帰船入船

(音頭) ホーランエーヤ (権子) ホーランエーヤ

逆行して帰着

(音頭) ホーラ (権子) ヤンサアアノエエ ヨヤサノサッサ

松江5

名	称
伝承地	松江市馬潟町
伝承者	広江 幸男 S17年生
	角田 新一 S22年生
調査員氏名	岡崎雄二郎・中尾秀信

踊りのときの掛け声

(音頭) ホーオオエンヤ

(掛け声) ホーランエイエ ヨヤサノサ エーララノランラ

權の掛け声 (離岸のとき)

(練り權音頭) エーサンエーエエ ヨヤサアノサア

(權声) サノエーエエ ヨヤサアノサア

(音頭) ホラサアアノサア エヤホーエイヤア

(權声) ホーラホーサアアサア エヤホーエイヤア

(音頭) ヤンサノハノエー ヤサソアランエーエ

ヤサソアランエー

(權声) ヤンサノハノエー ヤサソアランエーエ

ヤサソアランエー



(音 頭) ヤサーホーエー (權声) ヤアサーソーランエー

浅瀬を通るとき

(音頭權声) ヨイトサツサ ヤツシンヨー

接岸着船のとき

(練り權音頭) エーサンエーエ ヨヤサーノサー

(權 声) サーノエーエエ ヨヤサーツサ

ア ドッコイ ドッコイ

松江7

名 称 謔 歌

伝 承 地 松江市秋鹿町

伝 承 者 奥村 信隆 M 38年生

松本 梅一 T 10年生

調査員氏名 岡崎雄二郎・中尾秀信

松江6

名 称 酩<sup>もと</sup>すり歌

伝 承 地 松江市秋鹿町

伝 承 者 奥村 信隆 M 38年生

松本 梅一 T 10年生

調査員氏名 岡崎雄二郎・中尾秀信

酒屋男は ア ドッコイドッコイ

大名暮らし ア ドッコイドッコイ

ヤー

五尺六尺 ア ドッコイドッコイ

立て並べ ア ドッコイドッコイ

島根の出雲は ア ドッコイドッコイ

杜氏の本場 ア ドッコイドッコイ

ヤー

昔ながらの ア ドッコイドッコイ

酒造り ア ドッコイドッコイ

ヤー

うれしめでたの ア ドッコイドッコイ

若松さまは ア ドッコイドッコイ

ヤー

枝が栄えて ア ドッコイドッコイ

ア ドッコイ ドッコイ よいにゃ酩すり 夜中のこしき

エー 朝の洗い場がヨー つらござる

アードッコイ ドッコイ 今朝の寒さに 洗い場はどなた

エー かわい殿ごでヨー なげにゃよい

ア ドッコイ ドッコイ かわい殿ごの 洗い場の朝は

水は湯となれヨー 風吹くな

ア ドッコイ ドッコイ 酒屋男は 麦種育ち

アイヤー 家で年取るヨー ことがない

ア ドッコイ ドッコイ こしき番すりゃ 夜中に起きて

エー またで水をやるヨー へその下

葉が茂る ア ドッコイドッコイ

松江8

名称	さんざい節
伝承地	松江市西持田町
伝承者	仙田勘兵衛 M29年生
調査員氏名	水野信男・岡崎雄二郎

へ惚れたほの字はどう書きなさる 迷たまの字に棒をひく

へ声で呼ばれぬ手で招かれず 歌の文句で悟らさい

松江9

名称	三子節
伝承地	松江市西持田町
伝承者	仙田勘兵衛 M29年生
調査員氏名	水野信男・岡崎雄二郎

へ三子三子と名は高けれど 三子さほどの器量じゃない

へ起きて帰なされ持田の太郎兵衛 夜明けがらすの鳴かぬまに

へ浅い川でも ももまではまる 深くなるほど帯をとく

安来1

名称	田植え歌
伝承地	安来市大塚町
伝承者	田中広次郎 T4年生
調査員氏名	清山 恒吉

へ植えた植えたは植え手が上手 ちょうど碁盤の目のように

ヤレ目のように ちょうど碁盤の目のように

へ今年や豊年穂に穂が咲いて 道の小草に米がなる

ヤレ米がなる 道の小草に米がなる

安来2

名称	盆踊り歌
伝承地	安来市大塚町
伝承者	田中広次郎 T4年生
調査員氏名	清山 恒吉

へアーコラサーイヤホー イーヤノホイナー

天の星さえ夜遊びなさる コラサノセー

わしの夜遊び無理はないヨー ホーイ

へハーコラサヨホイー イーヤーエー

盆が来たこそ踊り子がそろおた コラサノサーイ

稲の出穂よりまだよけそろた アラヨーホホホーイ

へアーサノエーホホエー サノヨイコラセー

姉が十八妹が二十 コラサノセー

どこで算用が違うたやら アラヨーホホホーイ

安来 3

名 称 長持ち歌  
 伝 承 地 安来市大塚町  
 伝 承 者 田中広次郎 T4年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

ハハアー 今日ハナアー 日もよしハアアアー 天気もよし  
 結びナアアー 合わせてヨアアー ハア縁となるナアアアア  
 ハハアアー さらばナアアアー 行きますヨアアアアア アアアアアもさらば  
 こんどナアアア 来るときアアアアア アアアアアで来るナアアアア  
 ハハアアア 蝶よナアアア 花よとヨアアア ハアアアア育てた娘  
 今日ハナアア こんなたのヨアアア ハアア花嫁ナアアアアア

安来 4

名 称 安来節  
 伝 承 地 安来市大塚町  
 伝 承 者 田中広次郎 T4年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

ハ安来千軒 名の出たところ 社日様に十神山  
 ハ亀に送られ 清水戻り<sup>きよみず</sup> はやも社日の夕桜  
 ハあれほどに堅い約束しておきながら なぜに今宵は遅いやら  
 妻子ある身で出にくかる 蔭で待つ身のわたしでも 顔見りやあ  
 帰すがいやになる

安来 5

名 称 関の五本松  
 伝 承 地 安来市大塚町  
 伝 承 者 田中広次郎 T4年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

ハハアアア 関の五本松 一本伐りやあ四本 あとは伐られぬ夫婦松<sup>みょうと</sup>  
 ショコ ショコホイノアアアホンマツホアアア  
 ハハアアア 関と御碕に 灯台あれど 恋の闇路は照しやあせぬ  
 ショコ ショコホイノアアアホンマツホアアア

安来 6

名 称 苗取り歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 宮原カヤノ M37年生  
 竹内 常子 T14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

ハヤアアア ちの嫁ごさんは どこ育ち  
 ヤアアア 稲のナおらぼののぎ育ち  
 ハヤアアア いせの千家<sup>せんげ</sup>さんの五葉松あどこに  
 ヤアアア もとは御碕に葉は宇竜に  
 ハヤアアア 今年は豊年穂に穂が咲いて  
 ヤアアア 道の小草にも米がなる

安来 7

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 竹内 常子 T 14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へ一番はじめの一の宮 二また日光東照宮

三また佐倉の宗五郎 四また信濃の善光寺 五つ出雲の大社

六つ村々天神さん 七つ成田の不動さん

八つ八幡やわたの八幡さん 九つ高野の弘法さん

十でところの氏神さん これまで信心したけれど

浪子の病気は治りやせぬ ごーごーとなる汽車は

浪子と武男の生き別れ 泣いて血を吐くほととぎす

泣いて血を吐くほととぎす

安来 8

名 称 鬼決め歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 竹内 常子 T 14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へてんでん すつとんとん てですとんと餅米いたたく

春の花咲く梅の花 助さんこのごろ出世して

大金持ちとなりました

青山土手から青い鳥がみっちみち 白い鳥がみっちみち

後あとからハイカラさんが靴履いて袴はかまはいて

すつばらぼんのぼん

(注) 「すつばらぼんのぼん」でじゃんけんをする。

安来 9

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 竹内 常子 T 14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へ一かけ二かけて三かけて 四かけ五かけて橋かけて

橋の欄干手をこちに はるか向こうを眺むれば

十七、八の姉さんが花や線香手に持って

姉さんどこ行く尋ねたら

わたしは九州鹿兒島の 西郷さんの娘です

明治三年三月に 切腹なされた父上の お墓参りをいたします

お墓の前では手を合わせ 南無阿弥陀仏と拝みます

拝んだ後から魂たましいが ゆーらりゆらりと ジャンケンポン

安来 10

名 称 鬼ごっこの歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 竹内 常子 T 14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へ中の中のこん仏 お前はめくらで不自由だろ

だれんぞ代わってあげましょか

どがええかこがええか 選よってごらん

安来11

名 称 おじゃみ(お手玉歌)  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 竹内 常子 T14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〽おひとつおひとつおさらい お二つお二つおさらい

お三つお三つおさらい おみんなおさらい

おってしゃあみ おってしゃあみ 落としておさらい

おはさみおはさみ 落としておさらい

おちりんこおちりんこ 落としておさらい

お手はお手はて 落としておさらい

お左左 いっちょ<sup>みまひだり</sup>右左

しじとーんけ おんまのりかえ うんまのりかえ 落として

おさらい

ま橋こーごりー 筒橋こーごり 大橋こーごり

おーじみ いっかんしょ

安来12

名 称 長持ち歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 石倉 孝 T12年生  
 竹内 秋代 T11年生 他  
 調査員氏名 清山 恒吉

〽ハアー 今日ハナアー 日もようて アー 天気もよいし

結びナー合わせてヨー

アー 縁となるなえー アー うれしナー めでたのヨー

アー 若松さまは 枝がナー栄えてヨー 葉が茂るナーエー

〽ハアー わたしやナー行きますヨー ハアー どなたもさらば

こんど来るときやあヨー ハアー 客で来るナヨー

〽ハアー さらばナー 行きますヨー ハー 兄嫁様ヨー 後の二親

を頼みますナヨー

〽ハアー さらばナー 行きますヨー ハー 弟や妹 兄弟み

なアー 仲よくヨー ハアー 頼みますナアーエー

(以下略)

安来13

名 称 安来節  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 宮原カヤノ M37年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〽柿谷とろとろおり坂下りて 野方の田んぼ真直に

着いたところが吉岡で 下に下がれば山辺あり

伯太の川をば上のぼりや 着いたところは清瀬あり

清井の金鳳<sup>きんほう</sup>のどをこす 清水で一杯はしご酒

久野で早田を作るなら 佐久保佐久保の年のよさ

安来 14

名 称 安来節  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 宮原カヤノ M37年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へさても姑しゅうとの皆様方よ 耳をそばだてよく聞きたまへ

婿と嫁とに世を譲り 隠居する身になったなら

我慢我欲はうち捨てて 後生の道に尽すなり

必ず嫁をそしるなよ わが子も他人に縁づいて

姑がかりになるものよ そのとき折に里に来て

うちのかあちゃん意地悪し いつも怒るのをしるのと

涙ながらの物語 聞いたらさぞかし腹がたつ

わが子が不びんと思ふなら 嫁はそしらずかわいがり

安来 15

名 称 盆踊り歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 宮原カヤノ M37年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へコラヨーホホホーイ サーヨーホーイー ヨイヤセー

今年あ豊年穂に穂が咲いて コラセー

池のこぶたに米がなる ヨーホホホーイ

へコラヨーホホホーイ サーヨーホーイー

盆が来たらこそ踊り子がそろうた ドッコイセー

稲の出穂よりなおよくそろた ヨーホホホーイ

へコラヨーホホホーイ サーヨーホーイー

遠く離れて切れさえせねば ドッコイショー

引いて楽しむたこの糸 ヨーホホホーイ

安来 16

名 称 盆踊り歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 石倉 孝 T12年生 他  
 調査員氏名 清山 恒吉

へサノヨーホホホーイ サーヨーホーイナー コラサノサイー

人の女房と枯木の枝は ドシタカネー

命かけなきや 登られぬヨー ホホホーイ

へ花は二度咲く 若さは一度 ドシタカネー

若さ恋しや二度はない ヨーホホホーイ

へ会おおてうれしや 別れのつらさ ドッコイセー

会おて別れがなげにゃよい ヨーホホホーイ

へおまえ一人か 連れ衆かごはないか コラサノサイー

連れ者後から駕籠かごでくる ヨーホホホーイ

へ恋に焦がれて 鳴く蟬せみよりも ドッコイセー

鳴かぬ螢が身を焦がす ヨーホホホーイ

安来17

名称 盆踊り歌  
 伝承地 安来市野方町  
 伝承者 竹内 秋代 T11年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱ヨーホホホーイーコラサノサイー

来るか来るかと 川下見れば コラサノサイー

川原すすきの影ばかり アノヨーホホホーイ

〱おまえ一人か連れ衆はないか コラサイー

連れ者後から駕籠で来る ヨーホホホーイ

〱駕籠で来るのは欲なやつあおらぬ コラサイー

はげかちんばか腰抜けか サーヨーホホホーイ (以下略)

安来18

名称 盆踊り歌  
 伝承地 安来市野方町  
 伝承者 竹内 常子 T14年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱エーコラヨーホーイナ コラサノサイー

あなた百まで わしゃあ九十九まで ドッコイセー

ともに白髪の生えるまで ヨーホホホーイ

〱コラヨーホホホーイ ソラヨーホーイ コラサノサイー

思っちゃおれども 手出しがならぬ コラサイー

ならぬ手出しはしてみたい ヨーホホホーイ

安来19

名称 盆踊り歌  
 伝承地 安来市野方町  
 伝承者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱サーコラヨーホホホーイ サアーホーイナー コラセー

入れてください かゆくてならぬ ドッコイシヨーイ

わたし一人が蚊帳の外 ヨーホホホーイ

〱わしとあなたは 卵の中よ

わたしや白みで 黄みを抱く ヨーホホホーイ

〱腹は立て損りん気はし損 アラドッコイシヨーイ

人に女房は取られ損 アラヨーホホホーイ

安来20

名称 盆踊り歌  
 伝承地 安来市野方町  
 伝承者 宮原カヤノ M37年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱コラヨーホホホーイ サーヨーイ コラセー

あなた一人か 連れ衆はないか ドッコイセー

連れ衆は後から駕籠で来る ヨーホホホーイ

〱コラヨーホホホーイ サーヨーホーイ コラセー

あなた百まで わしゃ九十九まで ドッコイセー

ともに白髪の生えるまで ヨーホホホーイ

安来 21

名 称 安来節  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 宮原カヤノ M37年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱 大工しゃえは 頼みがござる ちよいとここの部の屋の戸が  
 開けたてするのに音がする 忍ぶ恋路のじゃまとなる  
 さらりとあいと開いて さらりとたつようになりはすまいか  
 大工さん

〱 わたしの昔は 社日の桜 今じゃ訪いくる人もなし  
 それに十神は常磐色 咲いた昔が思われる

安来 22

名 称 しげさ節  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 稲田 勝 T8年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱 隠岐は湯の島 花の島 磯にや波の花咲く  
 里にや人情の花が咲く  
 シャリコシャリコ シャリコシャリコ  
 〱 忘れしやんすな 西郷の港 港のあかりが主さん恋しと  
 呼んでいる

〱 かすかに聞える三味の音は 隠岐の  
 隠岐のかえりにあなたになろうた しげさ節  
 (注) 湯の島 〱 これは「絵の島」の変化したものだ。

安来 23

名 称 じゃんけん歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 竹内 常子 T14年生  
 石倉マサ子 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱 ツイツイツイ 北は樺太、千鳥より 南台湾、澎湖島  
 朝鮮八道おしなべて わが大君の美しさ  
 朝日に御旗ひるがえし 同胞すべて九千万  
 〱 ツイツイツイ

てんでんすんと てですとんと餅米いただく 春の花咲く梅の花  
 助さんこのごろ出世して 大金持ちとなりました  
 青山土手から青い鳥がみっちみち 白い鳥がみっちみち  
 後からハイカラさんが 靴履いて 袴はいて  
 すっぱらぼんのーぼん

安来 24

名 称 童歌  
 伝 承 地 安来市野方町  
 伝 承 者 稲田 勝 T8年生 他  
 調査員氏名 清山 恒吉

〱 後のからす先んなーれ わが家が焼ける  
 水がなきやあ貸しようか 余ったらけー戻せ  
 〱 後のからす先んなーれ わが家が焼ける



水がなきやあ貸しようか 余ったらけー戻せ

伝 承 者 稲田 勝 T8年生 他  
調査員氏名 清山 恒吉

安来25

名 称 行事歌  
伝 承 地 安来市野方町  
伝 承 者 稲田 勝 T8年生 他  
調査員氏名 清山 恒吉

へ向こう神の勸進 搗いた米一升 向こう神の勸進 搗いた米一升

向こう神の勸進 搗いた米一升

(注) 毎年十二月十三日、子どもたちが家々を回って米を集め、小豆飯にして

食べた。これは回るときの歌である。

安来28

へ亥の子さんの晩に 餅ついて祝わぬものは  
犬産め子産め 角の生えた子産め  
へ亥の子さんの晩に 餅ついて祝わぬものは  
犬産め子産め 角の生えた子産め

名 称 トンドさん祝う歌  
伝 承 地 安来市岩舟町  
伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
調査員氏名 清山 恒吉

安来26

名 称 トンドさんのホトホト  
伝 承 地 安来市野方町  
伝 承 者 稲田 恒夫 T5年生  
稲田 勝 T8年生  
調査員氏名 清山 恒吉

へうれしめでたの 若松さまよ 枝も栄えて 葉も茂る

チヨーサイチヨーサイ チヨーサイチヨーサイ  
ワッショイワッショイ

安来29

名 称 子守り歌  
伝 承 地 安来市岩舟町  
伝 承 者 清山喜美枝 T7年生  
調査員氏名 清山 恒吉

へトンドさんのホトホト いがんだ餅でも 大けながええ  
へトンドさんのホトホト いがんだ餅でも 大けながええ

安来27

名 称 亥の子歌  
伝 承 地 安来市野方町

へこの子よいこだ ぼた餅顔でな  
きな粉つけたら なおよかろな

アレワイドンドンドン コレワイドンドンドン  
へ高い山から 谷底見ればよ 瓜や茄子の 花盛りな  
アレワイドンドンドン コレワイドンドンドン

安来30

名称 ずいずいずころばし  
伝承地 安来市岩舟町  
伝承者 清山 倭枝 T8年生  
調査員氏名 清山 恒吉

へずいずいずころばしどまにこずい

やつぽにおわれてとつびんしゃん 抜けたあらどんどごしよ  
俵のねずみが米食ってチュ チュチュチュ  
お父さんが呼んでも お母さんが呼んでも  
いじっこなあきよ  
お井戸の回りでお茶わん欠いたのだあれ

安来31

名称 鴨緑江節  
伝承地 安来市岩舟町  
伝承者 清山 恒吉 T5年生  
調査員氏名 清山 恒吉

へ朝鮮と支那と境の あの鴨緑江  
流すいかだは アラよいけれど ヨイシヨ

雪や氷や閉ざされてヨ ほんとにまた チヨイチヨイ  
あんどけんえつきかれる アラチヨイチヨイ チヨイヤナー

安来32

名称 安来節  
伝承地 安来市岩舟町  
伝承者 清山 倭枝 T8年生  
調査員氏名 清山 恒吉

へわたしの昔は 茶店の桜 今は訪いくる人もなし  
それに十神は常磐色 今宵お越しのお客さま  
も一度咲かせてくださいんせ

安来33

名称 田植え歌  
伝承地 安来市岩舟町  
伝承者 清山喜美枝 T7年生  
調査員氏名 清山 恒吉

へ今年あ豊年穂に穂が咲いた ハイハイ 道の小草に米がなる  
ヤーレ米がなる 道の小草に米がなる  
へ調子そろえてどんどとやれば ハイハイ  
いかな大名も立ち止まる  
ヤーレ立ち止まる いかな大名も立ち止まる (以下略)

安来34

名称 苗取り歌  
伝承地 安来市岩舟町

伝 承 者 清山 倭枝 T8年生  
調査員氏名 清山 恒吉

ハヤレおらの嫁ごさんよナー どのの育ち  
ヤレ稲のナおらぼのナー のぎの育ち

### 安来35

名 称 貝殻節  
伝 承 地 安来市岩舟町  
伝 承 者 清山 倭枝 T8年生  
調査員氏名 清山 恒吉

ハ何の因果で 貝殻漕ぎ習うた カワイヤノー カワイヤノー  
色は黒うなる 身はやせる

ヤサホーエーヤ ホーエヤエーエ  
ヨイヤサノサツサ ヤンサノエーエ ヨイヤサノサツサ  
ハ浜村沖から 貝殻が招く カワイヤノー カワイヤノー  
女房よ飯<sup>かか</sup>たけ<sup>まま</sup> 出にやならぬ

ヤサホーエーヤ ホーエヤエーエ  
ヨイヤサノサツサ ヤンサノエーエ ヨイヤサノサツサ

### 安来36

名 称 トンドさん  
伝 承 地 安来市岩舟町  
伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
調査員氏名 清山 恒吉

ハうれしめでたの若松様よ ワツシヨイ ワツシヨイ ワツシヨイ  
枝も榮えて葉も茂る チョーサイ チョーサイ チョーサイ チョーサイ  
チヨーサイ チヨーサイ

### 安来37

名 称 安来節(いれこと)  
伝 承 地 安来市岩舟町  
伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
調査員氏名 清山 恒吉

ハ観光島根は 日本の名所 はあー出雲大社に 一畑薬師

歌の安来に美保関 ショコホイ ショコホイのほん松ホーイ  
新婚旅行は玉造 歴史に名高い 隠岐の島

ハ大工さんには 頼みがござる ちょいとそこの部屋の戸が  
開けたてするのに音がする 忍ぶ恋路の じゃまとなる  
さらりと開いて さらりとたつようになりはすまいか  
大工さん

ハ鹿の声 聞くが嫌だに 浜辺に住めば

千鳥鳴く 島のほとりに あのわび住まい  
二人仲を吹く松風は

またもや さしこむ 二十三夜の窓の月  
晴れてうれしや新所帯 (以下略)

安来 38

名 称 遊び歌(わらべ歌)  
 伝 承 地 安来市岩舟町  
 伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

雁が飛びやあ鳩が飛ぶ  
 一万石が調練した

(注) 幕末、母里藩の洋式の藩兵訓練をからかったもの。

安来 39

名 称 月の輪神事の囃し  
 伝 承 地 安来市岩舟町  
 伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

エンヤエンヤードゴデットーヤー  
 エンヤエンヤードゴデットーヤー  
 エンヤエンヤードゴデットーヤー

(繰り返し)

安来 40

名 称 石つき歌  
 伝 承 地 安来市岩舟町  
 伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

ヨイトコサー コラコラサー

ヨイトコサー コラコラシヨ  
 ヨイトコサー アラサノサー

安来 41

名 称 たこつき歌  
 伝 承 地 安来市岩舟町  
 伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

ヨイトコサー コラコラサッサー

おまえのサッサは大きなサッサー ヨイトコサー

安来 42

名 称 どうつき歌  
 伝 承 地 安来市岩舟町  
 伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

エンヤヨイト ヨイトーナー ヨーイ トコナー  
 エンヤラヨイト ヨイトーナー ヨーイ トコナー

安来 43

名 称 鴨緑江節  
 伝 承 地 安来市岩舟町  
 伝 承 者 清山 恒吉 T5年生  
 調査員氏名 清山 恒吉

へ朝鮮と支那と境の あの鴨緑江 流すいかだは

アリヤ よいけれど ヨイシヨ

雪や氷でや 閉ざされてよ ホントニマタ チヨイチヨイ

安東県へ着きかねる チヨイ チヨイ ヨーイヤナー

安来 44

名 称 ラッパ節

伝 承 地 安来市岩舟町

伝 承 者 清山 恒吉 T5年生

調査員氏名 清山 恒吉

へ人生わずか五十年 同じ死ぬなら満州の

積もる支那雪血に染めて 名誉の戦死がしてみたい

タカターカ タッター

へランブ ランブー ヨ

わたしやあなたに ほやほやほーれたー

芯のあるのを 見てほれた

かきがあるとは 知らなんだ

風に吹かれて いるわいな いるわいな

タカターカ タッター

鹿島 1

名 称 園正寺お杉赤間が関

伝 承 地 鹿島町片匂

伝 承 者 山本 孝蔵 T6年生

調査員氏名 袖本 静代

へさてきてちよっと出かけましょ

チヨイトコ チヨイ チヨイト

今の音頭はいずくでどなた

ヨイヤサノサーイ (以下囃子詞省略)

声もよう通る忍びもよいが わしが音頭は危ない音頭

竹の丸橋渡るがごとし 落ちたところははやしてたもれ

もちとしゃんしゃとはやして頼む どうでこの身が行かねばならぬ

(後略)

鹿島 2

名 称 鈴木主水

伝 承 地 鹿島町片匂

伝 承 者 山本 孝蔵 T6年生

調査員氏名 袖本 静代

へヤーハトナーイ ヤーハトナーイ

花のお江戸のその傍らに

ハーチヨイトコ チヨイ チヨイト さても珍し心中話

サイヤサノサーイ ヨイヤサノサイ 四ッ谷の新宿町よ

ハーチョイトコ チョイ チョイト (以下略)

鹿島3

名 称 八百屋お七  
伝 承 地 鹿島町片匂  
伝 承 者 山本 孝蔵 T6年生  
調査員氏名 袖本 静代

へ敬まい申し奉る ハーチョイトコ チョイ チョイト

それによるねの秋の鹿 ハーヤーハトナイ ヤーハトナイ

妻ゆえ身をば焦がすなら ハーチョイコ チョイヨイト

(以下略)

鹿島4

名 称 茶町通い  
伝 承 地 鹿島町片匂  
伝 承 者 山本 孝蔵 T6年生  
調査員氏名 袖本 静代

へ盆がナー来た来た 輪になってナー踊れ

月はナー まん円 踊りも円い

踊りナー踊りは はや来て頼む

いつもナー七月 ヨイ 盆ならよかるよ

踊りナーふりしてヨイ ヤンサ殿に会う

チョイチョイ チョイチョイ コラチョイ

わしがナー音頭は危ない音頭

音頭ナー 悪いところはやして頼む

そろたナーそろたナーヨイ踊り子がそろたヨイ

(以下略)

島根1

名 称 子守り歌  
伝 承 地 島根町多古  
伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
調査員氏名 湯原 章

へこの子良い子だ 寝のなら黙えよ 守りも難儀の雪が降る

へおまや良いがね 良い子の子守りよ 厭えやと言やせず泣きもせず

へ言わば言わざれ 何なとかかと

節期の二十日が来りや去えのる

へおのれ覚えちよれ 二十日の晩にや 骨と皮とに分けてやる

へおまや行えかさりや 何時えち戻らさや 春の木の芽の出るころに

島根2

名 称 子守り歌  
伝 承 地 島根町多古

伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
調査員氏名 湯原 章

後ろの正面だあれ

へねんねこさいやこよいちゆう子 お鷹に取られて泣くなよ  
へ寝た子かわえや起きた子の面はよ 嫂面まむしよりまだ憎い  
へねんねこねんねこねんねこや 寝たら母かつかへ連れて行く  
起きたらががまが取って囁かん 寝たらほんそのほんその子

島根 3

名 称 鬼ごっこの歌  
伝 承 地 島根町多古  
伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
調査員氏名 湯原 章

へかーごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる  
月夜の晩に 鶴と亀と滑った 後ろの正面だあれ

島根 4

名 称 鬼ごっこの歌  
伝 承 地 島根町多古  
伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
調査員氏名 湯原 章

へ中の中の弘法さん なあて背がかあがんだ  
親の日にえびいかにで それで背がかあがんだ

島根 5

名 称 子もらい歌  
伝 承 地 島根町多古  
伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
調査員氏名 湯原 章

へ勝ってうれしい花一匁もんめ 負けて悔しい花一匁  
はなちゃんがりたいたい花一匁 ねちゃんがりたいたい花一匁  
(二人が手を引きあい勝負する)  
勝ってうれしい花一匁 負けて悔しい花一匁

島根 6

名 称 七草歌  
伝 承 地 島根町多古  
伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
調査員氏名 湯原 章

へ日本の鳥鳥 たいどの鳥鳥 たいどの鳥が日本の土地へ  
渡らぬ先に 七草そろえて  
シチャ ホー ホー ホー ホー

島根 7

名 称 亥の子さん

伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章  
 〱亥の子さんの晩に 祝わの者は  
 蛇産め子産め 角の生えた子産め

島根 8

名 称 雪の歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

〱だんべらが降らば しびが母に 灸据え  
 〱だんべらが降らば しびが母に 灸据え

島根 9

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

〱二月三月花ざかり うぐいす鳴いた春の日の  
 楽しいときも夢のうち 五月六月実がなれば  
 枝から振るい落されて 近所の町へ持ち出され  
 何升何合量り売り もとより酸っぱいこの体

塩に漬かってからくなり 紫蘇に染まって赤くなり  
 七月八月暑いころ 三日三晩の土用干し  
 思えばつらいことばかり これも世のため人のため  
 敏は寄っても若い気で 小さい君らの仲間入り  
 運動会にもついて行く まして戦さのそのときにや  
 なくてはならぬこのわたし

島根 10

名 称 鬼決め歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

〱一かけ二かけて三かけて 四かけて五かけて橋をか  
 橋のらんかん腰かけて はるか向こうを眺むれば  
 十七、八の姉さんが 花と線香を手に持って  
 姉さん姉さんどこへ行く わたしは九州鹿児島  
 西郷隆盛娘です 明治十年戦争で  
 切腹なされた父上の お墓参りをいたします  
 お墓の前で手を合わせ 南無阿弥陀仏と拝みます  
 西郷さんの魂は ふうわりふわりと  
 ジャンケンポン



島根 11

名 称 手遊び歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

へ一つひよこが豆食って ないとこないとこないないない  
 へ二つ船には船頭さんが ないとこないとこないないない  
 へ三つ店屋に番頭さんが ないとこないとこないないない  
 へ四つ横腹痛いこと ないとこないとこないないない  
 へ五つ医者さんに薬箱 ないとこないとこないないない  
 へ六つ昔は鎧よろい着て ないとこないとこないないない  
 へ七つ浪ちゃんなみがハンカチ振って ないとこないとこないないない  
 へ八つやしん坊が指食わえて ないとこないとこないないない  
 へ九つ乞食がお椀わん持って ないとこないとこないないない  
 へ十で殿さんがお姫さんが ないとこないとこないないない

島根 12

名 称 遊戯歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

へかんごかんごしようや 仲良なかよにしようや  
 地藏さんの水を どんどと汲んで 抹香まっこう返った

島根 13

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

へ向こうの山に猿が三匹止まって 先の猿は物知らず  
 後の猿も物知らず 中の小猿がよう物知って  
 ござれ友達花見に行かや 花はどこばな 地藏の前の桜花  
 一枝折ってはバツと散る 二枝折ってはバツと散る  
 三枝が先さきで日が暮れて どの小屋で宿取らか  
 西の小屋で宿取らか 東の小屋で宿取らか  
 中の小屋で宿取らか 殿さん小屋で宿取って  
 暁起きて空見たら 結構なほっこな大船が  
 船どもそろえて帆をかけて 帆かけ船のつり物は  
 白織赤織赤だんべ 白だんべ

島根 14

名 称 地づき歌  
 伝 承 地 島根町多古  
 伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生  
 調査員氏名 湯原 章

へ調子そろえて エヤハレ エヤヨイヨイ ヨイヨイ  
 デンテとつけば いかな大名も オイオヤーハレ  
 ヨイヨイ ヨイヨイ 立ち止まる

持ちやげら ドンドン 取りやげて ハリワイサ

島根15

名 稱 馬子節(長持ち歌)

伝 承 地 島根町多古

伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生

調査員氏名 湯原 章

へうれしナア めでたの 若松様は 枝がナア

栄えてナア 葉も茂る ナアヨ

へ枝がナア 栄えて 葉が茂るなら

命ナア 長かれアア 末繁盛ナアヨ

へさらば行きます二親様よ 永のお世話になりました

島根16

名 稱 大漁節

伝 承 地 島根町多古

伝 承 者 矢田 秀雄 T4年生

調査員氏名 湯原 章

へアー鴨<sup>かも</sup>が来た来た 多古の灘へ

エヤ鴨<sup>いわし</sup>が鯛<sup>いし</sup>を 連れて来た オモシロヤ

へ鯛<sup>いし</sup>取れ取れ 天気も良かれ 灘で商い 値も良かれ

オモシロヤ

島根17

名 稱 盆踊り口説(お艶小源太)

伝 承 地 島根町瀬崎

伝 承 者 伊達 正 T4年生

調査員氏名 湯原 章

へ今度大坂道頓堀に

アーヤンハトナー ヤンハトナーエ

道頓堀に出羽が芝居に勘兵衛が座元

アーヤンハトナー ヤンハトナーエ

勘兵衛が座元ここの座元の勘兵衛様が

アーヤンハトナー ヤンハトナーエ

勘兵衛様が芝居願いに安芸宮島へ

アーヤンハトナー ヤンハトナーエ

安芸宮島へ永の芝居を請け負て戻る

アーヤンハトナー ヤンハトナーエ(以下略)

島根18

名 稱 子守り歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 山田スズ子 M41年生

調査員氏名 湯原 章

へ大床山の白兔 なしてお耳が長いかね

お母の腹におるときに 木の実芽の実食べたげな

それでお耳が長いそな ねんねんころりよおころりよ

この子がねたまにばぶついで ねんねの子守りに負わせて  
あっち見いても山々 こっち見つても山々  
山の中には何がおる かんばんや狐や狼や  
寝た寝た寝た寝た寝た寝た寝た寝た

島根19

名 称 手まり歌  
伝 承 地 島根町大芦  
伝 承 者 山田スズ子 M41年生  
調査員氏名 湯原 章

へうちの隣の赤猫が 牡丹絞りの着物着て

お寺へちよこちよこ参らんす お寺の御門に腰をかけて  
お足袋は一足ごんせんか お前のお足袋はどんな色  
紺に紫ねずみ色 ちよと一銭貸しました

島根20

名 称 手まり歌  
伝 承 地 島根町大芦  
伝 承 者 山田スズ子 M41年生  
調査員氏名 湯原 章

へ正正月松立てて 竹立てて

喜びなさるはお子供さん 嫌がりなさるはお年寄り  
紅鉄漿かねつけるはおかねさま だんなの嫌いは大晦日

いっちょう明けたら元日で 年始の御用が申しません  
お茶箱持ってこいお茶持ってこい  
吸物なんかはや持ってこい  
いやおかまいなさるな ちよと一銭貸しました

島根21

名 称 加賀音頭  
伝 承 地 島根町大芦  
伝 承 者 山田スズ子 M41年生  
調査員氏名 湯原 章

へ加賀のナアーエー マイドマイド 潜戸にナアー

どんとオー打つ波は アラヨイセー  
かわいナアー 殿ごのナアー  
ヤンサー度胸試し ホラ  
ヤレキタ ヤートコ セーノヨイヤーナ  
ホラ ハレワイセー コレワイセー  
サアーサアーナンデノデモセイー  
アー チョーサヤ チョーサー

島根22

名 称 棟上げ歌  
伝 承 地 島根町大芦  
伝 承 者 山田スズ子 M41年生  
調査員氏名 湯原 章

へうれしめでたの 若松様よ

枝も栄えて ヨー 葉も茂る オモシローヤ

へ鶴が舞います この家の空を

この家繁盛とホイ 舞い遊ぶ オモシローヤ

へ届け届けよ 末まで届け

末は鶴亀ホーイ 五葉の松 オモシローヤ

ハアーチ ヨーサヤチ ヨーサ

島根23

名 称 磯 節

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 山田スズ子

調査員氏名 湯原 章

M41年生

へしんのような かねさくらをきるりー

あかき心は あのすみれかく

へ児島高德 蓑み着て笠着て 御殿に忍ぶ

へ浮世離れて 奥山住まい

恋もりん気も 忘れていたに

鹿の鳴く声 聞けば昔が恋しゅうてならぬ

島根24

名 称 手まり歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 田中 孝子 T6年生  
調査員氏名 湯原 章

へ一つとせ 柄杓おいすりに笈お摺 杖に笠

巡礼姿で 父母を 尋ねるわいな

二つとせ 二人こうして目まがまんじ

那智様 お山の音高い 寂しいわいな

三つとせ 見るより お弓が走り出て

お盆に白米 ころろざし かわいいわいな

(以下略)

島根25

名 称 手まり歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 田中 孝子 T6年生

調査員氏名 湯原 章

へ波はどんどと 打ちあがる ここは浜辺の山の上

青空高くそびえ立ち 白地の旗を染めてゆく

島根26

名 称 手まり歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 田中 孝子 T6年生

調査員氏名 湯原 章

〱一にや 橘 二にや 杜若かきつばたかね

三にや 下がり藤 四にや 獅子牡丹かね

五つ 井山の千本桜かね 六つ 紫色よく染めたかね

七つ 南天真赤になったかね 八つ 山吹 九つ 小菊かね

十で 殿御さんのお駕籠に乗りたいたね

銭ぜんせがなあて乗られません

島根 27

名 称 お手玉歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 田中 菴子 T6年生

調査員氏名 湯原 章

〱おじやみ お二ふた お三み お三み

お四よ お四よ お五い お五い

おもを買ってくれとんきい おじやみ じゃとんきい

お二桜 桜 お三桜 桜 お四桜 桜 お五つ桜 桜

おも桜 みんな寄せ みんな寄せ

(以下略)

島根 28

名 称 子守り歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 田中 菴子 T6年生

調査員氏名 湯原 章

〱ねんねこ さらばこ 弥一が子

弥一に取られて ほえるなよ

ばぼ(餅)ども搗ついて 冷さまかいて

べんべ(牛)の子おに負おわせて 山越え 谷越え お里行き

里のみやげに なにもろた でんでん太鼓しょうに 笙の笛

ねんねこ ねんねこ ねんねこや

島根 29

名 称 手まり歌

伝 承 地 島根町大芦

伝 承 者 田中 菴子 T6年生

調査員氏名 湯原 章

〱一番始めは一の宮 二つでまた日光ゆうげんじ

三つで桜の吉野山 四つでまた信濃の善光寺 五つ出雲の大社おおやしろ

六つ村鎮守さま 七つ成田の不動さん

八つ八幡やわたの八幡さん 九つ高野の弘法さん

十でとうとう運獄寺

美保関 1

名 称 粉はたぎ歌(祭り歌)

伝 承 地 美保関町美保関

伝 承 者 美保関小学校児童

調査員氏名 福岡 佳章

〱ワトヤイマシヨ

わしやいちゃきいやの子供衆こそいつけるものよ

二ワトヤイマシヨ

わしや庭掃かぬ女子衆こそ庭掃くものよ

三ワトヤイマシヨ

わしや竿ささぬえさし衆こそ竿さすものよ

四ワトヤイマシヨ

わしや皺しわよらぬ年寄り衆こそ皺よるものよ

五ワトヤイマシヨ

わしや碁は打たぬ親方衆こそ碁打つものよ

六ワトヤイマシヨ

わしや櫓は押さぬ漁師衆こそ櫓を押すものよ

七ワトヤイマシヨ

わしや質置かぬ貧乏衆こそ質置くものよ

八ワトヤイマシヨ

わしや鉢持たぬ坊さん衆こそ鉢持つものよ

九ワトヤイマシヨ

わしや鍬持たぬ百姓衆こそ鍬持つものよ

十ワトヤイマシヨ

わしや字は書かぬ手習い衆こそ字を書くものよ

美保関2

名 称 宮ねり歌  
伝 承 地 美保関町美保関月名小路

伝 承 者 桶谷 亀吉 S2年生  
調査員氏名 福岡 佳章

〱 オイサーイ

おまえ百までヨイヨイ わしや九十九まで ヨーイセートコーセー  
ともに白がソレサー 生ゆるまでー

ソラヤートコセーヨイヤナー ハリワイセー コリワイセー  
サーサーナーアンデモセー

〱 オイサーイ

めでためでの ヨイヨイ 若松様よ ヨーイセートコセー  
枝も栄えてソーレ 葉も茂る

美保関3

名 称 宮ねり歌  
伝 承 地 美保関町美保関泊小路  
伝 承 者 北国小太郎 T13年生  
調査員氏名 福岡 佳章

〱 お伊勢参りに この子がたてた この子末まで 伊勢の松  
うちの後ろにサ みかんのつぎ木 みかんならずにサ 金がなる

美保関4

名 称 宮ねり歌  
伝 承 地 美保関町美保関西小路  
伝 承 者 生田 時次 S20年生  
調査員氏名 福岡 佳章

へうれしめでたは 若松様よ

枝も榮えて葉もヤーンサーも茂る

ソラーヤットコセー ヨーイヤナー コリヤ ハルワイセ

コレワイセーノサーサーナー アンデモエー

へ届け届けは ヨイヨイ末まで届け

末は鶴亀ヤサー五葉の松

美保関5

名 称 宮ねり歌(あたごまい)

伝 承 地 美保関町美保関西小路

伝 承 者 生田 時次 S 20年生

調査員氏名 福岡 佳章

へうれしめでたの 若松様よ

枝も榮えてチヨイ葉も茂る オモンロヤー

エートー エートー

美保関6

名 称 宮ねり歌

伝 承 地 美保関町美保関中浦小路

伝 承 者 山本 賢三 M 42年生

調査員氏名 福岡 佳章

へめでためでたの アヨイヨイ

三つ重なれば ヨーイセトコセー

末は鶴亀エーノヤーン 五葉の松

へめでためでたの アヨイヨイ

若松さまよ ヨーイセートコセー

枝も榮えてエーモヤーンサー 葉も茂る

美保関7

名 称 宮ねり歌

伝 承 地 美保関町美保関美保小路

伝 承 者 福岡 佳章 T 12年生

調査員氏名 福岡 佳章

へオーイサー 沖の御前は神代の島よ ヨーイセー トーコセー

荒れと凧なぎとのソレサエ知らせある

エサー 鶴が舞いますこの家やのお空で ヨーイセー トーコセー

この家繁盛とソレ舞い遊ぶ ソーラーヤートコ

エーエ ヨーイヤナー

ハリワイセー コリワイセー サーサー アンデーモセー

サーサ 家うちの後ろにみかんのおつぎ ヨーイセー トーコセー

みかんならずかに ソーレサエ 金かねがなる

美保関8

名 称 天神さん宮ねりの歌

伝 承 地 美保関町美保関

伝 承 者 美保・月名・西小路の子供

調査員氏名 福岡 佳章

ハ家の後ろにヨイヨイ みかんのつぎ木 ヨイセトコセー

みかんならずにはソーレーサー 金がなる

ソラヤトコセ ヨイヤナ ハリワイセ コリワイセ ササ

ナーアンデモセー

(注) 一月二日は各小路で天神さんの行事があり、そこでうたわれる。

### 美保関9

名 称 大山さんの歌(祭り歌)

伝 承 地 美保関町美保関

伝 承 者 美保小路の子供

調査員氏名 福岡 佳章

ハ大山さん 上ってこい なあばらこい こばこい こばこい

ハ大山さん 上ってこい なあばらこい こばこい こばこい

### 美保関10

名 称 関の五本松節

伝 承 地 美保関町美保関

伝 承 者 橋本 フイ M32年生

調査員氏名 福岡 佳章

ハハアー関はよいとこ 朝日を受けて

お山嵐が そよそよと ショコホイ ショコオイノーゴホンマツホイ

ハハアー青い松葉の しんてを見やれ 枯れて落つても

二人連れー シコホイ ショコホイノーホンマツホイ

### 美保関11

名 称 関の五本松節

伝 承 地 美保関町美保関

伝 承 者 野村オトキ M35年生

調査員氏名 福岡 佳章

ハハアー松が招くか 港じゃ呼ぼうか

関で白帆がはせて行く

ショコホイ ショコホイノーホンマツホイー

ハアー関の五本松 一本切りや 四本

あとは切られぬ 夫婦松

ショコホイ ショコホイノーホンマツホイー

### 美保関12

名 称 関の五本松節

伝 承 地 美保関町美保関

伝 承 者 木田ツネコ T11年生

調査員氏名 福岡 佳章

ハハアー関はよいとこ朝日を受けて 大山下ろしがそよそよと

ショコホイ ショコホイノーホンマツホイー

ハハアー忘れていたのに また顔見せて

思い出させて 泣かすのか

ショコホイ ショコホイノーホンマツホイー



美保関 13

名 称 船歌  
 伝 承 地 美保関町美保関  
 伝 承 者 山本 賢造 M42年生  
 調査員氏名 福間 佳章

へさても見事なる今日こんにちの座敷ナア

鶴とサー亀とが舞い遊ぶ 鶴は千年亀は万年末代とナ

祝いサーイめでたいノー イソわがいかいだいもよう

枝も栄えるノー 葉も茂る

美保関 14

名 称 壇尻  
 伝 承 地 美保関町美保関  
 伝 承 者 山本 賢造 M42年生  
 調査員氏名 福間 佳章

(音頭取り) (老中)

美保の御神おんかみ 泰平を守りたまひし あらたさの

(若連中)

アソソレー 五穀万作とハア

チョイサ チョイサ 入り来る船の数々かずかずに

商いさまさま暇もないソレー

(子供)

港繁盛と

(若連中)

オー鳴る太鼓

(音頭取り) (中老)

神をいさめの氏子ども 歌うて遊ぶ祭りごと アソソレー

(若連中)

海上安全守るエー

おめましよう ハリワイ ヤッサノサー

おす 鎮めましよう チョーサダ チョーサダ

美保関 15

名 称 壇尻移動の歌  
 伝 承 地 美保関町美保関  
 伝 承 者 山本 賢造 M42年生  
 調査員氏名 福間 佳章

へ高砂のじいさんとばあさんと小松の小蔭でよいことなされた

そうな ア オチャヤデ オチャヤデ

へ千両箱やっこらしよとにないだーた

若い者何する世継ぎの種まくそうな

オチャヤデ オチャヤデ (以下略)

美保関 16

名 称 ホーラエッチャ  
 伝 承 地 美保関町美保関  
 伝 承 者 恩田 稔 M38年生  
 調査員氏名 福間 佳章

△関の明神さんは二棟造りふたむね

屋根のかたそす エッコラ雲の上

ヨイヨイヨイヨイヨイヨイ

ハラランコララン ヨーエトナー

ハーイッチャイッチャホーラーエッチャ

△沖の御前さんは 不思議な島よ

凧なまと荒れとのヤレエッコラ知らせある

ヨイヨイヨイヨイヨイヨイ

ハラランコララン ヨーエトナー

### 美保関17

名	ホーラエッチャ
伝承地	美保関町美保関
伝承者	福間 佳章 T12年生
調査員氏名	福間 佳章

△エーヤ 出せ出せめつたなもの出すな

出いてよいのは銚子と杯ばかりじや

ヨイヨイ ヨーオイ ヨイヨイヨイ

ハララン コララン ヨーエーエトナー

ハイッチャイッチャ ホーラエッチャ

△関の明神さんは事聞きわけて

上り下りの船を助けてごっさんす

ヨイヨイ ヨーオイ ヨイヨイヨイ

ハララン コララン ヨーエーエトナー  
ハイッチャイッチャ ホーラエッチャ

### 美保関18

名	関口説
伝承地	美保関町美保関
伝承者	福間 佳章 T12年生
調査員氏名	福間 佳章

△ハー

唐も大和も昔も今も 恋という字は人間の種 ホイ

ここに雲州や鳥根の郡

ヤトセー ヤヤマカセ チョイ ハリワイシヨコリワイシヨ

△ハー

美保関とて名高き港 沖の方よりはせてくる船は ホイ

磯に見えにし女神と男神

ヤトセー ヤヤマカセ チョイ ハリワイシヨコリワイシヨ

△天地開けし ヨーホイ ハー ドッコイ ドッコイ

昔より ヤトセー ヤヤマカセー チョイ ハリワイシヨ

コリワイシヨ (以下略)

### 東出雲1

名	田植え歌
伝承地	東出雲町上意東

伝 承 者 周藤 梅俊 T 10年生  
調査員氏名 浅沼 政誌

〱調子そろえてどんどと植えりや いかな大名も立ち止まる

ヤレ立ち止まる いかな大名も立ち止まる

〱腰の痛さとこの田の長さ 四月五月の日の長さ

ヤレ日の長さ 四月五月の日の長さ

〱歌え歌えとセレ(注)はやしかけられて 歌は出はせぬ汗ばかり

ヤレ汗ばかり 歌は出はせぬ汗ばかり

〱思うておれども疲れちやおらぬ いっそ哀れの片想い

ヤレ片想い いっそ哀れの片想い

〱入れておくれよかゆくてならぬ 私ひとりが蚊張かやの外

ヤレ蚊張の外 私ひとりが蚊張の外

〱一夜泊まりの田植えさんに惚れて ひょっこり浮かれの泣き別れ

ヤレ泣き別れ ひょっこり浮かれの泣き別れ

〱引導渡せぬ破れた蓑で 波がちよこちよこ出てならぬ

ヤレ出てならぬ 波がちよこちよこ出てならぬ

〱破れふんどしお寺の御門 小僧がちよこちよこ出てならぬ

ヤレ出てならぬ 小僧がちよこちよこ出てならぬ

〱関の灯台くるりと回る わたしや縁切り手がまわる

ヤレ手がまわる わたしや縁切り手がまわる

〱思うて五年通うたら七年 あなたと添うたはただ一夜

ヤレただ一夜 あなたに添うたはただ一夜

〱恵比須大黒 出雲の国の西と東の守り神

ヤレ守り神 西と東の守り神

〱あらさくらさでこの田もすんだ どこのどなたも御苦労さま

ヤレ御苦労さま どこのどなたも御苦労さま

### 東出雲 2

名 称 地搗き歌

伝 承 地 東出雲町上意東

伝 承 者 周藤 梅俊 T 10年生

調査員氏名 浅沼 政誌

〱ヨイヤサーエー ヨイサノーヨイサエー

ヨイヤサーエー ヨイサノーヨイサエー

ヨイヤ調子ナー ヨイ調子ヨイ調子

ヨイヤ調子ナー ヨイ調子ヨイ調子

エンマノ調子ナー エンマノ調子

エンマノ調子ナー エンマノ調子

ヨイヤ女房ナー (注)絵に書いておいておく  
エニカケオイタル

ヨイヤ女房ナー エニカケオイタル

ヨイヤ男ナー エンマノ男ハ

ヨイヤ男ナー エンマノ男ハ

マタマタ調子ナー エンマノ調子

マタマタ調子ナー エンマノ調子

コラエントコナ エンヤラエノエントコナノエ

コラ エントコナ エンヤラエノ エントコナノエ  
 サノ エー エントコナ エンヤラエノ エントコナノエー  
 サノ エー エントコナ エンヤラエノ エントコナノエー  
 コラ エー エントコナ エンヤラエノ エントコナノエー  
 コラ エー エントコナ エンヤラエノ エントコナノエー  
 サノ エー エントコナ エンヤラエノ エントコナノエー  
 サノ エー エントコナ エンヤラエノ エントコナノエー

東出雲3

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 東出雲町揖屋  
 伝 承 者 広江ヤスエ T5年生  
 調査員氏名 岩佐 邦康

へおさら

おひとつ おろしておろしておろしておろして おさら  
 おふたつ おろしておろして おさら みんなで おさら  
 お左お左お左お左 おさら おてしゃみ おさら  
 おはさみ おさら  
 おちりんこおちりんこおちりんこ おさら  
 たたけのふしたたけのふし おさら 大橋くぐれ おさら

東出雲4

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 東出雲町揖屋  
 伝 承 者 広江ヤスエ T5年生  
 調査員氏名 岩佐 邦康

へあの子よい子だ ぼた餅顔でな  
 きな粉つけたら なおよかろな  
 アレワイ ドンドンドン コレワイ ドンドンドン

東出雲5

名 称 遊戯歌  
 伝 承 地 東出雲町揖屋  
 伝 承 者 広江ヤスエ T5年生  
 調査員氏名 岩佐 邦康

へ通りゃんせ 通りゃんせ ここはどここの細道じゃ  
 天神様の細道じゃ ちよつと通してくださいゃんせ  
 ご用のないもの通しやせぬ この子の七つのお祝いに  
 お札を納めに参ります 行きはよいよい帰りはこわい  
 こわいながらも通りゃんせ通りゃんせ

東出雲6

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 東出雲町揖屋  
 伝 承 者 広江ヤスエ T5年生  
 調査員氏名 岩佐 邦康

へお月さんなんぼ 十三と九つ そりやまだ若いな

伝承地 八雲村熊野  
伝承者 安達 昭宏 S 14年生  
藤田 利子 T 15年生

調査員氏名 安達 進

東出雲7

名 称 手まり歌

伝承地 東出雲町揖屋

伝承者 金本よしえ T 4年生

調査員氏名 岩佐 邦康

へ一番はじめは一の宮 二まつ日光修善寺

三まつ佐倉の宗五郎 四まつ信濃の善光寺

五つ出雲の大社<sup>おおし</sup> 六つ村々鎮守様

七つ成田の不動さん 八つ八幡の八幡さん

九つ高野の弘法さん 十で東京本願寺

へハラ宮代にや サノささぐる稲を 大御田にや  
サノ大御田にやヤンハレ 大御田にヤレ 秋の稔りを植えて待つ  
へハラ大神のや サノ恵みの露おく 若苗のヤ  
サノ若苗のヤンハレ 若苗のヤレ 末は御国の花となる  
へハラ八雲立つや サノくまなり峯を ほととぎすや  
サノほととぎすヤンハレ ほととぎすヤレ 栄える村の千代  
を鳴く

へハラ豊かなるや サノ秋の稔を たのみにはヤ

サノたのみにはヤンハレ たのみにはヤレ 植えよ歌えよ

乙女たち

東出雲8

名 称 お手玉歌

伝承地 東出雲町揖屋

伝承者 金本よしえ T 4年生

調査員氏名 岩佐 邦康

八雲2

名 称 ドンドン節

伝承地 八雲村熊野

伝承者 石倉 恒雄 M 33年生

調査員氏名 宮本 徳昭

へ天神様という人は 御名は菅原道真公

学問深く徳高く 君に忠義の心あつし

へ今のドンドン節あー どこからはやるなあー

大津長門さんのおー 江戸の土産なあ

コワイドンドン カワイドンドン

八雲1

名 称 熊野大社御田植え神事

へこの子よい子だなあ ぼた餅顔でなあ

きな粉つけたら なおかわいなあ

コワイドンドンドン カワイドンドンドン

へドンドコドンならやってもええ トコドンドコドンコドン

玉湯1

名 称 こだいじ

伝 承 地 玉湯町林村本郷

伝 承 者 岩田 満夫 S2年生

調査員氏名 小室 隆寿

へそろたなあよー

そろいました 踊り子がそろうた コリャセー

稲の出穂よりまだそろうたナーアヨ

今年々なあハヨー豊年穂に穂が下がる コリャセー

道の小草にや金がるナーアヨ (以下略)

玉湯2

名 称 茶町通い

伝 承 地 玉湯町林村本郷

伝 承 者 岩田 満夫 S2年生

調査員氏名 小室 隆寿

へ茶町ナー通いすりゃ 朝起きて戻れよー

すそはナー露やらよー ヤンサナー 涙やらよー

へ杵築ナー千家さんの五葉の松あどこによー

枝はナー岬によー ヤーンサ 葉は宇電おんづまにーよ

玉湯3

名 称 八百屋お七

伝 承 地 玉湯町林村本郷

伝 承 者 岩田 満夫 S2年生

調査員氏名 小室 隆寿

へ敬い申し奉る コラコラサイ 恋に夜寝ぬ秋の鹿

アラヤンハトナー ヤンハトナーイ

恋に夜寝ぬ秋の鹿 コラコラサイ 妻うえ身をば焦がすなり

アラヤンハトナー ヤンハトナーイ (以下略)

玉湯4

名 称 甚句(盆踊り歌)

伝 承 地 玉湯町林村本郷

伝 承 者 岩田 満夫 S2年生

調査員氏名 小室 隆寿

へ甚句ナ踊らば品よく踊れ

品のナよいのがソイチャこちの嫁

へ娘島田にちようちよが止まる

止まるナはずだよソイチャ花じゃもの

玉湯5

名称 神立ち(踊り歌)  
 伝承地 玉湯町林村本郷  
 伝承者 岩田 満夫 S2年生  
 調査員氏名 小室 隆寿

へ生まれは神立ちなれどヨ

今はナ一武志のナより島に えしやる

へ七夕おいとしござる 川を隔ててただナ一夜

玉湯6

名称 といたにころじく(踊り歌)  
 伝承地 玉湯町林村本郷  
 伝承者 戸谷 政朝 T3年生  
 調査員氏名 小室 隆寿

へ奥山のナ 三笹夜笹に 巻きに巻かれて住まいする

住めば都よわが里よ

玉湯7

名称 本郷長持ち歌  
 伝承地 玉湯町林村本郷  
 伝承者 渡部 政義 M43年生  
 調査員氏名 小室 隆寿

へもはやナ一行くかや お見送りします

こんどナ一来るときゃ 客で呼ぶよ

へもはや行きます 近所のおばさま方よ

永のお世話になりました

こんど来るときゃ 客で来るよ

へどこかどこかと 訪ねてきたら ここは殿ごさんの紋所よ

(以下略)

安道1

名称 祝い教え歌  
 伝承地 安道町安道  
 伝承者 岡本 晋一 S4年生  
 調査員氏名 馬田 実

へハアー 一つ歌いましょう はばかりながら 声の悪いのは

アー 生まれつき アー 節ふしの悪いのは師匠ししやうないからよ

へハアー 二つ二日の夢見のよさよ 三つ見た夢間違いはなし

へハアー 四つよるずの商いのよさよ

五ついつまでもこの家のご亭主

へハアー 六つむつまじく力を合わせ

七つ波風アノ立たぬよう

へハアー 八つ山ほどかね銭金もうけ 九つ蔵々に宝を積んで

へハアー 十で蔵々にとしどし身上勝る 身上増します

長者の暮らし 孫子たくさん末繁盛

宍道2

名	出雲追い分け
伝承地	宍道町宍道
伝承者	岡本 晋一 S4年生
調査員氏名	馬田 実

へうれしめでの 若松よ 枝が栄えて 葉が茂る

宍道3

名	相撲甚句
伝承地	宍道町宍道
伝承者	岡本 晋一 S4年生
調査員氏名	馬田 実

へそろいましたよ そろうたは 踊り子がそろうたよ

アードスコイ ドスコイ

へ秋の出穂よりまだよくそろたよ アードスコイ ドスコイ

さらばこれから 甚句を変えてよ アードスコイ ドスコイ

どうせはやりのひととこ節によ アードスコイ ドスコイ

相撲は今日ぎり相撲取りやいぬるよ

アードスコイ ドスコイ

へ今日の勝負は東西の 関取り衆の取り組みで

ご見物なる皆様は 朝からどしどしつめかけて

なみにきをではアールノホホエ はあないかいのよう

宍道4

名	なわて節
伝承地	宍道町宍道
伝承者	岡本 晋一 S4年生
調査員氏名	馬田 実

へ宍道亀島 アラエッサイサーイ 来て見たならば

ほかに木はない松ばかり アラマイコトマイコト

へあらたまの年は変われど アラエッサイサーイ

変わらえのものは アーコラコラ 主の心と変わりやせぬ

宍道5

名	出雲追い分け
伝承地	宍道町宍道
伝承者	庄司 久市 S4年生
調査員氏名	馬田 実

へうれしめでのたの若松さまよ 枝も栄えて 葉も茂る

へさいたえ杯 中見てあがれ 中は鶴亀 五葉の松

宍道6

名	山くずし(盆踊り歌)
伝承地	宍道町佐々布
伝承者	佐藤 松蔵 M40年生
調査員氏名	馬田 実

へえわのあんばあら あのやま山崩し 山を崩えて土手にする



ソラヤンハトナーイ ヤンハトナーイ

ハやまやま山崩し 山を崩えて土手にする

アラソラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ

ハわしが音頭で合わぬか知らぬ

合わぬところがわしゅう側衆頼む

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ

ハいつもくよくよ川端柳 水の流れを見て暮らす

ソラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ (以下略)

宍道7

名 称 チョチラ節(祝儀歌)

伝 承 地 宍道町佐々布

伝 承 者 佐藤 松蔵 M40年生

調査員氏名 馬田 実

ハサー 四海波は悪魔を払い 収むる手には ちぶこいを抱き

千秋楽は民をなで 万歳楽には命を延ぶる 相生の松風

ささつの声ぞ楽しむ ささつの声ぞ楽しむ

ハチヨチヨラサーエーおなこ女にナアアヨ わしやナアほだされて

アレテナンダドウジャイ

あちらへつとおおよ おめえもササノ ええどうじゃいねえ

ぐにあら あーのナあなあよー

アリヤー 飲んでさっしやいえ アリヤー痛いこたあない

宍道8

名 称 わしが国さ

伝 承 地 宍道町鏡

伝 承 者 勝部 恭雄 M40年生

調査員氏名 馬田 実

ハわしが国さで 見せたいものは 昔谷風えんま伊勢模様

チンチントトンチン チンチンテテチンチン チントント

ントンテンー

恋しいなあー懐かしい 宮城野をしのぶ

チーンチントチン はあまたまた チンチンテントンテン

テテントントチャ チンチンシンシント チャチン コロリ

トシヤン チンチントロー チンチントロー チンチン

ほかにはないぞ えー松島の おおことりい しょうがあい

宍道9

名 称 海晏寺づくし

伝 承 地 宍道町鏡

伝 承 者 勝部 恭雄 M40年生

調査員氏名 馬田 実

ハああれや 見やしゃんせえ

海晏寺かいあん ままよたつたがたかでも

お呼びはしまい もみじ狩り

ハああれや 見やしゃんせえ あの火の手は 江戸八百町

ほうさんげ これもたれよ おとめよほうえ

宍道10

名称 一筋  
 伝承地 宍道町鏡  
 伝承者 勝部 恭雄 M40年生  
 調査員氏名 馬田 実

へ人として 立たむはおりのこぜわさえ

憎い女の 移り香と 思えば燃ゆる

胸の火を 延ばすひのしの当てこすり

宍道11

名称 にあがりづくし  
 伝承地 宍道町鏡  
 伝承者 勝部 恭雄 M40年生  
 調査員氏名 馬田 実

へ平家で名高い景清も あこやがためには 牢破り

ましてや凡夫のわれわれが 恋しゅうのうて

ええなんとしようぞえな

宍道12

名称 大津絵那須野が原くずし  
 伝承地 宍道町鏡  
 伝承者 勝部 恭雄 M40年生  
 調査員氏名 馬田 実

へ那須野が原の殺生石 街道なされし玄応和尚

通る人々につことたまもの まえがにゆうわ姿にだまされ

て 鉢巻きで伊勢音頭を ササヤ ドッコイセノ ヨイヤサ

アレワノサー コレワノサー ナントドッコイセ

アレワノサー コレワモサー ナントドッコイサー

ありに踊りくたぶれて 法被はっぴも衣も太鼓のぼちも

ちいちゃまたたまらんなど なもほうれんげきよ

宍道13

名称 磯節(座興歌)  
 伝承地 宍道町鏡  
 伝承者 勝部 恭雄 M40年生  
 調査員氏名 馬田 実

へ林の野めの 街道筋木や林や 地車ぐるまの とどろく

音ぞ勇ましや

チーントチンチャチリチンチンテ ハア チンチンチンリ

ーリン チンチンシャ チリチンー ハア チンチンチリト

チトチン チトテンコロリン トテントローン テンテン

和歌の浦には名所がござる 一に権現 二に玉島

三に下がり松 四に塩釜よ

ヨーイ ヨーイトナー

宍道14

名称 念仏数え歌

伝承地 実道町佐々布  
 伝承者 永瀬 マキ M31年生  
 調査員氏名 馬田 実

へ一つとせ 久しく三途に石積みしを 弥陀の慈悲でこの里へ

二つとせ 再び会われぬ本願に やすやす会わせて  
 くだされた ありがたや なむあみだ

三つとせ 弥陀のお慈悲に助けられ このまま浄土へ  
 参るとは ああありがたや なむあみだ

四つとせ 欲で固めたこの胸に 他力の本願くだされた  
 ああありがたや なむあみだ

(以下略、二〇まであり)

実道15

名称 手まり歌  
 伝承地 実道町佐々布  
 伝承者 永瀬 マキ M31年生  
 調査員氏名 馬田 実

へこの後ろの梅の木に 雀が三羽鳩三羽

一羽の雀が言うことによ よんべ呼んだ花嫁ご  
 今朝の座敷へ座らせて 六枚屏風を立てつめて  
 きんらんどんすを縫ぬわせたら しっぽりかっぽり泣かしやんす

なんが不足で泣かしやんす なんにも不足はござらのが  
 わしが弟の千松が 西のほーらへ金掘りに  
 金かねども掘るやら掘らぬやら 一年たっても戻らぬが  
 二年たっても戻らぬが 三年目の正月に

おそめに来いとて状がきた おそめはやらんがわしが行く  
 かかさなかかさんはや行かさい おかかの土産みやげに何買かて戻る  
 一にかんざしや笄 二にや鏡 三にさらきや更紗の帯買かうて戻る  
 帯にや短かい襷たすきにや長い

ほうらい薬師の鐘の つり緒じよござんしょ よござんしょ

実道16

名称 こだいじ  
 伝承地 実道町実道  
 伝承者 庄司 久市 S4年生 他  
 調査員氏名 馬田 実

へハアアア アアアヨオオオオ

同じ灘でも佐々布屋の灘はハーキタヨーサー  
 松にていかの花が咲く

(二番三番歌詞不明)

へハアアア アアアヨオオオオ

実道木幡はたきは笄はらきがいらぬ ハーキタヨーサー  
 嫁や姑のすそではく

ハハアアー アアアヨーオオオ

奥山で巻く巻き笹夜笹 ハーキタヨーサアー

巻かれてはただ一夜(次の番 歌詞不明)

ハハアアー アアアヨーオオオ

六道亀島いつ来てみても ハーキタヨーサアー

ほかにきはないよまつばかり (以下略)

六道17

名称 こだいじ踊り

伝承地 六道町弘長寺

伝承者 庄司 久市 S4年生 他

調査員氏名 馬田 実

ハサノナーアサエー サアーヨーオオエー

踊らされ今晚限り アーコラサーイ

あすの晩から踊られぬナーハエー

ハサノナーアハエー サアーヨーオオエー

踊り見に来て踊らぬ人は アーコラサノサ

ひ仏金<sup>ぶつかなぶつ</sup>石仏<sup>いしぼつ</sup>ナーハエー

ハサノナーアハエー サアーヨーオオエー

どなたもおはやし頼む アーコラサノサイー

はやしなくては踊られぬナーハエー

ハサノナーアハエー サアーヨーオオエー

みごとな津山のお城 アーコラサーイ

ひぶつでらかさねのせいじかナーハエーサエー

ハサノナーアハエー サアーヨーオオエー

踊りに来て踊らぬ者は アーコラサーイ

ひ仏金石仏よナーアハエー

ハサノナーアハエー サアーヨーオオエー

かしや浦島太郎は コーラセー

開けて悔しい玉よせ箱ナーアハエー (以下略)

六道18

名称 七夕踊り

伝承地 六道町菅原

伝承者 庄司 久市 S4年生 他

調査員氏名 馬田 実

ハてんは七夕 おいとしござる アーコーラセー

川を隔ててコラヤレただの一夜

サノヨーイヨーイヨーイヤーセー

ハあそろうたそろうた踊り子がそろうた アーコーラセー

稲のさで穂よりコラヤレまだよくそろうた

サノヨーイヨーイヨーイヤーセー

ハわしとあなたは焼け山かずら アーコーラセー

またも手を出しヤコラヤレもつかれつく

サノヨーイヨーイヨーイヤーセー

八寺の門口に蜂が巢をかけて アーコーラセー

和尚が降りやあ刺す コラヤレ戻りや刺す

サノヨイヨイヨイヤーセー (以下略)

伝 承 者 門脇 健五 S 24年生 他  
調査員氏名 安部 忠義

八東海道では名も高き 所は小夜の中山で

アラ ヤーハトナーヤーハトナーア

妊みし女が一人旅 アーマイマイ 浪花の平治が道連れで

アラ ヤーハトナーヤーハトナーア

一夜一夜と口説けども アーマイマイ

一夜なびかぬ腹立ちに アラ ヤーハトナーヤーハトナーア

妊みし女を試し斬り アーマイマイ

その斬り口より子が生まれ

アラ ヤンハトナーヤーハトナーア

中山和尚さんが通られて アーマイマイ

どこやら赤子の声がする

アラ ヤンハトナーヤーハトナーア (以下略)

八東3

名 称 島芝翫節

伝 承 地 八東町波入

伝 承 者 歌 渡部 房枝 M 43年生

三味 池内喜一郎

太鼓 柏木 敏

調査員氏名 渡部 周逸

八笹に降る雪たわませおいてナー

八東1

名 称 盆踊り歌(八百屋お七)

伝 承 地 八東町波入

伝 承 者 柏木 朋道 S 19年生 他

調査員氏名 岩田 弘

八わが家もろとも類火にて 親子もろとも立ち退いて

アラ ヤンハトナーヤーハトナーア

どこさら立ち寄る門もなし アーマイマイ

旦那寺へと仮住まい アラ ヤンハトナーヤーハトナーア

縁は異なるものこの寺に アーマイマイ 小姓の吉三と自らは

アラ ヤンハトナーヤーハトナーア

親に隠して二世までも アードッコイ

小指を切って血を絞り アラ ヤンハトナーヤーハトナーア

誓書まで書いて取り替えし アードッコイ 枕定めぬその中に

アラ ヤンハトナーヤーハトナーア (以下略)

八東2

名 称 盆踊り歌

伝 承 地 八東町遅江

とんとたたいはねしゃんす

はねる間の ナーヨーオーイー おもしろさナー

ハレワノーヨーイーヨーイー

芸は芝翫で男は璃寛<sup>るかん</sup> ナー かわいらしいが門之助

人の好くのが ナーヨーオーイー 鰻十郎<sup>えび</sup>ナー

ハレワイーヨーイーヨーイー

歌の安来の亀島越せばナー 周田三里の牡丹島

今に残りし ナーヨーオーイー 芝翫節ナー

ハレワイーヨーイーヨーイー

#### 八束 4

名 称 盆踊り歌(清三口説)

伝 承 地 八束町波入

伝 承 者 柏木 朋道 S19年生 他

調査員氏名 岩田 弘

ア ヨーイヨーイーエヤナー

店はにぎやか暮らしは繁盛 アノコレワイセー

お台所は鳴る瀬のごとく

ア ヨーイヨーイーエヤナー

店の手代が七十と五人 アコレワイセー

その中でも清三というは

ア ヨーイヨーイーエヤナー

物はよく書く算そろばんも アコレワイセー

なんにかけても抜かりはないが

ア ヨーイヨーイーエヤナー (以下略)

#### 八束 5

名 称 地つき歌

伝 承 地 八束町入江

伝 承 者 吉岡鶴之助 M38年生

調査員氏名 岩田 弘

アーヨイトヤヨイトヤ

うちのお背戸にヨー 茗荷や露が

茗荷<sup>みよか</sup>めでたのーヨ 露繁盛

オーモオシロヤ アーヨイトヤヨイトヤ

姉もさいたヨーオーオ 妹もさいた

同じ蛇の目のヨ 唐傘を

オーモオシロヤ アーヨイトヤヨイトヤ

鶴が舞います この家の空で この家繁盛とヨ 舞い遊ぶ

オーモオシロヤ アーヨイトヤヨイトヤ

#### 八束 6

名 称 長持ち歌

伝 承 地 八束町入江

伝 承 者 門脇 春栄 S5年生

調査員氏名 岩田 弘

(送り歌)

へアー 今日ハナーアー日もよし アー 天気もよいし

アー 二つナーア 重ねてヨー アー縁となるだヨー

へアー 蝶よナーアー花とヨー アー 育てた娘

アー 今ハナーそなたにヨー アー さしあげますヨー

へアー わたしヤナーアー行きますヨー アー どなたもさらば

アー あとのナー親さんをヨー アー 頼みますヨー

(受取り歌)

へアー もらいナーアー受けますヨー アー そなたの娘

アー 末ハナー この家のヨー アー しんげち 芯柱ヨー

八束7

名 称 宮入り歌(宮ねり歌)

伝 承 地 八束町入江

伝 承 者 門脇 春栄 S5年生

調査員氏名 岩田 弘

へうれしめでた アノナ アーヨイヤサデ ヨイヤサデ

末まで届け ヨーイヨーイ 末は鶴亀 ヨーエサゴオ

五葉の松 サーヨーイワナーアア ヨーイヤナ

イヤハレワイセ イヤコレワイセ

ソーオノ ナンデモエー チヨウサヤ チヨウサヤ

へ若松さま ハ オイ 枝も オイ 栄えて 葉も茂る

チヨウサヤ チヨウサヤ

八束8

名 称 博多節

伝 承 地 八束町入江

伝 承 者 吉岡 サク M31年生

調査員氏名 岩田 弘

へお月さんがちよい出て松の影

板一枚の舟の底よりまだ恐ろしい こわい世間の人の口

人の口には戸が コラドッコインヨ たたの

へお月さんがちよいと出て松の影

博多帯しめ筑前絞り 筑前博多の帯を締め

歩む姿は柳 コラドッコインヨ 腰

お月さんがちよいと出て松の影 アーコンバンワー

八束9

名 称 磯 節

伝 承 地 八束町入江

伝 承 者 門脇しな子 T1年生

調査員氏名 岩田 弘

へ一里二里なら 自転車で通う

五里と離れりや 自動車を通う

千里離れりや 当世はやりの 飛行機で通う (以下略)

八束10

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 八束町入江  
 伝 承 者 門脇 藤枝 T7年生  
 調査員氏名 岩田 弘

へ一番初めの一の宮 二また日光金の宮 三また桜の吉野宮  
 四また信濃の善光寺 五つ出雲の大社 六つ村々天神さん  
 七つ成田の不動さん 八つ八幡の八幡宮 九つ高野の弘法さん  
 十でとうとう本願寺

これまで信心かけたのに 浪子の病気はなおらない  
 ごうごうごうと鳴る汽車は 武男と浪子の生き別れ  
 浪子は白いハンカチを うち振りながらねえあなた  
 早く帰ってちょうだいな 再び会われな汽車の窓  
 鳴いて血を吐くほととぎす

八束11

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 八束町入江  
 伝 承 者 門脇 藤枝 T7年生  
 調査員氏名 岩田 弘

へ一もんめの一助さん 芋屋のおばさん 芋ちようだい  
 二もんめの二助さん 肉屋のおばさん 肉ちようだい  
 三もんめの三助さん 鯖屋のおばさん 鯖ちようだい  
 四もんめの四助さん ようかん屋のおばさん ようかんちようだい

八束12

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 八束町入江  
 伝 承 者 竹谷 花枝 T6年生  
 調査員氏名 岩田 弘

五もんめの五助さん ごぼう屋のおばさん ごぼうちようだい  
 六もんめの六助さん ろうそく屋のおばさん ろうそくちようだい  
 七もんめの七助さん すし屋のおばさん すしちようだい  
 八もんめの八助さん 花屋のおばさん 花ちようだい  
 九もんめの九助さん 栗屋のおばさん 栗ちようだい  
 十もんめの十助さん 重箱屋のおばさん 重箱ちようだい

へおさら お一つ落として落としておさら  
 お二つ落として落としておさら おみんな落としておさら  
 おはさみおさら おちりんこおさら おてじゃみおさら  
 おてふしおてふし落としておさら

八束13

名 称 指遊び歌  
 伝 承 地 八束町入江  
 伝 承 者 竹谷 花枝 T6年生  
 調査員氏名 岩田 弘

へ一郎星といとい 二ばいこしよばいこ



商売ぬのじのおめかけさんは のんじゆくこのやの川とんぼ  
 どうやら こうやら ちよいと引け 引いても引かれぬ  
 松原源兵衛さん ちよと引いてごっさんせ

八束14

名 称 縄とび歌  
 伝 承 地 八束町入江  
 伝 承 者 門脇 藤枝 T7年生  
 調査員氏名 岩田 弘

郵便さん お入り はいよろし

じゃんけんぼん 負けたお方は 出てちょうだい

八束15

名 称 安来節  
 伝 承 地 八束町江島  
 伝 承 者 門脇 重 M42年生  
 調査員氏名 岩田 弘

堅い約束江島でしたが 待てど暮らせど馬渡で  
 なぜに今宵が遅江やら 波入で話かしてみたい  
 につこり笑った入江村 二つ心の二子村  
 寺津灘にて会いましょう 末は亀尻五葉の松

広瀬1

名 称 田植え下げ歌  
 伝 承 地 広瀬町比田  
 伝 承 者 井上 幸市 M28年生 他3名  
 調査員氏名 井上 明

コラ 今日のヤレヤ 田主の館やふた

どれ館 ヤーアンサ どれだやら ヤンハーレー

ヤレ どれだやら ヤーアレ 八棟造り檜葺き

コラ 今日こんにちのヤレヤ 田主の嫁ごさんの

田姿は ヤーアンサ 田姿は ヤンハーレー

ヤレ 田姿は ヤーアレ 五月野に咲く百合の花

コラ 正月のヤレヤ 歳徳としとくさまを

迎えるに ヤーアンサ 迎えるに ヤンハーレー

ヤレ 迎えるに ヤーアレ 門松たてて注連しめをはる

コラ 正月のヤレヤ 十一日の

鍬初すめに ヤーアンサ 鍬の初すめに ヤンハーレー

ヤレ 鍬初すめに ヤーアレ 千石万石数知かずれず

春は種まき ヤーレヤ 五月は田植え

秋は刈り干す ヤーアンサ 扱あぎこなす ヤンハーレー

ヤレ 扱あぎこなす ヤーアレ こないて納めるわが蔵へ

にぎやかな声こゑがするが あれは何の声かな

恵比須さんや大黒さんが俵はつまくり

コラ 大黒さまは ヤーレヤ せいは小さいけれども

蔵の主 ヤーアンサ 蔵の主 ヤンハーレー

ヤレ 蔵の主 ヤーアレ 俵の上で笑い顔  
恵比須・大黒出雲の国の 西と東の守り神  
ヤーレ 守り神 西と東の守り神

広瀬2

名 称 田植え歌(かつま)  
伝 承 地 広瀬町比田  
伝 承 者 川井 忠吉 T5年生 他5名  
調査員氏名 井上 明

〽わたしや歌好き歌わにゃならぬ ハイハイ

歌でこの身が果てるとも

ヤーレ 果てるとも 歌でこの身が果てるとも

〽仕事なさらば歌うてなされ ハイハイ

歌は仕事の花じゃもの

ヤーレ 花じゃもの 歌は仕事の花じゃもの

〽仕事なさらば歌うてなされ ハイハイ

歌で器量が下がりやせぬ

ヤーレ 下がりやせぬ 歌で器量が下がりやせぬ

〽歌え歌えとせりかけられて ハイハイ

歌は出ませぬ汗が出る

ヤーレ 汗が出る 歌は出ませぬ汗が出る

〽声がよう出でかんどがよけりや ハイハイ

歌は齒元もとに千もある

ヤーレ 千もある 歌は齒元もとに千もある (以下略)

広瀬3

名 称 苗取り歌  
伝 承 地 広瀬町比田  
伝 承 者 川井 忠吉 T5年生 他5名  
調査員氏名 井上 明

〽ヤーレ こちのナ嫁ごさんは ハイ どこ育ち

(唱和) ヤーレ 稲のナおらほのナーのぎ育ち

〽ヤーレ 淀のナ川瀬のナ ハイ 水車

(唱和) ヤーレ たれをナ待つやらナ くるくると

〽ヤーレ 米にナなりたやナ ハイ どこ米に

(唱和) ヤーレ 神にナ供えるナ 酒米さかどめに

〽ヤーレ 水にナなりたやナ ハイ 富田水に

(唱和) ヤーレ 富田のナ若い衆の一升水に

〽ヤーレ 石にナなりたやナ ハイ 富田石に

(唱和) ヤーレ 富田のナ若い衆のたま石に

〽ヤーレ 竹にナなりたやナ ハイ 富田竹に

(唱和) ヤーレ 富田のナ若い衆の尺八竹に (以下略)

広瀬4

名 称 雲助節  
伝 承 地 広瀬町比田

伝承者 井上 延一 M28年生  
調査員氏名 井上 明

〽今日はナー 日もよし ハー 天気もよし

結びナー 合わせて ハー 縁とするナーヨ

〽うれしナー めでたの 若松様ヨ

枝がナー 栄えて ハー 葉も茂るナーヨ

〽届けえナー 届けと ハー 末まで届け

末はナー 鶴亀 ハー五葉の松ナーヨ

### 広瀬5

名称 ばんばら(口説)  
伝承地 広瀬町比田  
伝承者 井上 忠吉 T5年生 他4名  
調査員氏名 井上 明

〽ヨーホイ ヨーホイ ヨイヤナー

わしがやるのは細谷川の ヨーイヨ

竹の丸橋駒下駄はいて ハーヨ

からりころりと渡るがようだ ヨイヨ

渡りかけたら落ちるが道理 ハーヨ

ヤーナー

落ちたところははやしで頼む ヨーイヨ

落ちたところははやしで頼む ハーヨ

ヨイヤナー

何をやるかや何をやらかきよか ヨーイヨ

ここに一つの口説がござる ハーヨ

ヨイヤナー

白滝口説をとろとろやるか ヨーイヨ

ヨーホイサー コーリヤーサでやりかけましょか

ハーヨ

### 広瀬6

名称 こだいじ(口説)  
伝承地 広瀬町比田  
伝承者 川井 忠吉 T5年生 他4名  
調査員氏名 井上 明

〽サーヨナーヨ コラヨ

そろたそろたよ踊り子がそろた (難し掛) コラサイ

稲の出穂よりもまだようそろたナーヨ

サーヨナーヨ コラヨ

竹の切り口にしたたかたつぷりたまりし水は (難し掛) コラサイ

澄まず濁らずナ出もようやらぬナーヨ

サーヨナーヨ コラヨ

今宵どこで寝ようかかぼちや棚の下で (難し掛) コラサイ

かぼちや枕にナ葉を夜着でナーアヨ

サーヨナーヨ コラヨ

買うてごしやらばあげな真赤な裾はね (唯し掛) コラサイ

こらぼたんに唐獅子菜の花に蝶々柳に螢のついたのが

ほしいや (唯し掛) コラサイ

今で持たんのが隣のおばばとわしばかりナーヨー (以下略)

広瀬7

名	称	ひとすじ
伝承地	広瀬町比田	
伝承者	井上 延一	M 28年生
調査員氏名	井上 明	

一筋に思いこんだるわが恋は 筆や言葉に尽さりよか

ほんにやるせがないわいな

有明にともす油は菜種から 蝶が焦がれて会いに来る

昔思えば懐かしや

広瀬8

名	称	松坂
伝承地	広瀬町比田	
伝承者	井上 延一	M 28年生
調査員氏名	井上 明	

ハ朝草に刈りこめられたる あのきりぎりす

馬の背中に乗せられて ギッチョナー ギッチョと

鳴くわいな

ハ一世の中にめでたいものは 芋のかみ

ずいきが長うて葉がもるうて 上には金銀小玉の露を置き

下には白髪根を配り 子孫ナーたくさんつれ繁盛

広瀬9

名	称	ちょちよら節
伝承地	広瀬町比田	
伝承者	井上 延一	M 28年生
調査員氏名	井上 明	

ちよちよらヨー おなごにヨー ハーヨーイトナー

わしやほだされてヨー ハー ソノサキ ドーダー

つらい勤めをサノエ せにやならぬ

咲いたヨー 桜にヨー なぜ駒つなぐヨー

ハー ソノサキ ドーダー

駒がいさいさ勇めばサノエ 花が散る

広瀬10

名	称	山ずくし(口説)
伝承地	広瀬町比田	
伝承者	井上 忠吉	T 5 他4名
調査員氏名	井上 明	

ハサーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ

何をナやろかや 何やろか コラサイ

安部屋の口説をやりかけよか

サーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ

享和の二年の戊の年 コラサイ 国はナ雲州の内取りで

サーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ

広瀬の御領で紛れない コラサイ 水のナ流れる富田川に

サーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ

水の流れを尋ねれば コラサイ 西比田村でも名も高い

サーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ

桂木森のナそのうちに コラサイ 日本一の大社あり

サーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ

金屋子神社と称いけり コラサイ 年には二度のナ祭りあり

サーヤンハトナーアー ヤンハトナーイ (以下略)

伯太1

名 称 こだいじ(盆踊り口説)

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫 T13年生

調査員氏名 梶谷 範敏

サーヨホホホーイヨーホーイ

今年や豊年穂に穂が咲いて ドッコイナー

道の小草に米よなるよホホホーイ

サーヨホホホーイヨーホーイ

そろたそろたよ踊り子がそろた ドッコイナー

稲の出穂よりなおよくそろたよホホホーイ

サーヨホホホーイヨーホーイ

うれしめでたの若松様は ドッコイナー

枝が榮えて葉がヨ茂るヨ ホホホーイ

伯太2

名 称 こだいじ盆踊り口説(八百屋お七)

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫 T13年生

調査員氏名 梶谷 範敏

花の京都の三条が町に ヨーイヨーイ

糸屋幸エ門四代の酒屋 サーヨーイヨーイヨイヤナーヨイ

伊勢はにぎやか暮らしは繁盛 ヨーイ

お台所はならせのごとく サーヨーイヨーイヨイヤナーヨイ

店の手代が七十と五人 ヨーイヨーイ

頭手代に清造とござる サーヨーイヨーイヨイヤナーヨイ (以下略)

伯太3

名 称 こだいじ盆踊り口説(お染心中)

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫 T13年生

調査員氏名 梶谷 範敏

恋のナー浮き名をたてりやと ヨーイヨイヨイ

これぞナー今年の初心中 サーヨイヨイヨイヤナー  
 心は都の東森<sup>あずま</sup> ヨーヨイヨイ  
 (不明) きもんの門屋敷 サーヨイヨイヨイヤナー  
 川らナー楷とやかぶらやの ヨイヨイヨイ  
 一人ナーむすめのナー名はお染 サーヨイヨイヨイヤナー  
 (以下略)

伯太4

名 称 こだいじ盆踊り口説(茶町通い)  
 伝 承 地 伯太町安田  
 伝 承 者 宮本 信夫 T13年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏

へアラ うれしめでたのヨー若松さまはヨー  
 アラ 枝が栄えてヨー ヤンサハー葉も茂るヨ  
 アラ 枝が栄えてヨー 葉が茂りやこそヨ  
 孫子末までヨーヤンサハー繁盛さるナー  
 アラ わしが歌出しやあヨー 空たつ鳥がヨー  
 アラ 羽がえ休みでヨ ヤンサハー歌聞くヨ

伯太5

名 称 どんどん節  
 伝 承 地 伯太町安田  
 伝 承 者 瀬尾大三郎 M30年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏

へ紀州は紀の国みかんの名所 青いときより見初められ  
 赤くなるのをアノ待ちかねて 箱につめられ釘打たれ  
 汽車や汽船に積み込まれ 駿河の富士山横に見て  
 東京新橋あの日本橋 吉原女郎屋へ身を売られ  
 客に出るときやあ 丸裸 ドンドーン

伯太6

名 称 どんどん節  
 伝 承 地 伯太町安田  
 伝 承 者 瀬尾大三郎 M30年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏

へ駕籠<sup>かご</sup>で行くのはお軽じゃないか  
 わたしや売られて行くわいの  
 ととさまご無事にまた母さまも 勘平さんも折々は  
 便り聞いたり 聞かせたり ドンド

伯太7

名 称 高い山から  
 伝 承 地 伯太町安田  
 伝 承 者 瀬尾大三郎 M30年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏

へ高い山から谷底見ればナー 瓜や茄子<sup>なすび</sup>の花盛りナー  
 中であんちよが舞い踊るな

アレワイヨイヨイヨイ コレワイヨイヨイヨイ

伯太 8

名 称	ぼた餅顔 (子守り歌)
伝 承 地	伯太町安田
伝 承 者	瀬尾大三郎 M 30年生
調査員氏名	梶谷 範敏

「こんな子よい子だ ぼた餅顔でなあ  
きな粉つけたら なおよかるな  
アレワイドンドンドン コレワイドンドンドン

伯太 9

名 称	新内
伝 承 地	伯太町安田
伝 承 者	瀬尾大三郎 M 30年生
調査員氏名	梶谷 範敏

「平家で名高い景清も あこやにのろけて牢破り  
ましてや凡夫の我々が  
会いとうのうても何んとしょうぞえなあ  
「去りし女房の形見とて あんどに残せし針の穴  
泣きいるわが子ひざあげ 男涙でもらい乳

伯太 10

名 称	たんかい節
伝 承 地	伯太町安田
伝 承 者	瀬尾大三郎 M 30年生
調査員氏名	梶谷 範敏

「網を引きあげ 船頭さんは帰る 後に残るのは 櫓と櫓  
波の音 ヨインヨコシヨ  
「浜の松風 相撲はなくなる 相撲取り帰る  
後に残るのは 四本柱に土俵と  
お砂よけに ヨインヨコシヨ 紙と水と塩をゆう

伯太 11

名 称	鴨緑江節
伝 承 地	伯太町安田
伝 承 者	瀬尾大三郎 M 30年生
調査員氏名	梶谷 範敏

「朝鮮と支那と境の あの鴨緑江  
流す筏はアノよけれども ヨインヨ  
雪や水にヨとざされてヨ  
あすはまたトケンに着きかねる チヨイチヨイ  
「朝鮮と支那の境の あの鴨緑江 流す筏も数知れず  
十字に開けば真帆片帆 往き来るまたジャンクのにぎやかさ  
「新世帯 馴れないかまどに青芝くべて  
「こら大変にくすぼるじゃあないか」

「でも青芝くべたんですもの」

「石油でもぶっかけたらいいいじゃあないか」

怒らず教えて アラちようだいよー ヨイシヨ

三味線うつ手によ 火吹き竹よつのとおる

その手に水手桶 チヨイチヨイ

伯太12

名 称 追い分け

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫

調査員氏名 梶谷 範敏

T 13年生

へわたしや出雲の 船乗り稼業 今日も棹さしやあ 黄金波こがね

宍道湖水に船歌小歌 沖でかもめがまた招く

伯太13

名 称 都々逸

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫

調査員氏名 梶谷 範敏

T 13年生

へどどいつやほでも やりくりや上手

今朝も七つ屋で 褒められた

へ娘今月ちゃ だいだかーよだか

抱いて寝てから しょじゃないか

伯太14

名 称 長持ち歌

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫

調査員氏名 梶谷 範敏

T 13年生

へアア 今日のはなあ 日もよしヨー 天気もよいし

結びナ合わせてよ アー蝶ちようとなるのよ

へアー蝶ナー 花やでヨー 育てた娘

今日はナー 殿御のヨー アー手に渡すヨー

(以下略)

伯太15

名 称 田植え歌

伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 宮本 信夫

調査員氏名 梶谷 範敏

T 13年生 他4名

へアー 米子からヤー大山さままで なんぼあるヤーサー

なんぼあるヤーハネー

なんぼあるヤー ハーレー 三十六道が五里ござる

へアー 大山のヤーハーレー みせんのお池にある水はヤー

サーある水はヤーハレー

ある水はヤーハーレ諸国の人の護符の水

へサー 横田ではヤーハーレ船通寺お山の梅の木はヤーサ



梅の木はヤーハレー

梅の木はハーレーさんがの国へ影をさす

伯太16

名	田植え歌(苗取り節)
伝承地	伯太町安田
伝承者	宮本 信夫
調査員氏名	梶谷 範敏
	T13年生 他2名

ヤーレ こちの嫁ごさんは どこ育ち

ヤーレ 稲のうらぼののぎ育ち

ヤーレ 米になりたや アラ 富田の米に

ヤーレ 富田のナ 若い衆の アラ 飯の米に

ヤーレ 水になりたや アラ 富田の水に

ヤーレ 富田のナ 娘さんの アラ 化粧の水

伯太17

名	田植え歌
伝承地	伯太町安田
伝承者	宮本 信夫
調査員氏名	梶谷 範敏
	T13年生 他2名

へそろたそろたよ早乙女さんがそろた

稲の出穂よりなおそろた

ヤーレなおそろた 稲の出穂よりなおそろた

へ今年や豊年穂に穂が咲いて ハイハイ 道の小草に米がなる

ヤーレ米がなる 道の小草に米がなる

へ今年や豊年門田の稲も ハイハイ 幹が一丈で穂が五尺

ヤーレ穂が五尺 幹が一丈で穂が五尺

伯太18

名	お手玉歌
伝承地	伯太町安田
伝承者	細田 玉枝
調査員氏名	梶谷 範敏
	T2年生

へおじゃみ おふたおふた おみいおみい およおよお

おいつ おったいせ おったいせ なつてき なつとんきい

おーじゃみじゃつとんきい (以下略)

伯太19

名	お手玉歌
伝承地	伯太町安田
伝承者	細田 玉枝
調査員氏名	宮本八代江
	T12年生

へおじゃみ おふたおふた おみいおみい およおよお

おいち おいち

おふたぎくらで なつとんきい

おみいぎくらで なっとんきー  
 およおぎくらで なっとんきー  
 おもおぎくらで なっとんきー  
 おふとよせ おふとよせ おおみちこほし こしあーれよ  
 おふたおーにけにけた おみいをおにけにけた  
 およおおににけた おっちめ おっちめ  
 おっちめ おっちめ おっちめ つーめた

伯太20

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 伯太町安田  
 伝 承 者 細田 玉枝 T2年生  
 宮本八代江 T12年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏

へねんねこや さらばこや ねんねこねんねこ 与市の子  
 与市の子じゃやら孫じゃやら  
 ねんねこねんねこねんねこや ねんねこねんねこねんねこや  
 ねんねの子守りはどこへ行た 野を越え山越え里へ行た  
 里の土産になにもろた でんでん太鼓に笙の笛  
 ねんねこねんねこや

伯太21

名 称 遊び歌  
 伝 承 地 伯太町安田

伝 承 者 細田 玉枝 T2年生  
 宮本八代江 T12年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏  
 へ中の中の小<sup>こんぼとけ</sup>仏 なあして背がかあがんだ  
 ねんばねんばに攻められて  
 おつちよこちよーでしゃあがんだ  
 へ中の中の小仏 なあして背がかあがんだ  
 ねんばねんばに攻められて  
 おつちよこちよーでしゃあがんだ

伯太22

名 称 遊び歌(お月さんなんぼ)  
 伝 承 地 伯太町安田  
 伝 承 者 細田 玉枝 T2年生  
 宮本八代江 T12年生  
 調査員氏名 梶谷 範敏

へお月さんなんぼ 十三 九つ そりやあまんだ若いな  
 嫁取ってあぎようか 嫁ごはいらぬ 婿取ってあぎよか  
 婿さんはいらぬ えのる道で(帰り道で)  
 尾のない鳥が 油筒くわえて てんこしゃん踊った

伯太23

名 称 螢とり歌

伝 承 地 伯太町安田  
伝 承 者 宮本 信夫 T 13年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

へ 螢こい 螢こい

あっちの水は苦いぞ こっちの水は甘いぞ

へ ほ 螢こい

あっちの水は苦いぞ こっちの水は甘いぞ

伯太 24

名 称 なんてまんがいいでしょう  
伝 承 地 伯太町母里  
伝 承 者 山崎りよの M 28年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

へ いやじゃいやじゃよ ハイカラさんはいやじゃ

頭の横ちょに横溝分けて なんてまんがいいでしょ

へ 一時二時まで夜明かすやつは 電信柱で頭こつこつ

なんてまんがいいでしょ

へ いやじゃいやじゃよ ハイカラさんはいやじゃ

頭の横ちょに ささえの壺焼き なんてまんがいいでしょ

伯太 25

名 称 子守り歌

伝 承 地 伯太町母里  
伝 承 者 山崎りよの M 28年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

へ あの子よい子だ ぼた餅顔でな

きな粉つけたらなおよかるな

アレワイドンドンドン コレワイドンドンドン

伯太 26

名 称 子守り歌  
伝 承 地 伯太町母里  
伝 承 者 山崎りよの M 28年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

へ 高い山から谷底見ればナー 瓜は三味ぶく 茄子は踊るナー

なかで こちょんちょが舞い遊ぶナー

アレワイ ドンドンドン コレワイ ドンドンドン

伯太 27

名 称 子守り歌  
伝 承 地 伯太町母里  
伝 承 者 山崎りよの M 28年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

へ こな子よいこた 杓子の顔でナー

なんぼ転んでも 鼻を打たのな

アレワイドンドンドン コレワイドンドンドン

伯太29

伯太28

名称 数え歌  
伝承地 伯太町母里  
伝承者 山崎りよの M28年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

名称 鳥おい  
伝承地 伯太町母里  
伝承者 山崎りよの M28年生  
調査員氏名 梶谷 範敏

唐土の鳥が 日本の土地に 渡らぬ先に  
七草そろえて ヤッホッホー

一つとせ 人々忠義を第一に第一に 思いや深き父の愛

二つとせ (不明)

三つとせ 幹は一つの枝と枝 枝と枝 仲よく暮らせよ兄弟あにおとと、姉妹

四つとせ よきこと互に勧めあい 勧めあい 悪きをいさめよ友と友人と人

五つとせ (不明)

六つとせ 昔を考え今を知る 今を知る 学びましようよ今のこと

今のこと

七つとせ 難儀をする人見るときは見るときは 力の限りいたわれよ あわれめよ

八つとせ 病は口より入るとい入るとい

飲み物食い物気をつけよ 心せよ

九つとせ 心は必ず高く持て 高く持て たとえ身分は低い

とも軽いとも

十とせ 遠き祖先の訓えをも 訓えをも 守りて尽す

家のため 国のため

仁多1

名称 苗取り歌  
伝承地 仁多町上阿井  
伝承者 渡部 林一 T5年生  
渡部 マン T7年生  
調査員氏名 植田 恒雄

ヤールレ どれもナどなたもナ 歌いなされ

ヤールレ 歌ナ器量がさがりやせぬ

ヤールレナ 縄手走る小女房こにようほ ヤールレナ 長い髪をさばいて

仁多2

名称 かつま歌  
伝承地 仁多町上阿井  
伝承者 渡部 林一 T5年生  
渡部 マン T7年生  
調査員氏名 植田 恒雄

歌いなされやどなたもどれも 歌で器量がさがりやせぬ

ヤレさがりやせぬ 歌で器量がさがりやせぬ

へ歌いはすれどまだ年若で 声が続かぬ夜明けまで  
ヤレ夜明けまで 声が続かぬ夜明けまで

仁多3

名 称 田植え歌(朝の歌)

伝 承 地 仁多町上阿井

伝 承 者 渡部 林一 T5年生

渡部 マシ T7年生

調査員氏名 植田 恒雄

(サゲ)

へ朝起きてヤーハレ ならせやならせ声ならせ

ナンサーテヤ 声ならせ

(早乙女)

ヤーレ声ならせ ヤーハレ ならさぬ声はに声なり

へ朝起きてヤーハレ 細戸に開けて見渡せば ヤー見渡せば

ヤーレ見渡せば 黄金に勝る朝日さす

仁多4

名 称 田植え歌(おなり殿の歌)

伝 承 地 仁多町上阿井

伝 承 者 渡部 林一 T5年生

渡部 マシ T7年生

調査員氏名 植田 恒雄

へ大黒はヤーレヤ背は小さいけれども蔵の主ナ さてや蔵の主

蔵の主 俵を壁に銭枕  
へ大黒はヤ おぼしなかいの蔵でこそ さてや蔵でこそ  
蔵でこそヤ 俵をつくべし奥の蔵へ

へおもしろ声があるが あれはなんの声

大黒さまが 俵をまくるその声よ

仁多5

名 称 田植え歌(晩方の歌)

伝 承 地 仁多町上阿井

伝 承 者 渡部 林一 T5年生

渡部 マシ T7年生

調査員氏名 植田 恒雄

へ今日の田の田友達は名残惜しい友やれ

洗へその川でこそ文を参らしよ

へ川の中の瀬で稚児が文落ふみといた

やな押せや やな押せや やない文を

へ一日かけた情を洗い川で流いた

まだ流いた洗い川へ流いた

仁多6

名 称 苗取り歌

伝 承 地 仁多町三沢上鴨倉

伝 承 者 竹田栄一 T5年生  
調査員氏名 植田 恒雄

〱ヤールうちのナ嫁ごさんはどこ育ち

ヤール稲のナおらぼのナのぎ育ち

〱ヤール杵築ナの千家さんの五葉の松やどこに

ヤール元は御崎にナ葉はおりよう(宇竜)に

仁多7

名 称 苗取り歌  
伝 承 地 仁多町三成  
伝 承 者 広野万之助 M42年生  
調査員氏名 植田 恒雄

〱ヤール 縄手走る小女房 ヤールナ長い髪をさばいて

〱ヤールナ米になりたやナ 戸田米に

ヤール 戸田の若い衆の飯米に

仁多8

名 称 田植え歌(朝まの歌)  
伝 承 地 仁多町三成  
伝 承 者 広野万之助 M42年生  
調査員氏名 植田 恒雄

〱今日の日のヤールナ田主の館は

どれ館ナンサーテどれ館ナ

どれ館ヤールナ八棟造りのひわだ葺き

〱今日の日のヤール田主の床前眺むれば

眺むればナ

眺むればナ

仁多9

名 称 田植え歌(昼前の歌)  
伝 承 地 仁多町三成  
伝 承 者 広野万之助 M42年生  
調査員氏名 植田 恒雄

〱大仙のヤール高天の原に昼寝してナ

ヤール枕してヨ東の殿御の夢を見る

〱今日の日の田主のしんすい眺むればナ

ヤール眺むればナ

仁多10

名 称 田植え歌(かつま歌)  
伝 承 地 仁多町三成  
伝 承 者 広野万之助 M42年生  
調査員氏名 植田 恒雄

〱歌え歌えとせりかけられて 歌は出ませぬ汗が出る

〱来いと言うたら川でも渡る 川が深けりや舟で来る

仁多11

名 称 田植え歌(午後の歌)  
 伝 承 地 仁多町三成  
 伝 承 者 広野万之助 M42年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

〽今日の日のヤーレヤ 田主のしんすい眺むればナ

ソーリヤア眺むればナ

ヤーレ眺むればヤ 鯉 鮒 金魚の数がある

〽今日の日のヤーレヤ 花壇を眺むればナ

ソーリヤア眺むればナ

ヤーレ眺むればヤ いろいろ花があるだら

仁多12

名 称 田植え歌(かつま歌)  
 伝 承 地 仁多町三成  
 伝 承 者 広野万之助 M42年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

〽思っちゃおれど 手出しがならの

ならの手出しがしてみたい

〽出雲八重垣鏡の池に 映す二人の晴姿

仁多13

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 仁多町上三所

伝 承 者 恩田金右衛門 M31年生  
 陶沢祐三郎 M35年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

〽今日はヤーレヤ田主の館はどれ館ヤーハレ

どれ館ヤーハレ

どれ館ヤーハレ 八棟造りのひわだ葺き

〽大山の下屋の権現何守るヤーハレ何守る

何守るヤーハレ 諸国の牛馬を守る神

仁多14

名 称 田植え歌(かつま歌)  
 伝 承 地 仁多町上三所  
 伝 承 者 陶沢祐三郎 M35年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

〽今日もまたばんじが暮れた 牛もあるけとうれしかる

ヤレうれしかる 手もあるけとうれしかる

〽来るか来るかと待つ夜な来いで 待たぬ夜に来て門に立かどつ

ヤレ門に立つ待たぬ夜に来て門に立つ

仁多15

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 仁多町三沢  
 伝 承 者 落合 石野 M42年生 他2名  
 調査員氏名 植田 恒雄

へ今日の日のヤーレヤ 田主の館はどれ館ナ！

ソレ どれ館ナ！

ドーレ館ヤー八棟造りのひわだ葺き

へ今日の日はヤーレヤ 田主の小庭を眺むればナ！

ソレ 眺むればナ！

眺むればナ！ ぼたん しゃくやく 百合の花

仁多16

名称 苗取り歌

伝承地 仁多町高田

伝承者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

へヤーレこちのナ嫁ごさんはどこ育ち

ヤーレ稲のナおらぼのナのぎ育ち

へヤーレ水になりたや戸田水に

ヤーレ戸田のナ若い衆の化粧水に

へヤーレ竹になりたや戸田竹に

ヤーレ戸田の若い衆の笛竹に (以下略)

仁多17

名称 田植え歌(朝歌)

伝承地 仁多町高田

伝承者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

(サゲ)

へ朝声はヤーハレ ならせやならせ声ならせヤーハレ

声ならせヤーハレ

(早乙女)

声ならせヤーハレ ならさぬ声はにごえなり

仁多18

名称 田植え歌(田主の歌)

伝承地 仁多町高田

伝承者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

へ今日のヤー 田主の館はどれだやらヤーレ

どれだやらヤーレ

どれだやらヤーレ 八つ棟造りにひわだぶき

へ今日のヤー 田主の館の泉水眺むればヤーレ

眺むればヤーレ

眺むればヤーレ 鯉、鮒、金魚が舞い遊ぶ

仁多19

名称 田植え歌(かつま歌)

伝承地 仁多町高田

伝承者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄



へ今年や豊年穂に穂が下がりや 道の小草に金かねがなる  
ヤレ金かねがなる 道の小草に金かねがなる

へここらあたりで皆々様よ 腰を伸ばして休みましょ  
ヤレー休みましょ 腰を伸ばして休みましょ

仁多20

名 称 田植え歌(大山歌)

伝 承 地 仁多町高田

伝 承 者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

へ大山のヤーヤレ 周りのまぎの葉の数はヤーレ

葉の数はヤーレ

葉の数はヤーレ 七千三百八葉ござる

へ大山のヤーヤレ 赤松が池にうつ波はヤーレ

うつ波はヤーレ

うつ波はヤーレ 横手の空で霧となる

仁多21

名 称 田植え歌(おなりどの歌)

伝 承 地 仁多町高田

伝 承 者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

へおなりどはヤーレヤ さんばいさまの飯をたくヤーレヤ

飯をたくヤーレヤ  
飯をたくヤーレヤ さんばいさまに供えます

仁多22

名 称 田植え歌(午後の歌)

伝 承 地 仁多町高田

伝 承 者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

へ恋しくばヤーレヤ 訪ねてござれ米子までナーレ

米子までヤーハレ

米子までヤーハレ 米子の町のまん中で

へ鳥上のヤーレヤ 船通山の梅の木はナーレ

梅の木はナーレ

梅の木はナーレ 三ヶ国さんかくにへ影をさす

仁多23

名 称 田植え歌(暮れ方の歌)

伝 承 地 仁多町高田

伝 承 者 小田川善之助 T12年生 他3名

調査員氏名 植田 恒雄

へ七つからヤーレヤ 西山見れば 恐ろしやヤーンハレ

恐ろしやヤーンハレ 日輪様のお宿入り

仁多24

名称	苗取り歌
伝承地	仁多町亀嵩
伝承者	内田 柳一
	M 42年生
調査員氏名	岩田ハナ子
	M 43年生
	植田 恒雄

〽ヤーレこちのナー 嫁ごさんはどこ育ち

ヤーレ稲のナおらほのナのぎ育ち

〽ヤーレナー縄手走る小女房 ヤーレ長い髪をさばいて

仁多25

名称	田植え歌
伝承地	仁多町亀嵩
伝承者	内田 柳一
	M 42年生
調査員氏名	岩田ハナ子
	M 43年生
	植田 恒雄

〽恋しくばヤーハレヤ 訪ねてござれ米子までヤーハレ

米子までヤーハレ

ヤーレ米子までヤーハレ 米子の町の真ん中へ

〽朝起きてヤーハレヤ 細戸に開けて見渡せばヤーハレ

見渡せばヤーハレ

見渡せばヤーハレ 黄金に勝る朝日さす

仁多26

名称	田植え歌(かつま歌)
伝承地	仁多町亀嵩
伝承者	内田 柳一
	M 42年生
調査員氏名	岩田ハナ子
	M 43年生
	植田 恒雄

〽めでためだの若松様は 枝が栄えて葉も茂る

枝が栄えて葉も茂る

ヤーハレ葉も茂る 枝も栄えて葉も茂る

〽辛苦長々種来る水も 人が情をかけにゃこぬ

人が情をかけにゃこぬ

ヤーハレかけにゃこぬ 人が情をかけにゃこぬ

仁多27

名称	木挽き歌
伝承地	仁多町上阿井
伝承者	渡部 林一
	T 5年生
調査員氏名	植田 恒雄

〽ヤーレ大工さんどま 表の奥で 木挽きあさまし 小屋ずまい

〽ヤーレ木挽き 下道めが 三升飯食らって

鋸の柄のような 糞たれた

〽ヤーレ鋸が下がらぬ 下らぬ鋸は どの裏齒の加減やら

仁多28

名称 餅つき歌  
伝承地 仁多町上阿井  
伝承者 渡部 林一 T5年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へうれしめでたのヤ 若松様は 枝が栄ようてヤレ 葉も茂る  
ヤッシャ モッショ ヤッシャ モッショ  
へうれしめでたの若松様は 枝が栄ようて 葉も茂る  
へ枝が栄ようて 葉が茂りや 命や 長かれ 姫小松  
ヤッシャ モッショ ヤッシャ モッショ

仁多29

名称 粃すり歌(白ひき歌)  
伝承地 仁多町三沢  
伝承者 佐藤 クラ M27年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へハー白にさばらばらばナーヨイナー ヤレナーヨイナー  
歌出せ女子おなご  
へハー来るか来るかとヨイナー ヤレナー ヨイナー  
川下見れば

仁多30

名称 白挽き歌  
伝承地 仁多町三沢

伝承者 佐藤 クラ M27年生  
調査員氏名 植田 恒雄

(石目)  
へいすすふけふけ 団子して食わせろ  
いすすふかねば またかいじや  
へいすすふけふけ 団子して食わせろ  
芋にかぶ菜を 切り混ぜて

仁多31

名称 白挽き歌  
伝承地 仁多町三沢  
伝承者 糸賀 貞一 M38年生  
調査員氏名 長谷川勝盛 M40年生  
植田 恒雄

へヨイナー 歌出せおなご ヤレナー ヨイナー  
歌は出ませの 汗が出る  
へイヤナー アレナイー  
来るか来るかと 川下見れば 川原よもぎの 影ばかり

仁多32

名称 白挽き歌  
伝承地 仁多町三成  
伝承者 糸賀 貞一 M38年生  
調査員氏名 植田 恒雄

いすすふけふけ だんごして食わしようぞ  
 いすすふかねば またかえじゃ  
 いすすふけふけ だんごして食わしようぞ  
 芋にかぶ菜を 切り混ぜて  
 (家)  
 うつのいすすは おかしないすす  
 入れてまわさにゃ こねならん

仁多33

名 称 石つき歌  
 伝 承 地 仁多町三沢  
 伝 承 者 糸賀 貞一 M38年生  
 長谷川勝盛 M40年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

ハハラヨーホイトコシヨ ヨイヤトコ ヨイヤトコ  
 ナンハノエー  
 ハハラエー トー エーヤトコ ヨイヤトコ ナンハーエー  
 大黒柱の下の石 でんでらでんと ついておけ

仁多34

名 称 石つき歌  
 伝 承 地 仁多町上三所  
 伝 承 者 恩田金右衛門 M31年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

ハサノヨイトコシヨ ヨイヤトコナンハノエー  
 エートコシヨ ヨイヤトコ ナンハノエー  
 どれもどなたも心得て この石なんぞと申するは  
 大黒柱の下の石 悪事災難取り除けて  
 金銀黄金こがねを突きこんで はんやと言う声かけたなら  
 頭の上まで取りあげて 地獄の底まで突き込んで  
 でんでらでんとナー 突いてごさっされや  
 ハーレワサーハノエー  
 ハーヨーイヤ ヨイホーサラ ハラヨイシヨ ハラヨイシヨ  
 ハラヨイシヨ ハラヨイシヨ

仁多35

名 称 わらたき歌  
 伝 承 地 仁多町上三所  
 伝 承 者 石原亀太郎 T2年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

わらをたたかば どんどとたたけ 下に玉子が ありやすまい  
 竹に雀は 品よく止まる 止めて止まらぬ 色の道  
 へ思い出すより ほれよが浅い 思い出さずに 忘れずに

仁多36

名 称 白ひき歌  
 伝 承 地 仁多町三沢

伝 承 者 林 マシ M37年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へいすすふけふけ だんごして食わしようぞ

芋にかぶ菜を 切り混ぜて

へ今夜どこで寝ようか かぼちゃの中で

かぼちゃ枕に 葉を夜具ね

へ今夜どこで寝ようか 茶藪の中で

茶の実まくらに 葉を夜具ね

へうちのお父さんは かぼちゃのつるで

隣屋敷を はい回る

仁多37

名 称 松 栄  
伝 承 地 仁多町三沢  
伝 承 者 竹田 栄一 T5年生  
調査員氏名 植田 恒雄

(前歌)

へハアー千両万両の金にはほれぬ

わたしゃあなたのサノエー 気にはれた

(本歌)

へハアー世の中にめでたいものは芋の頭

ずい気が長うて 葉が広うて 上には金銀小玉の露を受けて

下には白髪のじいばあさんが 孫子抱いて末繁盛  
へ世の中にめでたいものは そばの種

二回三回花咲かせ 末はみかどになるわいな

へ世の中にめでたいものは菊の花

根も効く・葉も効く・花も効く

こよいお客の声も聞く・酌とり女子の声も聞く

仁多38

名 称 ちよちよら節  
伝 承 地 仁多町上鴨倉  
伝 承 者 竹田 栄一 T5年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へうれしサー めでたのヨイ ヤレナー

若松様はハーンソノサキヤドウジャイ

枝も栄えてサノエー 葉も茂る

へ届けサー 届けヨイ ヤレナー

末まで届け ハーンソノサキヤドウジャエ

末は鶴亀 五葉の松

へちよちよらサー 女子にわしゃほだされて

ハーンソノサキヤドウジャエ

つらい勤めもせにやならぬ

へあなたサー 百までヤレナー

わしゃ九十九まで ハーンソノサキヤドウジャイ

ともに白髪が生えるまで

仁多39

名	博多節
伝承地	仁多町三成
伝承者	広野万之助
調査員氏名	植田 恒雄
	M42年生

〱百万石の 知行取るより あなたのそばで

赤いたすきをあやにかけ

手なべ下げてもいとやせぬ コリヤドッコイシヨ

ソレ お月さんが 小松の蔭から手まねする

〱身は町人でありながら 武士も及ばぬ 天野屋利兵衛

人にこうじやと頼まれりや

後にはひかれぬ 男 コリヤドッコイナ だて

ソレ お月さんが小便すりや 雨となる

仁多40

名	松栄
伝承地	仁多町三成
伝承者	広野万之助
調査員氏名	植田 恒雄
	M42年生

〱祝いがだんだん重なりて

四十二から六十一 六十一から八十八

八十八のお祝いに 床にかけたる掛物は 七福神の掛物よ  
前に据えたる広盆は 中が本朱で外が黒ため  
中には大鯛据えてある

外ひりに小鯛を遊ばせて これなとさかなで召しあがれ

〱十二や三で酌に出て 酒のさかなと望まれて

ちよいと後の新水に こいやふながいけてある

これは雑ぎこであげられぬ ちよいと後の小畑に

なすびが千本植えてある これも遅まき花盛り

はるばる空のがんの鳥 これなとさかなでめしあがれ

仁多41

名	松栄
伝承地	仁多町上三所
伝承者	恩田金右衛門
調査員氏名	植田 恒雄
	M31年生

〱世の中で めでたいものは芋の種

ずいきが長なうて 葉が広うて

上には金銀小玉の露を受けて 下には白髪のはあさんが

孫子たくさん 末繁盛

〱こちのお家は前から繁盛なお家にて

東の破風には鶴下りて 西の破風には亀上がり

鶴は千年生きるもの 亀は万年生きるもの

今は若世でおお繁盛

仁多42

名 称 嫁入り歌(門出)

伝 承 地 仁多町上三所

伝 承 者 陶沢祐三郎 M35年生

調査員氏名 植田 恒雄

へうれしナアめでたの若松様は 枝もナア葉も茂る

へかわい十七白歯を染めて 奥の納戸で身ごしらえ

へお門ナア出るときゃ あげはの蝶よ

行けばぼたんの花が咲く

へここは山中寂してならぬ ひとつさえええずればととぎす

(以下略)

仁多43

名 称 盆踊り歌(山くずし)

伝 承 地 仁多町上阿井

伝 承 者 渡部 林一 T5年生

調査員氏名 植田 恒雄

へどれもどなたも どなたもどれも コラサイ

ここらあたりで 踊りてわかりよ

サノヤンハトナイ ヤンハトナーイ

へ踊り踊らば 品よく踊れ コラサイ

品のよいのは 嫁ごにもろうた

サノヤンハトナイ ヤンハトナーイ

へわしがちよつと出て ちよつとやりましょか コラサイ

今の音頭さんは 煙草の中へ

サノヤンハトナイ ヤンハトナーイ

へ今の音頭さんは なかなか上手 コラサイ

声がよく出て 節うらうらに

サノヤンハトナイ ヤンハトナーイ

仁多44

名 称 盆踊り歌(神立節)

伝 承 地 仁多町上鴨倉

伝 承 者 竹田 栄一 T5年生

調査員氏名 植田 恒雄

へ伊予や讃岐や広島じゃない コラセー

わたしや備前の岡山育ち

サノヤンハトナーイ ヤンハトナーイ

へわたしや備前の岡山育ち コラセー

米のなる木をまだ知らぬ

サノヤンハトナーイ ヤンハトナーイ

へ米のなる木が一もとほしい コラセ

植えて育てて金ならしよ

サノヤンハトナーイ ヤンハトナーイ

仁多45

名 称 盆踊り歌(新保広大寺踊り)  
 伝 承 地 仁多町佐白  
 伝 承 者 和久利正儀 T13年生 他4名  
 調査員氏名 植田 恒雄

へ新保ナーエー広大寺が山に寺建てて コラサ  
 人も参らぬ戸も開かぬ

へ新保ナーエーサナエ 広大寺が腰にびく下げて コラサイ  
 前の小川でどじょうとる コラナーエー

へ佐白ナーエーサナーエ 名物広大寺踊り

拍子そろえて踊ろじやないかナーハーヨ

へ長者ナーヨーサナーエ 屋敷に産湯の泉 コラサイ

愛の元結かけたヨー松 コラナーハーヨ

へ阿用ナーヨーサナーエ 蓮華寺一畑薬師 コラサイ

いつも籠り堂の人が絶えぬヨーエ

へコラナーエサナーエ 広大寺の山に陽が落ちて

里にゃ踊りの灯がともる ナーヨー

へホラナーハーヨサナーナ 広大寺を踊る手が招くコラセー

嫁も姑もみな出て踊ろナーハーヨイ

へ斐伊のナーヨサナーナイ 川瀬か河鹿の笛か

鐘が聞こえる円満寺のナーハーヨ

へ盆はナーハーヨナー うれしや別れた人もコラセ

晴れてこの世に会いにヨー来るコラセナーヨ

へそれじゃナーヨーサナーナイ ここらあたりで踊りを止めてコラセー

またのご縁に踊ろじやないかナーアーヨイ

仁多46

名 称 盆踊り歌(口説)  
 伝 承 地 仁多町亀嵩  
 伝 承 者 内田 柳一 M42年生  
 岩田ハナ子 M43年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

へよいその後は

どれもどなたも踊ろじやないか ヤンハートナーヤンハートナーエー

わしがちよと出て音頭を取れば アーコラサー

万事頼むよ踊り子さんよ ヤンハートナーヤンハートナーエー

あれさこりやさじゃ踊りにならぬアーコラサー

ここらあたりで文句としようか ヤンハートナーヤンハートナーエー

(小源太物語一部)

今度大阪道頓堀の アーコラサー

出羽が芝居の勘平が座元 ヤンハートナーヤンハートナーエー

役者そろえて三十五人 アーコラサー

芸のよいのはただ五、六人 ヤンハートナーヤンハートナーエー

それが中でも義太夫さんは アーコラサー

三味もよく弾く諸芸がようて ヤンハートナーヤンハートナーエー

どこへ出しても後へはひかぬアーコラサー

それに劣らぬ吉川小源 ヤンハートナーヤンハートナーエー



年は十五で新前髪で アーコーラサー

女役者に一番者よ ヤンハートナーヤンハートナーエー

これも十五で花子もつぼみ それに小源がちよと目をかけて

一緒連れよと約束までも 両方互いに楽しむうちに (中略)

小源形見とお取りなされ 言うて小源は眠るがごとく

そこで一同涙にくれて 珠数に手をかけ南無阿弥陀仏

こちらで終わりとしましよ 長のお世話にあいになりました

仁多47

名 称 盆踊り歌(口説)

伝 承 地 仁多町三成

伝 承 者 砂田 莊仁 S13年生 他

調査員氏名 植田 恒雄

へサノヤンハートナーイ

今の音頭はいずこじやどなた アコラサイ

お声ナ自慢のヤレ人だこと サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

声はよう出る節うらやかに アコラサイ

わたしヤナあのようにやようやりませぬ サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

物にたとえて見ましようならば アコラサイ

しんのナ奥山細谷川の サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

竹の丸橋駒下駄はいて アコラサイ

杖もナつかずに渡るがごとし サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

渡りはずせば落ちるかも知れぬ アコラサイ

落ちたナところははやしで頼む サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

下手な長口上踊りのじゃまよ コラサイ

さんさなこころで本じよとやろか サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

何をやるかと思案をしたが コラサイ

思いナついたは短いやつを サノヤンハートナーイ

ヤンハートナーイ

仁多48

名 称 盆踊り歌(口説) お吉清三

伝 承 地 仁多町三成

伝 承 者 砂田 莊仁 S13年生 他

調査員氏名 植田 恒雄

へこんど京都の三条が町の コラサイ

糸屋ナ与エ門よどめの盛り サノヤンハートナーイ

店はにぎやか ヤンハートナーイ

店はにぎやか暮らしは繁盛 コラサイ

お台ナ所が鳴る瀬のごとく サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 店の手伝七十と五人 コラサイ  
 五人ナ頭の清三とやはら サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 物もよく書き算そろばんも コラサイ  
 何をナさせても抜け目のない男 サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 一つしわざの抜け目がござる コラサイ  
 ひとりナ娘のお吉とやらと サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 いつのころやら契りをこめて コラサイ  
 表てナ唐紙そろりと開けて サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 お吉お吉と小声で起こす コラサイ  
 人のナ耳にと入らざるうちに サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 だれに知れしか御主人さんに コラサイ  
 奥のナ一間にお吉をよんで サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー  
 (中 略)  
 わたしやここで止めおきまして コラサイ  
 だれかナどなたか声継ぎ頼む サノヤンハトナリー

ヤンハトナリー  
 やれなうれしや音頭さんが見えた コラサイ  
 見えたナとところでこの傘渡す サノヤンハトナリー  
 ヤンハトナリー

仁多49

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 仁多町上三所  
 伝 承 者 石原 朝子 T4年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

へうちの後の椎の木に 雀が三羽鳩三羽  
 一羽の雀が言うことには やんべ呼んだが花嫁ご  
 けさの座敷に据えられて 六枚屏風をたてつめて  
 すっぽりかぼり泣かしやんす 何が不足で泣かしやんす  
 なんだり不足はござらんが わしの弟の千松が  
 西の方らへ金堀りに 行きて金ども掘るやら掘らぬやら  
 一年待ても戻らせぬ 二年待っても戻らぬが  
 三年ぶりの朔日に お糸に來いとこの状がきて  
 お糸はやらぬがわしが行く あとの田地はどうなさる  
 売って払って金にして 親に十貫子に五貫  
 いとしおばごに四十五貫 あと船のお金をなんとする  
 高い米買って船に積み 安い米買って船に積む  
 船はどこまで都まで 都戻りになにもろた

一にこうがい二に鏡 三に更紗の帯もろた  
帯に短し褌に長し 大田薬師に金のつり緒にちよどよかる

仁多50

名 称 手まり歌  
伝 承 地 仁多町三沢  
伝 承 者 落合 石野 M42年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へうちの後のきい藪に 雀が三羽止まって

一羽の雀が言うことには やんべよんだ花嫁ご

末座の座すわらせて 畳三枚ござ三枚

合わせて六枚屏風をたてつめて 金らんどんすを前かけて

すっぽりかっぽり泣かしやんす (以下略)

仁多51

名 称 手まり歌  
伝 承 地 仁多町三沢  
伝 承 者 野々原マス M29年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へ向こう通るはおせんじやないか

おせんちよとこい物言うて聞かしよ

われになんだりやるものないが 銀のかんざし長崎かもじ

それをささせて化粧させて 前から見てもよいねえさん

後から見てもよいねえさん ホッホッ

仁多52

名 称 子守り歌  
伝 承 地 仁多町三沢  
伝 承 者 野々原マス M29年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へねんねんおころりねんころり ねんねんおころりねんころり

ねんねの守りはどこへ行った 山越えて川越えて里へ出た

里の土産になにもろた でんでん太鼓に笙の笛

鳴るか鳴らぬか吹いてみな

ねんねんおころりねんころり ねんねんおころりねんころり

仁多53

名 称 子守り歌  
伝 承 地 仁多町三沢  
伝 承 者 野々原マス M29年生  
調査員氏名 植田 恒雄

へお月さまえらいな お日さまの兄弟で

いつも年を取らないで 春夏秋冬 日本中を照らす

仁多54

名 称 子守り歌

伝 承 地 仁多町三沢  
 伝 承 者 落合 石野  
 調査員氏名 植田 恒雄  
 M42年生

へお月さんなんぼ 十三 九つ そりやまんだ若い  
 若いこたござらん お年が寄って

仁多55

名 称 指遊び歌  
 伝 承 地 仁多町亀嵩  
 伝 承 者 多賀てる子  
 調査員氏名 植田 恒雄  
 T5年生

へいちりぼつちりとんとん にばいこしようばいこ  
 しょうばいよろずのおめかけさんは  
 のんずくやのやの川とんぼ ぼらぼつとひけ

仁多56

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 仁多町亀嵩  
 伝 承 者 多賀てる子  
 調査員氏名 植田 恒雄  
 T5年生

へうちの後の椎の木に 雀が三羽止まって  
 一羽の雀が言うことには よんべよんだ花嫁ご  
 今朝の座敷に据えられて 六枚屏風をたてつめて

すつぽりかつぽり泣かしやんす 何が不足で泣かしやんす  
 (以下略)

仁多57

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 仁多町亀嵩  
 伝 承 者 多賀てる子  
 調査員氏名 植田 恒雄  
 T5年生

へてるはよい子だよい子だな  
 てるが寝たまに何しようか  
 てるが寝たまにあんもついで  
 べーべの子に負わせて  
 里の祭りに行きました  
 里の土産になにもろた  
 でんでん太鼓に笙の笛

仁多58

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 仁多町佐白  
 伝 承 者 藤原 馬市  
 調査員氏名 植田 恒雄  
 M24年生

へこな子よい子だばた餅顔でな  
 きな粉つけたらなおよかるな

ハルワーヨイヨイヨイ コリワイドンドンドン

へきな粉つけたもよいことはよいがな

小豆つけたらなおよかるな

ハルワーヨイヨイヨイ コリワイドンドンドン

へ小豆つけたもよいことはよいがな

砂糖つけたらなおよかるな

ハルワーヨイヨイヨイ コリワイドンドンドン

仁多59

名 称 すもうとり甚句

伝 承 地 仁多町上三所

伝 承 者 恩田金右衛門 M31年生

調査員氏名 植田 恒雄

へハ 物の初めを二という 荷物を運ぶを二という

女の大厄三という 小供の小便四という

白黒並べて五という ひざをくずせば六という

物を持って来て金を借りるを七という

ぼんと来てぼんと刺しゃあ八という

物を苦にすりゃあ九という

やけた火箸を水につけりゃ十という ナー

仁多60

名 称 数え歌

伝 承 地 仁多町三沢

伝 承 者 落合 石野 M42年生

調査員氏名 植田 恒雄

へ一番はじめに一の宮 二で日光東照宮

三で讃岐の金比羅さん 四で信濃の善光寺

五つ出雲の大社<sup>おやしう</sup> 六つ村々地藏さん

七つ成田の不動さん 八つ八幡の八幡さん

九つ高野の弘法さん 十で所の氏神さん

それほど信心したなれば (以下不明)

仁多61

名 称 すなぎり歌

伝 承 地 仁多町三沢

伝 承 者 林 マシ M37年生

調査員氏名 植田 恒雄

へおじゃみ おふたー おみえー およおー

おいつ おもをー

みな寄せ みな寄せ かってくれりつとんきー

へおじゃみざくらがりつとんきー おふたざくらがりつとんきー

おみざくらがりつとんきー

へおいつざくらがりつとんきー おもざくらがりつとんきー

みな寄せ みな寄せ かってくれりつとんきー

仁多62

名 称 ラッパ節  
 伝 承 地 仁多町三沢  
 伝 承 者 林 マシ M37年生  
 野々原マス M29年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

床も取って待っちゃったに ござらんとや

十二時過ぎてもござらんとや 前の土手まで出て見たら

そうこうする間に夜が明けた トコトットトトトトト

茶臼山から古志原見れば かわい兵隊さんは練兵する

お励みなされや国のため たまの日曜楽しみに

トコトットトトトトト

仁多63

名 称 さい鳥刺し  
 伝 承 地 仁多町三所  
 伝 承 者 藤原 貞夫 T9年生  
 調査員氏名 植田 恒雄

一つひよどり 二つひいご 三つみみずく

四つ夜たか 刺いてやりましよ

五ついずの木 六つ桃の木 七つ梨の木

さーさ刺いてやりましよ

八つ山鳥 九つ小鳥

十でとんびと言うやちや 目の早いやつでなあ

さー刺いてやりましよ

ふんなものおぼしこいで捨てて

新しいもつをばくるともつって

さーさあ 刺いてやりましよ

あ 逃げた逃げた 逃げたところは信濃の国の

善光寺でらの朝日御門に ぱっとたつてとまった

逃げた 逃げた

横田1

名 称 鈴番子歌  
 伝 承 地 横田町大呂  
 伝 承 者 安部 由蔵 M35年生  
 調査員氏名 糸原 正徳

今日は日もよしかまのりをはじめ

足はナー天社日キロを並べて ヨーヨリー

やがてホド穴見れば ホド先鉄花さきかなばながアーきらきらと

けさのナー こもりのアー ほどのよいさー

(番子ばやし)

やってごせー やってごせー

(村下のこたえ)

このナー町内のホーヨリ砂鉄を入れたら

千駄万駄のヨリー鉄かねがわく

今朝のナーしかけた湯釜の中で 塩とご幣でアー浄めます

湯釜の中でホーヤレ塩ごと幣でアー浄めたなれば

アーけが故障がアーさらにない

横田のせんちじアート蔵のお山ほくら ト蔵は今が花盛り

花がナー見たくばアート蔵へござれ

来いとナー言われりや川でもヨー渡る

川がナー深くばアー舟でナーくる

(ここからテープなし)

ハ 鈎ふけふけ米の値上がる やがて値が出る

かねの値も上がる鉄はがね

ハ 鈎うちでは金屋子さまの 金の幣が舞いあがる

三日三晩のやれ有明に 来るか来るかと川下見れば

河原よもぎが手を招くばかり

ハ 比田の金屋子さんはどちらでござる 元は桂木安部の森

横田 2

名	苗取り歌
伝承地	横田町全域
伝承者	島 要蔵
調査員氏名	糸原 正徳
	M 37年生 他 4名

ハヤレーこっちのナア嫁御さんはどこ育ち

ヤレー稲のおらぼのナーのぎ育ち

ヤレナー高いナア山のちぢらを(ちぢらハツづら)

ヤレ引けや下ろせやちぢらを

横田 3

名	田植え歌(さげ歌)
伝承地	横田町全域
伝承者	島 要蔵
調査員氏名	糸原 正徳
	M 37年生 他 4名

(上歌) 朝起きてヤーハレヤ細戸を開けて

眺むればヤーハレ眺むればヤーハレ

(下歌) 眺むればヤーハレ黄金に勝る朝日さす

(上歌) 今日の日のヤーハレヤ田主の館はやがた

どれ館ヤーハレどれ館ヤーハレ

(下歌) どれ館ヤーハレ八つ棟建てたひわたぶき

(同時に) アーサッサーアーアラッサー

(上歌) 今日の日のヤーハレ田主の田んぼ

何をまくヤーハレ何をまくヤーハレ

(下歌) 何をまくヤーハレ千町の田んぼに種をまく (以下略)

横田 4

名	田植え歌(かつま歌)
伝承地	横田町全域
伝承者	島 要蔵
調査員氏名	糸原 正徳
	M 37年生 他 4名

(サゲ)

ハ来るか来るかと川下見れば 川原よもぎの影ばかり

(早乙女)

ヤレ影ばかり 川原よもぎの影ばかり

へ来いと言わさりや川でも渡る 川が深けりや舟で来る

ヤレ舟で来る 川が深けりや舟で来る

へ会うてうれしや別れのつらさ 会うて別れがなけにやよい

ヤレなけにやよい 会うて別れがなけにやよい

へ親のない子に髪結うてやれば 親が喜ぶ先の世で

ヤレ先の世で 親が喜ぶ先の世で

横田 5

名 称 こだいじ歌

伝 承 地 横田町中村

伝 承 者 水岩田 勲 T2年生

水岩田 武 S17年生

調査員氏名 糸原 正徳

へサーヨ一サーナーホイヤーイコラヨイコラナ

ア一ドイタ ドイタナー

そろたそろたよ踊り子がそろた コラサイコラサイ

稲の出穂よりナーまだヨ一そろたナーハ一ヨ一

へサーヨ一サーナーホイヤーイコラヨイコラナ

ア一ドイタ ドイタナー

わしとあなたは羽織のひもよ コラサイコラサイ

固く結んでナー胸にヨ一あるナーハ一ヨ一

へサーヨ一サーナーホイヤーイコラヨイコラナ

ア一ドイタ ドイタナー

来るか来るかと川下見れば コラサイコラサイ

川原よもぎのナー影ヨ一ばかりナーハ一ヨ一

横田 6

名 称 山くずし(座付け)

伝 承 地 横田町全域

伝 承 者 水岩田 勲 T2年生 他3名

調査員氏名 糸原 正徳

へさらよ一そなのつね ヨイヨイ

わしがナーちよつと出て座付けをしましよ

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ

わしが音頭じゃ踊れません ヨイヨイ

声はナー出ませず 節ふしやできません

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ

声の悪いのはもと生まれつき ヨイヨイ

節ふしのナーできぬは師匠ないからよ

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ (以下略)

横田 7

名 称 お夏口説

伝 承 地 横田町全域

伝 承 者 水岩田 勲 T2年生



水岩田 武 S 17年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ 今度江近の石山寺に ヨイヨイ

ぼたんナー畑の真ん中ほどこに

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ

お夏小女郎が花つみあそび ヨイヨイ

そこへナー旅人ちよと通りがけ

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ

こな子よい娘だよい器量育ち ヨイヨイ

もちとナーこな娘が成人すれば

ホラヤンハトナーエ ヤンハトナーエ (以下略)

### 横田 8

名 称 石うす粉ひき歌 (高い山から)  
伝 承 地 横田町全域  
伝 承 者 永井 弥生 T 11年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ 高い山から谷底見れば 瓜やなすびの花盛り

アレワノヨイヨイヨイ コレワノヨイヨイヨイ

へ こなかよい娘だばた餅顔でな きな粉つけたらなおよかる

アレワノヨイヨイヨイ コレワノヨイヨイヨイ

### 横田 9

名 称 手まり歌  
伝 承 地 横田町全域  
伝 承 者 永井 弥生 T 11年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ うちのうしろのちいやぶに 雀が三羽止おまつて

一羽の雀が言うことには や よんべ呼んだる花嫁ご

けきの座敷に座らせて たたみ三枚ござ三枚

合わせて六枚屏風をたてつめて

きんらんどんすを縫いかけて

しつぽりかつぽり泣かしゃんす (以下略)

(注) ちいやぶ 竹藪。

### 横田 10

名 称 手まり歌  
伝 承 地 横田町全域  
伝 承 者 永井 弥生 T 11年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ けちよさん けちよさん 起きなんせ

起きて髪結うて鉄漿<sup>かね</sup>つけて お寺へちよちよこ参らんせ

お寺のご門で子を生んで もしもこの子が男なら

寺へささげて手習いさせて もしもこの子が女の子なら<sup>おなこ</sup>

寺の縁から突き落とされて こもに包んで小縄で締めて

締めたところへいろはと書いて

前の小川へちやぼんと投げて 下からどじょうがつつくやら

上から鳥が<sup>からす</sup>つつくやら つついた鳥はどっち行った  
千石万石飛んでった飛んでった

伝承者 大谷 トミノ T2年生  
調査員氏名 糸原 正徳

横田11

名 称 お手玉歌  
伝承地 横田町下横田  
伝承者 大谷 トミノ T2年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へおさら おひとつおろしておろして おさら

おふたつおろしておろして おさら

おみおろして おさら おみんなおさら

へお手しゃみお手しゃみ おさら おはさみおはさみ おさら

むつりんこむつりんこ おさら

お左お左 どうりどり おさら

やちよないやちよない おさら

おってほしおってほし おさら おんばおんば おさら

しいるやっとなぎ おさら ひじかけ ひじかけ おさら

そでかけそでかけ おさら

手ばたき手ばたき手ばたき おさら 返せ 戻せ

へおじゃみ おふた おふた おみい おみい

およお およお おいつ おいつ おもお

みねみねかってくれ とんぎ

おじゃみじゃっとなぎ おふたざっくら ざくら

おみざっくら ざくら およざっくら ざくら

おいつざっくら ざくら おもうざっくら

みねみねおもざくら つめつめつめ おふたつめつめ

おみつめつめ およつめつめ おもうつめつめ

返せ戻せ

横田13

名 称 手まり歌  
伝承地 横田町下横田  
伝承者 大谷 トミノ T2年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ向こうのばばさん縁から落ちて

すねっこ痛めて膏薬貼って

歩くたんびにはぐれて あ痛た あ痛た あ痛た

横田12

名 称 お手玉歌  
伝承地 横田町下横田

横田14

名 称 指遊び歌

伝 承 地 横田町下横田  
伝 承 者 大谷 トミノ T 2年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ嫁起きて 火たけ 婿は起きて かまへ行け  
じいとばばあ えっと寝

横田 15

名 称 縄とび遊び歌  
伝 承 地 横田町下横田  
伝 承 者 大谷 トミノ T 2年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ郵便さん やれ来たほい  
お上の御用で やっちんちん やっちんちん

横田 16

名 称 指遊び歌  
伝 承 地 横田町大谷  
伝 承 者 糸原 正徳 M 42年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へいちが刺いた ブンブンブン なが刺いた ブンブンブン  
さんが刺いた ブンブンブン しが刺いた ブンブンブン  
ごが刺いた ブンブンブン ろくが刺いた ブンブンブン

しちが刺いた ブンブンブン 蜂が刺いた ブンブンブン  
あかん蜂が刺いた ボーンボン

横田 17

名 称 子守り歌  
伝 承 地 横田町大谷  
伝 承 者 糸原 正徳 M 42年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へ大山越えて 小山越えて まいげのじいさん目黒さん  
おおやま  
どんどん坂下りて 花屋へ寄って  
池のはた回って ごいし ごいし

横田 18

名 称 指遊び歌  
伝 承 地 横田町大谷  
伝 承 者 糸原 正徳 M 42年生  
調査員氏名 糸原 正徳

へえっちりぼっちりとんと にばいこしよばいこ  
しようばいのろじの おめかけさんは  
のうじくやのやの川とんぼ ぼらぼっと引け

横田 19

名 称 だらじ歌

伝 承 地 横田町大谷  
 伝 承 者 糸原 正徳 M42年生  
 調査員氏名 糸原 正徳

へばばさんばばさん 芋おをごっさい  
 やあこたやあが なんにしりゃあ  
 かかさんのめんちよに わなかけて  
 ちゃっちゃんのちんこを 取っちゃあわい

横田20

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 横田町下横田  
 伝 承 者 大谷 トミノ T2年生  
 調査員氏名 糸原 正徳

へええ子せえ ええ子せえ ええ子せえや  
 ねんねせえ ねんねせえ ねんねせえや  
 へねんねこ山のけんけの子 泣いたら子鷹に取られます  
 へねんねせえ ねんねせえ ねんねせえや  
 ねた子が起きたそのときにゃ あんもをちいて冷まかいて  
 べえべえの子に負おわせて あっちら向いても山山  
 こっちい向いても山山 (以下略)

大東1

名 称 大東七夕行列の囃子  
 伝 承 地 大東町大東  
 伝 承 者 小学校児童1〜6年  
 調査員氏名 内部 文吉

へテンテコテンノー七夕さん テンテコテンノー七夕さん  
 テンテンテテン  
 へテンテコテンノー七夕さん テンテンテテン (くり返し)

大東2

名 称 八百屋お七  
 伝 承 地 大東町清田  
 伝 承 者 加藤 隆吉 T7年生  
 調査員氏名 内部 文吉

へあれが八百屋のお七かや  
 アラヤンハトナー ヤンハトナー  
 歳おなごやあまだいかぬ女おなごにて  
 アラヤンハトナー ヤンハトナー  
 かかる大事だいがすぐるぞや すぐる次第を明らかに  
 ヤンハトナー ヤンハトナー  
 申しあげよとおおせなり お奉行の前に手をついて  
 アラヤンハトナー ヤンハトナー (以下略)

大東 3

名 称	大東茶つみ歌
伝 承 地	大東町大東
伝 承 者	青木 清 M35年生
調査員氏名	内部 文吉

へ春の大東はどこから来るや 茶つみ女の手先から

へ揉めや揉めやと揉ませておいて 後であげ師が染をする

アラドッコイドッコイ ドッコイドッコイ

へわたしや百まで あなたは九十九まで ともに白髪がはえるまで

ドッコイ

へ何の因果で茶揉みなさる 色は青菜に身はやせる

ドッコイドッコイ ドッコイドッコイ

大東 4

名 称	数え歌
伝 承 地	大東町山田
伝 承 者	南波 ヒデ M32年生
調査員氏名	内部 文吉

へ一つとや 一つ巡礼幼な子か

足には脚絆甲がけさん参ろうわいな

二つとせ 二人の親さん二人旅

父ちゃん母ちゃん顔知らず会いたいわいなあ (以下不明)

加茂 1

名 称	手まり歌
伝 承 地	加茂町加茂中
伝 承 者	古山 誠治 M43年生
調査員氏名	黒田 知治

へ一番目に一の宮 二また日光東照宮

三は讃岐の金比羅さん 四は信濃の善光寺

五つ出雲の大社 六つ村々天神さん

七つ七浦七恵比須 八つ八幡の八幡さん

九つ高野の弘法さん 十は所の氏神さん

加茂 2

名 称	手まり歌
伝 承 地	加茂町加茂中
伝 承 者	古山 誠治 M43年生
調査員氏名	黒田 知治

へよんべ呼んだ花嫁ご 今朝の座敷に座らせて

六枚屏風をたてつめて しっぽりかっぽり泣かしやんす

なんが悲して泣かしやんす わしの弟の仙松が

奥のこうやに金堀りに 金ども掘るやら掘らぬやら

一年待っても戻らんが 二年待っても戻らんが

三年ぶりのついたちに 人をごせとの状がきた

人はやらずにわしが行く (以下略)

加茂3

名	称	地つき歌
伝承地		加茂町加茂中
伝承者		古山 誠治 M43年生
調査員氏名		黒田 知治

ハアラ よーいやとーこなー ホイ

よーいや とーこ よいとこなー

アラ よーいやとこなー ホイ

調子をそろえて よいとこなー

アラ よーいやかかまかせー ホイ

親父がどんだで かかまかせー

アラ よーいやかかまかせー ホイ

おかかのためだよ よいとこな

加茂4

名	称	田植え歌
伝承地		加茂町加茂中
伝承者		古山 誠治 M43年生
調査員氏名		黒田 知治

ハ晩げえには ヤンハーレヤー 西山見れば

にぎやかな ヤンハーレヤ にぎやかなー

ハーレヤ 日輪さまのお宿入り

ハ晩げえには ヤンハーレヤー かもめが三羽

西へたつなあーハーレヤ 西へたつなー

アラ 西にもお池がーあるそうなー

ハ大山の ヤーンハーレヤー 赤松が池にー

波立つがなー ハーレヤ 波立つがなー

ハーレヤ 日輪さまのおーたちか

加茂5

名	称	粉ひき歌
伝承地		加茂町加茂中
伝承者		古山 誠治 M43年生
調査員氏名		黒田 知治

ハえいししふけふけ だんごして食わしょうぞ

いすすふかねば またおかえ ハーゴーエゴーエゴーエゴエ

ハ赤児寝させて えししをふえて

積もる白粉で お焼きする ハーゴーエゴーエゴーエゴエ

ハ娘島田に ちょうちよが止まる

止まるはずだよ 花だもの ハーゴーエゴーエゴーエゴエ

加茂6

名	称	ぼたもち歌
伝承地		加茂町加茂中
伝承者		古山 誠治 M43年生
調査員氏名		黒田 知治

ハこの子よい子だ ぼた餅顔でな

きな粉つけたら ああなおよからな

アルワイドンドンドン コレワイドンドンドン

へきな粉つけたらよいこたよいが

お砂糖つけたらなおよからな

アルワイドンドンドン コレワイドンドンドン

へ高い山から谷底見れば

うりやなすびの花盛りよ

アルワイドンドンドン コレワイドンドンドン

加茂7

名 称 若松さま

伝 承 地 加茂町加茂中

伝 承 者 古山 誠治 M43年生

調査員氏名 黒田 知治

へうれしめでたの若松様よ 枝も栄えて葉も茂る

アラノンデサッシャイ エタイコタナイ

これの親方聞きや 酉とりの歳 鳥羽重ねに倉七つ

アラノンデサッシャイ エタイコタナイ

これのお背戸のみようごやふきが

めでたやふきの繁盛よ

アラノンデサッシャイ エタイコタナイ

加茂8

名 称 左義長の歌

伝 承 地 加茂町加茂中

伝 承 者 伊原 清 T3年生

調査員氏名 黒田 知治

へかかさんどこ行くのー山越えて谷越えて里へ行き

里の土産に何もろた でんでん太鼓に笙の笛

ヨイヨイ

へ見た見た見た見た 隣の娘も年ごろで

花のかんざし買うを見た ヨイヨイ

へ今年豊年万作で この家のだんなも稲刈りだ ヨイヨイ

へ泉屋の権兵衛さんがしめこんで わしゃ見たども知らぬ顔

ヨイヨイ

加茂9

名 称 こだいじ踊り歌

伝 承 地 加茂町岩倉

伝 承 者 今岡 俊朗 S19年生 他

調査員氏名 黒田 知治

へそろたそろたよ 踊り子がそろた コラセー

稲の垂れ穂より なおよくそろたなあ

へ老いも若きも 手を打ちならし コラセー

踊りましようよ 盆踊り

へたたく太鼓は こだいじ踊り コラセー

町の繁盛の音がする

へ高麻山から 朝日が昇りゃ コラセー

平和加茂町に 朝がくる

へ今年や豊年 門田<sup>かど</sup>の稲が コラセー

からが一丈に 穂が五尺 (以下略)

木次1

名	お手玉歌
伝承地	木次町上熊谷
伝承者	錦織 文子 T2年生
調査員氏名	浅沼 博

へおさら おひとつおひとつ おさら

おふたつおふたつ おさら おみんなおさら

てっさんてっさくどおしておさら

おはさみおはさみどおしておさら

おちりんこおちりんこどおしておさら おみんなおさら

小さな橋こぐれ 小さい橋こぐれどおしておさら

大きい橋こぐれ 大きな橋こぐれどおしておさら

おひとりひだりぎっちょ みてわかれ

なかよくしまよくそろえて たたえておさら みんなおさら

やっちょない やっちょないどおしておさら

木次2

名	遊戯歌
伝承地	木次町上熊谷
伝承者	錦織 文子 T2年生
調査員氏名	浅沼 博

へ一れつ談判破裂して 日露戦争ありにけり

さっさと逃げるロシアの兵 死んでも尽す日本の兵

五万の兵を引き連れて 六人残して皆殺し

七月八日の戦いに ハルピンまでも押し寄せて

クロバトキンの首を取り 東郷大将万々歳

木次3

名	遊戯歌
伝承地	木次町上熊谷
伝承者	錦織 文子 T2年生
調査員氏名	浅沼 博

へ一に一畑お薬師さん 二に日本の高神さん

三に讃岐の金比羅さん 四に信濃の善光寺

五つ出雲の大社 六つ村々鎮守さん

七つななやの弁天さん 八つ八幡の八幡さん

九つ高野の弘法さん 十で所の氏神さん

一丁あがり一丁あがり



木次4

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 木次町上熊谷  
 伝 承 者 錦織 文子 T2年生  
 調査員氏名 浅沼 博

へうちの後の桐の木に 雀が三羽鳩三羽

一羽の雀が言うことによ いうべよんだ花嫁ご (以下略)

木次5

名 称 二人で両手をあわせて遊ぶ歌  
 伝 承 地 木次町上熊谷  
 伝 承 者 錦織 文子 T2年生  
 調査員氏名 浅沼 博

へうちの金比羅さんは はげちよで困ります 困ります

困った金比羅さんは 涙がぼーろぼろ ぼーろぼろ

それを着物のたもとでふきましよう ふきましよう

ふいた着物は脱ぎましよう 脱ぎましよう

ぬいだ着物は洗いましよう 洗いましよう

洗った着物は絞りましたよ 絞りましたよ

しぼった着物は干しましよう 干しましよう

干した着物は畳みましよう 畳みましよう

畳んだ着物はしまいましよう しまいましよう

しまった着物はねずみがガリガリガリガリ

そこへ猫がやって来て ジャンケンポン

木次6

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 木次町平田  
 伝 承 者 亀山 幸枝 S6年生  
 亀山 静枝 S3年生  
 調査員氏名 浅沼 博

へおじゃみい おふた おみえ およう おみつ おもう

みんな寄せ みんな寄せ かつとくれ りつとんぎ

おふたざくらが ざくら おおみいざくらが ざくら

おおよりざくらが ざくら おおいつざくらが ざくら

おおもうざくらが ざくら みんな寄せ みんな寄せ

かつとく りつとんぎ おー抜け おー抜け

おー抜け おー抜け みんな寄せ みんな寄せ

かつてくりつとんぎ

木次7

名 称 石つき歌  
 伝 承 地 木次町平田  
 伝 承 者 亀山 稔 T14年生  
 調査員氏名 浅沼 博

へ横田のかしらの竹崎の 六十八なるじいさんが

十七、八なるねえさんに かんざし買ってやったげな

買ったにしてはよう買った やったにしてはようやった

もろうたにしてはようもろうた ヨイシヨ ヨイシヨ

えんまの調子はよい調子 この調子なんでも忘れずに  
デンデラデンとついたら 晩には大鯛酒三升  
ようもつくてこの衆 ヨイシヨ ヨイシヨ

木次 8

名 称 指折り歌  
伝 承 地 木次町平田  
伝 承 者 亀山 マツヨ M40年生  
調査員氏名 浅沼 博

いちりぶちりとんとん にばえこしよばいこ

しょうばいのろずのおめかけさんは  
ろんじくののやのかわとんぼ 川を渡ればずいずい

木次 9

名 称 亥の子の石つき歌  
伝 承 地 木次町平田  
伝 承 者 亀山 稔 T14年生  
調査員氏名 浅沼 博

亥の子さん晩に餅ついて祝わぬものは

蛇産め 子産め 角の生えた子を産め  
ここはどこだ 百姓でござる ちった百姓ができますか  
それはまた御繁盛 はにやこん はにやこん

木次 10

名 称 遊戯歌  
伝 承 地 木次町木次  
伝 承 者 原 静子 T9年生  
調査員氏名 浅沼 博

いしゃん しゃん 一にやたちばな 二にやかきつばたかね

三にや下がり藤 四にや獅子ぼたんね  
五つ井山の千本桜かね 六つ紫色よく染めたかね  
七つなりても 八つ山ぶし 九つこんまかね  
十で殿ごさんのお駕籠かごに乗ろうかね

木次 11

名 称 子守り歌  
伝 承 地 木次町木次  
伝 承 者 原 静子 T9年生  
調査員氏名 浅沼 博

い子供と子供がけんかして 薬屋さんが止めたけど  
なかなかやめられぬ ひと泣き泣いたら親が出た

## (二) 出雲地区

### 出雲地区民謡調査の整理をして

いつごろだったか簸川郡の中学校へ行く途中、にぎやかなお囃子と一緒に山車がおりにくるのにぶつかった。この祭りの音楽をしばらく聞いてから学校に着くと、音楽室からベートーヴェンの「喜びの歌」を歌う生徒たちの歌声が流れてきた。せっかく地元で素晴らしい教材があるのに教育の場に生かされないのは残念なことだとその時思ったものである。

さて今回の調査は歌詞を中心にするということだったが、テープを通して数多くの曲に接することが出来たのは大変幸せなことだった。出雲地区を大きく、平田市・出雲市・大田市・簸川郡・飯石郡の五区に分け、集められた曲は「踊り歌」二〇曲、「労作歌」五八曲、「座興歌」九曲、「祝い歌」二〇曲、「遊戯歌」七四曲、「子守り歌」四曲、「祭り歌」一一曲の計一九六曲。録音の無い、歌詞だけのものを入れると二〇〇曲を越えた。

民謡は古くなれば歌われなくなり、歌詞も現代風に変わっていくのが自然である。当然歌う人によってはメロディも変化していく。柳田国男の「方言圏論」を音楽に当てはめて考えてみると、古い音階ほど中央都市から離れた地方に残っていくはずである。今回興味深い曲は数曲あったが、「方言圏論」的な意味で湖陵町の「祝い歌」（譜例Ⅰ）は特に興味深かった。

日本には大きく分類して四種類の音階がある。（譜例Ⅱ）「律音階」

「民謡音階」「都節音階」「琉球音階」がそれである。中でも古い形のものと考えられているのが「律音階」で、この音階の変形である「呂音階」が最も古いものではないかと思われる。今回の調査では、出雲地区に限りほとんどが日本民謡の中でも最も数の多い「民謡音階」であったが、古い形から新しい形のものと移っていく途中の形であろうと思われるものが先述の「祝い歌」である。曲中の変イ音は新しい形の都節音階の音であるが、多分この曲の本来の姿はフラットなしのイ音で歌われる「律音階」のものであったろう。変ニ音にしても同様である。第六小節目からフラットなしのイ音・ニ音に戻っている。新しい流行歌が都から伝えられ、いつしかその音階の音が従来の音階に<sup>はやりた</sup>くい込んでいったものにちがいない。

このように民謡は長い時間をかけて常に変化し、成長していくものであり、「正調」はない。あるいはまた、子供たちは一瞬にして新しい歌を作っていく。

昔から日本人が生活の中で歌ってきた歌を音楽として認めず、西洋の近代音楽を無理やり押しつけた戦後の音楽教育に育てられた私たちは、「歌」や「音楽」を失ってしまった。これからの私たち、特に音楽人は、こうした調査を足がかりに、どんどん日本音楽に挑戦し、数十年前に歌が人々の中に生きていたように音楽を生活の中にとり戻したいものである。

なお、採譜したものは、文化課にあるので参考にされたい。

(馬庭 悟)

譜例 I 「祝い歌」 採譜 馬庭 悟

う れ し め で た の わ か ま つ さ ま ア よ  
 え だ も さ か え て も ヨ 葉 も  
 し げ る お も し ろ や ハアヤイトヤイト そのう た

譜例 II

民謡音階 都節音階  
 律音階 琉球音階

## 出雲地区調査民謡

### 出雲1

名 称 木遣り  
 伝 承 地 出雲市塩冶町  
 伝 承 者 新田 福市 M34年生  
 調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へうれしめでエタの ヨーイヨーイ 若松様アヨー

枝も栄えりやー アラ葉もしげる

サーヨーイヨーイ ヨーイヤナ

へとどけ とどけは ヨーイヨーイ 末までとどけ

末は鶴亀のー アラナーア五葉の松

サーヨーイヨーイ ヨーイヤナ

へこれの親方 ヨーイヨーイ 聞きや酉とちの年ー

とりば重ねにー アラ倉七つ

サーヨーイヨーイ ヨーイヤナ

### 出雲2

名 称 雲助節  
 伝 承 地 出雲市塩冶町  
 伝 承 者 新田 福市 M34年生  
 調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へハー私しゃナーアア 行きますナーアア 親さんさらばー

こんどナー 来るときやー もろも木でナーアエー

へハーこはナーアア 大坂たいざかナーアア 一人でナー越せぬー

またナー 殿御とのみにー 手を引かれナーアエー

へハーおまえナーアア 百までナー わしや九十九までー

ともにナーアア 白髪が 生えるまでナーアエー

へハーたんすナーアア 長持ナーアア いこうにナーつづらー

納めナー ますぞやー お倉の内へナーアエー

### 出雲3

名 称 相撲取り節  
 伝 承 地 出雲市塩冶町  
 伝 承 者 新田 福市 M34年生  
 調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へハーアエー これの屋敷はーめでたい屋敷ヨー

四方シコロで白壁で 西へたつたる白壁はー

右のかくには鶴つけて 左のかくには亀つけて

天井裏にはサルつけて 鶴は千年 亀万年

まさる三千三百三十三ヶ月 それの床前ながむれば

梅の木古木が植えてある 一の小枝に二の小枝

三の小枝の枝ばなに うぐいす小鳥ー つがい来る

木葉をくわえて巢をかけてーエー 十二玉子を生みそろえ

家内一緒に育てあげ はがえをそろえて発つときは

金の銚子に銀茶碗 一分や小判のとりざかな

この家繁盛とホホーイ 立ち上がるヨーイ

アラすもとりさんには女房がない  
あることあつても兄貴の女房で わたしが勝手にならない  
トコドッコイドッコイドッコイ

出雲4

名 称 都名所  
伝 承 地 出雲市塩冶町  
伝 承 者 新田 福市 M34年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橋

〽都名所で見せたいものは 嵯峨の桜に 高尾の紅葉  
涼し浴衣の河原の涼み ほかでないぞえ丸山  
雪にしょんがいなー

出雲5

名 称 磯節  
伝 承 地 出雲市塩冶町  
伝 承 者 新田 福市 M34年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橋

〽一里二里なら自転車を通う 五里とへだてりゃ自動車を通う  
千里へだてりゃアア 当時はやりの 飛行機で通う  
〽空飛ぶ赤蜂ちよつと呼び止めて おまえ刺す気が刺さぬ気か  
私しゃあなたの お手の出しよじゃ 刺すかもしれぬ

出雲6

名 称 博多節  
伝 承 地 出雲市塩冶町  
伝 承 者 新田 福市 M34年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橋

〽板一枚の 舟の底より まだ恐ろしいよ  
こわいは世間の人の口 人のヨロ口には 戸がたたぬ  
ドッコイナー たたぬ  
〽身は町人でありながら 武士にまさりし 天野屋利兵衛  
人にこうよと頼まれりゃー 後へは引かない 男伊達  
ドッコイナー 伊達

出雲7

名 称 かいあんじ  
伝 承 地 出雲市塩冶町  
伝 承 者 新田 福市 M34年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橋

〽あれエー 見やしゃんせ 快男児  
ママヨータったのー 高尾でもーオー  
お呼びやせぬぞエーエ エーエーエー もみじ枯れ

出雲8

名 称 二上り新内景清  
伝 承 地 出雲市大津町下大津

へ平家で名高い 景清も

あこやにのろけて 牢破りー

ましてや凡夫の 我々は 相伴て どうしよんがいなー

伝 承 者 小村 梅之助 M36年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橋

出雲9

名 称 石搗き歌

伝 承 地 出雲市大津町下大津

伝 承 者 小村 梅之助 M36年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へこれの親方聞きや 酉の年 とりば重ねにサナ倉建てる

サーヨイヨイヨイヨイヤナ

へ届け届けとサーヨイヨイ 末まで届け

末は鶴亀サナ五葉の松 サーヨイヨイヨイヨイヤナ

出雲10

名 称 祝いのことば

伝 承 地 出雲市大津町下大津

伝 承 者 小村 梅之助 M36年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

まかりいでたるものは 万代の神にて候

さても しんざいの鶴と 双葉のめおと松  
君と契りの移り香も ふみにぞ通うそよ松に  
枝も鳴らさぬそのおの竹の 幾千代かけてむつまじく  
よろず心おきなく暮らすこと ちようせい殿の  
めでたき限りにて候 (メロディーなし)

出雲11

名 称 七草の鳥追い

伝 承 地 出雲市大津町下大津

伝 承 者 小村梅之助 M36年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

七草なずな 唐土の鳥が 日本の国へ

渡らぬうちに 七草そろえて ヤーホヤホヤホ

(メロディーなし)

出雲12

名 称 亥の子さん

伝 承 地 出雲市大津町下大津

伝 承 者 小村梅之助 M36年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へ亥の子さんの晩に 祝わぬ者は

蛇産め 子産め 角の生えた子産め

出雲13

名 称 手ぬぐい人形踊りの曾我兄弟  
 伝 承 地 出雲市大津町下大津  
 伝 承 者 小村 梅之助 M36年生  
 調査員氏名 杉原 明・原 良橘

ころは建久四つの春 五月雨雲にふり混せて  
 富士のすそ野の巻き狩あり

ヤーヤーヤー 遠からん者は音にも聞け

近くば寄って目にも見よ われこそは曾我の十郎すけなり

同じく五郎時宗 不俱戴天の親の仇

工藤左衛門祐恒を 討ち取ったりー」

※出合えー出合えと呼ぶ声は 富士のすそ野に響きけれ※

親孝心の仇討ちを たたえる世こそ

※めでーたけれー※

(※ー※の部分のみがメロディーをもっている)

(注) 手拭いで人形を作り、歌に合わせて踊らせる。

出雲14

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 出雲市大津町下大津  
 伝 承 者 小村 梅之助 M36年生  
 調査員氏名 杉原 明・原 良橘

へうちの後の梅の木に 雀が三羽 鳩三羽

一羽の雀が言うことによ よんべ呼んだが花嫁ご

けさの座敷に座らせて きんらんどんすうちかけて  
 すっぽりかっぱり泣かしやんせ なんだい不足はござらんが  
 わしが弟の千松が 西の方へ金掘りに  
 金を掘おやら掘らんやら 一年経っても戻らんが  
 二年経っても戻らんが 三年目の正月に  
 おばばに来てて状がきた おばばはやらずにわしが行く  
 あとの田地は金にして 親に十貫 子に五貫  
 しめておばばに 五十五貫

出雲15

名 称 雲助節(長持ち歌)  
 伝 承 地 出雲市知井宮町喜儀  
 伝 承 者 勝部 知 T15年生  
 調査員氏名 杉原 明・原 良橘

へさらばナーアー皆様 アー皆様さよなら

今度ナーアー来るときや アーアノ客で来るぞエー

へここがナーアー ここかとー アー尋ねて来たがヨー

ここがナーアー殿御さんのヨー アーやかたと見たぞえー

へ蝶やナーアー花よとー アー育てた娘よー

今日はナーアーあなたのー アー嫁となるナエー

へ何もナーアー分からぬー アー娘じゃけれどよー

どうかナーアー願いますー アーふた親様よー

へアー承知なーアーしましたー アー受け取りましたよー



たんすナーアー長持ー ハアー巽たつみの蔵へー

### 出雲 16

名 称 神楽の褒めことば  
伝 承 地 出雲市知井宮町  
伝 承 者 勝部 知 T 15年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橘

へ待てエー待てエー 待った待った待った しばらく待ったー

待った待った しばらく待ったー

待った待ったときし止めたる 拙者はこれより

西でなければ東でなし 南でなければ北でなし

座の下ごおりは 掃きだめ村の 蚤左衛門のせがれ

蚤の助にございますー 近ごろ四、五日天気続きに

ピョン ピョン ピョンと はねあがってみれば

笛や太鼓のにぎやかさー ひーと足ゆるり二足ゆるり

三足みよろり四足よよろりよると 立ち寄れば

笛や太鼓のにぎやかさー 年のころなら一つ二つ三つ

四つ五つ六つ七つ八つ 九つとお十に足らずの幼な子がー

頭にてんがんに手に鈴ガラガラと あの手ふり足ふり腰ふり

かわいらしさや さぞかし親 兄弟衆が 見られたならば

さーぞやさぞや 涙が出ることでござんしょー

この蚤の助も玉ネギや カボチャのような涙が

ポロリポロリと出てなりませぬ さてさて

何にたとえて褒めよやら 山や川ではじが古い

蝶や花よもじが古い つくづくつくしで

申し上げましょなら 正月餅つくそれ団子つく

団子ついたらかぶりつく かわいねえさん羽板つく

港港に舟がつく 舟に帆がつく 櫓がつく 梶がつく

稲荷ちんじにすしがつく つくづくつくしは

山へ上れば木の数 笹の数

千里ヶ浜では砂の数ほどあるけれど

あまり長口上は見物衆のさまたげ 早く早く舞の段

鈴振り上げさせたまえー

へただ今おん褒めいただきました

お先生は どこのいずこの先生か

手前いっこう存じませんが

我々一同が ほうらほったんほら谷の

猪・猿・狸が背なにこの葉をつけて 水遊びをするがごとき

芸にもいたらぬこといたしますのに

あれほど エートエートの ご念のいったおん褒め言葉

誠に誠に大慶至極に存じ奉ります

気の早いやつは楽屋の方で ヨコロンでコロロンで

ネコロンでいるような 始末でございます

さっそくおん先生のおひざ元 おんお尋ねしまして

お礼な参上いたしますのが本来なれど

ただ今はごらんの通り 芸まっ最中なりますれば

明日は早朝 芸子舞子を引き連れまして

樽や肴をかつがせて おん先生のおひざもと

お礼な参上といたします まずは取りあえず

出雲名物は安来節をもって おんお返しといたします

へ出雲名物 荷物にならぬ 聞いてお帰り 安来節

へエー いやいやいやいや この蚤之助が 一口や半口

わに口さか口たごし口 便所の戸口でしゃべったとて

あれほどご念の入った 日本一か今市か

さもなきや大田の彼岸市か

というほどの安来節なんかはいらぬこと

早く早く舞の段 鈴ふり上げさせ給えー

へさらばごめんこうむりましょう

出雲17

名 称 神謡

伝 承 地 出雲市荒茅町

伝 承 者 川上 栄蔵 T3年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へ八雲立つ八雲立つヨー 出雲八重垣妻込にヨー

八重垣つくるーその八重垣をー 八重垣つくるヨーオーヤー

へこのころだに このころだにーヨー

誠の道に かないなばヨーオー

折らずとも神や守らん 折らずともーヤーヤー

出雲18

名 称 子守り歌

伝 承 地 出雲市平野町

伝 承 者 原 勝 S5年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

(まりつき歌)

へこの後ろのしいの木に 雀が三羽鳩三羽

一羽の雀が言うことにや よんべよんだが花嫁ご

今朝の座敷にねまらせて 六枚びょうぶをたてしめて

きんらんどんすをおし立てて すっぽりかっぽり泣かしやんす

なにが不足で泣かしやんす なんだー不足はござらぬが

私が弟の千松が 西の方へ金掘りに行きて

金を掘おやら掘らんやら 一年経っても戻らんが

二年経っても戻らずに 三年目のついたちに

おそめに來いてて状が來た おそめはやらのがわしが行く

後の田地はどうなさる 後の田地はかねにして

親に十貫 子に五貫 せめて母御に四十五貫

四十や五貫のお金はどうなさる たこや米買て舟に積み

舟はどこ舟 都舟 都戻りに何買うてもろた

一にこうがい二にや鏡 三にさらさの帯買うてもろた

帯にや短こし たすきにや長し

大田薬師のお鐘かねの釣り緒に ようござんしよ

あら もうよござんしよ

(注)ねまらせてはすわらせて

出雲19

名 称 わらべことば  
 伝 承 地 出雲市南本町  
 伝 承 者 杉原 明 T 14年生  
 調査員氏名 杉原 明

(札打つつあん)

へ 札打つつあん めんめがつしゃい  
 めんめがなけらにや こんこがつしゃい  
 こんこがなけらにや じえんじえがつしゃい  
 (注) がつしゃい || ちようだい なけらにや || 無いならば こんこ || お米  
 じえんじえ || 銭

出雲20

名 称 わらべことば  
 伝 承 地 出雲市南本町  
 伝 承 者 杉原 明 T 14年生  
 調査員氏名 杉原 明

へ 大念寺で大豆貫<sup>ま</sup>つて 連紹寺<sup>れんじょうじ</sup>で礼言<sup>れいごん</sup>つて  
 延命寺<sup>えんめいじ</sup>で炒<sup>え</sup>つてまつて 神門寺<sup>かんとじ</sup>でかんでまつて  
 南泉寺<sup>なんせんじ</sup>でなあなつて 明顕寺<sup>みょうけんじ</sup>で妙な顔したと  
 (注) なあなつて || なくなつて

出雲21

名 称 わらべことば

伝 承 地 出雲市南本町

伝 承 者 杉原 明 T 14年生  
 調査員氏名 杉原 明

へ かわいけりや抱いて寝 抱いてエ寝りや小便<sup>しょうべん</sup>こく  
 小便こきやささげ ささげりや手がだい  
 手がだいけりや落とせ 落としゃかわい (以上、繰り返す)  
 (注) だい || だるい

出雲22

名 称 わらべことば  
 伝 承 地 出雲市南本町  
 伝 承 者 杉原 明 T 14年生  
 調査員氏名 杉原 明

へ だんべらが降う晩に 沢屋のかどで 駄賃馬<sup>だちんま</sup>が屁こいて  
 何ほこいた十<sup>とお</sup>こいた 十の山へ聞こえて  
 松が三本ころんで しけかけて 起こいた  
 (注) だんべら || 水分を含んだ大き目のぼたん雪 降う || 降る しけ || 支柱

出雲23

名 称 わらべことば  
 伝 承 地 出雲市南本町  
 伝 承 者 杉原 明 T 14年生  
 調査員氏名 杉原 明

へ 莊原の庄やんが 障子の穴からしょんべこいて

あんまりおかして ポンが抜けた

(注) 莊原 土地名 ポン 尻 抜けた 出た (こいた)

出雲 24

名	知井宮盆踊り
伝承地	出雲市知井宮町喜儀
伝承者	勝部 知 T15年生
調査員氏名	杉原 明・原 良橋

(山くずし)

へ 踊りナー抜きましょ 神門の踊り ハーヨイヤセー

若い我らの血潮は踊る

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ 北をナー眺めりや 神戸の川の ハーヨイヤセー

清き流れに若鮎が飛ぶ

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ハー関の五本松 アードッコイショ

一本切りや四本 アードッコイ

あとは切られぬ夫婦松 アシヨコ アシヨコホイで

踊りにかかる

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ああわが里くどき アードッコイセー

嫁にやるまい古志知井宮へ

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ああ古志知井宮へ アーヨイヤセー

粟やくまごの やせ里どころ

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ああやせ里どころ アーヨイヤセー

それは聞かれて大楯様が

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ああ大楯様が アーヨイヤセー

山のすそぬい 土手をば築き

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ハー関で見染めて アードッコイ

大社で結ぶー アードッコイ 末は松江の嫁が島

アシヨコ アシヨコホイで あの段続き

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ アーあの段続き アラドッコイセー

布智と知井宮 よく結ばれて

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ああよく結ばれて アーラヨイヤセー

できた神門は豊かな里よ

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ ああ豊かな里よ アラヨイヤセー

嫁に行かんせ 婿さんやんろうと

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へこころナーあたりで 踊りを変えて

アーラヨイヤセー

へハア参りなされよ アードッコイセー

出雲の大社 アードッコイ いつもにこにこ福の神

アショコ アショコホイで 踊りを変える

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ明日はナー花咲く 多聞院寺の アラヨイヤセー

弓掛け松やらあの貝塚や

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ宝ナー塚から 弘法寺や アラヨイヤセー

比布智社に陰陽石は

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へ村のナー名所は 数々あれど アラヨイヤセー

次の踊りもありますほどに

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

へこころナーあたりで その手をおろし アラヨイヤセー

さらば皆様おいとましましょう

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

出雲25

名 称 出雲木遣り

伝 承 地 出雲市知井宮町喜儀

伝 承 者 勝部 知 T 15年生

調査員氏名 杉原 明・原 良橋

へ西ーはヨイ大黒ヒナー 東はーハ恵美須

中をヨイ取り持つヒナー アラーアナ福の神

サーヨイヨイヨイヨイヤナ アララ コララ

ハンラーハートセー

へめでたのーイめでたのヒナー 若松ヒ様ヨー

枝もヨイ榮えてヒナー アラーアナ葉も茂る

サーヨイヨイヨイヨイヤナ アララ コララ

ハンラーハートセー

へ届けヨイ届けエヨホーエ ヨイヨイ 末まで届け

末はヨイ鶴亀ーヒナー アラーアナ五葉の松

サーヨイヨイヨイヨイヤナ アララ コララ

ハンラーハートセー

へ※なんのかんのとひと文句 こころあたりで

ひととこと人とおぼかし※

取りやげーてーハ頼む

サーヨイヨイヨイヨイヤナ アララ コララ

ハンラーハートセー

(※～※の間は、メロディ無し)

出雲26

名称 十二月数え歌  
伝承地 出雲市荒茅町上向  
伝承者 宇京 清吉 M45年生  
調査員氏名 杉原 明・原 良橋

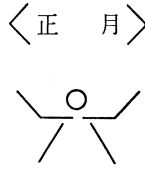
正月△男声Ⅰ▽ アーでは一つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 一つ正月三宝にーエー 飾りのだいたい

いかがですー

△男声Ⅰ▽ 初めながらも良くできましたー

歌の文句にあわせて、膳の上に割パンで、以下のように文様を描く。

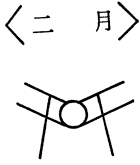


二月△男声Ⅰ▽ アーでは二つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 二月初午稲荷様ーアー 鳥居にイ額とは

いかがですー

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー



三月△男声Ⅰ▽ アー三つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 三月三日はひな祭りー 京びななんぞは

いかがですー

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー

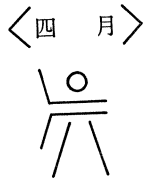


四月△男声Ⅰ▽ アーでは四つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 四月八日はお釈迦様ー 天にも地にも

我ひとりー

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー

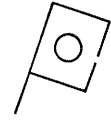


五月△男声Ⅰ▽ アーでは五つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 五月五日は鯉のぼり 定紋入りとは いかがですー

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー

<五 月>



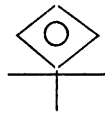
六月△男声Ⅰ▽ アラでは六つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 六月祇園に鉾が立つー 立ち鉾なんぞは

いかがですー

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー

<六 月>



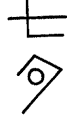
七月△男声Ⅰ▽ アーでは七つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 七月七日はたなばたでー しちせき七夕文字とは

いかがですー

△男声Ⅰ▽ アラ今度は格別良くできましたー

<七 月>

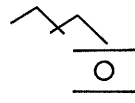


八月△男声Ⅰ▽ アーでは八つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 八月十五夜お月様ー 雲間に月とは いかがですー

△男声Ⅰ▽ アー今度も良くできましたー

<八 月>



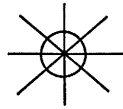
九月△男声Ⅰ▽ アーでは九つともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 九つ九月は菊の月ー ばりんの菊とは

いかがですー

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー

<九 月>



十月△男声Ⅰ▽ アーでは十とともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 十月は出雲は神在りでー 稲佐の浜には 仮の宮

△男声Ⅰ▽ アラ今度も良くできましたー

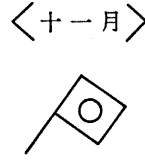
<十 月>



十一月△男声Ⅰ▽ アーでは十一ともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 十一月三日は明治節 日の丸御旗は いかがですー

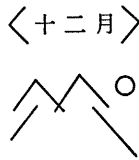
△男声Ⅰ▽ アー今度も良くできましたー



十二月△男声Ⅰ▽ アーでは十二ともせイーエー

△男声Ⅱ▽ 十二月師走の雪の月 富士の白雪 いかがですー

△男声Ⅰ▽ アー今度も良くできましたー



出雲27

名	荒茅盆踊り
伝承地	出雲市荒茅町上向
伝承者	宇京 清吉 M45年生町上向
調査員氏名	杉原 明・原 良橘

(安来節のメロディーで)

△出雲名物 数ある中で お目にかけてたい盆踊りー

△アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

アー島根出雲の荒茅郷は

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハアー荒茅郷は アラドッコイセー

アー出雲大社をヨー 後ろに控え

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハアー後ろに控え アラドッコイセ

アー西は日本海 逆巻く怒濤

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハアー逆巻く怒濤 アラドッコイセー

アー妙見こう山をヨー 南に控え

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハアー南に控え アラドッコイセー

ハアー霞棚引くヨー 三瓶の山やー

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハアー三瓶の山や アラドッコイセー

アー中国山脈をヨー はるかにと眺めー

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

アーはるかに眺め アラドッコイセー

アー見渡す限りのーヨー 水田地帯ー

アーラヤンハートナーイ ヤンハートナイ

アー水田地帯ー アラドッコイセー

アー稲の中からヨー 日の出を見ればー



アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ  
ハアー日の出を見ればー アラドッコイセー

アー白砂の松ヨー その浜山はー

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアーその浜山は アラドッコイセー

アー自然美をなすヨー 大公園のー

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアー大公園のー アラドッコイセー

アーこころあたりでヨー 入れことひとつ

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

(安来節のメロディーで)

ハアー出雲荒茅 来て見やしゃんせ 盆の踊りのにぎやかさ

アショコ ショコホいでー またやりましょや

ハアーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアー岡の上より 四方を見ればー

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアー四方を見ればー アラドッコイセー

アー昔ながらのヨー 山河の姿ー

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアー山河の姿ー アラドッコイセー

アーこころあたりでナー 納めてみましょ

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

(安来節のメロディーで)

ハアー盆はうれしや 別れた人が 晴れてこの世に 会いに来る  
アショコ ショコホいのー またやりましょやー

ハアーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

(安来節で)

ハアー出雲大社へ お参りなされ 縁の結びを なざる神

アショコ ショコホいでー 最後を納めー

ハアーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアーもはや今宵はヨー ていきの時間

アーラヤンハートナイ ヤンハートナイ

ハアーていきの時間 アラドッコイセー

アーまたのおいでナー お目もじ申すー

#### 出雲28

名	称
伝承地	神楽褒め言葉
伝承者	出雲市荒茅町上向
調査員氏名	宇京 清吉 M45年生
	杉原 明・原 良橋

ハ男声 I V

ハ待った待ったしばらく待った 待った待ったしばらく待った

待った待たれ待たれと差し止めましたる

拙者めはー恥ずかしながら

国元を名乗り上げましょうぞならば

これより東でなし北でなし西でなし

はるか南にあつたるその奥の

山のその山の奥の炭焼きヤン公の子でやんすー

初めて大社参りの帰りがけ ひと足ゆるり ふた足ゆるり

ゆるりと立ち寄って眺むれば 今は三番そらの真最中

褒めるほの字も知らねどもー

何かもって お褒め申そうならばー

当時はやりの歌謡曲をもって お褒め申しましょ

——ここで「浪曲節だよ人生は」を歌う——

へまーだまだ褒める数は 山で木の数カヤの数ー

天に上れば星の数ー そーこらあたりのおじょうさんの

おまんこの数ほどありましたなれどー あまり下手の長口上は

ご見物人様のさまがー ーこらあたりでチャボの一声

——コケッコー——

△男声Ⅱ▽

へ大慶至極に存じたてまつります

只今の段 お褒めくだされました

ご先生様はどーこのいずくの

だれ人お先生かは存じませぬけれどー

あの様な歌謡曲なんぞで お褒めくださりましたる段

いーかばかりか大慶至極に存じたてまつりまーす

さっそくの段 お手元を改め

おん礼にまかりこすはずのところには ございますかなれどー

ごらんのとおり取込み中のことなれば

私が一つ当時はやりの「矢切りの渡し」

をもって御お返しつかまつりましょうなれば

——ここで「矢切りの渡し」を歌う——

まだまだ返す言葉はありますかなれど

ごらんのとおり芸半ばのことなれば

これをもって おん礼なつかまつります

△男声Ⅰ▽

へいーヤイヤ炭焼きヤン公の子が褒めたとて

あーのようなお念の入りました お褒めは及ばぬことー

早く早く もとの調子そろえて お手を上げさせられよー

△男声Ⅱ▽

へしーからばごめんこうむりましょう 調子 調子

平田 1

名 称 河下甚句

伝 承 地 平田市河下町

伝 承 者 原 満野 T14年生

調査員氏名 加納 恵美子

(はやしはトコドッコイドッコイドッコイ)

へさすが出雲の名所の中で その名は鰐淵浮浪のお山

お山チラチラ浪間に浮ぶ 浮ぶお山へ舟漕ぎ寄せて

霊地開きし智春の聖 法灯千載その名は高く

御柱水の泉は尽きず 飛沫は轟く浮浪の滝の

淵は鰐淵稻佐に通ふ 滝の白糸千代繰り返し

鰐は躍らず河鹿が鳴いて 春は桜や若葉の緑

谷に木魂すあの一と声は 鳴いて血を吐く山時鳥

昔忠義の頼源法師 隠岐の帝を守りし苦衷

今に伝ふる佛法僧鳥 秋はもみじに心も赤く

赤い顔した弁慶さんが なぎ刀かっいで登りし山路

鹿の鳴き音に昔をしのぶ 登り下りの巡礼さんが

うたう縁起の声はればれと 声につられ谷川つたい

音頭で名高い河下へ来れば 沖にチラホラ白帆が見えて

可愛い殿御は和布を刈るよ かよう千鳥に文ことづけて

思う心を知らそとすれど 波は岸边にどんとどんと寄する

河下よいとこ一度はおいで 波に藻潮の花も咲く

〔出雲くどき〕

〔本歌詞は平くどきおどり、山くどきおどりに使用  
はやしは平くどき ヨーイヨーイヨーイヤナーイ  
山くどき ヤーハトナーイヤーハトナーアイ

わしは大山お主は三瓶 中の宍道湖で湯あみする

わしが生まれは鳥根の出雲 東にそびゆる大山やまの

峰の白雪棚引く雲や 千古変らぬ偉容を仰ぎ

はるか西へと眼をやれば 延々連なる山脈こそは

中国山脈出雲の屋根よ 大山お山のその足もとにや

建武中興ではまれも高き 船上山やまたその昔

日本神話のその始まりの 八岐大蛇を御退治なされ

村雲劔をとり出されたる 鳥上山やその辺りには

スサノオノ尊とクシ稲田姫の 八重垣つくり睦み合い給う

古き縁の山々ありて 出雲と石見の境にや高く

三瓶お山が雲着てござる 三千年の歴史を秘めて

斐伊の流れは水ゆるやかに 夢の宍道湖にアノ注ぎ入る

松江大橋流りよが焼きよが 和多見通いはアリヤ舟でする

松江大橋から宍道湖みれば 千鳥お城にあの嫁ヶ島

映る灯影もアリヤなつかしや 周り十二里の宍道湖水の

その向こうには目のお薬師で 広く知られた一畑寺や

古い歴史にもみじと鹿で その名知られし鰐淵寺あり

名物うどんの平田を過ぎりや 黒烟渦巻く工場町の

出雲今市そのまた先にや 国土奉獻にその名も高き

大国主命をまつる 出雲大社が御鎮座なさる

関は朝日よ大社は夕日 名所出雲のアリヤ西東

松江大橋からチョイト舟に乗り そりこ舟浮かぶ中海過ぎて

美保関へと参詣すれば 歌に知られたあの五本松

〃関の五本松一本切りや四本 後は切られぬ夫婦松〃

出雲名所はまだまだあれど ころでいよいよ我等が国の

出雲名物荷物にならぬ 安来節をばチョと歌いましょう

〔安来節〕

鰐淵お山で鹿鳴くころは 清き流れに散るもみじ

もみじ見るなら鰐山おいで 山と谷とはひじりめん

鰐淵お山のもみじの下で 晴れてうれしい二人連れ

鰐淵山から流れる水は もみじ映して河下へ

鰐淵お山へ朝日をうけて 河下沖には真帆片帆

河下海岸千鳥が鳴けば 恋し昔を思い出す

平田 2

名 称 三津町宮ねり歌  
 伝 承 地 平田市三津町  
 伝 承 者 山岡 富清 T9年生  
 調査員氏名 加納 恵美子

西の沖から アリヤセ コリヤセ

鴨さえ来れば サーヨイ ヨイ

鯖がとれます ヤートーコー ベタベタとー(たくさんの意)

サーヨイ ヤナーア アーヨイヤナー アドッコイ

アソワイセー コリワイセー アーソーラ ナンデエモエー

この親方 アリヤセ コリヤセ

前から繁盛 サーヨイ ヨイ

今は若世で ヤートーコー なお繁盛

サーヨイ ヤナーア アーヨイヤナー アドッコイ

アソワイセー コリワイセー アーソーラ ナンデエモエー

見てもみごとな アリヤセ コリヤセ

とんどの宮は サーヨイ ヨイ

大工手柄か ヤートーコー 金せぎか(たくさん費用をかけたの意)

サーヨイ ヤナーア アーヨイヤナー アドッコイ

アソワイセー コリワイセー アーソーラ ナンデエモエー

届け届け アリヤセ コリヤセ

天まで届け サーヨイ ヨイ

末は鶴亀 ヤートーコー 五葉の松

サーヨイ ヤナーア アーヨイヤナー アドッコイ

アソワイセー コリワイセー アーソーラ ナンデエモエー

(以下歌詞のみ)

安芸の宮島 周りは七里 浦は七浦 七恵比須

うれしめでたの 若松様は 枝も栄えて 葉も茂る

平田 3

名 称 祝い船歌  
 伝 承 地 平田市塩津町  
 伝 承 者 川谷 真一 T4年生  
 調査員氏名 加納恵美子

ヤーラー (新たまの) 年のはじめの初夢に

めでたいことを夢に見た

そのよな夢が合うなれば 三島の浦の盆に

平にうけて眺むれば 四角四面に倉を建て

末には長者になるもありがたい ヤーラーエー

ヤーラー 主のうけたるお盃 天から白銀黄金が降りかかる

七福神がおそろいで お恵比須様が梶をとり

大黒様のお手先で この家の倉にと馳せて来る ヤーラーエー

ヤーラー 八雲たつ 山は鶴山亀山の

間を流るる八雲川そが川の 流るる水を汲みうけて

酒につくりし泉わく われわれどもも戴いて

寿命延ばして喜べり ヤーラーエー

ヤーラー 世の中に めでたいものは芋のかみ

寿いきが永うて葉が広うて 朝には黄金の露受けて

下には孫子をひき連れて 末には長者となるもありがたい  
ヤーラーエー

＼ヤーラー しめ縄の 祝いなごかれ一五三

夫婦もろとももろもきの 裏白の この小袖を

孫子に譲り葉の ヤーラーエー

＼ヤーラー 日和よし 日和よければ模様もよし

お舟下ろしのお乗り初め さてまた四方を眺むれば

宝来山にいさご山 黄金の山も桜木の

ヤーラーエー

＼ヤーラー 枝も栄える 葉も茂りますする

年の始めの初夢に めでたいことを夢に見た

いざなぎ山の楠を 舟に造りし今下ろし

白銀の柱をしたてて 黄金のしびをくくませて

みなわて縄を整えて 綾や錦を帆に巻いて

宝が島へ乗りこんで 思う宝を積みこんで

あなたの蔵へ納めおく ヤーラーエー

平田 4

名 称 木綿ひき歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納恵美子

＼うちの後ろの梅の木に 雀が三羽鳩三羽

一羽の雀が言うことによ よんべよんだ花嫁ご

今朝の座敷へ座らせて 六枚屏風をたてつめて

金らんどんすを縫わせたら しっぽりかっぽり泣かしやんす

何が不足で泣かしやんす なんだり不足はござらんが

わしの弟の千松が 西のほうらいへ金掘りに

金ども掘るやら掘らんやら 一年たっても戻らんが

二年たっても戻らんが 三年目の一日に

おかめに来いと状が来た おかめはやらんわしが行く

行きて戻って何々着さしよ 上には紋付 紋羽織

下には越後の長小袖 千松さんの土産には

茶せん茶しやく 茶の間のばあやんに ホッホッホー

平田 5

名 称 ゴム手まり歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納 恵美子

＼向こうとらさん 竹松ちゃん 目も鼻も 賢くて

城山崩して 宮建てて 宮のまわりへ ゴままいて

ゴマがほどけて油になあり だんさん お馬

奥さん おかご 坊さん てん車(肩車)

嬢さん ねんねこさい あした来い 賃やる

晩に来い 賃やる 賃は無い 賃は無い

こな(あの人) 嘘ちき(うそつき)

だんさん ちよと 百だった

平田 6

名 称 お手玉歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納 恵美子

へ おじゃみー おふたー おふたー おみえー おみえー

およおー およおー おいちー おいちー おもお

かってく りっとんき おおじゃみ じゃみ とんき

おおふた ざくらは りっとんき

おおみい ざくらは りっとんき

おおよう ざくらは りっとんき

おおいち ざくらは りっとんき

おおもう ざくらは かってく りっとんき

おおじゃみ じゃみ とんき かっせん

平田 7

名 称 縄とび歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納 恵美子

へ 一かけ二かけ三かけて 四かけて五かけて橋をかけ

橋の欄干手をかけて はるか向こうを眺むれば

十七、八のねえさんが お花と線香を手を持って

ねえさんねえさんどこ行くの 私は九州鹿児島西郷隆盛娘です

今からお墓に参ります お墓の前では手を合わせ  
涙ながらに拝みます 拜んだ後から幽霊が  
ふわりふわりと ジャンケンポン

平田 8

名 称 数え歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納 恵美子

へ しゃんしゃんしゃん 一にや橘

二にやかきつばたかねん 三はさがればし

四は獅子ぼたんよ 五は井山の千本桜かねん

六つ紫色よく染めたかねん 七つ何でも

八つ山吹 九つ…………… (以下記憶に無し)

平田 9

名 称 十本指の歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納 恵美子

へ いちほち とんとん にばよき しょぼこ

しょうばい ならずのおめかけさんは

どんぐり やのやの 川とんぼ  
ちよちよちよ ちよつとふけ

平田 10

名 称 数え歌  
伝 承 地 平田市国富町  
伝 承 者 多久和千代子 M44年生  
調査員氏名 加納 恵美子

一は出雲の大社 二は日光東照宮

三は讃岐の金比羅さん 四は信濃の善光寺

五<sup>いっつ</sup>一畑お葉師さん 六つ村々鎮守さん

七つ成田のお不動さん 八つ八幡<sup>やわた</sup>の八幡<sup>はちまん</sup>さん

九つ高野の弘法さん 十は所の氏神さん

大田 1

名 称 仮屋餅つき歌  
伝 承 地 大田市大田町大田  
伝 承 者 森吉 喜八郎 T15年生  
調査員氏名 勝部 義夫

(太鼓と、ヤアヤアの掛け声の中で)

今年<sup>ア</sup>はだんなのナー祝い年 ア知行がヨイ増します五万石  
(アーヨイシヨノヨイシヨノの声の中で)

餅をつく、餅をつきながらー)

餅をつけつけナー中をつけー

中をヨイつかねば餅やーならぬー

(アーヨイシヨノヨイシヨノと餅をつく)

この間、太鼓は鳴り続けている

大田 2

名 称 仮屋餅つき歌  
伝 承 地 大田市相生  
伝 承 者 吉田 専蔵 T7年生  
調査員氏名 勝部 義夫

餅をつけつけナー中をつけ 中をヨイつかねば餅やならぬ

(ヘイヤダノヘイヤダノヘイヤダノヘイヤダノと掛け声が入る)

これのお背戸のナーみかんの木 みかんヨイならいで金がる

(掛け声)

これのお背戸のナー茗荷<sup>めようがふき</sup>落

茗荷ヨイめでたく落繁盛

(掛け声)

めでためだたナー重なれば 末はヨイ鶴亀五葉の松

(掛け声)

今年<sup>ア</sup>はだんなのナー祝い年 知行ヨイ増します五万石

(掛け声)

これのお蔵のナー白ねずみ 大判ヨイ小判をくわえよせる

(掛け声)

へ餅をつけつけナー中をつけ 中をヨイツかねば餅ゃならぬ

(掛け声)

——録音にはないが次のような詞もある——

へこの後ろへナーみかんの木

植えてみかんヨイならいで金がる

へこの後ろへナー柿の木植えて

柿がヨイならいで金がる

へこの後ろのナーいのみの木

ヤレいのみはヨイならいで金がる

へ年の始めにナー筆をとる よろずヨイ宝を書きそめる

へうれしめでたのナー若松様 枝もヨイ栄えて葉も茂る

へ餅をつくならナー一石どまつきゃれ

二斗やヨイ三斗はだれもつく (注 どまーぐらいは)

へ今年はだんなのナー祝い年 だんなヨイ祝いの餅をつく

へこの主人のナー祝い年 恵比須ヨイ大黒さんの舞い遊び

へ梅と桜をナー両手にさげて どれがヨイ色よい花だやら

大田3

名称 仮屋餅つき歌

伝承地 大田市大田町大田

伝承者 熱田 格市 M32年生

調査員氏名 勝部 義夫

へ大田名物ナー仮屋にのぼり 夏のヨイ祭りやー彼岸市

(掛け声・ヨイヤナヨイヤナヘヤヘヤ)

へおじじみやれよナー餅つく婿の

ハー腕にヨイ頼もしい力ーこぶ

(掛け声)

へ日本全国ナー東の果てで 富士のヨイ高嶺にー鶴が舞う

(掛け声)

大田4

名称 石見伊勢音頭

伝承地 大田市大田町大田

伝承者 熱田 格市 M32年生

調査員氏名 勝部 義夫

へヨーオイサァー 音頭とる子がな ヨイヨイ

端はなから落ちる アーラヨーイセーソーコセー

端の下でもヤンサ音頭とる

ハリヤヨーイヤナーヨーイヤナー

ハリワイセーコリワイセー セーノナンデーエーモセー

ハー飲んで干せ 飲んで干せ

へヨーオイヤサァー お伊勢参りで ヨイヨイ

お払い受けて アーラヨーイセーソーコセー

戻るその日のヤレサ うれしかるー

ハリヤヨーイセーソーコセー

ハリワイセーコリワイセー セーノナンデーエーモエー



ハー飲んで干せ 飲んで干せ

ハヤーオイサアー ここは大坂な ヨイヨイ

わしやー四十曲がり ヨーイセーソーコセー

アー馬に乗りかけヤレサだんなさま

ハーヨーイヤナーヨーイヤナー

ハリワイセーコリワイセー セーノナンデーエーモエー

ハー飲んで干せ 飲んで干せ

大田5

名 称 石見銀山巻き揚げ節

伝 承 地 大田市大森町

伝 承 者 中川 アサヨ M33年生

調査員氏名 勝部 義夫

ハ仙の山からヨー谷底見ればヨ

巻いたマターア巻いたーのー アー声がするヨ

ハ三十五番のヨー座元の水はヨ

大岡マターア様でもー アー裁きやせぬヨ

ハ大岡様でもヨー裁けぬ水をヨ

水車マターアポンプでー アー皆さばくヨ

アースツチヨイ スツチヨイ

ハ巻けば本番ヨー巻かなぎや歩役ヨ

巻けばマターア女のー アー身がたたぬヨ

ハ巻いた巻いた巻いたヨー巻けぞが巻いたヨ

巻けぞマターア巻かなぎやー アー箱たたけヨ

大田6

名 称 苗取り歌

伝 承 地 大田市三瓶町志学

伝 承 者 大田 フサノ M29年生

調査員氏名 勝部 義夫

ハ大仙山のこうわらび 摘めど籠にやたまらぬ

(くりかえす)

ハ大仙山のつづらを 引けやおるせつづらを

(くりかえす)

ハ朝日さすヤーハレ 日向の里で野ぜり摘むヤー

ヤー野ぜり摘むヤーレー 日向の里で野ぜり摘むヤー

大田7

名 称 田植えかつま歌

伝 承 地 大田市三瓶町志学

伝 承 者 大田 フサノ M29年生

調査員氏名 勝部 義夫

ハ恵比須大黒出雲の国の 西と東の守り神

ハヤーレ守り神 西と東の守り神

ハ浮布池を鏡に立てて 雪で化粧する三瓶山

ハヤール三瓶山 雪で化粧する三瓶山

ハあなた百までわしゃ九十九まで ともに白髪が生えるまで

ハヤール生えるまで ともに白髪が生えるまで

ハ恋し恋しと鳴く蟬よりも 鳴かぬ螢が身を燃やす

ハヤール身を燃やす 鳴かぬ螢が身を燃やす

ハ抱いて寝もせずいとまもくれず つなぎ舟とはわしのこと

ハヤールわしのこと つなぎ舟とはわしのこと

ハ長い畦も長々通うた もはや今宵がいとまごい

ハヤールいとまごい もはや今宵がいとまごい

ハいとまごいだとさす盃は 中にご酒やら涙やら

ハヤール涙やら 中にご酒やら涙やら

ハ三瓶お山のあら雲晴れて 今日はお山の晴れ姿

ハヤール晴れ姿 今日はお山の晴れ姿

ハ咲いた桜になぜ駒つなぐ 駒が勇めば花が散る

ハヤール花が散る 駒が勇めば花が散る

ハ紀州みかんは日本の宝 外は日の丸中は菊

ハヤール中は菊 外は日の丸中は菊

ハほれた病がお医者で治りゃ 八百屋お七は殺しやせぬ

ハヤール殺しやせぬ 八百屋お七は殺しやせぬ

ハ姑あ浜柿小姑はきねり 嫁は西条の合わし柿

ヤハール合わし柿 嫁は西条の合わし柿

大田 8

名称 田植え歌(サゲ)

伝承地 大田市三瓶町志学

伝承者 藤井 正雄 T2年生

調査員氏名 勝部 義夫

サゲ ハ朝声はヤーハレ鳴らしに鳴らせ

声鳴らせノーホサ声鳴らしよ

早乙女 ハーアリヤ声鳴らせヤーハレ 鳴らさぬ声は寝声

サゲ ハ三拝のヤーハレこの土へござる

正月のホーサ正月のー

早乙女 ハーアリヤ正月はヤーハレ 三月からは田の神

サゲ ハおなりさんはヤーアリヤどこからござる

米子からノーホサ米子からのー

早乙女 ハーアリヤ米子からヤーハレ 米子の町の万屋

サゲ ハおなりさんはヤーハレ名馬の駒で

迎えたがノーホサ迎えたがの

早乙女 ハーアリヤ迎えたがヤーハレ 門から徒歩でおいで

サゲ ハ三拝のヤーハレお神酒の酒は

どご酒かノーホサどご酒かの

早乙女 ハーアリヤどご酒かヤーハレ 大和の国の生酒

サゲ ハ三拝のヤーハレお神酒の酒は

だれにさすノーホサだれにさすの

早乙女 ハーアリヤだれにさすヤーハレ 先ず三拝にさします

サゲ ハ三拝のヤーハレ高天原で

昼寝してノーホサ昼寝しての

早乙女 ハーアリア昼寝してヤーハレ 思う殿御の夢を

サゲ 〱三拝のヤーハレ倉の鍵さげて

どの倉へノーホサどの倉への

早乙女 ハーアリアどの倉へヤーハレ 白米倉へ急ぐ

サゲ 〱大黒はヤーハレ背は低けれど

倉の主ノーホサ倉の主ヨ

早乙女 ハーアリア倉の主ヤーハレ 俵の壁に銭を

サゲ 〱おなりさんヤーハレどこまで送る

峠山へノーホサ峠山へヤー

早乙女 ハーアリア峠山へヤーハレ 情のために送る

サゲ 〱三瓶はヤーハレ姫逃池の

かきつばたノーホサかきつばたの

早乙女 ハーアリアかきつばたヤーハレ

五色に咲いてヤレみごと

サゲ 〱三瓶山ヤーハレ日影の前は

演習地よノーホサ演習地

早乙女 ハーアリア演習地はヤーハレ 諸国の人が集まる

サゲ 〱日暮れにはヤーハレ西上見れば

にぎやかなノーホサにぎやかなの

早乙女 ハーアリアにぎやかなヤーハレ 日輪様が舞いごさる

大田 9

名 称 田植え歌

伝 承 地 大田市静間町八日市

伝 承 者 熊谷 正枝 T7年生

調査員氏名 勝部 義夫

(朝)

〱ハア今日の風は良い風 ハアすそ吹きさまいた

(以上くりかえす)

〱ハア早乙女さんの上手は ハア下がるほどが上手だ

(くりかえす)

(夕方)

〱ハアお日が西の山端に ハアおよそぎなされよ

(くりかえす)

〱ハア今日の田の友たち ハアおなごり惜しやな

大田 10

名 称 田植え歌

伝 承 地 大田市静間町八日市

伝 承 者 熊谷 正枝 T7年生

調査員氏名 勝部 義夫

〱岩国のヤーアレそろばん橋を

渡るにはノーオサ渡るにはノー

ハア渡るにはヤーアレ 白足袋はいてわらぞうり

〱大山のヤーアレ高天原で 昼寝してノーオサ昼寝してナー

ハア昼寝してヤアアレ いとしい殿御の夢を見た  
ハ十七がヤアアレ差したるかんざし

何金なにがねかノオサ何金かノ

ハア何金かヤアアレ 真ちゆうなまりに鉛の銀流し

(各節とも二回繰り返し)

大田 11

名 称 田植え歌  
伝 承 地 大田市大田町  
伝 承 者 熱田 格市 M32年生  
調査員氏名 勝部 義夫

ハ朝まにはヤアアレ ならしにならし声ならしノ

アリヤ声ならしヤアアレ ならさぬ声は寝声なりヨ

ハ朝起きてヤアアレ ならしにならし声ならしノ

オオサ声ならしノ

アリヤ声ならしヤアアレ ならさぬ声は寝声なりヨ

ハ田の神はヤアアレ どちらからござる宮の奥ノ

オオサ宮の奥ノ

アリヤ宮の奥のアーレ 芦毛の駒に手綱かけ

ハ朝まにはヤアアレ 清水寺の鐘つきだノ

オオサ鐘つきだノ

アリヤ鐘つきがヤアアレ 都の女郎が目を覚ます

(各節とも何度か繰り返す)

大田 12

名 称 もみすり歌  
伝 承 地 大田市大田町  
伝 承 者 熱田 格市 M32年生  
調査員氏名 勝部 義夫

ハこんのお背戸みょうがの 茗荷ふきと落は

茗荷めでたい 落繁盛

※BA〔ギッシンギッシン〕二人が同時に唱える

※B〔ヨイシヨイシヨイシヨ〕

ハ小屋原多根ヤス 小豆原

多根は田所 米どころ

※(前に同じ)

ハ花は二度咲く 若さは一度

若さ恋しや 二度はない

※(前に同じ)

ハ花といわれりや 咲かねばならぬ

咲けば実がなる 恥ずかしや

大田 13

名 称 小屋原田植え囃子  
伝 承 地 大田市三瓶町小屋原  
伝 承 者 田中 円造 M44年生  
調査員氏名 勝部 義夫

(一) 祇園囃子

つづいて

(一) 門掛り

(二) ニツ拍子(二丁子)

男声へ近江の国の北野橋から 下見れば

女声 アリヤ下見れば 鯉かや鮒かやアーイ

男声へ酒は出たが肴にや何やら ちやの葉を

女声 アリヤちやの葉を 酔あえにあえてはオーサ

男声へ一の谷の敦盛様は 年十六で戦さに負けたは

口惜しや

女声 アリヤ口惜しや 熊谷次郎と名を

全員 ドッコイドッコイ

(四) 八丁調子(八丁子)

へ大仙のヤーハレヤ お宮の前の唐獅子がのソレ

唐獅子がの どころなる石屋の手柄やら

へ大仙のヤーハレヤ お宮へ参る道問えばのソレ

道問えばの ふもとの茶屋から三里

へ五月のヤーハレヤ 五月のころは代かきでのオサ

代かきでのソーリヤ 代かきでヤー ハーレ白旗立てて光手

(五) 早調子

(六) 下りは

大田 14

名 称 博勞節

伝 承 地 大田市川合町吉永  
伝 承 者 平井 秀雄 T11年生  
調査員氏名 勝部 義夫

へ石州博勞が国発つときは 中をみごとに飾りたて

茜のおもがた塗り鼻木 もえぎの「ゆたん」を振りかけて

博勞の装束柳行李 背に負い隣の爺さん婆さんも

私もこうして出るからは 紙の戒名で戻るとも

そのとき悔むなこりや女房 何んのそんなことあるものか

大田 15

名 称 追い込み節  
伝 承 地 大田市川合町吉永  
伝 承 者 平井 秀雄 T11年生  
調査員氏名 勝部 義夫

へ石州博勞の牛見る目もと

ハーッ(シート)と追いかけて 引き返し

左の角にも耳をそえ 右の角にも耳をそえ

角の間から首押さえ 三枚あばらをなでおろし

後に回りにて尾を取りて ちんちくちんちくきんを引く

この牛や良い牛 値段はいくらでくだしやんす

小判五十両であげましよう ハーノーエー

追い込め 追い込め

大田 16

名称 追い込み節  
 伝承地 大田市川合町吉永  
 伝承者 平井 秀雄 T 11年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

へもーし博勞さん 牛を買うなら斑牛を買われ  
 額にちよんぼり菊斑 角は前出の壹高手

肩には輪ごかけ斑 背には金箱負い斑  
 産頭さんずに投げ越し負け斑 腹には大蛇の巻き斑

四つ足が白うて 尾が白うて 大山市だいせんいちでも百五十両

(注) ちよんぼり少し

旧大田市三瓶地方の宴席での最後に、大盃を回し飲みするとき、必ず歌われた。

大田 17

名称 シツカク踊り(田楽踊り)  
 伝承地 大田市水上町福原  
 伝承者 浅野 助義 M 42年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

(宮座式田楽踊之次第)

先一 入波 次二 座替 次三 四ッ頭 次四 片波合  
 次五 惣波合 次六 布摺 次七 大飛 次八 小飛  
 次九 骨合 次十 顔合 次十一 胡麻立 次十二 柴舞  
 掛声(シツ、シツ、シツ、シシシ)と四拍子十六拍子の変拍子で  
 続く。

大田 18

名称 盆踊り歌  
 伝承地 大田市川合町  
 伝承者 安濃 久男 S 20年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

(安珍清姫くどき)

へ国を申せば紀州の国で 紀州変化て愛する話

ここは熊野にまぎれもないが 泊柳は庄次の屋方  
 行きや帰りの吸付け煙草 それが機となり寝泊まりなざる  
 庄次屋方のかの清姫は きりょうのよいこと玉子に目鼻  
 色の白さは雪にもまさる 参詣帰りのその道筋に

庄次屋方にお泊まりなざる 奥の一間に安珍寝せて  
 夜の九ッ夜半のころに 表唐紙さらりと開けて

安珍安珍と小声で起こす 安珍驚き早や目をさます

夢かうつつか迷いのものか そこで清姫言われるように  
 夢や迷いのものではないよ わたしやこの家の清姫なるが

申し安珍見覚えあろう 三月四月は袖でも隠す  
みつきよつき

最早七月袖では行かん 連れて行かんせ安珍様よ  
なな

そこで安珍言われることに 四時しよとき片時忘れはせねど

わたしや熊野にりよ願かけて 願をほどかにや婦人はつれぬ

女つれてはお山ができぬ と言うて安珍夜抜けをなざる

日高川へと急いで行きやる 申し船頭さん助けておくれ

あとを追いくる女が一人 あとを追いで来る女はだれか

庄次屋方の清姫なるぞ そこで船頭が心得まして

舟を取り出し安珍乗せて 川のことなら舟かみのぼし  
 竿をさします櫓をこぎ出して そうこうする間に川真ん中で  
 そこで安珍申することに 申し船頭よ頼みがございます  
 わたしの頼みはほかでもないが あとを追い来る女が一人  
 あとの女を渡したならん そこで舟頭が申すことにや  
 わたしや商売舟賃もらや だれを渡さぬとわたしやいえません  
 聞いて安珍が申することに こんな舟頭は不実なものだ  
 二人前でも舟賃出そか そこで舟頭が申すことに  
 二人前さえ舟賃もらや あとの女は渡してやらん  
 話す間に向こうの岸についた 少しあがればぞうしよう寺様よ  
 寺は大地の七堂伽らん 門にかかりてくぼ笠ぬいで  
 内に入りて両手をついて ご免なされと挨拶いたし  
 申し和尚さん頼みがございます 紀州めぐりの安珍なるが  
 あとを追い来る女が一人 早くわたしを隠しておくれ  
 聞いて和尚さん心得まして 鐘をおろして安珍隠す  
 あとの女が舟場に着いた 舟頭舟頭と声をはり上げて  
 早くこの川渡しておくれ そこで舟頭が言われることに  
 ここの川をば十二時限り お上さまより言いつけありて  
 ここは七日の舟止めされて 七日過ぎねば夜舟は出せぬ  
 どんなご用でも渡されません 聞いた清姫腹立てまして  
 女だとも馬鹿にはするな 舟頭渡さにヤ自力で渡る  
 着たる着物を柳の枝に はいた石駄をぬぎずてまして  
 櫛やかんざしこうがい土手に うろこざし出し角いただいて

髪はさか立ち身の毛はよだち 日高川へとざんぶとはいる  
 火炎吹き立て水おしわけて 岸についたよ七尋半も  
 すこしあがればぞうしよう寺様よ 門にかかりてはったとにらみ  
 申し和尚さんご無心ござる これへ安珍渡しておくれ  
 そこで和尚さん言われることにや これに近ごろ安珍見えん  
 そこで清姫腹立てまして ほかの寺には釣り鐘下がる  
 鐘の下りたは不思議でならん 聞いて和尚さん申することに  
 鐘の下りたに不思議はなかる 鐘を下ろして造作普請  
 なおも清姫おさん思い 鐘を見つめてキャキャどなる  
 鐘を取り巻く七巻き半も 火炎吹き立て尾ばちでたたく  
 中の安珍鐘もろともに 溶けて流れて日高の川へ  
 なんと若い衆このきりもてた だれかどなたか音頭さんに頼む  
 あやれうれしや音頭さんが見えた あとの音頭から傘渡す

大田 19

名 称 盆踊り歌  
 伝 承 地 大田市波根  
 伝 承 者 勝部 典正 S4年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

(鈴木主水くどき)

花のお江戸のそのかたわらに さても珍し心中ばなし  
 所四谷の新宿町の 紺ののれんにききょうの紋は  
 音に聞えし橋本屋とて あまた女郎衆のあるその中で

お職女郎とて白糸こそは 年は十九で当世育ち

あいきよければ皆人さんが われも人もと名指して揚がる  
わけてお客はどなたと聞けば 春は花咲く青山辺の

鈴木主水という侍で 女房持ちにて二人の子ども

五つ三つはいたずら盛り 二人子どものあるその中を

今日も明日もと女郎買いばかり 見るに見かねて女房のお安

ある日わが夫主水に向かい これさわが夫主水様よ

わたしや女房で焼くのではないが 子ども二人は伊達には持たぬ

十九二十の身じゃあるまいし 人に意見もする年ごろで

やめておくれや女郎買いばかり 金の成る木は持たしやんすまい

どうせ切れるの六段目には 連れて逃げるか心中をするか

二つ一つの思案と見える しかし二人の子どもがふびん

二人子どもとわたしの身をば 末はどうする主水様よ

言えば主水は腹立ち顔で 何の小しやかな女房の意見

己が心で止まないものが 女房しかしの意見でやまぬ

愚痴なそちより女郎衆がかわい それがいやなら子どもをつれて

そちの里へと出て行かしやんせ 愛想づかしの主水様よ

そこで主水は小やけになりて 出でて行くのは女郎買い姿

後でお安はさて悔しやと いかにも男のわがままじゃとて

死んで見せよと覚悟はすれど 五つ三つの子に引かされて

死ぬに死なれず嘆いておれば 五つなる子がそへと来たり

もうしかかさんなぞ泣かしやんす どこか痛くばさすってあげよ

言えばお安は顔ふり上げて どもも痛くて泣くのじゃないが

幼けれどもよく聞け坊や あまり父さま身持ちが悪い

意見いたせば小しやかなやつと たぶさつかんでちようちやくなざる

さても残念夫の心 自害しよとて覚悟はすれど

後に残りしわれらがふびん どうせ女房の意見じゃやまぬ

さればこれから新宿町の 女郎衆頼んで意見をしよと

三つなる子は背中に負おて 五つなる子の手を引きまして

出でて行くのはさも哀れなり 行けばほどなく新宿町の

紺ののれんは橋本屋とて 見れば表に主水の草履

それと見るより小職に向かい わたしやこちらの白糸さんに

どうぞ会いたい会わせておくれ ハイと小職は二階に上がる

これさあねえさん白糸さんよ どの女中か知らない人が

なにかお前に用ありそうな 会うてやりなよ白糸さんよ

言えば白糸二階を降りる 私を尋ねの女中というは

お前さんかえ何用でござる 言えばお安は初めて会うて

私は青山主水が女房 お前見かけて頼みがござる

主水身分は勤めの身分 日日の勤めを愚かにすれば

末はお扶持が離れるほどに ここの道理をよく聞き分けて

どうかわが夫主水殿に 意見をされて白糸さんよ

せめてこの子が十にもなれば 昼夜あげづめなさってままよ

またはわたしが去られた後で お前女房にならしやんすとも

どうかこの後主水殿が 三度来れば一度はあげて

二度は意見をしてくだしやんせ 言えば白糸言葉につまる

わたしや勤めの身の上なれば 女房持つとは夢さら知らず



ほんに今まで懇志にしたが さぞや憎かろお腹も立とが  
わたしもこれから主水殿に 意見しますお帰りなされ  
と言うて白糸二階へ上がる 後で二人の子どもを連れて  
お安わが家に早や帰りける ここで白糸主水に向かい  
お前女房が子どもを連れて わたしに頼みに来ました様子  
今日はお帰りとめてはすまぬ 言えば主水はニコニコと笑い  
置いておくれよ久しかぶりよ ついにその日も居続けなざる  
お安子どもを相手にいたす 待てど暮らせど帰りもしない  
もはやその夜も明け方となる 支配方よりお使いありて  
主水身持ちがふらちの故に 扶持も何もみな取り上げる  
後でお安は途方にくれる 扶持に離れて長らえおれば  
馬鹿のたわけと言われるばかり 武士の女房じゃ自書をしよと  
二人子どもを寝かせておいて 硯とり出し墨すり流す  
落ちる涙が硯の水よ 涙ながらに書置き残す  
白木綿でわが身を巻いて 二人子どもの寝たのを見れば  
かわいかわいで子に引かされる 思い直して逆手に持ちて  
グッと自書の刃の下よ 二人子どもは早や目をさます  
五つなる子が背中にする 三つなる子が乳房にする  
幼心でただ泣くばかり 主水それとは露さら知らず  
女郎屋立ち出でホロホロ酔いで 女房じらしの小歌で帰る  
表口より今戻ったと 言えば子どもが早や駆け出でて  
もうし父さんお帰えりなるか なぜに母様今日限り  
物も言わずに一日も寝る ほんに今までいたずらしたが

御意にやそむかぬのう父さまよ どうぞわびしてくださいませと  
言えば主水は驚きなされ あいの唐紙すらりと開けて  
見ればお安は血潮に染まり わしが心が悪いが故に  
自害したのよふぶんなことよ 涙ながらに二人の子ども  
ひざに抱き上げかわいやかわい 何も知るまいよく聞け坊や  
母はこの世をいとまだほどに 言えば子どもは死がいにする  
もうし母さまなげ死になした 嘆く子どもをそのまま置いて  
檀那寺へと急いで行きやる 戒名もらってわが家へ帰る  
哀れなるかや女房の死がい 孤に包んで背中に負おて  
三つなる子は前にと抱え 五つなる子の手を引きまして  
檀那寺へと葬りまして 是非もなくわが家に帰る  
女房お安の書き置き見れば あまり勤めのほうらつ故に  
扶持もなんにも取り上げられて または門前払いと読んで  
さては主水も仰天なざる 子ども泣くのをそのままおいて  
出でて行くのは白糸方よ 行けば白糸主水に向かい  
したが今夜はお帰りなされ 言えば主水はその物語り  
衿にかけたる戒名出して 見せりや白糸手に取り上げて  
わたしの心が悪いが故よ お安さんへは自書をさせた  
死出の山路も三途の川も お安さんこそ手を引きましよう  
言えば主水はしばしとどめ お前死ぬならわたしもとも  
言えば白糸かぶりをふりて わたしとお前と心中しては  
お安さんへの言いわけ立たぬ お前死なずに永らえしやんせ  
二人子どもを成人さして 会向頼むよ主水さまよ

言うて白糸一間に入る あまた朋輩女郎衆を招き

譲り物とて櫛笄を やれば小春が不思議に思い

これさあねさんどうした訳か 今日に限って譲りをいたす

それにお顔もすぐれもしない 言えば白糸よく聞け小春

わしは幼い七つの年に 人に売られて今この里で

辛い勤めも早や十二年 勤めましたの主水様へ

三年このかた懇志にしたが 今度わし故御扶持に離れ

お安さまは自害をなさる それにわたしが永らえおれば

お職女郎の意気地が立たぬ 死んで意気地を立てねばならぬ

早くそなたも身ままになりて わたしがために香花頼む

言うてそのまま一間に入る 口の中にてただ一言と

わたし故にこそ命を捨てて さぞやお前も無念であるが

死出の山路も三途の川も ともにわたしが手を引きましよう

南無と一声この世の別れ あまた朋輩みな打ち寄りて

人に情の白糸さんが お安様へと命を捨てて

残り惜げに朋輩どもが 別れ惜しんで嘆くも道理

今は主水も詮方なくも 忍びひそかにわが家に帰る

子ども二人に譲りを置いて 重ね重ねの身の誤りを

われとわが身一生を捨てて 子ども二人は取り残される

涙こぼしてただ泣くばかり あまと心中もあるとは言えど

義理を立てたり意気地を立てて 命捨てました三ともに

聞くも哀れな話でござる

大田 20

名 称 草履隠し歌

伝 承 地 大田市大田町大正東

伝 承 者 岩谷 定子 T5年生

調査員氏名 勝部 義夫

へ草履隠しもの隠し 池のはたの茶碗は 危ないものじゃ

へ一ぼちとんとん 二ばいでしょぼくる

商売ならずの おめかけさんは なんじく山やの 川とんぼ

へ一ぼち二ぼち三ぼち桜 桜の枝にからすがとまる

からすの首を にちやげてにちやげて

とうろに見せて あしたかい

酒の肴になん肴 蛙のすいもん いーぼーし

大田 21

名 称 鬼ごっこ歌

伝 承 地 大田市大田町大正東

伝 承 者 岩谷 定子 T5年生

調査員氏名 勝部 義夫

へ中の中の小坊さん なしてこーしてかごんだ

親の日にべべ食って それでこうしてかごんだ

一さら二さら三さら四さら 五さら六さら七さら八さら

九さら十さら十さらの上に やいとすえて

あーつや悲しや金仏かなぼん

大田 22

名 称 鬼ごっこ歌  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

〽座頭さん 座頭さん あま酒一杯買わしゃんせ  
 鬼「まだまだ」

まだと言うなら あなたの後にだれがいる

鬼「〇〇さん」

それが大きな大間違い センギリギツチヨ センギリギツチヨ  
 あなたの後にだれがいる

大田 23

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

〽十おせ二十せ三十せ四十せ 五十せや六十せや七十せや  
 八十せや九十せや百おせや 十おせ  
 〽二十せ三十せ四十せ 五十せや六十せや七十せや  
 八十せや九十せや二百おせや 十おせ (と続けていく)

大田 24

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

〽おさら おひとおいておいておさら

おふたおいておいておさら おおみおいておいておさら

おみんなおさら おいてしゃみ おいてしゃみ おさら

おはさみおはさみ おさら

おいちりんこ おいちりんこ おさら

おひだーりおひだーり だーりだり

なかよせなかよせ おさら

やいぢよない やいぢよない おさら

おてっぶしおてっぶし おさら

すがすがすがが たたいて おさら

おくさのおさがり おさがり おさら

おおひざおおひざ ひかけてもどして おさら

ちいさい橋くぐれ ちいさい橋くぐれ おさら

大きな橋くぐれ 大きな橋くぐれ おさら

おひとやにぶつけ おふたやにぶつけ

キットコシヨ キットコシヨ

大田 25

名 称 手遊び歌  
伝 承 地 大田市大田町大正東  
伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
調査員氏名 勝部 義夫

(セッセセ)

一にや たちばな 二にや かきつばた  
三にや 下り藤 四にや ししぼたん  
五つ 井山の千本桜 六つ 紫ききょうの花や  
七つ 南天 八つ 山吹 九つ 紅梅  
十で とうとう終わった

大田 26

名 称 手遊び歌  
伝 承 地 大田市大田町大正東  
伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
調査員氏名 勝部 義夫

(セッセセ)

一かけ二かけ三かけて  
四かけて五かけて橋かけて 橋のらんかん腰かけて  
はるか向こうを眺むれば 十七、八の姉さんが  
片手に花持ち線香持ち 姉さん姉さんどこ行くの

わたしは九州鹿児島 西郷隆盛娘です 明治十年戦役に

切腹なされた父上の お墓参りにまいります

お墓の前で手を合わせ 南無阿弥陀仏と拝みます

大田 27

名 称 手遊び歌  
伝 承 地 大田市大田町大正東  
伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
調査員氏名 勝部 義夫

一 一番はじめに一の宮 二 また日光東照宮

三 また佐倉の宗五郎 四 また信濃の善光寺 五 つ出雲の大社おおよしろ

六 つ村々鎮守さま 七 つ成田の不動さん

八 つ大和の八幡さん 九 つ高野の弘法さん 十 で東京浅草寺

これほど心願こめたのに 浪ちゃんの病気は治らない

ゴオゴオゴオとなる汽車は 武夫と浪子の別れ汽車

二度と会われぬ汽車の窓 鳴いて血をはくほととぎす

大田 28

名 称 唱え歌  
伝 承 地 大田市大田町大正東  
伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
調査員氏名 勝部 義夫

駄賃馬が屁こいた なんぼこいた十こいた

向の山へ響いて 松が三本こけた

大田 29

名 称 唱え歌  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

へみかんきんかん酒のかん 親がせつかん子が聞かん  
 主さんの言うこた わしや聞かん

田舎の姉さん 気が利かん

大田 30

名 称 オイチニの薬屋さん  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

へ赤いまんじゅうに白まんじゅう ひとつたべたらうまかった  
 馬にけられて痛かった 痛けりやお医者に見てもらえ  
 お医者薬は利かないよ オイチニの薬はよく利くよ  
 オイチニ オイチニ

大田 31

名 称 さよなら三角  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

へさよなら三角また来て四角 四角は豆腐豆腐は白い  
 白いはうさぎうさぎははねる はねるは蛙 蛙は青い  
 青いはバナナ バナナは高い 高いは二階 二階はおぞい  
 おぞいは幽霊 幽霊は青い 青いは小僧坊主小僧坊主は滑る  
 滑るは氷 氷は光る 光るは日輪 日輪は赤い  
 赤いはとうがらし とうがらしは辛い 辛いはかささん  
 (注) おぞい||恐ろしい

大田 32

名 称 日本の乃木さん  
 伝 承 地 大田市大田町大正東  
 伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
 調査員氏名 勝部 義夫

へ日本の乃木さんが凱旋す すずめ めじろ ロシヤ  
 野蛮国 クロバタキン 金のため  
 負けて逃げたはチャンチャン坊 棒でなぐるは犬殺し  
 しわんぼうの柿の種 猫は寝てグウグウグウ  
 軍人さんは鉄砲だよ 夜目遠目傘の内  
 ちりも積もれば山となる 類をもって集まれ

れんげの花が開いた たぬきの金玉八畳敷  
きつねの尻尾だんごにしょ 松竹梅がへこたれて  
照れ屋のてっちゃんてれがらす  
スウスウガアガアとおばかり  
りっぱななんぼでも もうやめた

大田 33

名 称 車屋さん  
伝 承 地 大田市大田町大正東  
伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
調査員氏名 勝部 義夫

へ車屋さん 車屋さん ここから駅まで いくらです  
五十銭 五十銭 一銭五厘負けて 赤ちよこべえー

大田 34

名 称 三瓶の子守り歌  
伝 承 地 大田市三瓶町池田  
伝 承 者 岩谷 定子 T5年生  
調査員氏名 勝部 義夫

へねんねこごとほこ 与市が子  
○○ちゃんが 寝たあなかいに あんもついでさあまいて  
べべの子におおわせて 三瓶のつうじい 登ろや (くりかえす)

大田 35

名 称 酩酊り歌 もんどり  
伝 承 地 大田市大代町大家  
伝 承 者 尾崎 寿行 T11年生  
調査員氏名 勝部 義夫

へ宵に酩酊る 夜中にこしき (ヨイヨイヨヨ)  
朝洗場の水つらさ

(ほんにそうだそうだ その理でござる 朝の洗場の水つらさ)  
酒屋百日すんだら帰れ (ヨイヨイヨヨ)  
冬のつらさを寝て忘れ  
(ほんにそうだそうだ その理でござる 冬のつらさを寝て忘れ)

大田 36

名 称 荒擢い歌  
伝 承 地 大田市大代町大家  
伝 承 者 尾崎 寿行 T11年生  
調査員氏名 勝部 義夫

へヤーアレ 繁盛しましよ の家 やかた 家方よ  
鶴がご紋の巢をかけたよ  
(ヤーアレ 先生ごじょうずその歌返す  
鶴がご紋の巢をかけた)  
へヤーアレ 鶴がご紋の巢をかけたならよ

亀はお庭で舞を舞う

(先生ごじょうずその歌返す 亀はお庭で舞を舞う)

アードッコイドッコイ

大田 39

名称 バッササ節

伝承地 大田市大田町

伝承者 宮脇 サト M30年生

調査員氏名 勝部 義夫

大田 37

名称 さいさい節

伝承地 大田市大田町

伝承者 宮脇 サト M30年生

調査員氏名 勝部 義夫

三瓶白雪朝日で溶ける 嫁島田は アリヤサイサイ 寝て解ける

娘島田に蝶々がとまる

とまるよはずだよ アリヤサイサイ 花だもの

歌え歌えとせきたてられて

歌や出ませで アリヤサイサイ 汗が出る

あなたの見たようなぼたんの花が

咲いてよおります アリヤサイサイ 来る道に

大田 40

名称 チョコホイ節

伝承地 大田市大田町

伝承者 宮脇 サト M30年生

調査員氏名 勝部 義夫

明日はお発ちか お名残おしや

雨を降らせて もう一夜 チョコホイ

明日はお発ちか お名残おしや

延里・福田を 後にして チョコホイ

大田 38

名称 白ひき歌

伝承地 大田市大田町

伝承者 宮脇 サト M30年生

調査員氏名 勝部 義夫

三刀屋 1

名称 盆踊り歌

伝承地 三刀屋町中野

伝承者 永井 良輝 S13年生

調査員氏名 片寄 勇

白をひきゃらば 歌出せ女子 歌で器量が 下がりやせん

(ばんば)

ハ―どれもどなたも踊ろじやないか ハ―コーラサーイ

ハ― 中野踊りをコーラーにぎやかに

サノヨ―イヨ―イ ヨイヤ―ナーイ

ハ― 遠い祖先がヨ―残した踊り ハ―コーラサーイ

ハ― 老いも若きもコーラーほがらかに

サノヨ―イヨ―イ ヨイヤ―ナーイ

ハ― 大山おやまおろしにヨ―歌声乗せて ハ―コーラサーイ

ハ― 踊りつづけよコーラー末長く

サノヨ―イヨ―イ ヨイヤ―ナーイ

ハ― どれもどなたもヨ―立て替えましょや ハ―コーラサーイ

ハ― 立ての替えては コ―ラ山くずし―

サノヨ―イヨ―イ ヨイヤ―ナーイ

(山崩し)

ハ―ヤレコラヤー ヤレコでチョイト山崩し

ハ―コラコラサーイ

山をナー崩して寺建てる

サノヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハ―おまえナーエ― 百まで―わしゃ九十九まで―

ハ―コラコラサーイ

ともにナー白髪を生ゆるまで―

サノヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハ―音頭ナーエ― 取る女こが橋から落ちて―

ハ―コラコラサーイ

橋のナー下から音頭取る

サノヤンハートナーイ ヤンハートナイ

ハ―どれもナーエ― どなたも立て替えましょや―

ハ―コラコラサーイ

立てのナー替えてはコダイジに―

サノヤンハートナーイ ヤンハートナイ

(コダイジ)

ハ―コラナアイヨ―オイヨ―オイ―

いとしコダイジが腰にかごさげて―

ア―コーラサーイ

前の小川でエナー どじょうを―取るナーイヨ―

コラナーイヨ― オイヨ―オイ―

ハ―どれもどなたもヨナー 踊ろじやないか―

ハ―コーラサーイ

中野踊りをヨナ にぎやかにナーイヨ―

コラナーイヨ― オイヨ―オイ―

お山おろしに歌声乗せて―

ハ―コーラサーイ

踊り―つづけ―エヨ末長く

ナイヨ― コラナーイヨ― オイヨ―オイ―

ハ―どれもどなたもヨ―立て替えましょや―

ハ―コーラサーイ

立ての替えてエは伊勢オ―オオ



音頭にヨー

(伊勢音頭)

へお伊勢ヤー 七度<sup>ななたび</sup>ヨー熊野へーヨー三度

トーコセー ヨイヤナー

愛宕さまへーはーヨーホー ヤーレー月参りー

ハーコーラコーラーヨイヤセー ヨイヤナー

アレハサツサーコレワレサツサー

ササーなんでもエー

へわしがナー国サーはヨー お伊勢ーエがーヨー遠いー

トーコセー ヨイヤナー

伊勢へ行ったやヨー ヤーレー参りたや

ハーコーラコーラーヨイヤセー

ヨイヤナー

アレハサツサーコレワレサツサー ササーなんでもエー

へどれもなどなたもヨー 立替えエヨましょヤー

トーコセー ヨイヤナー

立ての替えてはヨー ヤーレー安来踊り

ハーコーラコーラーヨイヤセー

ヨイヤナー

アレハサツサーコレワレサツサー ササーなんでもエー

(安来節)

へ出雲出るときヤー 涙で出たがー

今じゃ安来の噂もないー

三刀屋<sup>2</sup>

名 称 手まり歌

伝 承 地 三刀屋町給下

伝 承 者 藤原 繁充 M40年生

調査員氏名 片寄 勇

へうしろの後ろのほうの木に 雀が三羽 鳩三羽

一羽の雀が言うことにゃ 夕べ呼んだる花嫁ご

畳座敷に座らせて 六枚屏風を立てつめて

中でしっぽりかっぼり 泣かしやんす

何が不足で泣かしやんす 何にも不足はござらんが

わしが弟の千松が 西の方来金<sup>かね</sup>掘りに

金ども掘るやら掘らぬやら 一年待てども戻らんが

二年待てども戻らんが 三年ぶりの一日<sup>ついたら</sup>に

人をよこせと状が来た 人はやらぬがわしが行く

後の田地はどうさーらー 後の田地は金にして

親に三貫子に四貫<sup>し</sup> 四十四貫の銭金<sup>ぜにかね</sup>は

おじやおばこに四十四貫 四十四貫の銭金は

高い米買うて舟に積み 安い麦買うて舟に積み

舟はさつさと都まで 都帰りに何買うてもろた

一に笄<sup>とがひ</sup> 二に鏡 三にさらさの帯買うてもろた

帯に短したすきに長し 一畑薬師の金の吊りでに

ちようどよござんした よござんした

ちよと千つきました

三刀屋3

名 称 田植え歌  
伝 承 地 三刀屋町乙加宮  
伝 承 者 渡部 善市 M39年生 他  
調査員氏名 永塚 久守

へ調子をろえてデンデとやれば いかな大名も立ち止まる

アアヤレ立ち止まる いかな大名も立ち止まる

へいかな大名も立ち止めりや止まる 止めて止まらぬ色の道

アアヤレ色の道 止めて止まらぬ色の道

へ色に迷うなナンバは辛い 人は見かけによらぬもの

アアヤレよらぬもの 人は見かけによらぬもの

へ四角四面の郵便箱が 恋のとりもちするわいな

アアヤレするわいな 恋のとりもちするわいな

へ好いた殿御にあげたいものは 金の成る木とたまご酒

アアヤレたまご酒 金の成る木とたまご酒

へ抱いて寝もせずいとまもくれぬ つなぎ舟とはわしのこと

アアヤレわしのこと つなぎ舟とはわしのこと

へ来いと言われりや川でも渡る 川が深けりや舟で行く

アアヤレ舟で行く 川が深けりや舟で行く

へ娘十七浅川渡る わしが妻なら負い渡す

アアヤレ負い渡す わしが妻なら負い渡す

へ妻でないとして渡しておくれ ここは山かげ人知らぬ

アアヤレ人知らぬ ここは山かげ人知らぬ

へ一夜来てまた寝肌がよけりや 妻と定めて来ておくれ

アアヤレ来ておくれ 妻と定めて来ておくれ

三刀屋4

名 称 田植え歌  
伝 承 地 三刀屋町乙加宮  
伝 承 者 渡部 善市 M39年生  
調査員氏名 永塚 久守

へ恋しくばヤレ訪ねてござれ 米子までヤレ米子までは

サラ米子までヤレヤ逃げて 米子で住まいする

へ日暮れにヤレかもめが三羽 西へ立つノサ西へ立つノ

サラ西へ立つヤレヤ 西にも池があるやら

三刀屋5

名 称 苗取り歌  
伝 承 地 三刀屋町乙加宮  
伝 承 者 渡部 善市 M39年生  
調査員氏名 永塚 久守

へサマリヤー これのなあ嫁ごさんは どこそたち

三刀屋6

名 称 木挽き歌  
伝 承 地 三刀屋町乙加宮  
伝 承 者 渡部 善市 M39年生  
調査員氏名 永塚 久守

「ヤール木挽き女房にや なるなよ娘 花の盛りは山小屋で

「ヤール大和もどりの なぐれた木挽き

しんぼなされやこの小屋で

「ヤール木挽き大工は 深山の蜘蛛で

あの木この木に糸を張る

「ヤール木挽き外道めが 三升飯食るうて

鍋の柄のよな糞たれた

### 三刀屋7

名	称	手まり歌
伝承地	三刀屋町乙加宮	
伝承者	石原アキノ	M42年生
	渡部ミサヲ	T2年生
調査員氏名	永塚 久守	

「うちのうしろの椎の木に すぐめが三羽鳩三羽

一羽のすぐめがいうことにかや ゆんべ迎えた花嫁ご

今朝の座敷に座らせて 畳三畳ござ三畳

六枚屏風を立てつめて すっぽりかっぽり泣かしやんす

なんだり不足はないけれど わしが弟の千松が

西の紺屋へ金掘りに 金を掘るやら掘らぬやら

一年たっても戻りやせぬ 二年たっても戻らぬが

三年三月のついたちに 人をごせとの状がきた

人はやらぬがわしが行く あとの田地はどうなさる

あとの田地は金にして 親に三貫子に四貫

いとしおぼこに四十四貫 あとのお金はどうなさる

高い米買うて舟に積み 安い米買うて舟に積む

舟はどこまで都まで 都もどりに何もろた

一にこうがい二に鏡 三に更紗の帯もろた

帯に短かしたすきにや長し 一畑薬師の鐘のつり緒に

なおよかるなおよかろう

### 三刀屋8

名	称	手まり歌
伝承地	三刀屋町乙加宮	
伝承者	矢原ウメノ	M37年生
調査員氏名	永塚 久守	

「ここからお江戸へなんぼある 三百三十四里八丁

はだかではだして 道中がなるものか

やるかやらぬかやってみしよ 小さい子どもが手まりつく

あれもようつく これもようつく

お花畑でやっとなせやっとなせ

チョト二百(以下判然とせず) ツイタ十オトエヤ二十ヤ

三十ヤ四十ヤ……………

三刀屋9

名称 手まり歌  
 伝承地 三刀屋町乙加宮  
 伝承者 矢原ウメノ M37年生  
 調査員氏名 永塚 久守

〱一に一畑お薬師さん 二は日本の高神さん

三は讃岐の金比羅さん 四は信濃の善光寺 五つ出雲の大社

六つ六角六地藏さん 七つ七浦七恵比須

八つ八幡の八幡さん 九つ高野の弘法さん

十はところの氏神さん ヤーレーヤーレありがたや

チヨト三百 ツイタ十オトエヤ二十ヤ

三十ヤ四十ヤ五十ヤ……………

三刀屋10

名称 手まり歌  
 伝承地 三刀屋町乙加宮  
 伝承者 矢原ウメノ M37年生  
 調査員氏名 永塚 久守

〱一二が三四 五六が七八で 十が十日市

花の松笠 おたしやおとらや ちよびやくちよんびやく

ツイタ十オトエヤ二十ヤ 三十ヤ……………

三刀屋11

名称 手まり歌  
 伝承地 三刀屋町乙加宮  
 伝承者 矢原ウメノ M37年生  
 調査員氏名 永塚 久守

〱一つとせ人も通らぬ山奥で

おせんと伝兵衛の色ばなし いや色ばなし

〱二つとせ二股大根離れても

おせんと伝兵衛は離りやせぬ いや離りやせぬ

〱三つとせ見れば見るほど良い男

おせんが惚れたに無理はない いや無理はない

〱四つとせ用のないお門を二度三度

おせんに会うとて二度三度 いや二度三度

〱五つとせいつも流行らぬかんざしを

おせんに挿させてきげんとる いやきげんとる

〱六つとせむろで締めたる腹帯を

弛めてやらされ伝兵衛さん いや伝兵衛さん

〱七つとせ何を言うにも語るにも

おせんが腹にと子が出来て

生まにや生まれず 墮ろさにや墮りず

〱八つとせやれやれうれしや男の子が

祝ってやらされ伝兵衛さん いや伝兵衛さん

〱九つとせここで会わねばどこで会う

大阪高松まんなかで いやまんなかで

〱十とせ徳利提げ出して何にする  
おせんに飲ませる甘酒さ いや甘酒さ

### 三刀屋12

名 称 粉ひき歌  
伝 承 地 三刀屋町乙加宮  
伝 承 者 矢原ウメノ M37年生  
調査員氏名 永塚 久守

〱(石目)イシンン挽け挽け 団子して食わせる

イシンン挽かねば またおかゆ

〱臼も車も挽ぎゃこそ回る 挽かずに回るは風車

〱臼を挽くなら 順度じゅんどに挽ぎゃれ

臼がまくれちや 米採れぬ

〱十九立ち待ち二十日の寝待ち 二十三夜はとりさかえ

ペッコペッコ

### 三刀屋13

名 称 紙漉き歌  
伝 承 地 三刀屋町上熊谷  
伝 承 者 井谷 岩夫 S7年生  
調査員氏名 永塚 久守

〱楮むしは時間をかけて はいだ皮にも血が通う

〱白皮づくりで良し悪しきまる にぎる包丁に良い紙を

〱楮洗いは寒さがしみる しまる繊維に身は燃える  
〱紙を漉くには練りよく混ぜて 厚い薄いが無いように  
〱真心こめてよ仕上げた紙は かわいい娘を出す想い

### 吉田1

名 称 山伏踊りの歌  
伝 承 地 吉田村大字吉田村  
伝 承 者 岡田 禱隆 S13年生  
調査員氏名 黒角 高義

(庭入りの歌)

今年の稲の葉色の美しさや 黄色の玉が露に浮く 露に浮く

(走りの歌)

ホーサー (長い間奏)

ホーサー (短い間奏)

〱ミオ忍びサーコーノ ミオ小部屋のサーコーノ ミオ窓の月

ミオ油火なればサーコーノ ミオ消そナーぞもの

(以下二番三番録音がないため、歌詞のみを記す)

〱深山熊笹茂れば細る 私は殿御を待ちや細る

〱深山山雀くるめん回る 私は殿御の妻回る

(引き歌)

〱今年の年はめでたい年で

日に千石の米が増す 日に千石の米が増す

(伊勢論議)

ホーサー (長い間奏)

ホーサー (短い間奏)

へミオ伊勢サーコーノ ミオ参りてサーコーノ

ミオ内宮や外宮や フィヨール (一小節の間奏) エーエエン

天のーフィヨールー 岩戸ーフィヨ

アッフィヨール (一小節の間奏) フィヨール

浅間がナ滝をー フィヨール (一小節の間奏) それを見てー

フィヨール (一小節の間奏)

※かーんた アーろうのーオーオ フィヨール (間奏)

フィヨールおもしろさ ※#語りの#の意

(以下二番三番録音がないため、歌詞のみ)

へ熊野へ参りて佐田野のお宮 住吉高砂 尾上の松

それを見て語りのおもしろさ

へ高野へ参りて巻野のお寺 奈良の都の長谷野のお寺

それを見て語るのおもしろさ

(引き歌)

へ今年の年はめでたい年で

日に千石の米が増す 日に千石の米が増す

(娘論議)

ホーサー (長い間奏)

ホーサーフィヨール フィヨールオーおれエは フィヨール娘を

アッフィヨール (間奏) フィヨール三人 フィヨール持ちて

フィヨール (間奏) フィヨール一ばんじー娘には

アッフィヨール (間奏) フィヨール京一番のフィヨ

フィヨール (間奏) フィヨール白金 アッフィヨール (間奏)

フィヨール手箱 フィヨール (間奏) フィヨール

フィヨールオーおれエは フィヨール娘を アッフィヨール (間奏)

フィヨール三人 フィヨール持ちて フィヨール (間奏)

フィヨール一ばんじー娘には アッフィヨール (間奏)

フィヨール京一番のフィヨ フィヨール (間奏)

フィヨール白金 アッフィヨール (間奏) フィヨール手箱

フィヨール (間奏) それを買い フィヨール (間奏)

土産にしよう (以下二、三番歌詞のみ)

へ二番娘には京一番の尺長帯を

それを買い土産にしよう (二度返す)

へ三番娘には京一番の白見の鏡

それを買い土産にしよう (二度返す)

(引き歌)

ホーサー アッフィヨール 今年のナー 年はフィヨール

アッフィヨール めでたいナー年で フィヨール (間奏)

アッフィヨール 日にナー千ナー石の フィヨール (間奏)

米が増す (間奏) フィヨール (間奏) フィヨール 米が増す

(伊勢寄り歌)

ホーサー (長い間奏) ホーサー

へ伊勢エーナーのーオー フィヨール (間奏)

エー夕田ノアーエーのーオー フィヨール (間奏)

フィヨールカ石 フィーヨー (間奏) しーめーたーのー

フィヨール (間奏) エーばかり イーのーオー

フィーヨー (間奏) フィーヨー 夜を明かし

(以下、二・三番歌詞のみ)

伊勢の夕田で吹く笛は 聞こえ知るもの加古川へ

伊勢の雀が奈良へ出て ここは奈良かや伊勢恋し

(庭入り引き歌)

杵築の沖の尾京島 もとは白金 うら黄金 うら黄金

(竜宮走り歌)

ホーサ (長い間奏) ホーサ

ミオ竜宮サーコーノ ミオ浄土オーのーサーコーノ

ミオ乙の姫 フィヨー (間奏) ミオおい出サーコーノ

アッフィヨー ミオなさーれ エーてーサーコーノ

フィヨー (間奏) ミオお笑顔で フィヨー (間奏)

ミオお笑顔で (以下、二・三番歌詞のみ)

踊り踊りて参らせる 踊り見物なさりける なさりける

踊り見物なさりては 元の屋方へお帰り

元の屋方へお帰りては 牛馬繁盛やらめでた

(踊り歌)

山伏の腰に下げたる法螺の貝は

一吹き吹いては連れを待つヨナ

二吹き吹いては宿をとるヨナ

チーインチン チーインチン オッカケン オッケタモ

山伏踊りがおもしろやーな チーインチン チーインチン  
山伏の腰に挿したる錫杖をば

一振り振りては悪魔を払う 二振り振りては災難払う

チーインチン チーインチン オッカケン オッケタモ

山伏踊りがおもしろやーな チーインチン チーインチン

日の本の耕作も親にヤ子がつき 子に子がついて

枝もさすなり葉も茂るなり

チーインチンチーインチン オッカケン オッケタモ

山伏踊りがおもしろやーな チーインチン チーインチン

吉田2

名 称 餅つき歌

伝 承 地 吉田村大字吉田町

伝 承 者 江角 清市 T12年生

調査員氏名 黒角 高義

松を植えます吉田の里へ うれしやーれめでたの若苗を

うれしめでたの若松様よ 枝も栄える葉も茂る

(※「松露亭」ともいう)

山晴れ 山晴れ苗木を植える うれしやーれめでたの若苗を

苗は若苗杉の木檜の木 やがて黄金の花が咲く

田部名物餅搗き音頭 調子そろえて杵の音

庭じゃ餅搗く表じゃちぎる 奥の広間で金はかる

安来港の千石船は 出雲綿屋の鉄鋼

へ上方通いの千石船に 鉄の鋼を千駄積む

へ今朝のこもりのまかせの良さよ 鉄千駄に炭千駄

吉田 3

名 称 盆踊り歌

伝 承 地 吉田村大字吉田村

伝 承 者 岡田 禧隆 S13年生

調査員氏名 黒角 高義

(清三くどき)

へこんど京都の 三条が町の 糸屋与衛門 よどめの盛り

店はにぎやか 暮らしは繁盛 (以下略)

吉田 4

名 称 鍛冶屋歌

伝 承 地 吉田村大字吉田村

伝 承 者 杉原周太郎

調査員氏名 黒角 高義

へうれしめでたの若松様よ 枝が栄えて葉が茂る

へ鉄の値が出て米の値が下りゃ 田部様には蔵が建つ

へ大工様よて左下様よけりゃ 七分五厘の歩が留まる

吉田 5

名 称 安座踊りの歌

伝 承 地 吉田村梅木地内

伝 承 者 谷口 真市

調査員氏名 黒角 高義

(第一番頭の歌)

へーヨウー

今年のサ稲の葉色の良さやへーヨウー

黄金の玉が露に置くへーヨウー露に置く

へーヨウー

千早振るへーヨウー神の御利生が 強ければへーヨウー

村も繁盛で穏やかでへーヨウー穏やかで

へーヨウー

千早振るへーヨウー神の御利生が 強ければへーヨウー

牛馬息災やれめでたへーヨウーやれめでた

へーヨウー

千早振るへーヨウー神の御利生が 強ければへーヨウー

五穀稔々ありがたやへーヨウーありがたや

へーヨウー

千早振るへーヨウー龍宮浄土へ 立願たてへーヨウー

願のほどきに踊りますへーヨウー踊ります

(引き歌)

へーヨウー

今年や世が良てへーヨウー 穂に穂が下がるへーヨウー



小櫛 取り桶 斗で計れへーヨー斗で計れ

(第二番頭の歌)

へーヨウー

一の門開き二の門開き

黄金の門を押し開きへーヨー押し開き

へーヨウー

東の妻戸へ出て見ればへーヨウー

春の景色とうち見えるへーヨウー 梅の花 梅の花

へーヨウー

南の妻戸に出て見ればへーヨウー

夏の景色とうち見えるへーヨウー 百合の花 百合の花

へーヨウー

西の妻戸に出て見ればへーヨウー

秋の景色とうち見えるへーヨウー 菊の花 菊の花

へーヨウー

北の妻戸へ出て見ればへーヨウー

冬の景色とうち見えるへーヨウー 雪つ花 雪つ花

(引き歌)

へーヨウー

あなたのお庭東向きへーヨウー

朝日を受けて福参りへーヨウー福参り

(第三番頭の歌)

へーヨウー

お家がかりを眺むれば 銀延べて 柱に立てて  
葺いたる屋根は板金でへーヨウー板金で

へーヨウー

もとの都の兵衛が娘 見る目も良いが形も良いが

あまり心が高うしてへーヨウー高うして

へーヨウー

月日が池の大蛇となりて 思いよらずの池に住む

池に住むとて苦しはないか苦しはないか

池に住めとの生まれ合いへーヨウー生まれ合い

へーヨウー

それを兩人の親が聞く 熊野へ招いて

文覚上人呼び出し呼び出し

法華経手に持ち読まれ候へーヨウー読まれ候

へーヨウー

そのとき大蛇が舞い上がり 十六角をほろりと落とし

もとの姫御になられ候へーヨウーなられ候

(引き歌)

へお厩うまやがかりを眺むれば 七間厩しちまやに七匹の馬が

七人番衆をつけたまへ へーヨウーつけたまへ

(第四番頭の歌)

へーヨウー

十九の殿の長浜通い 十九もいとし二十五もいとし

年が若けりやまたなおいとしへーヨウーなおいとし

へーヨー参りてノーホホ 御心がとまり御心がとまり  
出雲じゃノーホホ大社 へーヨー大社

へーヨー参りてノーホホ 御心がとまり御心がとまり  
京ではノーホホ清水 へーヨー清水

へーヨー参りてノーホホ 御心がとまり御心がとまり  
奈良ではノーホホなられ<sup>ぶ</sup>へーヨーなられ<sup>ぶ</sup>仏

へーヨー参りてノーホホ 御心がとまり御心がとまり  
安芸ではノーホホ宮島へーヨー宮島

(引き歌)

へ十七、八がおりやこそ来たに

主ないうちに来たならばへーヨー来たならば

(第五番頭の歌)

へーヨー 細谷川の椿をごろうじ

丈がちそても花が咲くへーヨー花が咲く

へーヨー

奈良の春日のみすの前見れば

桐の戸帳でそよそよとへーヨーそよそよと

へーヨー

奈良の春日の御山では 鹿と女鹿<sup>め</sup>が連れ合うて

遊ぶ心のおもしろやへーヨーおもしろや

へーヨー

奈良の春日の池見れば 鯉と鮒とが連れ合うて

遊ぶ心のおもしろやへーヨーおもしろや

へーヨー 奈良の春日の習いかや

響を取らずに孫を抱くへーヨー孫を抱く

(引き歌)

へ梅に鶯 稲穂に雀 十七、八がおりやこそ来たに

へーヨー おりやこそ来たに

吉田 6

名	称	たたら歌	
伝	承	地	吉田村高殿
伝	承	者	堀江要四郎
調査員氏名	黒角	高義	M 19年生

へヤー朝の仕掛けのナーハー用意を見れば

小鉄千駄にナーハー炭万駄ヨ

ヤー朝の仕掛けのナーハー湯釜のナー内を

塩と御幣でハー清めますヨ

ヤー塩と御幣でナーハー清めたならば

汚れ不浄は皆晴れます

ヤー塩と御幣でナーハー清めておいて

種をつけますナーハー御火種をヨ

ヤー朝の仕掛けのナーハー朝四つねせて

湯花そろえてナーハーとろとろとヨ

ヤー朝の仕掛けのナーハーほどき見れば

ほどがちらちらナーハー花が立つヨ

ヤー朝の仕掛けのナーハーしきまい見れば

黄金ちらちらナーハー花が立つヨ

ヤー昨日子守でナーハー今朝四つ明けて

湯花そろえてナーハーとろとろとヨ

ヤー昨日子守でナーハー今日二日目

明日は下りでナーハー薄暗いヨ

ヤー金を植えたるナーハー両職人が

すきをおさめるナーハー元山に

ヤーすきをおさめてナー お手を合わせてナーハー拝みます

ヤー今朝の出勤にナーハー若釜すえて

樽を懸げますナーハー懸樽を

吉田7

名 称 田植え歌

伝 承 地 吉田村大字吉田村

伝 承 者 田村建次郎 T11年生

調査員氏名 黒角 高義

(かつま歌)

調子そろえてでんでとやれば いかな大名も立ち止まる

ヤレ立ち止まる いかな大名も立ち止まる

いかな大名も立ち止めや止まる 止めて止まらぬ色の道

ヤレ色の道 止めて止まらぬ色の道

話しゃ話いたと目で見りや見たと とかく世間はままならぬ

ヤレままならぬ とかく世間はままならぬ

(苗取り歌)

サァーマリー杵築の太夫さんは(二度返し)

コリヤ 器量な人

サァーマリー足じゃーな足調子(二度返し)

コリヤ 手じゃ 太鼓

サァーマリー杵築の千家さんの(二度返し)

コリヤ五葉の松どこに

サァーマリーこれのな 嫁御さんは

コリヤどこ育ち

(さげ歌)

今年初めての若さげ様で 思案ばかりで歌が出ぬ

朝声はナーハレヤならせやならせ

声ならせナーハレヤ声ならせナー

ハレヤ 声ならせナー ハレヤ ならさぬ声は寝声

朝起きてヤ細戸明けてヤ 見渡せばヤー

ハレヤ見渡せばヤー ハレヤ見渡せばヤー

掛合1

名 称 盆踊り歌

伝 承 地 掛合町掛合

伝 承 者 長見 静雄 T15年生 他

調査員氏名 松村 千弘

(石童丸)

ハサノ ヤンハートナー ヤンハートナー (以下囃子略)

さあさこれからちよいとやりましょか

アー コリヤセ (以下囃子略)

歌に無調法はどなたも御免 わしの声とて良いのじゃないが  
少し間の声継ぎします わしが音頭をとるのじゃないが

声の悪いはもと生まれつき 節の悪いは師匠とらず

悪いところはたもとで隠し だれもどなたも囃子を頼む

囃子なければ音頭はとれぬ さあさこれから文句にかかる

何が良かろうか何やりましょか 昔語りを聞くより今は

哀れなるかや石童丸は 小さいうちから神妙なもので

父を尋ねる思いとなりぬ 母を連れ出し高野に登り

聞けば高野は女は御無用 母は麓の玉屋が茶屋に

あずけおくのは哀れなけれど すぐにその身は高野に登る

九万九千のお寺をさがし 尋ねまわれど行方が知れぬ

(中略)

わしはやめますこの声限り だれかどなたか後継ぎ頼む

頓原1

名称 お手玉の歌

伝承地 頓原町八神

伝承者 升本アサ子 M37年生

調査員氏名 春日 智明

ハお一つ下して おさら お二つ下して おさら

おみー下して おさら おみんな おさら

手々しゃみ 手々しゃみ 下して おさら

おはさみ おはさみ 下して おさら

おちりんこ おちりんこ おさら

お左 お左 中りき 中きて つまよせ さらつき

たたいて おさら

やちゃない やちゃない 下して おさら

竹の節 竹の節 下して おさら

おーんば おーんば とんきり おさら

しいろーとんきり おさあら

膝 膝 下して おさら 袖 袖 下して おさら

手ばたき 手ばたき えかけて 下して 手ばたき おさら

小さい橋 こぐれ小さい橋 こぐれ おさら

大きい橋 こぐれ 大きい橋 こぐれ おさら

皿とて こらせ お一つ屋の文助 お二つ屋の文助

お三屋の文助 おさら

十でかけの木 十でかけの木 おまけに一升

やっちか どっこい 合戦

頓原2

名称 田植え歌

伝承地 頓原町八神

伝 承 者 那須 政年 M 25年生  
調査員氏名 春日 智明

(かつま)

〽歌は良いものわが気も勇む 人の気もまたなお勇む

〽歌う場に出て歌わぬ者は 歌をそしるかまんじるか

〽歌いなされやお歌いなされ 歌でこの身が果てるとも

〽常の歌声忘れはせぬが 内が激しゅうて出がづらい

〽思いましたよあなたのことを 朝日さすから入日まで

〽思うて来たのにこの戸が開かぬ 憎やこの戸の上おとし

〽入れてくだされかゆくてならぬ わたし一人は蚊帳せうかの外

(苗取り歌)

〽苗代のみすまに立つ木は 何の木かよ

さあ何の木かよ 杉の木かよ 松よ

〽朝声をなれ ならせ ならせ

声ならせ ならさぬ声は 寝声

(おなりさん)

〽おなりさんヤーハーリヤ

生まれははずこと尋ねればノーホーサ 尋ねればノー

ハーリヤ 尋ねればヤーハーレヤ 峠の先の米子

〽おなりさんヤーハーリヤ

迎えの馬は 何馬かノーホーサ 何馬かノー

ハーリヤ 何馬かヤーハーレヤ 青成駒で 迎える

赤来 1

名 称 唐とう白びやくひき歌  
伝 承 地 赤来町赤来  
伝 承 者 横見 亀 M 39年生  
調査員氏名 倉橋 清延

〽白や車はコリヤ 引きやこそ回る 引かで回るがコラ風車

引きやこそ回る 引かで回るがコラ風車

〽白を引く夜にヤコリヤ 必ずござれ

白の手伝てでしよとコラ 言うてござれ

必ずござれ 白の手伝てでしよとコラ 言うてござれ

〽白びやくにさばらばコリヤ 歌出せおなご

仕事しごと楽らくげでコラみたがよい

歌出せおなご 仕事しごと楽らくげでコラみたがよい

〽歌は良いものコリヤ わが気の勇む 人の心はコラなお勇む

わが気の勇む 人の心はコラなお勇む

〽来るか来るかとコリヤ 川下見れば

川原よもぎのコラ蔭かげばかり

川下見れば 川原よもぎのコラ影かげばかり

(注) さばらばは触ふれれば。

赤来 2

名 称 地つき歌  
伝 承 地 赤来町赤来  
伝 承 者 横見 亀 M 39年生  
調査員氏名 倉橋 清延

＼伊勢を参りてナー ヨイヨイ お蔽い受けて

アラヨイセー トーコセー

帰るー道中の アナソーレサー うれしさーよー

イヤソリヤヨーイヤナー アラヨーイヤセー

アリワイサー コレワイセー ソリヤ ナンデモエー

＼伊勢はヨー 津で持つナー ヨイヨイ 津は伊勢で持つ

アラヨイセー トーコセー

尾張ー名古屋はーナー ソーレサー 城で持つ

ソリヤ ヨーイヤナー ヨーイヤセー

アリワイサー コレワイサー

ソリヤ ナンデモエー ヨイサ ホイサ

赤来3

名 称 木挽き歌

伝 承 地 赤来町下赤名

伝 承 者 門所 米蔵 M21年生

調査員氏名 倉橋 清延

＼イヤール 木挽きさまなら お泊まりなされ

愛し殿御さんと 同じ職

＼イヤール 木挽き女房にや なるなや妹

想う仲でも 引き分ける

＼イヤール 木挽きさはのー 一升飯食うて

鋸の柄のよな 糞たれた

赤来4

名 称 草刈り歌

伝 承 地 赤来町下赤名

伝 承 者 門所 米蔵 M21年生

調査員氏名 倉橋 清延

＼ハー 今朝の朝草にヤヨー 鎌の刃がヤレ折れてー

三把遅れたヨー 友だちに

＼ハー 来るか来るかとヨー 川下ハー見ればー

川原よもぎのヨー 蔭ばかり

＼ハー 話しゆしまししょうヨー 小松のアレ下で

松の葉のようにヨー こまごまと

赤来5

名 称 手まり歌

伝 承 地 赤来町赤名

伝 承 者 高橋 コハル M23年生

調査員氏名 倉橋 清延

＼わしが十五になる年に 屋敷を広めて 蔵建てて

蔵の回りに鈴下げて 鈴がじゃらじゃら鳴るときにや

父つあもかかさもうれしかろ うれしかろ

赤来6

名 称 手まり歌

伝 承 地 赤来町赤名

伝 承 者 高橋コハル M23年生  
調査員氏名 倉橋 清延

〱一二三四 美代の姉さん 殿がないとて お悔みなさる

殿は丹波の助十郎様よ 助が土産に何々もろた  
一に筈 二におしろい箱 三にさらさの帯もろた 帯もろた

赤来7

名 称 手まり歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

〱うちの隣の守やんが 山から転げて今日七日

七日と思えば四十九日 四十九日がすんだなら

お客そろえて参りましょう でん木で味噌すりや

お豆でござる 人が見ぬまに ちよいと隠せ

(注) 守やん〱子守り でん木〱れん木・すりこ木「ちよいと隠せ」で手まりを前掛の下へ隠す。

赤来8

名 称 手まり歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

〱これのお背戸のちやちやの木に 小鳥が三羽巢をかけて

一羽の小鳥が申すには これの座敷は狭座敷

となりの座敷は広座敷 畳三枚 ござ三枚

合わせて六枚敷きつめて 金らんびょうぶで立て回し

中でしっぷりかっぶり泣かしやんす

何が不足で泣かしやんす 何にも不足じゃありません

わしの弟の千松が 七つ八つから金堀り

金を掘るやら掘らのやら 一年たってもまだ戻らん

二年たってもまだ戻らん 三年ぶりの一日に

おかねに來いとこの状が來た おかねはやらないわしが行く

わしが行くには金がある 田地田畑売り払い

親に百貫 子に五貫 せめておばばに四十五貫

あとはわたしが持っていく 持っていく

ちよっと一がつかました (注) 掘らの〱掘らぬ

赤来9

名 称 手まり歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

〱一に橘 二にかきつばたネ 三にさがり藤

四に獅子ぼたんネ 五つお山のつつじにさつきかネ

六つ紫ききょうに染めたかネ 七つなる天

八つ山桜かネ 九つ米の木  
とおとおいつ  
十一貫つきました つきました

赤来 10

名 称 手まり歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

一はとかいせん ものの初めは何でも一だ  
二はとかいせん 商人あきんどの担ぐはみな荷という  
三はとかいせん 女の大役みな産という  
四はとかいせん 子供の小便しよんべんみなシという  
五はとかいせん 親方遊びをみな碁という  
六はとかいせん 飲んで死んだらみな無という  
七はとかいせん 貧乏人のやりくりみな質という  
八はとかいせん プンと来てブンと刺しやみな蜂という  
九はとかいせん ものを案じりやみな苦という  
とおとお  
十 一貫つきました つきました

赤来 11

名 称 お手玉歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

へおじやみ おじやみ おふた おふた おみい おみい  
およお およお おいつ おいつ  
おいつざくらが りんとんき おもうざくらが りんとんき  
さらりととっては なんじやいな  
ちいさい はしゅう くぐれ おおはしゅう くぐれ

赤来 12

名 称 羽根つき歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

へ一重に二重 みよとしゃ よねご 三にや 杓子  
杓子で羽根つきや ひや二、三や四  
いっつちや、七八ななや この十  
(注)羽根が落ちるまで歌を繰返す。

赤来 13

名 称 わらべ歌  
伝 承 地 赤来町上赤名  
伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
調査員氏名 倉橋 清延

へあの向こうを猿が三匹通りよおる  
前のお猿も もの知らず 後のお猿も もの知らず



いっち中の この猿が ものをよう知つて  
 山々歩いて 銭を一文拾て 鱒を一こん買うてきて  
 焼いて食べても塩辛し 煮て食べても塩辛し  
 あんまり塩が辛いで 前の溝へ飛び込んで  
 水をがぶがぶ飲んだらば あんまり腹が太うて  
 鐘つき堂へ上つて 屁をブンブンこいたらば  
 鐘つき堂が割れて 豆腐屋へ響いて  
 豆腐カ三丁めげた

赤来 14

名 称 七草歌  
 伝 承 地 赤来町上赤名  
 伝 承 者 倉橋ノブエ T3年生  
 調査員氏名 倉橋 清延

へ七草なずな 唐土とうどの鳥が 日本の土地へ  
 渡らぬ先に 七草そろえて ヤーホッホ

赤来 15

名 称 大黒歌  
 伝 承 地 赤来町井戸谷  
 伝 承 者 難波 暎吉 M30年生  
 調査員氏名 倉橋 清延

(序の歌)

へあーらめでたや まずはしばらくぐめんなされ  
 これほだめでたいお家では なんの次第を申しましょ  
 なにとて細かに知らねども 石童丸と申しましょ  
 (以上メロディなしの口上)

(本歌)

へアラサーエー アー月にナーむら雲花に風  
 イヤ散りてナー はかないものはない  
 へアラサーエー アーここにヨー筑前・肥前・肥後  
 イヤ大隅 薩摩の六ヶ国  
 へアラサーエー アー加藤ヨー重氏あの言う人は  
 無情を感じ 世を捨てて  
 へアラサーエー アー諸国ヨー修業にいでたまう  
 後に残りし 妻や子は  
 へアラサーエー アー思いナー待つこと十余年  
 イヤ父上高野に ありと聞き  
 へアラサーエー アー石童丸はヨー母上と  
 イヤ菅のヨー 小笠を傾けて  
 へアラサーエー アー旅のヨー疲れもいといたなく  
 イヤようやく高野の かむろやに  
 へアラサーエー アー宿りたまいて二人とも  
 イヤ明日はナー 会わんと喜ぶも  
 へアラサーエー アー女人ヨー禁制の山なれば  
 せんかたなくもヨー 母上を

へアラサーエー アーふもとの茶屋にと残しおき

イヤ石童丸はナー ただ一人

へアラサーエー アー父をヨー尋ねて高野山

イヤ先をヨー申せば ほど長い

へアラサーエー アーわしがやるのはこの声限り

だれかどなたか 声援頼む

(納めの歌)

へアラサーエー アーこころヨーあたりで納めおき

末はヨー鶴亀 五葉の松

へアラサーエー アーお家の繁盛と祝いましょう

赤来16

名 称 大黒歌

伝 承 地 赤来町野萱

伝 承 者 高橋 泰一 M33年生

調査員氏名 倉橋 清延

(序の段)

へまずしはばらくごめんなされ これほどもめでたいおん家さま

なんの次第を申しましょ なにとてこまやかに知らねども

小栗様とて申します 小栗様では 文の段を申します

(本歌の段へ小栗さんへ)

(1)ふみの初段

へ都もろ町せんだんや ごとうさえもんあき人が

せんだんこびつを背に負い 大編笠を手に持って

都五条の橋の上 これからどちらへ参ろうか

相模の国へと参ろうやら 美濃や相模はさておいて

まずは常陸の国へ参りましょう 常陸の国へとはよなれば

黒木のご殿が見えまする 一のご門に立ち寄りて

いかにそれなる門番よ あけて通せよあき人を

一のご門は通り抜け 二のご門はまた通りのけ

……中略……

さらばさらばのいとまごい 黒木のご殿を後に見て

相模の国へと急がれる ふみの初段はこれまでよ

(2)ふみの二段

へふみの二段と申するは 常陸の国から相模まで

なにかじとはゆうたれど もとが天狗のことなれば

天をこぐりし地を走り 三日三夜に走りつける

相模の国へとはよなれば えのえのご殿が見えまする

一のご門に立ち寄りて 開けて通せよ門番よ

そこで門番言われよに ここはどこかと思ひしが

知らずば教えて聞かせよか 父よこやまと申するに

男の子ばかり四人持ち 姫が一人も無き故に

こんにちさまにと願をかけ こんにちさまのさずけごで

……以下省略……

(おさめの段)

へまずしはめでたのお大黒 末は鶴亀ごよの松

お家繁盛と納めます

(以上録音なし、原文のまま)

赤来17

名称	盆踊り歌
伝承地	赤来町下赤名
伝承者	横貝 亀 M39年生
調査員氏名	倉橋 清延

(山づくし)

(前ことば)

へそろたそろたよナー 踊り子がそろた アードッコイシヨ

夏も静かな○○の門へ

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエ アードッコイシヨ

わしがやるのはナー あぶないことで アードッコイシヨ

竹の丸橋や丸歯の下駄で

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエー

渡りかけてもナー 落ちるかも知れぬ アードッコイシヨ

もしも落ちたらあらさで頼む

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエー

またも落ちたらナー こらさで頼む アードッコイシヨ

三度落ちたらナー わしがやめます

ソーラヤンハトナー ヤンハトナーエー

下手な長口上 捨ておきまして ハードッコイシヨ

さあさこれから 本字にやかかる

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエー

本字にやかかれども 細かにや知らぬ アードッコイシヨ

鹿の横跳び あすこやこや

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエー

声が悪いのは わしや生まれつき アードッコイシヨ

節がゆかぬはナー 師匠ないからよ

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエー

語る外題は 何よと問えば アードッコイシヨ

いとも哀れな 因縁話

サーノヤンハトナー ヤンハトナーエー

鈴木主水を読み上げます アードッコイシヨ

(鈴木主水) へばんばV

へ鈴木主水という侍は ヨイヤナーコラセー

女房持ちにて子供が二人

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

子供二人あるその中で ヨイヤナーコラセー

今日も明日もと女郎買いなさる

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

見るに見かねて女房のお安 ヨイヤナーコラセー

わしがりん気で言うのじやないが

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

金の成る木は持ちやなされまい ヨイヤナーコラセー

止めておくれよ女郎買いばかり

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

言えば主水は目に角立てて ヨイヤナーコラセー

……調査ここまで……中略

申しととさまお帰りました ドッコイシヨ

なぜにかかさま今日にて早く

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

ものも言わずにおいでるほどに ドッコイシヨ

聞いて主水は仰天いたし

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

あいの唐紙さらりと開けて ドッコイシヨ

見ればお安は血しように浮かび

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

それとあるより主水の心 ドッコイシヨ

やあれ悲しややれ残念や

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

意見するうち止めたら良いが ドッコイシヨ

あんなことにはなるまいものと

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

男ながらに涙にくれる ドッコイシヨ

サアサこれにて文句がみてる

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

だれかどなたか声継ぎ頼む ドッコイシヨ

早く出て来にや踊りが冷める

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

わたしや止めますこの声限り ドッコイシヨ

……次の人が歌う前言葉……

へちよいさコリヤコリヤ 受け取りました

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

今の音頭はいずくのどなた ドッコイシヨ

声は良い声節やよも出来る

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

ものに例えて申するならば ドッコイシヨ

春は日南山 ひなやま 細谷奥の ほそたにおく

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

うぐいすの声にさもよく似たり ドッコイシヨ

わしがやるのはそれとは違い

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

声は悪声 節はゆきませぬ ドッコイシヨ

声の悪いのはもと生まれつき

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

節のゆかぬは師匠ないからよ ドッコイシヨ

口上申せばまだ長いけど

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

サアサこれから本字にかかる ドッコイシヨ

(石童丸) へばんばV

へ哀れなるかや石童丸は ヨイヤナーコラセー

父を尋ねて母連れ出して

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

おうにお山は女人を嫌う ヨイヤナーコラセー

母はふもとの玉屋が茶屋に

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

(調査表、ここで「中略」)

親と子の縁切れんが不思議

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

空で煙がサアよれ合うて ヨイヤナーコラセー

石童丸はまずこれまでよ

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

(八百屋おひち) へ山づくし

へ聞くも哀れな話をござる ドッコイシヨ

花のお江戸に八百屋というて

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

よろず青もの商いなざる ドッコイシヨ

店もにぎやか商売繁盛

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

一人娘のおひちと言うは ドッコイシヨ

(調査書「略」)

(やしお おりの心中)

へ国を申せば出雲の国の ヨイヤナー コラセー

こおり  
郡申せば神門の郡

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

ぢぢらな  
村名申せば杵築の町で ヨイヤナー コラセー

こおりだい  
郡代ほのおん総領で

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

(調査書「中略」)

長い刀をすらりと抜いて ドッコイシヨ

流れる清水で刀を冷やし

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

おりの脇腹三刀通し ドッコイシヨ

返す刀でわが成仏よ

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

やしお口説はまずこれまでよ ドッコイシヨ

わたしや止めますこの声限り

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

(兵佐とおでん)

へ今度石州津和野の城下 ヨイヤナー コラセー

佐々木様とて侍ござる

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

その若殿兵佐というて ヨイヤナー コラセー

年は十九で墨前髪よ

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー

(調査書「中略」)

わたしや津和野のおでんでござる ドッコイシヨ  
覚悟なさんせ七日の内に

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
のろい殺してへんぜるほどに ドッコイシヨ  
後で兵佐はふらふら病

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
七日振りにと兵佐は果てる ドッコイシヨ  
花を折りては南無阿弥陀仏

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
まだもこの先あるかも知れん ドッコイシヨ  
兵佐の口説はまずこれまでよ

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
(間男殺し) ^源次と富佐 お富V

天は明らか 天明五年 ヨイヤナー コラセー  
聞くも哀れな 間男殺し

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー  
村名申せば 梅原村の ヨイヤナー コラセー  
寺が三か所 庄屋が二軒

ヨーホイヨーホイ ヨーイヤナーエー  
(調査書「中略」)

白木三方に生首乗せて ドッコイシヨ  
これはお前のこの子でござる

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

お梅 わたしの女房でござる ドッコイシヨ  
敵あるなら今ここで取れ

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
敵どころかおまえの手柄 ドッコイシヨ  
手柄酒ならもう一杯飲もや

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
源次口説はまずこれまでよ ドッコイシヨ  
わたしや止めますこの声限り

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
(法味口説)

わしが心を正してみれば ドッコイシヨ  
久遠劫よりただ今までも

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
生死流転と六道輪廻 ドッコイシヨ  
迷い苦しむその有様を

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
見るに見かねて大悲の親は ドッコイシヨ  
花のうてなを飛降りたまい

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
法蔵菩薩と身をへり下り ドッコイシヨ  
世自在王のみもとにいでて

ヤンハトナー ヤンハトナーエー  
五濁悪世の悪人女人 ドッコイシヨ

ただで助ける お法みほりあらば

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

授けたまえとお願ねがいあれば ドッコイシヨ

これは大した大願なるぞ

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

海の潮うしほをただ一人いちにんで ドッコイシヨ

杓ますで汲み干す例たとひがあれば

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

救う手だてがつくかも知れん ドッコイシヨ

そこで菩薩ぼさつは うち喜んで

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

五濁悪世ごじやくあくせいの悪人女人あくにんおんな ドッコイシヨ

ただで助けるこの大願を

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

成就じゆうじゆしあげるそのときまでは ドッコイシヨ

弥陀みだつの正覚しょうかく取らじと誓ちかい

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

救う大願だいがんとりかかられて ドッコイシヨ

五劫ごごつの間まご思惟しゆいこらし

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

長ながさい永劫えいごつ御修業ごしゆぎやうなされ ドッコイシヨ

衆生しゆじやうかわいのただ一念いっぺんで

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

わが身忘れて御苦勞ごくろう続け ドッコイシヨ

ついに大願だいがん整ととのえ上がり

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

正覚じやうかく成就じゆうじゆの阿弥陀あみだとなつて ドッコイシヨ

五濁悪世ごじやくあくせいの悪人女人あくにんおんな

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

罪つみはいかほど重いがとても ドッコイシヨ

障さわりゃいかほど深いがとても

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

罪つみも障さわりも見抜みぬいた上で ドッコイシヨ

成就じゆうじゆしあげた南無阿弥陀なんむあみだ仏ぶつ

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

ただでわれらに与あたえるほどに ドッコイシヨ

こうじゃそうじゃの計はかりらい止とめて

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

その身みそのままその氣きのなりで ドッコイシヨ

親おやに任まかせてそのまま来きいと

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

呼よんでくださるその呼よび声を ドッコイシヨ

はいつと聞き得える一念いっぺん帰命きめい

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

親おやの撰取せんしゆの懐住ふくぢゆうまい ドッコイシヨ

寝ねても起きても立たつてもいいても

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

親と二人で安気な暮らし ドッコイシヨ

もはや御親の弘誓の舟に

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

われと乗り込む心配いらす ドッコイシヨ

乗せて必ず渡すとあれば

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

四十八色の帆を巻き上げて ドッコイシヨ

花の浄土へ横づけなれば

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

黄金花降る蓮台上へ ドッコイシヨ

据えてくださる発念化生

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

もはやはだえは しま黄金と ドッコイシヨ

応法妙服身に着飾りて

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

見るも聞くのも楽しみづくめ ドッコイシヨ

御恩うれしやあらありがたや

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

かかる果報もやがてのうちと ドッコイシヨ

名号唱えてただ待つばかり

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 ドッコイシヨ

法味口説はまずこれまでよ

ヤンハトナー ヤンハトナーエー

赤来 18

名	田植え歌
伝承地	赤来町下赤名
伝承者	横貝 亀 M 39年生
調査員氏名	倉橋 清延

(苗取り歌)

朝声はヤーレ ならせテならせ声ならせヤヨ

朝日さすヤーレ 日向の里で野芹つむヨ

大仙のヤーレ お山へ登る門出にヨ

おなり様ヤーレ 門までかごで迎えたがヨ

イヤおなり様ヨ 来はなされたが

イヤ来はなされたがヨ 縁に腰を

(注) かつこ内は歌われていない、どの歌も完結していない点が特色である。



赤来 19

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 赤来町野萱  
 伝 承 者 高橋 泰一 M33年生  
 調査員氏名 倉橋 清延

(苗取り歌)

〱朝声はヤーレ 鳴らせテー鳴らせー声こよ鳴らせヨー  
 サー声こよ鳴らせヤーレ 鳴らせぬ声はー

(おり)

〱朝声ならいては鳥の寝屋を出でのー  
 狩に出て行こうや 鳥のねやー

〱朝起きてヨーハーレヤ 浜辺を行けば千鳥鳴くノーホサ  
 千鳥鳴くヨーソリーヤ 千鳥鳴くヨーハーレヤ

な お 鳴 け 千 鳥 声 を  
 (おり)

〱あっちも千鳥こっちも千鳥 千鳥中を通れば  
 浜辺の千鳥めが声をする

赤来 20

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 赤来町赤名  
 伝 承 者 高松 コハル M23年生  
 調査員氏名 倉橋 清延

(かつま)

〱イヤ野でも山でも子は産みなされ 千把倉より子は宝ー

イヤ子は産みなされ 千把倉よりヤ子は宝ー

〱桜三月あやめは五月 咲いて年とる梅の花

イヤあやめは五月 咲いて年とる梅の花

〱三瓶お山の雨雲晴れて 今日 田植えの花の里

イヤ雨雲晴れて 今日 田植えの花の里

〱植えた植えたよ植え手が上手 ちょうど碁盤の目のように

イヤ植え手が上手 ちょうど碁盤の目のように

〱歌の節とところで変わる 変わすまいぞやわが心

イヤとこで変わる 変わすまいぞやわが心

〱いつも五月の節ぎぎなら良かる いとし殿御と肩並べ

イヤ節なら良かる いとし殿御と肩並べ

赤来 21

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 赤来町野萱  
 伝 承 者 高橋 泰一 M33年生  
 調査員氏名 倉橋 清延

(さげうた)

〱オイ鶏はヨーハーレヤ

夜の何時にさえずるかノーホーサ さえずるかヨー

ソリヤさえずるかヨーハーレヤ 夜の九つに さえずる

〱オイ今朝起きてヤーハーレヤ

化粧の池で影見ればノーホーサ 影見ればヨ

ソリヤ影見ればヨーハーレヤ さもすごごと影が

〱オイ今朝の戸をーハーレヤ

細戸にあけて見渡せばノーホーサ 見渡せばヨ

ソリヤ見渡せばヨーハーレヤ 黄金に勝る朝日

(おり)

〱唐紙小障子を細戸に開けて 君様招くや 細戸に

赤来22

名 称 田植え歌

伝 承 地 赤来町下赤名

伝 承 者 横貝 亀 M39年生

調査員氏名 倉橋 清延

(役目歌)

〱八雲立つーウリヤ 出雲の国で打ちはじめノーホーサ

打ちはじめヨーハーレヤ 打ちはじめヨーハーレヤ

このよしわらを田とな

〱イヤ田の初めヤーハーレヤ 日向の里の三くぼ田にノーホーサ

三くぼ田にヨーハーレヤ 三くぼ田にヤーハーレヤ

まかずの種子が生えた

赤来23

名 称 田植え歌

伝 承 地 赤来町野萱

伝 承 者 高橋 泰一 M33年生

調査員氏名 倉橋 清延

(おなりうた)

〱オイ今日こんにちのーハーレヤ おなりさんは

どちらからかノーホーサ どちらからかヨ

ソリヤどちらからかヨー ハーレヤ峠の先の米子

(くどき)

〱さて今日こんにちの おんなりさまは どちらからござる 峠の先の

米子の町の 町まん中の 中屋というの 織姫さまを

さて今日の おんなりさまと 頼まれければ 織姫さまは

十二の小袖 御身に飾り 菅なる笠を 御手に持ちて

芦毛の馬に おん乗りたまい しんとろとろと 迎えて来たが

〱オイおなりさんヨーハーレヤ 迎えの馬は

何馬かノーホーサ何馬かヨ

ソリヤ何馬かヤー ハーレヤ芦毛の馬でみごと

〱オイおなりさんヨーハーレヤ 迎えの馬の

足音はノーホーサ足音はヨ

ソリヤ足音はヨー ハーレヤしんとろとろと勇む

〱オィおなりさんヨーハーレヤ 門まじヤ

馬で迎えたがノーホーサ 迎えたがヨ

ソリヤ迎えたがヤー ハーレヤ門から内はかちで

(おり)

へイヤ門まじや馬で 門からかちで

おんなりさまはヤレ 来はなされたが

来はなされたがヤ 縁えんに腰

へオイおなりさんヨーハーレヤ 綾あやなるたすき

投げかけてノーホサ投げかけてヨー

ソリヤ投げかけてヨー ハーレヤ昼間の支度をなさる

へオイおなりさんヨーハーレヤ 昼間の支度

なしつらばノーホサなしつらばノー

ソリヤなしつらばノー ハーレヤ御器ごきとり上げて飯めしを

へオイ飯盛らばヨーハーレヤ 御膳に据えて

だれ参るノーホサだれ参るヨー

ソリヤだれ参るヤー ハーレヤまず三神さんばいに参ら(す)

(おり)

へ酒は出たがー 肴さかなは何をや チヤの葉を

チヤの葉を酢おんさいあえに あえては御肴

以下、三回以上繰り返す

へはいなんもう ひいえーでーえー

以下、三回以上繰り返す

へなまみどー(音頭取りが唱える) (笛の間奏)

へなあまあみどうやーなあまみどうやー

なあまあみどうやーなあまみどうやー

とんでーからか とんでーからか とんでーからか

とんでん でごでんどー でごでん どうでん でごでん

とんでーからか とんでーからか とんでーからか

とんでん でごでんどう でごでん どうでん でごでん

とんでーからか とんでーからか とんでーからか

とんでん でごでんどー

なまみどー(音頭取りが唱える) (笛の間奏)

へでんでごでんから(笛の間奏)

へでんでごでんから(笛の間奏)

へでんでごでん でんでごでん でんでごでん とんでん

でごでん とんでん でんどうでん

でごでん とんでん えーやーしっから

からから とんでん えーやーしっから

からから とんでん えーやーしっから

からから とんでーやしっとんでん

でんどうでん でごでん とんでん

でんどうでん でごでんとんでー えーやーしっから

佐田1

名称 須佐念仏踊り

伝承地 佐田町宮内

伝承者 畑中 時夫 S6年生

調査員氏名 田中 迪亮

へねーんのー ねーんのー ねーえん

からから とうでん えーやーしっから  
からから とうでん えーやーしっから  
からから とんでーやーしっとうでん  
でんとうでん でごでん とんでー

なまみどー(音頭取りが唱える) (笛の間奏)

へでんでごでんから(笛の間奏)

へでんでごでん でんでごでん とんでん  
でんとうでん でごでんとん

なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーみんどうーなーまーしっ  
なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーしっ なーまーしっ なーまーしっから  
からからから からから とうでん でごでん  
とんでーやーしっ とんでん

でんとうでん でごでん とんでん  
でんとうでん でごでん とん

なーまーみんどうーなーまーしっ  
なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーみんどうーなーまーしっ  
なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーしっ なーまーしっ なーまーしっから  
から から から

からからとうでん でごでん とんでーやーしっ

とんでん でんとうでん でごでん とん

なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーみんどうーなーまーしっ

なーまーしっ なーまーしっ なーまーしっから

から から から

とうでん でごでん とんでーんやーしっ とんでーん

なまみどー(音頭取りが唱える) (笛の間奏)

はらみどーはらみどー はーらーみどー

(この部分はメロディなく、唱えのみ)

へでんとうでん でごでん とうでん でごでん とんでー

ねーんのーうー ねーえーんのうー ねーえん

## 佐田 2

名 称 田植え歌

伝 承 地 佐田町大呂東山中

伝 承 者 和田 初則 M39年生

調査員氏名 田中 迪亮

## (さげ歌)

(サゲ) へ朝声をヤーレヤならさげならせ

声ならせナーリヤー声ならせのー

(早乙女) へナーリヤー声ならせやー ハーエヤ ならさぬ声は ね声

(サ) へおなり様ヤーレヤ迎えの馬は

何馬かナーリヤー何馬かのー

(早) へナーリヤ何馬かやー ハーエヤ 明け三歳の子馬

(サ) へおなり様ヤーレヤ迎えの馬の

足どりはナーリヤー足どりはのー

(早) へナーリヤ足どりはやー ハーエヤ しんとろとろとにぎや

(サ) へおなり様ヤーレヤ門まで馬で

迎えたがナーリヤー迎えたがのー

(早) へナーリヤ迎えたがやー ハーエヤ 門から内は ちちで

(サ) へさんばいはヤーレヤこの田にござる

正月にナーリヤー正月にのー

(早) へナーリヤ正月にやー ハーエヤ 春三月は 田の神

(サ) へさんばいはヤーレヤ正月までは

年とこでナーリヤー年とこでのー

(早) へナーリヤ年とこでやー ハーエヤ しめ縄張り替え田の神

(サ) へさんばいのヤーレヤ昼間の米は

どこ米かナーリヤーどこ米かのー

(早) へナーリヤどこ米かやー ハーエヤ 加賀越前のお米

(サ) へおなり様ヤーレヤどこまで送る

峠山へナーリヤー峠山へのー

(早) へナーリヤ峠山へやー ハーエヤ 情けのために送る

(サ) へおなり様ヤーレヤ峠のたわを

越すときはナーリヤー越すときはのー

吸いかけ煙草で急ぐ

(サ) へおなり様ヤーレヤ泊まりの町は

どの宿かナーリヤーどの宿かのー

(早) へナーリヤどの宿かやー ハーエヤ いつ来て見ても 花の

(さげ歌) II

(サ) へ十七がヤーレヤ初めて嫁入り

するときはナーリヤーするときはのー

(早) へナーリヤするときはやー ハーエヤ わが添う殿の契り

(サ) へ十七がヤーレヤ七重の小袖

八ツ重ねナーリヤー八ツ重ねのー

(早) へナーリヤ八ツ重ねやー ハーエヤ だいのりの姫が美し

(かちま歌)

男(音頭取り) へおいでなされや出雲の須佐へ

伸びる明るい よい村よ

男(全員) ヤーレよい村よ 伸びる明るい よい村よ

折目 折目を 文と読む

男(音頭) へ文をもろうたが一字も読めぬ

折目 折目を 文と読む

女(音頭) へ親は子というて尋ねもするが

親を尋ねる 子は生まれな

女(全員) ヤーレ子は生まれな 親を尋ねる 子は生まれな

歌をうたえば楽だとおっしゃる

歌は難儀の 身のあまり

(全員)

ヤーレ身のあまり 歌は難儀の 身のあまり

女(音頭)

へ歌はうたいたいし歌の字は知らず

アラサ コラサのしなでやる

(全員)

ヤーレしなでやる アラサ コラサのしなでやる

女(音頭)

へ今日は日がようて朝日がようて

思う殿御サに 二度出会うた

(全員)

ヤーレ二度出会うた 思う殿御に 二度出会うた

佐田 3

名 田植え歌

伝 承 地 佐田町八幡原

伝 承 者 岩崎 喜六 M44年生

調査員氏名 田中 迪亮

(音頭取り) へ花は二度咲く若さは一度

若さ恋しや二度咲かぬ

(全員)

ハアーヤレ二度咲かぬ 若さ恋しや二度咲かぬ

(音頭取り) へ塩治通れば神戸路川じ

松にテイカの花が咲く

(全員)

ハアーヤレ花が咲く 松にテイカの花が咲く

(音頭取り) へ松にテイカの花ではないが

テイカかづらに花が咲く

(全員)

ハアーヤレ花が咲く テイカかづらに花が咲く

(音頭取り) へ関であね買アてうちのかか見れば

三里奥山古狸

(全員)

ハアーヤレ古狸 三里奥山古狸

(音頭取り) へ今年や豊年穂に穂が咲いて

道の小草も米がなる

(全員)

ハアーヤレ米がなる 道の小草も米がなる

(音頭取り) へ咲いた盃中見てあがれ

中は鶴亀五葉の松

(全員)

ハアーヤレ五葉の松 中は鶴亀五葉の松

佐田 4

名 田植え歌

伝 承 地 佐田町原田

伝 承 者 岩島 惣一 M34年生

調査員氏名 田中 迪亮

(さげ歌)

へさいぎょう西行さまヤレヤ文字に書いては

西と書くの サー西と書くの

アリヤ西と書くヤー アーレヤ東に行くとはだれ

以下、同じ歌詞を繰り返す

(かちま歌)

へわたしや出雲の八重垣さまに 縁の結びが願いとや

へかど門に立ちまい 立ち聞きしまい 五尺その虫やみな死ぬる

へ五尺その虫や死んでも良いが 五尺上の虫や死なぬよに

佐田 5

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 佐田町大字宮内  
 伝 承 者 森山 新市 M27年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

ハアアー 木挽き女房にや なーるーなヤア妹いもうと！

花の盛りは 板小屋だアー

佐田 6

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 佐田町大字大呂字吉野  
 伝 承 者 森山 熊雄 M39年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

ハ木挽き女房になるなよ妹 花の盛りは板小屋でー

ハ大和戻りの名残の木挽き 辛抱なされやこの小屋で

ハめおとがらすの小仲のよさや だれもかか持ちゃあのごとし

佐田 7

名 称 工夫(こうふ)歌  
 伝 承 地 佐田町宮内  
 伝 承 者 和田 利市 T3年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

ハアアー

工夫こうふさんならお泊まりなさい コラサ ヨイトコラサ

うちのおやじの相の職 アコラサ ヨイトコラサ

ハ咲いた桜になぜ駒つなぐ コラサ ヨイトコラサ

駒が勇めば花が散る アコリヤコリヤサーソリヤホンダー

ハ淀の川瀬みづぐるまのあの水車 アコラサ ヨイトコラサー

何を待つやらくるくと アコラサ ヨイトコラサ

以下七五調の歌詞なら何でも取り入れて歌う

佐田 8

名 称 盆踊り歌  
 伝 承 地 佐田町大呂  
 伝 承 者 和田 初則 M39年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

ハアー踊り踊るなら盆の十五夜に コラコラセー

アー踊るお方はコラ早よ出て頼む

サーノヤンハートナイヤンハートナイ

ハアーそろたそろたヨーまだそろたーヨ コラコラセー

アー稲の出穂よりコラまだそろたーヨ

サーノヤンハートナイヤンハートナイ

佐田 9

名 称 博多節  
 伝 承 地 佐田町宮内  
 伝 承 者 和田 利市 T3年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

〱百万石の知行取るより あなたのそばでコリヤ

竹の柱に茅の屋根

手鍋つるともいとやアリヤドッコイショ セーぬ

オヤ世の中陽気に暮らしましょう

〱百万石の知行取るより あなたのそばでコリヤ

竹の柱に茅の屋根

手鍋つるともいとやコリヤドッコイショ セーぬ

オヤお月さんがチヨイと出て松の蔭

### 佐田10

名 称 長持ち歌  
伝 承 地 佐田町宮内  
伝 承 者 板垣 新一  
調査員氏名 田中 迪亮  
T9年生

〱今日はナアー日もよし 縁起もよいし

蝶よ花よと 育てた娘ヨむすめ

神のおつげの ハアーめでたい涙ヨ

私しゃ嫁いきます ハアー皆さんさらばヨ

父さん母さん ハアー元気を祈るヨ

ながのナアーお世話にー ハアになりましたがヨ

今度ナアー来るときヤー ハアー客で来るわヨ

### 佐田11

名 称 お手玉歌  
伝 承 地 佐田町八幡原  
伝 承 者 岩崎アヤ子  
調査員氏名 田中 迪亮  
T8年生

〱おひとつ落として落として落として落としてオサアラ

おふたつ落として落としてオサアラ

おみつつ落として落としてオサアラ おみんなオサアラ

おてしやんおてしやんおてしやんおてしやんオサアラ

おはさみおはさみおはさみおはさみオサアラ

おちりんこおちりんこおちりんこおちりんこオサアラ

お左お左お左お左 なあかのきさりとオサアラ

おてっぼしおてっぼしおてっぼしおてっぼしオサアラ

小さな橋くうぐれ小さな橋くうぐれ

小さな橋くうぐれ小さな橋くうぐれオサアラ

さらいち取ってもなんにもない

おひとつやのむつつのき おふたつやのむつつのき

おみつつやのむつつのき およつつやのむつつのき

おいつつやのむつつのき おもやのむつつのき

おななやのむつつのき おややのむつつのき

おおこやのむつつのき おとやのむつつのき

ごっかんじよ (以上、はじめから繰り返す)



佐田 12

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 佐田町八幡原  
 伝 承 者 岩崎 喜六 M44年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

へうちのうしろの梅の木に 雀が三羽鳩三羽

中の雀が言うことには や ゆうべ迎えた花嫁ご  
 金らんどんすのうちかけで すっぽりかつぽり泣かしやんす  
 何が不足で泣かしやんす 何も不足はないけれど  
 わしの弟の千松が 西のほうらい金掘り行って  
 金を掘るやら掘らぬやら 一年たっても戻らぬが  
 二年たっても戻りやせぬ 三年ぶりのついでに  
 おそめに来いとの状態がきた おそめにや行かせぬわしが行く  
 行くにつけては金がある 後の田地はどうなさる  
 売ってこないで金にして 親に千貫子に四貫  
 思う母御に四十五貫 まずまず一貫貸しました

佐田 13

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 佐田町八幡原  
 伝 承 者 岩崎 喜六 M44年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

へすいせんや すいなめしよ すいをなめたらかねつけしよ  
 かねをつけたら鏡を見よ 鏡見たなら化粧をしよ

化粧したなら髪なでしよ 髪をなでたら帯をしよ  
 帯をしたなら前だれしよ 前だれしたなら負い子をしよ  
 負い子したならけんおとや けんおとや

佐田 14

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 佐田町八幡原  
 伝 承 者 岩崎 喜六 M44年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

へひいふがみよりいつもがななより ちよっとお返し  
 花の街からおとしやおとらや とびやくちよんびやく  
 ちよとひやくをついた ひいふがみより いつもがななより  
 ちよっとお返し 花の街からおとしやおとらや  
 とびやくちよんびやく ちよとうたひやくをついた  
 (続いて三百二百と繰り返し長く続けることを競い合う)

佐田 15

名 称 数え歌  
 伝 承 地 佐田町八幡原  
 伝 承 者 岩崎 喜六 M44年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

へいちにや一畑お薬師さん 二にや日本の高神さん  
 三にや讃岐の金比羅さん 四つにや信濃の善光寺

五つ出雲のおおやしる 六つむらむら天神さん  
 七つ成田の不動さん 八つ八幡の八幡さん  
 九つ高野の弘法さん 十でところの氏神さん

佐田 16

名 称 数え歌  
 伝 承 地 佐田町八幡原  
 伝 承 者 岩崎 喜六 M44年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

八しやんしやんしやん 一にや橘 二にや杜若かね  
 三にや下がり藤 四にや獅子牡丹ね  
 五つ井山の千本桜かね 六つ紫色よく染めたかね  
 七つなんでも 八つやまぶし 九つこそめ  
 十で殿御さんのおかごで乗らりよかね  
 ぜんぜがのうて乗られません

佐田 17

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 佐田町大呂吉野  
 伝 承 者 児玉 義雄 M40年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

八これの後ろのすいの木に 雀が三羽鳩三羽  
 一羽の雀がいうことによ よんべ迎えた花嫁ご

キラのやしきにすわらしえて すっぽりかっぽり泣かしやんす  
 何がふしぎで泣かしやんす 何だりふしぎはないけれど  
 わしが弟の千松が 七つ八つから金掘りに出て  
 一年待ってもまだ戻らん 二年待ってもまだ戻らん  
 三年ぶりのついたらに おそめに来いとどの状が来た  
 おそめはやらぬがわしが行く あとの田地はどうなさる  
 売ってこないで金にして 親に二貫 子に五貫  
 わたし殿御に四十五貫 高い米買うて舟に積む  
 安い大豆買うて舟に積む 舟はさっさで都への一ぼる  
 都戻りにや何も一ろた 一にやこうがい 二に鏡  
 三にさらさの織地も一ろた  
 帯にや短かしたすきに長し  
 笠の締め緒にやなお長し 大田薬師の鐘のひも緒に  
 よござんしょよござんしょ

佐田 18

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 佐田町宮内  
 伝 承 者 長島 英子 S7年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

八おひとつ落として落としておーさーら  
 おふたつ落として落としておーさーら

おみーつつ落として落としておーさーら

おみんな おーさーら

おー手ちゃんでおー手ちゃんて

落として おーさーら

おはさみおはさみ落としておーさーら

おちりんこおちりんこたたいておーさーら

お左お左お左 つまよせ なかじま

たたいて さらいて おーさーら

すがすが たたいて おーさーら

竹の節竹の節 落として おーさーら

おーんまさんでせーがねーせーがねー

たたいて おーさーら おじゃみー

おふたー おふたー おみえー おみえー

およおー およおー おいちー おいちー

おーもーたーいしよ たいしよ かつちく じえつとんき

おーじゃみ じえつとんき

おーふたざくらが じえつとんき

おーみえざくらが じえつとんき

おーようざくらが じえつとんき

おーいちざくらが じえつとんき

おうもう じえつとんきー おたーいしよ たいしよ

おーむし こーむし こーむし まーめよ

おーぬけ おーぬけ ぬーけた

おーふた おーぬけ ぬーけた

おーみえ おーぬけ ぬーけた

おーよう おーぬけ ぬーけた

おーいち おーぬけ ぬーけた おも ぬけたー

おたーいしよ たいしよ おもぬけた

おーつめ おーつめ つーめた

おーふた おーつめ つーめた

おーみえ おーつめ つーめた

おーよう おーつめ つーめた

おーいち おーつめ つーめた おも つーめたー

おたーいしよ たいしよ おも つーめた ガーッシヨ

佐田 19

名 称 かごめかごめ

伝 承 地 佐田町宮内

伝 承 者 長島 英子 S7年生

調査員氏名 田中 迪亮

へ坊<sup>ぼん</sup>さん坊さん どこ行くの 私は田んぼへ稲刈りに

わたしも一緒に 連れりゃんせ お前が行くときやまになる

こーんな坊さん くそ坊さん うしろの正面だーあれ

佐田 20

名 称 せっせっせ  
伝 承 地 佐田町宮内  
伝 承 者 長島 英子 S7年生  
調査員氏名 田中 迪亮

へせっせっせーの ばらりとせ うちの こんびらさん  
はげ頭 はげ頭 あんまり はげ頭で 困った 困った  
あんまり 困って 涙さんが ぼーろぼろ ぼーろぼろ  
ぼろぼろ 涙は ふきましよう ふきましよう  
ふいた 着物は 脱ぎましよう 脱ぎましよう  
脱いだ 着物は 洗いましょ 洗いましょ  
洗った 着物は 絞りましたよ 絞りましたよ  
絞った 着物は 干しましよう 干しましよう  
干した 着物は 畳みましょ 畳みましょ  
畳んだ 着物は しまいましょ しまいましょ  
しまあた 着物は ねーずみさんが  
がーりがり がーりがり  
がりがり ねずみは 困った 困った  
胸を 押さえて じゃんけんぼん

佐田 21

名 称 げた隠し  
伝 承 地 佐田町宮内  
伝 承 者 長島 英子 S7年生

調査員氏名 田中 迪亮

へげた 隠し しゅーれんぼう  
まな板の上に  
かみそり 一っちよう 乗せて  
ぎっちょんちよん まっちょんちよん

佐田 22

名 称 子守り歌  
伝 承 地 佐田町大呂  
伝 承 者 和田 由子 M44年生  
調査員氏名 田中 迪亮

へ寝ーた 寝ーた 寝ーた寝たー 良い子が寝た 間に  
アーモーついて 冷まかいて べーべの子に 負わせて  
あこの山越えて 里へ行った 里の土産に 何もろた  
でんでん太鼓に 笙の笛

佐田 23

名 称 坑夫歌  
伝 承 地 佐田町佐津日  
伝 承 者 佐々木豊之進 M38年生  
調査員氏名 佐々木 敬志・田中 迪亮

へ朝まとうからカンテラ下げて

坑内下るもヨ一 親の罰

へア一 坑夫さんなら今言うて今ヨ一

土方さんならヨ一 まづ思案

へア一 神戸行こうと わし連れ出ーしーてー

ここが神戸かヨ一 山の中

佐田 24

名 称 水引き歌

伝 承 地 佐田町佐津目

伝 承 者 佐々木 豊之進 M38年生

調査員氏名 佐々木 敬志・田中 迪亮

へア一 三十五番のサモトの水は 大岡さんでも 裁きやせぬ

へ大岡さんでも裁かぬ水を 手子<sup>てこ</sup>や坑夫が みな裁はく

佐田 25

名 称 製錬歌

伝 承 地 佐田町佐津目

伝 承 者 佐々木豊之進 M38年生

調査員氏名 佐々木敬志・田中 迪亮

へとこや大工<sup>だいく</sup>の焼面<sup>やけつら</sup>よりも 色の小白いヨ一 手子<sup>てこ</sup>がよい

佐田 26

名 称 手まり歌

伝 承 地 佐田町東林草木谷

伝 承 者 大谷キクノ M37年生

調査員氏名 田中 迪亮

へ一に一畑お薬師さん 二には日本の高神さん

三に讃岐の金比羅さん 四には信濃の善光寺さん

五つ出雲の大やしろ 六つかん六角堂のうつつみさん

七つ七浦七恵比須 八つ八幡<sup>やわた</sup>の八幡<sup>はちまん</sup>さん

九つ高野<sup>こうや</sup>のこうしめさん 十は所の氏神さん

これほど願をたてまつる それでも添わせてくれぬなら

前の小川に身を捨て投げて 三十三ひろの大蛇となりて

参る氏子を 取り絶<sup>と</sup>やす 取り絶<sup>た</sup>やす

佐田 27

名 称 手まり歌

伝 承 地 佐田町東村草木谷

伝 承 者 大谷キクノ M37年生

調査員氏名 田中 迪亮

へひいふが みいよおで いつむが ななやで とおでお返し

花の街から おとしや おとらや

ちょびやく ちょんびやく 向こう隣の 塩辛力士の

およそだれかさんに 渡いた 渡いた

へ受けました ハイマシター さんよの盃受けました

これからどちらに回しまして 向こう隣の 塩辛力士の  
ようさんかたに 渡いた 渡いた

佐田28

名 称 手まり歌  
伝 承 地 佐田町東村草木谷  
伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
調査員氏名 田中 迪亮

へ天から落ちた お手まりさんは  
寺へささげて 手習いさせて

寺の縁から つき落さーれて 月かぼたんか 手まりの花か  
手まりよう来た 上がれとおしゃる  
あがれ言葉は かたじけなーいが  
ここの和尚さんは 親切かいな

佐田29

名 称 手まり歌  
伝 承 地 佐田町東村草木谷  
伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
調査員氏名 田中 迪亮

へ向こう通るは 何者だ<sup>もん</sup> めんめも鼻も 隠いて  
寺山越えて 宮越えて 宮の回りに ごま播いて  
ごまは仏さんのあまはかり 油は仏さんの嫌いもの

奥さんお駕籠 だんさんお馬 嬢ちゃんねんね  
坊ちゃんてん車 下手さん下手さん 滑んなヨー 転ぶなヨー  
滑ったわー 転んだわー 親の言うこと 聞かぬからー  
一文膏薬 買うてきてー おさよに 貼わせて  
べったこん べったこん

佐田30

名 称 白ひき歌  
伝 承 地 佐田町東村草木谷  
伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
調査員氏名 田中 迪亮

へいしし<sup>(石田)</sup> ひけひけヨー だんごして 食<sup>か</sup>しょうぞ  
いしをひかねば またおかい  
へいしの軽さよー相手の良さよ  
相手替わすなヨー 明日の夜も

佐田31

名 称 わらたたき歌  
伝 承 地 佐田町東村草木谷  
伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
調査員氏名 田中 迪亮

へわらをたたかば 中とんとんと  
中にゃ親子が ござりやせぬ

佐田 32

名 称 尻とりことば  
 伝 承 地 佐田町東村草木谷  
 伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

へ松竹梅が へこたつて てーちなとつつかん てーがらし

しいたけがやがや とうばかり りっぱなな

なんぼでも もうやめた 狸の金玉 八畳敷き

狐の尻尾を だんごにしよ 松竹梅が へこたつた

佐田 33

名 称 花ごよみ  
 伝 承 地 佐田町東村草木谷  
 伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

(旋律なし)

年のはじめの福寿草 黄金の色も温かく

続いて香る梅が香に 桜も咲けば梨すもも

みなひととき紅白の 花の眺めのうるわしさ

野辺も山辺も新緑の 風に藤波騒ぐとき

池水匂うかきつばた 垣根にからむ朝顔の

咲き香りつつ潔く 濁りに住まぬ白蓮の

巻き葉をおるる露涼し 夕暮れに咲く月見草

月見のころも近づけば 萩のうねりに宿る玉

ききょう かるかや おみなえし 秋の花草多けれど

中には君の千代八千代 匂うや菊の花の宴

いつしか木々もうら枯れて 寂しき庭のさざんかや

秋風寒き籬蔭に びわの花咲く年の暮れ

佐田 34

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 佐田町東村草木谷  
 伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

(苗取り歌)

へ苗代のヨー 島へ行くー 水には舟をはいて

アラ舟をはいて 島へ行くー 水には舟をはいて

(あと続いて繰り返す)

(さげ歌)

へさんばいの ヤーレヤ おみきのお酒はどこ酒かの

オオサーどこ酒かの

ハーヤーレードーこ酒かのー 丹波の国の生酒

アラさげさんさげさん 晩には鯖だよ 早乙女は いりこだ

へお怒らしゃんすな 餅買うてあげる

あなたみたいな ふくれ餅

へ花といわれりゃ 咲かねばならぬ

咲けば実がなる それがいや

へ歌いなされや 御器量なお方 歌で御器量が 下がりやせぬ  
 へ人の殿でも 取らねばならぬ わがと定めた 殿はない  
 へ高い山から 谷底見れば うりやなすびの 花盛り

佐田 35

名	田植え雛子
伝承地	佐田町大呂西山中
伝承者	森山 直人 S3年生
調査員氏名	田中 迪亮

(かちま調子)

へ出雲大社の御田植えまつり 佐田の雛子でにぎやかに  
 御田植えまつり 佐田の雛子でにぎやかに  
 へ今日はよき日で御饌田の田植え 植える早苗の色のよさ  
 御饌田の田植え 植える早苗の色のよさ  
 へいつも変わらぬ真心こめて 神にささげるこの田植え  
 真心こめて 神にささげるこの田植え

へ今年豊年穂に穂が咲いて 黄金大波佐田の町  
 穂に穂が咲いて 黄金大波佐田の町  
 へ佐田はよいとこよい米どころ 田植ばやしでにぎやかに  
 よい米どころ 田植ばやしでにぎやかに  
 へつづいて

(田植え本調子)

へさんばいはヤーヤーレヤ この田にござる いつにござるヤー

コーリヤ いつにござるヤー ソーリヤいつにござるヤー  
 ハーレヤ 春三月は 田の神  
 へ豊かなるヤーヤーレヤ 秋の稔りを 頼むとてヤ  
 コーリヤ 頼むとてヤー ソーリヤ 頼むとてヤー  
 ハーレヤ ささげまつらん 御酒ぞ  
 へかしこくもヤーヤーレヤ 大國主の 大神はヤー  
 コーリヤ 大神はヤー ソーリヤ 大神はヤー  
 ハーレヤ 国土を鎮めて この里に  
 へ日暮れにはヤーヤーレヤ 西山見れば 鮮やかにナー  
 コーリヤ 鮮やかにナー ソーリヤ 鮮やかにナー  
 ハーレヤ 日輪さまの お入り  
 へ今日の田のヤーヤーレヤ 主のささらは どこに置くやー  
 コーリヤ どこに置くやー ソーリヤどこに置くやー  
 ハーレヤ ななよのあぜに 納め

(注) ※の部分は、多勢の合唱と歌頭が、重なる部分で、各々の終りと次の初めが重なっている。

佐田 36

名	尻とりことば
伝承地	佐田町東村草木谷
伝承者	大谷キクノ M37年生
調査員氏名	田中 迪亮

(旋律なし)



てるてる坊主てる坊主 坊主になるのは けしの花  
 鼻高天狗は 鞍馬山 やまがら こがら しじゅうがら  
 がらがら引き出す鳩車 車に乗る人 乗せる人  
 ひとつ目小僧の 豆腐買い 買い食いする子は 食いしん坊  
 坊やは むくむく太ってる てるてる坊主てる坊主  
 (はじめに返って繰り返す)

佐田 37

名 称 尻とりことば  
 伝 承 地 佐田町東村草木谷  
 伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

日本の 乃木さんが 凱旋す  
 すずめ めじろ ろしや 野蛮国 クロバトキン  
 きんちやがま まけろうふ 舟の底にも十文字  
 地獄の穴は 真っ逆し しわんぼうの柿の種  
 猫と寝てぐうぐうぐう 軍人さんは 鉄砲だよ  
 夜目遠目傘のうち ちりもつもれば山となる  
 類で集まる忠義の手本

佐田 38

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 佐田町東村草木谷

伝 承 者 大谷キクノ M37年生  
 調査員氏名 田中 迪亮

木挽女房にや なるなや妹  
 花の盛りは 板小屋にー ズイコ ズイコ  
 大工木挽きは 深山みやまの雲よ  
 あの木の木に 糸を張る ズイコ ズイコ  
 花の盛りは 板小屋なれど 小判並べて 女郎を買う  
 小判ならべて 女郎買うときは いかな大名も かなやせぬ  
 花は二度咲く 若さは一度 若さ恋いしや 二度とな

多伎 1

名 称 石切り歌  
 伝 承 地 多伎町小田  
 伝 承 者 安井忠次郎 M33年生  
 調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

花の盛りをー 身は病院に  
 主こそ知らねど ドシタイ 泣き暮らす  
 アウトサカ ウントサカ  
 石屋殺しにや 刃物はいらぬ  
 雨が三日降りや ドシタイ  
 みなころり アウトサカ ウントサカ  
 わしが隧道の監督なれば

二度のタバコは (休憩) ドンタイ 三度でも  
アウントサカ ウントサカ

多伎2

名 称 くい打ち歌  
伝 承 地 多伎町小田  
伝 承 者 安井忠次郎 M33年生  
調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

アアエントコ エントコナー  
アアヨイサノ コラエナ エントコナー  
アアエントコ エントコナー  
アアエントコナト ぼたもちや エントコナー  
アアエントコ エントコナー アアエンヤラヤー ハイ  
わしとあなたは エンヤラヤー ハイ  
アアエンコー エンヤラヤー ハイ  
ヤレー そこじゃそのままエンヤラヤー ハイ  
アア エンコー エンヤラヤー ハイ  
アア ヨイサノー まだまだ エンヤラヤー ハイ  
アア ヨーホイ アアどしたか どしたか  
お前百まで わしや九十九まで ともに白髪が生えるまで  
ヤー ハイ ヤレー チョーサイ エンヤラヤー ハイ

多伎3

名 称 草取り歌  
伝 承 地 多伎町小田  
伝 承 者 安井忠次郎 M33年生  
調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

アわしとあなたは とうがのそーだち  
朝まとうから (早くから) こげやこげヨイヨイ  
アわたしやあなたに しんかーら迷た  
親に内緒で 末遂げよかーヨイヨイ  
アお前百まで わしや九十九まで  
ともに白髪の 生えるまでーヨイヨイ

アお前さんとなら いかよな苦勞も  
情ないとは 思わせぬーヨイヨイ

多伎4

名 称 木挽き歌  
伝 承 地 多伎町口田儀  
伝 承 者 和田森義雄 S6年生  
調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

アハアー 大工さんより 木挽きさんが憎い  
仲の良い木をひき分ける  
アハアー 木挽き女房にや なるなよ妹  
妹だまして兄がなる  
アハアー 木挽きさんたちや いつまでここに

山が済まねば帰えりやせぬ

ハハー わしとあなたは 松葉の暮らし

枯れて落ちて二人連れ アドッコイ ドッコイ

多伎5

名 称 盆踊り新内づくし

伝 承 地 多伎町小田

伝 承 者 安井忠次郎 M33年生

調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

(歌い出し)

へさあさあ皆さんが ハイハイ

踊ろじゃないか アドッコイセー

踊り踊るならアラお寺の庭で

アーヨーホイヨーホイ ヨーイーヤナー

そろたそろいました ハイハイ

踊り子がそろた アドッコイセー

アーそろたところで ハイハイ 文句にかかる

アーヨーホイヨーホイ ヨーイーヤナー

(鈴木水口説)

へ花のお江戸の ハイハイ

アーそのまん中で アードッコイセー さても珍し心中話

アーヨーホイ ヨーホイ ヨーイーヤナー

ここは四ツ谷の ハイハイ アー新宿町の アードッコイセー

紺ののれんに ハイ 桔梗の紋は

アーヨーホイヨーホイ ヨーイーヤナー

アー音に聞こえた ハイハイ

橋本屋とて アードッコイセー

あまた女郎衆があるその中で

アーヨーホイヨーホイ ヨーイーヤナー

アーお職女郎衆のナ ハイハイ

白糸こそは アードッコイセー 年は十九でコラ盛りの花よ

アーヨーホイヨーホイ ヨーイーヤナー

アーあいきょう良ければ ハイハイ

アー皆人様が アードッコイセー

われもわれもとハイ名指しである

アーヨーホイヨーホイ ヨーイーヤナー

中でお客は ハイハイ どなたと聞けば アードッコイセー

(以下略)

多伎6

名 称 盆踊り山づくし

伝 承 地 多伎町小田

伝 承 者 安井忠次郎 M33年生

調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

(歌い出し)

音頭へハアー踊ろじゃないか 囃子 アラ ドッコイセー

音 ハアーそれもそれだが 踊り子が足らぬ

囃 アラ ヤンハトナー ヤンハトナー

音 ハアー踊り子が足らぬ 囃 アラ ドッコイセー

音 踊り見に来て踊らぬ人は

囃 アラ ヤンハトナー ヤンハトナー

音 ハアー踊らぬ人は 囃 アラ ドッコイセー

音 ハアー足なしチンバカー お手々がないか

囃 アラ ヤンハトナー ヤンハトナー

音 ハアーお手々がないか 囃 アラ ドッコイセー

音 木仏 金仏 あの石仏いしぼけ

囃 アラ ヤンハトナー ヤンハトナー

音 ハアーあの石仏 囃 アラ ドッコイセー

音 それもそれが文句にかかる

(声継ぎを頼む文句)

へなんと皆さん頼みがござる 音頭続いてやりたいけれど

声がかすれて口説かれませぬ だれかどなたか声継ぎ頼む

覚えある人 はや出ておくれ

(声継ぎする文句)

へわしが音頭の声継ぎいたす 今の先生はどこのだなた

どこのどなたかわしは知らないが 声はよく通る節おらやかに

わしはまねなどできないけれど 習い覚えたすじ道だけを

しどろもどろにやりかけます

(小切文句)

へわしの音頭は危ない音頭 竹の丸橋 駒下駄履いて

ヒョロリヒョロリと渡るがような

いつかどこらでナー落ちるか知らぬ

多伎7

名	称	手まり歌
伝	承	地 多伎町小田
伝	承	者 安井忠次郎 M33年生
調査員氏名		山本一男・秦野尚雄

へ向こうのお山で 三味弾くだれか

だれかこなたか 氏神さまか

お手を合わせて 拝もとすれば

七ツ子猿が 八ツ児こをはらむ

もしもこの子が 男の子なら

寺へささげて 手習いさせる

もしもこの子が 女の子なら

こもに包んで 小縄で締めて

前の小川ながわに ポチャンと投げる

投げた心は ぼたんの花か

月かぼたんか 手まりの花か

手まりよう来た 上がれとおっしゃる

上がりや御姫が たび巻こするの たびこする

(注) たびこするは休憩するの意。

多伎 8

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 多伎町小田  
 伝 承 者 安井忠次郎 M33年生  
 調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

ねんねんねんねんねんや ねんねが守りはどこ行つた

山越えて谷越えて里に來た 里のみやげに何もろた

デンデン太鼓に笙の笛 それをたたいて遊ばんせ

ねんねんねんねんねんや ねんねが守りのうさぎの子

なぜにお耳が長いのか おかかのぼんぼにおるときに

桃の葉笹の葉食べまして それでお耳が長いとさ

ねんねんねんねんねんや ○○さんは良い子だねんねしな

多伎 9

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 多伎町口田儀  
 伝 承 者 和田森義雄 S6年生  
 調査員氏名 秦野 尚雄

(かつま節)

そろた出そろたナ 早乙女さんがナそろた

植えりや黄金の波が立つ

丸い卵ナ 切りよじやナ四角

物はいよいよ角が立つ

わしとあなたはナ 茶わんのナほつれ

いつが別れになるじややら

お寺御門にサナ 蜂が巣サナかけて

和尚が降りや刺す戻りや刺す

多伎 10

名 称 田植え囃子  
 伝 承 地 多伎町神原  
 伝 承 者 錦織 幸治 S21年生  
 調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

(さげ歌)

今日もヤーハーレヤ五月のころは

代かきでノーホサ 代かきでノ

ハリヤア 代かきでヤーハレ 白旗立てて 先牛で

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

わが門田ヤーハーレヤ千町ばかりも

植えるにはノーホサ 植えるにはノ

ハリヤア 植えるにはヤーハレ

鳴りものぞるいで囃子田に

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

おなりさんーヤーハーレヤどこから迎える

米子からノーホサ 米子からノ

ハリヤア 米子からヤーハレ 米子の町の 良い女郎

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

へおなりさんーヤーハレヤ門<sup>かど</sup>まで駕籠で

迎えがノーホサ 迎えがノー

ハリヤア 迎えがヤーハレ 門<sup>うち</sup>から内<sup>うち</sup>は お徒<sup>から</sup>歩なり

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

へおなりさんーヤーハレヤ黄金の池に

手を使いノーホサ 手を使い

ハリヤア 手を使いヤーハレ 髪解く暇を 願わざる

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

へおなりさんーヤーハレヤ乱れし髪を

なんと解くノーホサ なんと解く

ハリヤア なんと解くヤーハレ おおぼの櫛で 四つに解く

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

へ大山<sup>だいせん</sup>のヤーハレヤ七谷<sup>ななたに</sup>越えて

鳴く鹿はノーホサ 鳴く鹿はノー

ハリヤア 鳴く鹿はヤーハレ 妻来い来いと 三<sup>みつ</sup>声<sup>こゑ</sup>鳴く

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

へ門<sup>かど</sup>田<sup>た</sup>をばーヤーハレ百人ばかりで

植えるにはノーホサ 植えるにはノー

ハリヤア 植えるにはヤーハレ 鳴りものぞろいで雛子田に

ドッコイ ドッコイ ドッコイ

多伎 11

名 称 花馬音頭

伝 承 地 多伎町口田儀

伝 承 者 渡部 誠 S 13 年生

調査員氏名 山本一男・秦野尚雄

(花馬音頭)

へうれしめでたの若松様は 枝も栄えて葉も茂る

鶴が大社の御前で舞えば 関の灘では亀が浮く

花は二度咲く若さは一度 若さ恋しや二度とない

立田川向こうへ渡れば紅葉も散るし 渡りにや聞かれぬ鹿の声

咲いた桜になぜ駒つなぐ 駒が勇めば花が散る

娘島田に蝶々が止まる 止まるはずじゃよ花じゃもの

重たい重たいこの花ばかりや 金で固めた花じゃもの

西行法師は山見て勇む 若衆姫見て気が勇む

(花馬を回すとき)

(音 頭) ホーラーエーうれしめでたの 若松様はヨーホーエ

(はやし) ヤーヤットコヤーヨイヤナ

(音 頭) ハー枝も栄えて葉も茂る ヨーホーイトナ

(はやし) ホーラーハララガリーハ コララガヨイヨイ

ヨーイトコ ヨーイトコセー

(花馬を引くとき)

(音 頭) ホーサノサーイヤラホーヨイヤナ

(はやし) ホーサノサーイヤラホーヨイヤナ

(音 頭) ヤッサホーヨイヤナ

(はやし) ヤッサホーヨイヤナ

(音頭) ホラエーヨイヤサガサツサ

(はやし) ホラエーヨイヤサガサツサ

湖陵1

名称 嫁入り歌

伝承地 湖陵町差海

伝承者 岡田 國由 T8年生

調査員氏名 森山 弘昌

〱今日はナー日も良し アー天気も良し

娘ナー合わせて アー縁となるナーヨ

〱今はナーお立ちか アーお名残惜しや

今度来るときや アー孫連れてナーヨ

〱わたしやナー行きます アー親さんさらば

(注) いかいナーお世話に アー相成りました

〱いかいナーお世話は アーお互い様よ

お前ナーゆかしやりや アーあと寂しナーヨ

〱蝶やナー花やと アー育てた娘

今日はナーあなたに アー差し上げまする

〱蝶やナー花やと アー育てた娘

もらいナーますぞや アーありがたや

〱嫁はナー若嫁 アーなんにも知らぬ

頼みナーますぞや アー姑さんナーエ

〱姑はアー年寄りー アーなんにもできぬ

(注) ござるな嫁さん アー末頼むナーヨ

〱おいでナーましたか アー受取りましよか

この家ナー繁盛と アー末永くナーヨ

〱どこかナーどこかと アー尋ねて来たら

これがナー殿御の アー屋形かいナーヨ

〱これのナーお背戸の アー双また榎

えの実ナーならず アー金が成るナーヨ

〱いとまナーごいだよ アーこの門越せば

後へナー帰るは アー非常なことだよ

〱後へナー帰るは アー非常とは言えど

縁がナーなけりやな アーまた戻ります

(注) いかい〓大変 ござるな〓くたばるな、疲れるな

湖陵2

名称 上釜小唄

伝承地 湖陵町大池

伝承者 小原 光夫 T9年生

調査員氏名 森山 弘昌

(上釜小唄)

〱うれしめでたの若松さまよ 枝も栄えてヨー葉も繁る

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

その歌戻せ 枝も栄えてヨー葉も繁る

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

〱鶴が舞いますこの家の上で この家繁盛とヨ一舞い上がる

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

その歌戻せ この家繁盛とヨ一舞い上がる

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

〱大漁してまたのぼりを立てて いずこ神々にヨ一お礼参り

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

その歌戻せ いずこ神々にヨ一お礼参り

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

〱新船造りて七乗<sup>ななじょう</sup>八乗<sup>やじょう</sup> 今年やまんが良<sup>このじょう</sup>かろうと九乗<sup>ここのじょう</sup>げ

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

その歌戻せ 今年やまんが良かろうと九乗げ

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

〱うちの親方よい親方で 今は若世でヨ一なお良かる

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

その歌戻せ 今は若世でヨ一なお良かる

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

〱鴨が舞います上釜<sup>かまがま</sup>沖で 鴨はワカナのヨ一導きか

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

その歌戻せ 鴨はワカナのヨ一導きか

オモシロヤ ハアーヤイトヤイト

湖陵3

名 称 粉ひき歌

伝 承 地 湖陵町二部  
伝 承 者 森山清次郎  
調査員氏名 森山 弘昌 M42年生

〱ア一石<sup>いし</sup>臼 ぶけぶけー だんご焼いてかましよ

中に味噌入れてナー こがこーがーとー

ア一そりやふけ ア一ほりやふけ

湖陵4

名 称 木遣り

伝 承 地 湖陵町差海  
伝 承 者 中尾 隆義 M42年生  
調査員氏名 森山 弘昌

〱ホ一ラーエー ヤア一これの親方ヤ一ハーエー

ハ一ヤッテゴセーヨ一イヤナ

ヤア一これの親方長々お世話に 相成りましたヨ一イトネ

ハ一ハラレバハララノラハラヨ一イトコ ヨ一イトコセ

〱ホ一ラーエー ヤア一これの親方ヤ一ハーエー

ハ一ヤッテゴセーヨ一イヤナ

ヤア一これの親方聞きや鳥の歳

鳥羽重ねにあの蔵七つヨ一イトネ

ハ一ハラレバハララノラハラヨ一イトコ ヨ一イトコセ

〱ホ一ラーエー ヤア一鯛の浜焼きヤ一ハーエー



ハ―ヤッテゴセーヨ―イヤナ

ヤァー鯛の浜焼き目玉がしょうかん ヨ―イトネ

ハ―ハラレバハララノラハラヨ―イトコ ヨ―イトコセ

ハ―ハララーエー ヤァーかのたかのたぞヤァーハ―エー

ハ―ヤッテゴセーヨ―イヤナ

ヤァーかのたかのたぞ思うことかのた

鶴が御門にアノ巢をかけたヨ―イトネ

ハ―ハラレバハララノラハラヨ―イトコ ヨ―イトコセ

ハ―ハララーエー ヤァー一つじゃいかないヤァーハ―エー

ハ―ヤッテゴセーヨ―イトナ

ヤァー一つじゃいかない 二つ三つの間でやるやヨ―イトネ

ハ―ハラレバハララノラハラヨ―イトコ ヨ―イトコセ

(以下、離子詞省略)

ハ―ヤァー鶴が舞いますヤァーハ―エー

ヤァー鶴が舞いますこの家の上で

この家繁盛とアノ末長くヨ―イトネ

ハ―ヤァーうれしめでたのヤァーハ―エー

ヤァーうれしめでたの若松さまよ

枝も栄えてアノ葉も繁るヨ―イトネ

ハ―ヤァーこれのお背戸のヤァーハ―エー

ヤァーこれのお背戸の双また榎

えの実ならずアノ金なるヨ―イトネ

ハ―ヤァー富士山白雪ヤァーハ―エー

ヤァー富士山白雪朝日で溶ける

娘島田はアノ寝て解けるヨ―イトネ

ハ―ヤァーねかせて花咲くヤァーハ―エー

ヤァーねかせて花咲く こうじ屋の娘ヨ―イトネ

ハ―ヤァー色よぎ花だよヤァーハ―エー

ヤァー色よぎ花だよ 金紺真赤にアノ銀緑ヨ―イトネ

(この歌は華により違う)

ハ―ヤァーここは大阪ヤァーハ―エー

ヤァーここは大阪 若い衆のご苦労ヨ―イトネ

ハ―ヤァー重たい花だよヤァーハ―エー

ヤァー重たい花だよ 金でせがせたこの花じゃものヨ―イトネ

ハ―ヤァー伊勢は津でもつヤァーハ―エー

ヤァー伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ

尾張名古屋はアノ城でもつヨ―イトネ

ハ―ヤァーあれを見やんせヤァーハ―エー

ヤァーあれを見やんせ 十七、八なるねえちゃんたちが

おしろいお手々でちよこらちよいと招く ヨ―イトネ

ハ―ヤァーやつとこまかせのヤァーハ―エー

ヤァーやつとこまかせの 声をば頼むヨ―イトネ

ハ―ヤァーここは宮山だヤァーハ―エー

ヤァーここは宮山だ からだ身清めて心も清めてヨ―イトネ

ハ―ヤァー安芸の宮島ヤァーハ―エー

ヤアー安芸の宮島まわれば七里

浦は七浦アノ七恵比須ヨイトネ

〱ヤアー近くなつたぞヤアーハーエー

ヤアー近くなつたぞ

笛やでんでのアノ音が聞こえるヨイトネ

〱ヤアー恵比須大黒ヤアーハーエー

ヤアー恵比須大黒出雲の国の西と東のアノ守り神ヨイトネ

〱ヤアー娘島田にヤアーハーエー

ヤアー娘島田に蝶々が止まる

止まるはずだよアリヤ花だものヨイトネ

〱ヤアー女房持たしよかヤアーハーエー

ヤアー女房持たしよか 五万石やろかヨイトネ

〱ヤアーなんばは絡繰からくりヤアーハーエー

ヤアーなんばは絡繰 まかねばのぼらぬヨイトネ

### 湖陵5

名 称	サーノエ節
伝 承 地	湖陵町差海
伝 承 者	中尾 隆義 M42年生
調査員氏名	森山 弘昌

〱そろたそろたよ踊り子がそろた

稲の出穂よりハーヨー なおよくそろたナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱桜三月あやめは五月

咲いて歳取るハーヨー アノ梅の花ナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱沖の途中にお茶屋を建てて

上り下りのハーヨー あの舟を待つナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱沖の途中となかに白帆が見える

あれは紀の国ハーヨー アノみかん舟ナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱みかん舟なら一夜ひともも早く

一夜遅けりゃハーヨー アノ値が下がるナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱虎は千里の藪さえ越せど

わたしやおこしがハーヨー アノままならぬナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱かわよかわよと夜は抱きしめて

昼は互いにハーヨー アノ知らぬ顔ナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱かわいがられて寝た夜もござる

泣いて明かしたハーヨー アノ夜もござるナーハーエー

サラナーハーエーサーノエ ア カワイヤセー

〱天の星さえ夜遊びなさる

主の夜遊びハーヨー アノ無理もないナーハーエー

サラナーハーエーサーノーエ ア カワイヤセー  
へかわいがられた蚕の虫も

糸を取られてハーヨー アノ丸裸ナーハーエー  
サラナーハーエーサーノーエ ア カワイヤセー

### 湖陵6

名 称 正月つあん  
伝 承 地 湖陵町差海  
伝 承 者 中尾 隆義  
調査員氏名 森山 弘昌 M42年生

へ正月つあん 正月つあん

どこからござった(どこまでござった)

三瓶の山から 羽子板腰に挿いて

えんちりえんちりござった

### 湖陵7

名 称 手まり歌  
伝 承 地 湖陵町差海  
伝 承 者 永瀬 和子  
調査員氏名 森山 弘昌 T12年生

へこの後ろの椎の木に 雀が三羽鳩三羽

一羽の雀が言いことにゃ よんべ呼んだ花嫁ご

今朝の座敷に座らせて 金らん緞子のその中で

しっぽりかっぽり泣かしゃんす なんが不足で泣かしゃんす

なんだり不足はござらぬが わしの弟の千松が

西のほうらへ金堀り行きて 金は掘やら掘らのやら

一年たつても状が来ん 二年たつても状が来ん

三年目の一日に お糸に來いとて状が来た

お糸はやらんわしが行く 後の田地はどうなさる

売ってしもうて金にして 安い米買うて舟に積む

舟はどこ舟都舟 都帰りになに買てもろた

一にやこうがい二にや鏡 三にや更紗の帯買てもろた

帯にや短かしたすきにや長し とうざ薬師の鐘の釣り緒に

なおよかる なおよかる

へ紺屋のもだれにストトンが止まった

なあしてとまった ひだりて止まった

ひだりけりや田植え 田植えや冷たい

冷たけりやあたれ あたりやあつ

熱けりや後へしざれ 後へしざりやのみが食

のみがかみや殺せ 殺しもかわい

かわいけりや抱えて寝 抱えて寝や小便こく

小便こけやささげ ささげりや手がだい

手がだいけりや落とせ 落しもかわい

へ向こうの山に猿が三匹並んで

前の猿ももの言わず 後の猿ももの言わず  
中の子猿がようもの知って なんと友だち花折り行かや

花はどこ花 地蔵の前の桜花 一枝折ってはパツとする

二枝折ってはパツとする 三枝のさかえで日が暮れて

どっちの紺屋で宿取らか 東の紺屋で宿取らか

西の紺屋で宿取らか 中の紺屋で宿取らか

畳を三畳借り寄せて

畳は短かし夜は長し 三日月起きて空見たら

けいせんたちが舟をそろえて帆をかけて

からす からすどこへ行く からすは出雲へ水汲みに

へ手まりと手まりが行きやうて

ふとちの手まりが言うことには 姉さん 姉さん どこへ行く

出雲路権現参ります 姉さんのたもとに血がついて

血ではござらぬ 濃紅だ 濃紅だ

(注) よんべいゆうべ しざれいさがれ なんだりいなんにも だいいだるい

ストトンいはおじろ ふとちい一つ なあしていどうして ひだりて

へおんしよこい かわいしよ 油虫に乗ってこい

湖陵8

名称 ことといし歌  
伝承地 湖陵町二部  
伝承者 永瀬 和子 T12年生  
調査員氏名 森山 弘昌

へ一番始めの一の宮 二は日光東照宮

三は桜の吉野山 (讃岐の金毘羅さん)とも

四はまた信濃の善光寺 五つ出雲の大社 六つ村々鎮守様

七つ成田の不動さん 八つ八幡の八幡宮

九つ高野の弘法さん 十は東京博覧会

これまで心願かけたのに 一夜も二夜もくださらぬ

ゴーゴーゴー発電車 武男と浪子は汽車の中

武男が軍隊出るときにや 浪子は絹のハンカチを

うち振り上げてねえあなた 早く帰ってちょうだいな

早く帰ってちょうだいな

湖陵9

名称 とんぼつりの歌  
伝承地 湖陵町二部  
伝承者 永瀬 和子 T12年生  
調査員氏名 森山 弘昌

湖陵10

名称 木綿ひき歌  
伝承地 湖陵町差海  
伝承者 桑原クミヨ T5年生  
調査員氏名 森山 弘昌

へアーお前百まで わしや九十九まで

ともに白髪を生えるまでヨイヤナー ナンノー

へアーこれの親方 今日酉とりの歳

鳥は若さの蔵七つヨイヤナー ナンノ

へアー松江大橋 柳の下で

わたしやあなたをぬれて待つヨイヤナー ナンノ

へアー何をくよくよ 川端柳

水の流れを見て暮らすヨイヤナー ナンノ

へアーこれのお背戸みよだての 茗荷みぎわや露ひよは

茗荷めでたや露繁盛ヨイヤナー ナンノ

へアーかわいかわいと にわまつしげで

昼は互いにしわの顔ヨイヤナー ナンノ

へアーわたしやあなたの こしがたなれど

わしはあなたの妻じやものヨイヤナー ナンノ

湖陵 11

名 称 豆炒り歌

伝 承 地 湖陵町差海

伝 承 者 井上ヒデノ M38年生

調査員氏名 森山 弘昌

へお夏何しや 菜の虫ええます

お夏何しや 菜の虫ええます

へお夏何しや 鬼の豆ええます

お夏何しや 鬼の豆ええます カラコン カラコン

(注) 何しや || 何をす ええます || 炒いります

湖陵 12

名 称 江島音頭

伝 承 地 湖陵町差海

伝 承 者 中尾 俊介 S26年生

調査員氏名 森山 弘昌

へヤレ出たヨ出た 舟がチヨイチヨ出たヨ出た

アラヨンボダイタカネ アラ百ナ二十ヨしん舟船

へヤレ七夕たのよばた 空のチヨイチヨイ七夕たのよばた

アラヨンボダイタカネ アラおいナとしナござる

へヤレ鶴ヨ鳥 さぎのチヨイチヨイ鶴ヨ鳥

アラヨンボダイタカネ アラおはならいヨ箱で

へヤレ宮ヨ鳥 安芸のチヨイチヨイ宮ヨ鳥

アラヨンボダイタカネ アラ回ればヨ七里

湖陵 13

名 称 杵築音頭

伝 承 地 湖陵町差海

伝 承 者 中尾 俊介 S26年生

調査員氏名 森山 弘昌

へハーやりかけましょか アドッコイシヨ

ハーさても差海のナー皆様方よ

アラヤンハトナーヤンハトナー

ハー皆様方よ アドッコイシヨ

ハー盆が来ましたナー今年も盆が

ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―今年も盆が アドッコイシヨ  
ハ―盆の踊りにナー踊らぬ者は  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―踊らぬ者は アドッコイシヨ  
ハ―猫か鼠かナー空たつ鳥か  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―空たつ鳥か アドッコイシヨ  
ハ―それでなければナー皆出て踊ろ  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―皆出て踊ろ アドッコイシヨ  
ハ―老いも若きもナー皆出て踊れ  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―皆出て踊れ アドッコイシヨ  
ハ―さあさどなたもナー皆出てやるか  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―皆出てやるか アドッコイシヨ  
ハ―そろたそろたよナー踊り子がそろた  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―踊り子がそろた アドッコイシヨ  
ハ―稲の出穂よりナーなお良くそろた  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―なお良くそろた アドッコイシヨ

ハ―そろたところでナー皆様方よ  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―皆様方よ アドッコイシヨ  
ハ―だれもどなたも はやしを入れて  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―はやしを入れて アドッコイシヨ  
ハ―今夜一晩は 楽しくやるか  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―楽しくやるか アドッコイシヨ  
ハ―はやしそろえてナーでんと頼む  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―でんと頼む アドッコイシヨ  
ハ―はやしあるならナーわしやなんぼでも  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―わしやなんぼでも アドッコイシヨ  
ハ―音頭取りますナー夜のふけるまで  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―夜のふけるまで アドッコイシヨ  
ハ―それじゃこころでナー音頭にかかる  
ハラヤンハトナーヤンハトナー  
ハ―音頭にかかる アドッコイシヨ  
ハ―かかるところでナー皆様方よ  
ハラヤンハトナーヤンハトナー

ハ一皆様方よ アドッコイシヨ

ハ一あまた音頭はナ一数々あれど

ハラヤンハトナーヤンハトナー

ハ一数々あれど アドッコイシヨ

ハ一わしが音頭はナ一権八くどぎ

ハラヤンハトナー

(この後に続いて「平井権八口説」 「白糸口説」  
「清三口説」が歌われる)

### 湖陵14

名 称 大池小唄

伝 承 地 湖陵町大池

伝 承 者 三原 セン

調査員氏名 森山 弘昌

M 36年生

へ音に名高い大池の蛇池 谷を数えりや四十八谷

へ小川なれども大池の川は 六十余州にありやすまい

(大池の地でわいた水が大池の海へ流れ

こむことを言ったもの)

へ蛇池 蓮池 下池越えて ここは大迫寺どころ

### 大社1

名 称 楽車の歌

伝 承 地 大社町宇竜

### 楽車の歌(御成婚式)

伝 承 者 木村弥一郎 M 34年生  
調査員氏名 加村 健悟

へハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ

ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ

ハア すぐみますー アーこれはヨイヤサ

すーずめて すーずめて ヨーイトーセー

めでたやな 皇国の東宮の イヤ御成婚式のお祝いに

ア コレハヨイヤサ

今日を祝え奉りて町人が イヤにぎわいせんと集い来てー

アーコレハヨイヤサ

ととほき祭るえー(「ゴドーゲ祭る」と聞える) 太鼓かな

幾万年も末繁盛 アーヨイヨイヨイヤサー

ヨーイトセー アーヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ

### (高 砂)

へすずめましようー(拍子木三拍打つ) アーコレハヨイヤサ

すずめてすーずめて ヨーイトーセー

高砂やー尾上の松もー 年ーふりてー

イヤ 翁嬸がまかり出て アーコレハヨイヤサ

今年や豊年穂に穂が下がる

イヤ この町繁盛でしっかとせー

(デンデンデンと太鼓の間奏)  
道にや小草もえー 黄金がなるー 鶴と亀が舞い遊ぶ

ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ  
 ハア ヨイヨイヨイヤサー ヨーイトセ

(松の二葉)

ハアー すぐめましようー コレハヨイヤサ  
 すぐめて すぐめて ヨーイトーセー

松のー二葉でー屋根をふーけー

イヤ 中には福神舞い遊ぶー アー コレハヨイヤサ

若竹の直ぐに育つが子ども衆の

イヤ末たのもうしき花も実もー コレハヨイヤサ

(太鼓の間奏)

威勢な すがたもえー 福神のー

とざーさーノー御代となりける

アー ヨイヨイヨイヤサ ヨーイトセ

ハア ヨイヨイヨイヤサ ヨーイトセ

ハア ヨイヨイヨイヤサ ヨーイトセ

大社2

名 称 初夢  
 伝 承 地 大社町鷺浦  
 伝 承 者 米井 竹蔵 M36年生  
 調査員氏名 加村 健悟

(独吟) めでたエーエーのエーエーそれエー わかー

(伴吟) 枝もー栄える のーオーエー葉ーもー

(独) ヤーットセー あらたまの 初夢にー

(伴) エーエー草なぎーイ 山の 楠のーオー木をーラ

船に 造りて 今ー下ろし エー白銀の

柱をーオー おし立てて エー白銀のー せみを

含ませてエー 御繩 てなわを ことのいと

綾ーヤー錦をー 帆に 描いて エー宝が 島へ

乗り込んで 数の 宝をー積み受けて

エーそなたの 倉へエー 納めおく 祝い

(独) めでたーのー の若

(伴) イヤー 枝もヤー 栄える 葉もしーイ 茂るー

(注) この曲はもともと船歌だが、現在祝い歌として使われている。

大社3

名 称 木遣り歌  
 伝 承 地 大社町鷺浦  
 伝 承 者 米井 竹蔵 M36年生  
 調査員氏名 加村 健悟

(独吟) ロートコ ロートコセー (伴吟) ウーエー

(独) ヨーイサー (伴) ヨーヤサ

(独) ヨーエサー (伴) エーエーヨー イヤー

(独) ヨーイトーナー



(伴) ホーラーエーヤー アーララット ドッコイシヨ

ヨイトトコヨイトトコセー

(独) ホーラーエー コノハターラエーマースー

ヤーエー (伴) ヤートコセーヨイヤナ

(独) コノハターエーマースー オエカケーマースー

ヨイトトコセー

(伴) ホーラーエーヤ アーララーカ ドッコイシヨ

ヨイトトコセー

(独) ホーラーエー ココハーダイーサカー ヤーエー

(伴) ヤートコセー ヨイヤナ

(独) コノサカーダイサカー ドートコセー

(伴) フーエーイ エイヤ エイヤ エイヤ

エイヤ

(注) 本来木遣り歌だが、現在一月五日の屋台船行事の祭り歌として歌われている。

大社4

名 称	木遣り歌
伝 承 地	大社町杵築
伝 承 者	山本福太郎 T1年生
調査員氏名	加村 健悟

(独) へホーラーエー 今日日は良し 天気も良し

イヤエー

(伴) ヤーヤットコセーヨイヤナ

(独) みんなそろって にぎやかに イヤーエートトナー

(伴) ホーラーエーノ アララーノドッコイドッコイ

ヨイトトコセー

(独) へホーラーエー おぼぼどこへ行く

さんちよ樽下げーて イヤーエー

(伴) ヤーヤットコセー ヨイヤナ

(独) 嫁の在所へ孫抱きに イヤーエートトナー

(伴) ホーラーエーノ アララーノドッコイドッコイ

ヨイトトコセー

(独) へホーラーエー この後追います イヤーエー

(伴) ヤーヤットコセー ヨイヤナ

(独) 後を追<sup>(C)</sup>えます 追<sup>(C)</sup>えかけます ドートコナー

ドーオトコシエクラー

(伴) イエーイ エイヤ エイヤ エイヤ エイヤ

(独) へホーラーエー 重たいはずだやえ

(伴) イヤーエーヤーヤットコセー ヨイヤナ

(独) めでせがせた宝船 イヤーエートトナー

(伴) ホーラーエーノ アララーノドッコイドッコイ

ヨイトトコセー

(独) へホーラーエー 鶴が来ました 十神の山へ

イヤエー

(伴) ヤーヤットコセー ヨイヤナ

- (独) さぞや亀島 まつでやろ イヤーエートナー  
 (伴) ホーラーエーノ アララーノドッコイドッコイ  
 ヨーイトーコヨーイトーコーナー  
 (独) 〱ホーラーエー この後追います イヤーエー  
 (伴) ヤーヤットコセー ヨーイヤナー  
 (独) 後追います 追いかけます ドートコナー  
 ドーオトコシエクラー  
 (伴) イエーイ エイヤ エイヤ エイヤ エイヤ エイヤ  
 (独) 〱ホーラーエー うれしめでたーのー 若松様は  
 イヤーエー  
 (伴) ヤーヤットコセー ヨーイヤナー  
 (独) 枝も栄えて 葉も茂る イヤーエートナー  
 (伴) ホーラーエーノ アララーノドッコイドッコイ  
 ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー  
 (独) 〱ホーラーエー 娘島田に 蝶々が止まるヨ  
 イヤーエー  
 (伴) ヤーヤットコセー ヨーイヤナー  
 (独) 止まるはずじゃよ 花じゃもの イヤーエートナー  
 (伴) ホーラーエーノ アララーノドッコイドッコイ  
 ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー  
 (独) 〱ホーラーエー ここはだい坂 まかねばのぼらぬ  
 (伴) イヤーエー ヤーヤットコセー ヨーイヤナー  
 (独) まかねば登らぬ 皆様方ー ドートコナー

(伴) ドーオトコシエクラー  
 イエーイ エイヤ エイヤ エイヤ エイヤ エイヤ

大社5

名 称 八雲立つ  
 伝 承 地 大社町杵築  
 伝 承 者 中筋 知己 S2年生  
 調査員氏名 加村 健悟

(神歌・八雲立つ)

〱ハア 八雲立つー ハア 八雲立つー

ハア 出雲八重垣 妻ごめに アーヨー

ハア 八重垣作るヨー アーヨー

ハア その八重垣を その八重垣を

ハア いずれの神もヨー アーヨー

(注) 本来神楽歌とされているが、現在、大土地荒神社祭礼のとき歌われる。

大社6

名 称 神楽歌  
 伝 承 地 大社町杵築  
 伝 承 者 中筋 知己 S2年生  
 調査員氏名 加村 健悟

(三宝)

〱これにたつよー オーここはー アー

高天の原わちなりーいよー アヨウー  
ア いずれーエーの 神ーもやー アヨウー

大社7

名 称 吉兆歌  
伝 承 地 大社町杵築  
伝 承 者 山川熊三郎 M44年生  
調査員氏名 加村 健悟

(吉兆歌・八雲立つ)

へめでたい のいそれ 若枝萌え 栄えるのえ 葉もえ  
八雲立つ 山は鶴山 亀山の あいを流るる 吉井の川  
エー そが川の 流れの その水を 神酒みきに作りし 諸白を  
エー 神明に ささげ 奉り それを人々 いただけば  
エー 齢よわいを よばす 試しとや おいーわーい

大社8

名 称 神謡稜威  
伝 承 地 大社町杵築  
伝 承 者 山川熊三郎 M44年生  
調査員氏名 加村 健悟

へめでたいのい 神国常磐かみくにとこぎわに 栄えてのえ 民の  
八雲立つ 出雲の神の 守ります 大和島根の 礎いしずは  
ちよ 万世よろずよも ゆるぎなく 御世は治まり 民栄え

はいきみがー みずは とつ国の 果ての 果てまで  
輝きて 仰がぬ 人をこそ なかりけれ おいーわーい

温泉津1

名 称 お手玉歌  
伝 承 地 温泉津町湯里  
伝 承 者 中祖百合子 T2年生  
調査員氏名 重田 保之

へおひとつ おさら おみんな おさら  
お手乗せ お手乗せ お手乗せ お手乗せおろして おさら  
おちりんこ おちりんこ おちりんこ  
おちりんこおろして おさら  
おってんぶし おってんぶし おってんぶし おってんぶし  
ぶうして おさら 左ぎつちよ 左ぎつちよ  
左ぎつちよ 左ぎつちよ 左ぎつちよ 左ぎつちよ  
なかよし つまよし さらりと ちよちゃん  
やあちよめ おさら ※(地名)みのこし 通れ みのこし 通れ  
みのこし 通れ みのこし 通れ おさら  
小ちやい川 通れ 小ちやい川 通れ 小ちやい川 通れ  
小ちやい川 通れ おさら 大きな川 通れ おさら  
おおばらけ

温泉津2

名 称	白ひき歌
伝 承 地	温泉津町井田
伝 承 者	青笹トシノ T1年生
調査員氏名	重田 保之

へ白も回れやー ひき木も 回れー

ともにや 勤めーの 身じやほどに

へあれのーお背戸のー 茗荷みよがとよき露は

茗荷めでたい 露繁盛

温泉津3

名 称	手まり歌
伝 承 地	温泉津町井田
伝 承 者	久保田マサコ T4年生
調査員氏名	重田 保之

へこれのお背戸の ちやの木に 雀めが三十三止まり

あとの雀も 物言わず さきの雀も 物言わず

いーちの中の 子雀が 物をチュッチュッと よう知って

畳三枚 ござ三枚 合わせて六枚 ひきつめて

ゆうべもろうた 花嫁じよ けさの座敷に 座らして

きんらんどんすを 縫わされば

ほうろり ほうろりと 泣かしやんす

何が不足で 泣かしやんす 何も不足は ないけれど

わしの弟の 千松が 七つ八つから かね掘りて

かねを掘るやら 死んだやら 一年待っても 戻らんが

二年待っても 戻らんが 三年ぶりの ついたちに

おみつにこいとの状が来た

おみつは やるまい わしが行こう

どうでも おみつが行くなれば

あわせの一つも こしらえて (着物) ノノコの一つも こしらえて

温泉津4

名 称	石童丸
伝 承 地	温泉津町温泉津
伝 承 者	的場権三郎 M39年生
調査員氏名	重田 保之

へヨッ ハイドッコイ 哀れなるかや石童丸は

ヨッ ハイドッコイ 父を尋ねて高野に登る

ヨッ ハイドッコイ 母はふもとの玉屋が茶屋に

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

預けおくこそ ヤッ ドッコイ ドッコイ 哀れなーや

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

すぐにその身が高野へ登る ヨッ ハイドッコイ

九万九千くまんくせん おんでらの御寺々を ヨッ ハイドッコイ

尋ねめぐれど行方知れず

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

親と子の縁切れぬが不思議 ヨッ ハイドッコイ

音に聞こえし無明の橋で ヨッ ハイドッコイ  
親子互に行合いければ

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

問うてみばやと衣の袖に ヨッ ハイドッコイ

袖にすがりて涙にかたる ヨッ ハイドッコイ

もうし御僧 御物尋ぬ

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

都方にて新九郎谷に ヨッ ハイドッコイ

髪をこぼした今道心が ヨッ ハイドッコイ

もしもお山にあるというなら 会わしてたべと

ヨッ ハイドッコイ 頼みあげます のう 御僧よ

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

さては不思議な稚児こそ来たれ ヨッ ハイドッコイ

山にかほど数多けれど ヨッ ハイドッコイ

そちが尋ねをするくらいなら

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

会わることではないでわ稚児よ ヨッ ハイドッコイ

人を尋ねて露知れぬとき ヨッ ハイドッコイ

何のなにかしなに左衛門と

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

書いて高札立て置くならば ヨッ ハイドッコイ

置いて三日さんいち十日にや知れる ヨッ ハイドッコイ

会うと思えば添書きをする

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

いやと思えばその札を引く ヨッ ハイドッコイ

どうぞ情に御僧様よ ヨッ ハイドッコイ

書いておくれやその高札を

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

書いてやるのは、いとやすけれど ヨッ ハイドッコイ

ここは無明の橋中なれば ヨッ ハイドッコイ

筆にことかく硯墨すずりすみ持たぬ

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

葺が堂まで来たれや稚児よ ヨッ ハイドッコイ

硯墨をばはや取りい出せ ヨッ ハイドッコイ

書いてやるぞや それ今ここで

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

国はなんというか 名はなんというか ヨッ ハイドッコイ

国を申せば築前の国の ヨッ ハイドッコイ

加藤左衛門 名は重氏と

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

寅や三年以前のころに ヨッ ハイドッコイ

一家一門相集りて ヨッ ハイドッコイ

花の遊びをなされしときに

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

父の持ちたる御盃に ヨッ ハイドッコイ

花が一輪吹き散り入りて ヨッ ハイドッコイ

それをこの世のいとまとなされ

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

国を出でさせー エンヤドッコイ ドッコイ たまいける

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

父の御年二十三歳で ヨッ ハイドッコイ

母はそのとき十九歳にて ヨッ ハイドッコイ

姉の千代鶴三歳のとき

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

わたしやまんだ母の胎内 ヨイヨイ ななつき 七月半で

ヨッ ハイドッコイ 捨てておかれたみなし子なるが

ヨッ ハイドッコイ 今は生まれて成人いたし

ヨッ ハイドッコイ 名をば石童丸よと申す

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

言えば言うほど子に違いなし ヨッ ハイドッコイ

持った筆をばからりと投げて ヨッ ハイドッコイ

袖に涙をしほるがごとく

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

そこでその子が姿を見つげ ヨッ ハイドッコイ

わしが尋ねる父上なれば ヨッ ハイドッコイ

名乗りたまえよ のう御僧よ

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

そちが尋ねる父上殿は ヨッ ハイドッコイ

ヤート三年前にむなしく終わる ヨッ ハイドッコイ

そこでその子が涙にくれて ヨッ ハイドッコイ

尋ね巡りしその甲斐もなし ヨッ ハイドッコイ

イヤー とても会われぬことなれば 親の屍 石塔なりと

ヨッ ハイドッコイ 教えくたされ御僧様よ

ヨッ ハイドッコイ 義理に迫りて抜け口言うて

ヨッ ハイドッコイ 何の縁なき無縁の墓を

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

教えられたる石童丸は ヨッ ハイドッコイ

墓の卒塔婆しつかと抱いて ヨッ ハイドッコイ

声を惜しまずただ泣くばかり

ヤートセー ヤート ドッコイ ドッコイ

### 仁摩 1

名	称	琴ヶ浜盆踊り歌
伝承地		仁摩町馬路
伝承者		島田 利吉
調査員氏名		勝部 義夫
		M 39年生
		他

(口説はじめ)

へ今の音頭の名人様は だれかどなたかわしや知らねども

声はよい声細谷川の 鶯鳴く声さぞおもしろや

御声休めて煙草の間 わしが少しの声継ぎします

わしが声とてよいのじゃないが 声の悪いは元生まれつき

節の行かぬは師匠ないからよ とかく音頭ははやしが大事

はやしぬるけりや 口説かれませぬ 口説ぬるけりや  
はやされませぬ

踊る子どもや見物の衆は 声をそろえてはやしを頼む  
わしが音頭はこの山奥の 鹿の横飛びあそこやここや  
竹の丸橋渡るがままよ 落ちたところは御免を願う

さあさこれからやりかけましょや

(源徳丸)

へ憐れなるかや源徳丸は 殿のみ船か日本一か

光り輝く御船なれど 国は雲州馬潟ヶ浦で

新艘造りて船積みいたす 二十四人の船子をそろへ

中に一人新五郎というて 生まれよいかや器用な男

花の開きか二八のときか 船頭役をば被りたまひ

はいと請け合ううちうらやかに 勇み勇んでみなわを繰れば

妻や子どもや親たち様は 心ばかりの別れをしまや

そこで新五郎申されけるに 親に孝行火の元大事

国のおきてを大事に守れ 言うに言われず早や追手風

地あい吹きなら帆を巻き上げて 馬潟灘をばさらりと替る

おもて見合せ船見合せて さあさこれから真ともでござる

歌やさんやで一夜を走る 一夜走りて夜の明けごろに

着いたところは石見の国の 音に聞えた琴ヶ浜沖で

気色かわりて はえにし となる 山の落としを裏帆にもろて

舳のおやじがどんすをかけて 引けどしやくれど

おもかしきかず

綱も錨も役には立たず これじゃたまらぬこりやどうしよと  
二十四人が両手を合せ 讃岐様にと乞い願ひする

運の尽かや浪風高く 高き浪風やぐらを越えて

楫の若葉がさらりと落ちる これじゃたまらぬ早やかなわぬと

そこで新五郎申されようには 松江恋しと思うな船子

船に乗ぬるか覚悟でござる

やがて浄土の港に入る みんなぐぜいの御船に乗りて

思ふ夜の間辛島沖で さらばさらばと相果てました

伝馬にぬきに結びつけおいた 一に大事な往来箱を

磯辺回りの小釣りの人が 伝馬難なく吹き寄せたまう

ばつと広げて拝見すれば 早く見つけて村役人へ

急ぎ急ぎいで飛脚を立てて 見れば松江の御手船船よ

妻のおせんが申されようには 松江様にと注進いたす

もはや霜月また末の月 おそし十月帰ると言うたが

未浄土でまた逢いましょと

どうぞこの世で逢われぬなれば

露に散り行くのや散りにける 思い直して舟遊びする

### (三) 浜田地区

#### 浜田地区の民謡概観

浜田地区には、日本海に面した江津市・浜田市・三隅町、江川流域に沿った桜江町・川本町・邑智町・大和村・羽須美村、そして南部内陸部に位置する瑞穂町・石見町・旭町・金城町・弥栄村の二市八町三村が含まれる。

今回の調査結果を概観してみると、まず労作歌において多くの種類の歌が収録されたことが、一つの成果として確認できる。中でも「田植え歌」「白ひき歌」「木挽き歌」はほとんどの地域から報告があり、「苗取り歌」「草取り歌」「地づき歌」もそれに次いで多く収集されている。また、「櫓こぎ歌」「さば割り節」「鋤簾歌」「紙すき歌」「酒造り歌」「木遣り歌」など、各地の伝統的生業形態と結びついた興味深い歌の記録も、少ないサンプル数ながら得られている。さらに祝い歌に関しては、「嫁入り歌」が比較的多くの地域で伝承されている点や、「舟おろし歌」「船謡」「權揃え歌」が日本海沿岸地域に分布している点などを特色として指摘することができる。

ここでまず、各市町村において調査収集された歌を種別ごとにまとめてみると、次頁のようになる。

これらのうち、特に労作歌、祭り歌・祝い歌、踊り歌・舞謡については細目を通観し、今回集められた情報をもとに簡単な説明を加えておきたい。



瑞穂町		大和村		邑智町	川本町	江津市		浜田市			市町村	種別	
酒造り歌	木挽き歌 田植え歌 白ひき歌 嫁入り歌	木遣り歌	木挽き歌 船頭歌			鋤簾歌	麦打ち歌 横槌歌 白つき(するぎ)歌 權揃え歌	地つき歌 鋤簾歌 鶴亀	あかとり歌 嫁入り歌 ほめ言葉	櫓こぎ歌 舟降ろし歌	苗取り歌 田植え歌 田囃子	白ひき歌 木挽き歌 餅つき歌 神楽歌	労作歌
	盆踊り歌 歌 ニューン 歌	雑歌	地歌 磯節	盆踊り歌	神楽歌		盆踊り歌				盆踊り歌	盆踊り歌	祝い歌
			子守り歌 手まり歌								子守り歌 手まり歌		舞踊り歌
			螢とり歌										座興歌
													子守り歌
													わらべ歌

三隅町	弥栄村	旭町	金城町	桜江町	石見町
地つき歌 木挽き歌 紙すき歌 相撲甚句	田植え歌 木挽き歌 田植え歌 田植え囃子 盆踊り歌	舟子節 そどり歌 地つき歌 鋤簾歌 酒盛り歌	木遣り歌 木挽き歌 地つき歌 相撲甚句	苗取り歌 白ひき歌 木挽き歌	苗取り歌 白ひき歌 木挽き歌
	餅つき歌			田植え歌 嫁入り歌 盆踊り歌	田植え歌 嫁入り歌
		磯節 高い山から こだいじゅ		盆踊り歌 歌 帰村歌	盆踊り歌
		子守り歌 手まり歌			
		お手玉歌 手遊び歌 しりとり歌		遊戯歌	

## 一、労作歌

まず農耕に関連する歌の主要レパートリーを占めるのは、稲作の一連の作業に伴う、いわゆる「田歌」の類である。田歌は普通いくつかのサブ・ジャンルに分けられており、苗代から苗を集めるとき「苗取り歌」、田植え作業の際の「田植え歌」、後の雑草取りのときの「草取り歌」などが今回収録されている。それらのうち、特に「田植え歌」には太鼓・笛・鉦などによる伴奏や大きな身振り手振りが付けられることが多い。また、「苗取り歌」と「田植え歌」は先唱と囃子言葉の二手に分かれて交唱的に、そして「草取り歌」は一人もしくは複数による斉唱で歌われる。実際の作業時に歌われていた時期は地域によって異なり、石見町では昭和初期ごろまで、三隅町では昭和三〇年代中ごろまでと言われている。また「田植え歌」の伝播に関しては、明治初期に広島方面から石見町経由でもたらされたという桜江町の報告もある。

農作業に伴う歌のうち、次に多く収録されたのが「臼ひき歌」である。これは麦や稲の脱穀・粉ひき作業のときにうたわれた歌で、二人の作業者の掛け合いによるものが多い。また、江津市の「麦打ち歌」「横槌歌」「するぎ歌」はそれぞれ、麦の穂を竿で打って実を落とし、それを槌で碎き、さらに臼で粉ひきをする一連の作業に伴ってうたわれた歌である。旭町の「草刈り歌」は、牛馬の飼料用の草刈り作業のときに歌われていたもので、近年では、盆踊りの際や座興に歌われることが多いと言われる。

山林での作業に関連する歌としては、「木挽き歌」が多く収集されている。木挽き職人は、例えば大和村では大正初期ごろまで活動して

いたと言われるが、今回収録された「木挽き歌」の中には、そうした木挽き職人自身による作業歌のほか、三隅町の事例のように、近隣の者が互助的に山で伐採作業をする際にうたった歌も含まれている。この場合、歌詞は木挽き職人の歌からの借用が多くを占めている。いずれの歌も、歌い方は交互唱で、歌詞は卑猥な内容を含んだものが多い。弥栄村には、明治以前に広島方面から「木挽き歌」が伝えられたと言われている。

漁撈に関する歌は三種類ほどで、いずれも浜田市で収集されている。そのうち「櫓こぎ歌」は、浜田市瀬戸ヶ島の女性たちが和布とりの際にうたっていた歌、「あかとり歌」は、船底に溜った海水を数人が手押しポンプなどを使って汲み出す時にうたっていた歌である。「あかとり」作業は「あか汲み」とか「あかひき」とも呼ばれていた。また「さば割り節」は、一刻を争うさばの塩蔵作業の際に歌われていたもので、北前船の船頭たちによって伝えられた歌と言われている。大正中期以降の冷凍保存法の発達に伴い、この歌が作業歌として歌われることは今日まずない。

諸職に関連した歌については、「地づき歌」「鋤簾歌」「紙すき歌」「そどり歌」「酒造り歌」の五種類の歌が報告されている。「地づき歌」は、家を建てる時、柱の土台となる部分に小石を入れて地固めする際に歌われていたもので、近隣総出の多人数による作業の中、一人が先唱し、他の者が囃子言葉を唱和する歌い方をとっていた。「鋤簾歌」は、鋤簾（長い柄の先に竹ざるや鉄歯を鉄状に取り付けた道具）を使って、瓦や素陶器製作用の粘土から石や混ざり物を選び分けたり、

粘土を練ったりする作業の際にうたわれた歌である。「紙すき歌」は、かつて各家庭で行われていた紙すきのための諸作業（原料となるこうぞの皮剥ぎ・たたき・漉<sup>す</sup>きなど）が、やがて共同作業場で行われるようになり、多人数で作業をしながら歌われるようになったものである。三隅町では昭和二十年ごろまで歌い継がれていたと言われるが、作業人口の減少と機械の導入に伴い、現在では作業歌として歌われることはない。また、旭町の「そどり歌」は、特にこうぞの皮を剥ぐときに交唱的にうたわれた歌である。瑞穂町の「酒造り歌」は、一見杜氏を題材にした戯れ歌風の歌詞を持っているが、酒造り用の麴を混ぜる素摺<sup>もす</sup>り作業のときにうたわれる歌だと報告されている。

最後に交通運搬に関連した歌としては、「船頭歌」と「木遣り歌」が収集されている。大和村の「船頭歌」は、船こぎの最中や船への荷揚げのときにうたわれた歌であるが、船こぎ歌の方は明治大正期に特に流行した歌で、船作業以外のときにも盛んに歌われていたと言われる。また金城町と大和村の「木遣り歌」は、歌詞内容からして、かつて家の建材や枕木材を運搬した専門の木遣り職人による作業歌と考えられる。

## 二、祭り歌・祝い歌

「田植え囃子」（あるいは「田囃子」「田楽囃子」）は、本来田植え作業に伴う歌であったものが様式的に整えられ、早くに田植え自体から分離して神社の祭りや各種行事の中に組み込まれるようになったもので、近年まで伝承されている田植え歌の多くはこの形態をとっている。

る。また中には、川本町の田植え囃子のように、始めから祭事のための祝い歌として創作されたものもある。

「餅つき歌」は、さまざまな祝儀用の餅作りのときや棟上げ式のとき、あるいは種々の祝いごとでの独立した祝い歌として歌われることが多い。そのため、作業歌としてよりはむしろ、祝い歌としての性格の方が強いと言えよう。三隅町ではかつて、招待を受けた祝いの席を立つときに、「餅つき歌」を歌ってから帰ることもあったと報告されている。

「舟降ろし歌」は、舟の建造に取りかかる前と、完成後、舟を水に降ろす前にそれぞれ行われる儀式の際に歌われる。歌い出しは一人で、後におおぜいが唱和する歌い方が一般的である。江津市の「船謡」は、北前船の船頭たちの歌が元歌と言われ、正月の通夜ごもり（船主や船頭、船大工たちが集まって酒盛りをする）や結婚式などで歌われる。また同じく江津市の「權揃え歌」は、山辺神社の水上演習祭（江津祇園祭）の中日（毎年七月一四日）に、江川にくり出す御輿の權こぎの動作や船上で踊られる權振り踊りなどに合わせて歌われる朗唱的な掛け声歌である。

報告事例の多い「嫁入り歌」（多くの地域で「祝入り（歌）」とも呼ばれている）は、かつての婚礼における嫁入りの過程に付随して歌われたもので、嫁が生家を出発するとき、行列をなして婚礼道具を運ぶ道中、婿の家に着いたとき、婚礼道具を引き渡すとき、そして相手方がその荷物を受けとるときなど、場面場面に応じて異なる歌詞内容を持っている。婚礼の風習の変化に伴って、近年ではほとんど行われる

ことのない歌唱慣習であるが、三隅町では、寺の入仏式や公共建造物の落成式の際に、大きな紅白の餅や樽、肴などを担いで練り歩き、祝意を表わすのに現在でもこの歌がうたわれることがあると言われる。また、褒め言葉（褒め口上）というのは、来訪者による祝い言葉の朗唱を指しており、結婚式や家の新築祝いなどのときに耳にすることが出来る。

三隅町などに伝わる「相撲甚句」は、さまざまな祝儀の席での祝い込みのときに歌われるもので、髻かつらに化粧回しをつけたおおぜいの人間が、円陣を作って踊りながらこの歌をうたう。三隅町には、明治末期ごろに浜田市日脚地区の人がもたらしたと言われている。

### 三、踊り歌・舞謡

この項には「盆踊り歌」と「神楽歌」が含まれているが、「神楽歌」に関しては、浜田地区におけるその種類の多さとレパトリーの膨大さのため、今回の調査対象からは予めはずされていたことを断っておきたい。

ほとんどの市町村から報告がなされている「盆踊り歌」については、特に口説の文句と節回しにおいて、地域ごとあるいは個人ごとの細かなヴァリエーションは認められるものの、歌（口説）と踊りの基本的形態や口説の主要レパトリーなどはほとんど類似している。基本的形態として挙げられるのは、男女を問わず常に一人が歌い（何人かが交替で歌い継ぐこともある）、踊り手たちが合いの手を入れる点、歌と踊りの伴奏に太鼓一台（稀に拍子木や鉦が加わる）が用いら

れる点、踊り手たちが輪状形態をとって、歌い手の位置するやぐらの周囲をゆっくりとした動作で踊りながら回る点などである。また今回収録されたレパトリーとしては、「鈴木主人」「安珍清姫」「阿波鳴戸巡礼」といった口説が比較的多くの地域に共通しており、わずかに浜田市の「津和野しんばん口説」に、歌の伝播という点での地域的特色を見ることが出来る。（山田陽一）

### 参考文献

- 西岡光夫・酒井董美 『石見の民謡』今井書店 昭和41年。  
牛尾三千夫 『大田植と田植歌』岩崎美術社 昭和43年。  
水野信男 「島根の民俗音楽(Ⅰ)」山陰文化研究紀要 第10号。  
石塚尊俊 『日本の民俗——島根』第一法規出版 昭和48年。

# 浜田地区調査民謡

## 浜田 1

名 称 苗取り歌  
 伝 承 地 浜田市内田町  
 伝 承 者 森 ナヲ M32年生  
 調査員氏名 小笠原好助

〱朝日長者の大友侯がささぎよまいたる手合いは

一房に千石千才 なれよとまいたる手合いは

〱青い苗を取るには 元もとに手を入れてな

うらうらとなびかせて 元もとに手を入れてな

〱あさおの子がらすが露に しょんぼりぬれてな

うらうらと鳴いて通る 露にしょんぼりぬれてな

## 浜田 2

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 浜田市佐野町  
 伝 承 者 岡本 俊信 T4年生  
 調査員氏名 小笠原好助

〱今日の日和に田植えをすれば 秋の実りはよいほどに

〱今年やよい年 恵みの年よ 恵比須大黒舞い込んだ

〱あなた百まで わしゃ九十九まで ともに白髪の生ゆるまで

〱あなたみたよな牡丹の花が 咲いております来る道に

〱わしとあなたは茶碗の響き いつが別れになるじゃやら

## 浜田 3

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 浜田市内田町  
 伝 承 者 森 ナヲ M32年生  
 調査員氏名 小笠原好助

〱植えて三尺 穂に出て五尺 さても見事な 早や早稲を

早や早稲を さても見事な 早や早稲を

〱歌は歌いたし 歌の節ふしや知らず

今度江戸へ行きや 節ふしを習う

節を習う 今度江戸へ行きや 節ふしを習う

〱歌のご先生が居おられるとは知らず

歌を出したら ごめんなされ

ごめんなされ 歌を出したら ごめんなされ

〱桜三月 菖蒲は五月 咲といて歳としとる 梅の花

梅の花 咲いて歳とる 梅の花

## 浜田 4

名 称 白ひき歌  
 伝 承 地 浜田市内田町  
 伝 承 者 森 ナヲ M32年生  
 調査員氏名 小笠原好助

〱白をひけひけ だんごして食めわしよ

ひかにゃ 冷や飯めしまた茶漬

〱白をひく夜にゃ 必ずおじゃれ

重か手伝しよと言ておじやれ

〱白がいやさにそうめん屋を出たら

生まれやいかなまんじゅう屋へ

〱まんじゅう屋にこそよい嫁娘 どれが嫁やら娘やら

〱嫁と娘は一目見りやちがう 娘白歯で 髪かみや島田

浜田 5

名 称 木挽き歌

伝 承 地 浜田市佐野町

伝 承 者 岡本 俊信 T4年生

調査員氏名 小笠原好助

〱ヤーレー 涙ながらに 挽いたる板は

やっと出来たよ三間半

〱ヤーレー 木挽きや女房になるなよ娘

木挽き息ほよひく早う死ぬる

〱ヤーレー やっと 習うたる この木挽き

早く死ぬとは なさけなや

浜田 6

名 称 櫓ふなこぎ歌

伝 承 地 浜田市瀬戸ヶ島町

伝 承 者 前本 チエ M34年生

調査員氏名 小笠原好助

〱ヤーレ やめておくれよ船乗り稼業は ヨーエ

ヤレ 色は黒なる ノーサ 気は荒くなるヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ 何で船乗りやめらりよか ヨーエ

ヤレ 沖にや万両の ノーサ 金があるヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ 新造造りて 何積みましょか ヨーエ

ヤレ こぶ積みましょ ノーサ 喜ぶをヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ 金をもうけた 去年よりや今年 ヨーエ

ヤレ 千里小浜の ノーサ 砂の数ヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ 舟も舟子も 舟魂様も ヨーエ

ヤレ 御苦労なされた ノーサ 沖の瀬にヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ 沖の暗いのに 白帆が見える ヨーエ

ヤレ あれば紀の国 ノーサ みかん舟ヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ お山おろしの 生木の櫓ふなでも ヨーエ

ヤレ あなた見て押しや ノーサ 櫓ふなが軽いヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

〱ヤーレ 押して上れば 音戸の瀬戸で ヨーエ

ヤレ 押せば都が ノーサ 近くなるヨ

ヨイ ヨイ ヨイ

※囃子詞(アリア押すわい かくわい 音戸の瀬戸だよ)

浜田7

名称 あかとり歌  
伝承地 浜田市瀬戸ヶ島町  
伝承者 前本 チエ M34年生  
調査員氏名 小笠原好助

色は黒なる気は荒くなる ヨイヨイ

やめておくれや ササ 舟乗りを

アリヤ ヨーイヨイ ヨイヨイヨイ

アリヤリヤン コリヤリヤン ヨーイトナー

(アア 爛せい 飲むよ)

船も船子も船魂さまも ヨイヨイ

ご苦労なされたかた沖の瀬に

アリヤ ヨーイヨイ ヨイヨイヨイ

アリヤリヤン コリヤリヤン ヨーイトナー

(アア 爛せい 飲むよ)

浜田8

名称 さば割り節  
伝承地 浜田市瀬戸ヶ島町  
伝承者 前本 チエ M34年生  
調査員氏名 小笠原好助

鯖は食いかせー 浜田の沖にー

あかねだすきで ヨーイヤナー 鯖を割るヨー

鯖は取りたて 浜田の沖にー

あかねたすきに ヨーイヤナー 鯖を割るヨー

急げ早よ行けー 生魚の船頭ー

一夜遅けりや ヨーイヤナー 値が下がるヨー

麦は熟れるなり 鯨船にやいぬるー

何を頼りに ヨーイヤナー 麦を刈るヨー

浜田9

名称 地づき歌  
伝承地 浜田市佐野町  
伝承者 佐々木倫市 M43年生  
調査員氏名 小笠原好助

ハーヨーイヨイ ヨーイヤナ アリヤリヤ

コレワイセ サーナンデモセー サンヨ サンヨ

祝いめでたよ 三つ重なりて ヨーイヨイ

末はナー鶴亀ナント五葉の松 (クク)

祝いめでたの若松様よ ヨーイヨイ

枝がナー栄えてナント葉も茂る (クク)

これのお家は昔から繁盛 ヨーイヨイ

今はナー若世でな お繁盛 (クク)

親の意見と茄子の花は ヨーイヨイ

千にナー一ツのナント無駄はない (クク)

恋し恋しと鳴くせみよりも ヨーイヨイ

鳴かぬナー螢がナント身を焦がす (クク)

へわらじ切れても粗末にやするな ヨーイヨーイ  
菓はナーお米のナント親じゃもの (ク)

浜田10

名称 地つき歌  
伝承地 浜田市元浜町  
伝承者 橋野アキノ T5年生  
調査員氏名 小笠原好助

へこれのお家は昔からよいが アーヨイヨイ  
今は若代ハアーなおよかろう

アリヤヨーイヨーイヨイヤナ  
アリヤリヤ コレワイセー サーナンデモセー  
アーサンヨジャ アーサンヨジャ

へこれの親方だんごか餅か アーヨイヨイ  
もちはナーアーもちだがアリヤ金持ちよ (ク)  
へめでためだが三つ重なりて アーヨイヨイ  
末はナーアー鶴亀アリヤ五葉の松 (ク)

浜田11

名称 地つき歌  
伝承地 浜田市内田町  
伝承者 森 ナヲ M32年生  
調査員氏名 小笠原好助

へ恵比須大黒 ヨイヨイ 出雲の国の ヨーイヨイ

西と東のアノ守り神

アリヤ ヨーイヨーイ ヨーイヤサ  
アレワノサ コレワノサ サーナンデモセー  
サンヤノ サンヤノ

へこれの親方 ヨーイヨーイ だんごか餅か ヨーイヨイ  
もちはもちだがアノ金持ちだ (ク)  
へこれのお背戸に 茗荷と露と ヨーイヨイ  
茗荷めでたやアノ露繁盛 (ク)

浜田12

名称 鋤簾歌  
伝承地 浜田市長沢町  
伝承者 寺前 広一 T2年生  
調査員氏名 小笠原好助

へほれちゃだめだよ瓦師<sup>かわら</sup>さんにゃ 瓦切るより思い切る  
へわたしの主<sup>ぬし</sup>さんは瓦師さんよ 瓦屋根見りゃ思い出す  
へ歌を歌うにも時分がござる 晩の上がりか昼前か

浜田13

名称 田囃子(祭り歌)  
伝承地 浜田市佐野町  
伝承者 山田 令二 S16年生  
調査員氏名 小笠原好助



(田植え歌)

へおもしろい声をする あれは何の声やら

アリヤ 恵比須大黒の俵まくる声やれ

へ京都の町の乙姫は はかま裁ちが上手な

アリヤ 八重に裁ち 八重に縫い 八重にひだをとるとな

へ沖の東海 櫓の上にとまる鳥は何鳥

アリヤ 口や錦にしゃれんげ羽根の白い鳥をな

へ京都の川の上の瀬に稚子が笛を落とした

アリヤ やなをせきやなをせき やなに笛がかかるぞ

へ代かきは上がつたが 駒はどこへつないだ

アリヤ うねを越え 谷を越え 下がり松へつないだ

へわしやあ京へ上るがよ とぎはござるまいかな

アリヤ わしがもとの才太郎を連れて上りゃんせな

(三拝降し)

へ三拝のヤーアリヤ 高天たかまの原で昼寝して

昼寝してヨーアリヤ 思いの殿御を夢見たる

へ三拝のヤーアリヤ 頼まれ月はこの月

ここの月とヤーアリヤ 十月となりては生まれくる

へ三拝のヤーアリヤ 生湯のたらいは何だら

何だらいとヤーアリヤ 白金だらいに黄金のしゃく

へ三拝のヤーアリヤ とりあげばばはどこ

どこのばばとヤーアリヤ 大和の国の千代の母

へ三拝のヤーアリヤ 生湯の小袖は何小袖

何小袖とヤーアリヤ 白むく小袖に綾の組

へ三拝のヤーアリヤ どこからござるか宮の方から

宮の方からヤーアリヤ 芦毛の駒で宮の方から

(あげこ)

へ手綱ゆりかけ 芦毛の駒で

あれさ やれまた 芦毛の駒で

へあげこ知らんのは 尾のない鳥よ

あれさ やれまた 尾のない鳥よ

浜田14

名 称 餅つき歌(祝い歌)

伝 承 地 浜田市佐野町

伝 承 者 岡本 俊信 T4年生

調査員氏名 小笠原好助

へハアー 祝いでたな 三つ重なりて 末は鶴亀 五葉の松

へハアー 坂で転んで 大黒様を拾うた

しかも子ねの日の子ねの刻に

へハアー 餅をつくなら 一石二石 二斗や三斗は口よこし

へ庭じゃ餅つく 表じゃちぎる 中の四畳半じゃ金かたよはかる

へこれのお家のお棟の破風はふにや 鶴が巢をかけ御所鶴が

へなんと行ってかけた お家繁盛と言ってかけた

へこれのお背戸にや 茗荷と路と 茗荷めでたや 路繁盛

へヤンサンサと 沖こぐ舟は 女郎が招けば 磯に寄る

へ女郎が招くとも磯には寄るな 女郎は化けもの昼狐

浜田15

名 称 餅つき歌(祝い歌)  
 伝 承 地 浜田市元浜町  
 伝 承 者 橋野アキノ T5年生  
 調査員氏名 小笠原好助

へお前ナー百まで わしや九十九まで ヤンサヨ

ともにヤナー白髪のアリヤ生ゆるまで

ヤンサヨー ヤンサヨー

へこれのナーお庭の榎の枝に ヤンサヨ

榎実ならずのアリヤ金がる ヤンサヨー ヤンサヨー

へ祝いナーめでたの 若松様よ ヤンサヨ

枝もナー栄えてアリヤ葉も茂る<sup>しげ</sup> ヤンサヨー ヤンサヨ

浜田16

名 称 船おろし歌(祝い歌)  
 伝 承 地 浜田市元浜町  
 伝 承 者 浜角 益市 T2年生  
 調査員氏名 小笠原好助

へ新造つくりて 沖乗りゆすればナー

ともにヤ大黒 表にヤ恵比須ナー 中にヤ船魂 福の神

上から鶴が舞い下がる 下から亀がはい上る

鶴と亀とが舞い遊ぶ 鶴は千年 亀はまた

万年末代いつまでも 続くこの船 さてもめでたいな

イエヤーヨーエ お祝い

浜田17

名 称 祝入り歌(嫁入り歌)  
 伝 承 地 浜田市佐野町  
 伝 承 者 佐々木倫市 M43年生  
 調査員氏名 小笠原好助

(祝入り歌)

へ長い道中はるばる来たが 早くご門の戸を開けて

門に門松小庭に蘇鉄 祝いなされよ嫁御様

これのお背戸にヤ茗荷と蒔 茗荷めでたや蒔繁盛

(内より引き受けの歌待ち歌、または祝入りで受ける場合)

へ荷物そろえて受け取ります 奥の一間に納めます

(人足祝入り)

へ奥の一間に納めた荷物 二度と再び出さぬよう

(花嫁が生家を出るときの祝入り媒酌人または人足がうたう)

へ今日は日もよし天気もよいし 結びナー合せてハ縁となる

(花嫁の代人がうたう)

へさらばナー行きます<sup>ふたおや</sup>両親様よ

永のナーお世話にハ一になりましたヨ

(親)

へ故郷恋しと思うな娘 故郷この世の仮の宿

(花嫁代人)

へさらば行きます皆様さらば 永のお世話になりました

(人足)

へ家をナー出るときやハ一涙が出たが

今度ナー来るときやハー客で来るヨ

〽ここは大坂四七曲がり 足がだるかるう徒歩かちの衆

〽あれに見ゆるは我が行く里か 我が家思えば懐かしや

〽ここがねナーハー銭すだれヨ 蝶よ花よと育てた娘

荷物ナーそろえてハー渡がすよ

奥のナー一間にハー納めた荷物

二度とナー再びハー出さぬよに

浜田 18

名 称 褒め言葉(祝い歌)

伝 承 地 浜田市元浜町

伝 承 者 橋野アキノ T5年生

調査員氏名 小笠原好助

〽待った待った 待たしやんせ 褒める口上は知らねども

酒の肴にチョイト褒めやんしょう これのお蔵の白ねずみ

一匹、二匹、三匹 末は五匹(ごひいき)に願ひ上げます

浜田 19

名 称 鶴亀(祝い歌)

伝 承 地 浜田市元浜町

伝 承 者 浜角 益市 T2年生

調査員氏名 小笠原好助

〽今日 これのお祝いに 鶴亀に 松竹は千代も万代も

さて その外は限りなし 代代 御代は譲り葉の

しめ飾り 一面飾り 曇らせ 向むこは おもかぎり エエハーア

ヨイヤナー いつも常盤の若緑 栄え 栄えて 国々も

島も一つで豊かなる 民のかまどもにぎにぎと イエーイトナー

閉ざさぬ御代ぞめでたいナー ヤーラン めでたか ソーレ

若枝も エン 栄える ノーエ 葉も

浜田 20

名 称 津和野しんばん口説(盆踊り歌)

伝 承 地 浜田市長見町

伝 承 者 木屋 利男 M40年生

調査員氏名 小笠原好助

〽そろうたそろうたよ踊り子がそろうた

稲の出穂よりなおよくそろうた 今年み仏なられた方の

苦労かんなん追善供養 老も若きもみなよいよいと

はやくださりや少しの間 下手な音頭にゃはやしが大事

頼みまするよよろしきように さればこれより文句を語る

〽今度津和野のしんばんくどき 佐々木三郎という侍の

それが息子に栄三というて 年は十九で総前髪で

太刀を差させて袴かみしもを着せて 殿のご門に立たせてみれば

器量姿は世に並びなし 色の白さは初雪勝る

裏と向かいに升屋というて 升屋娘にお伝というて

年は十六今咲く花よ 立てばしゃくやく すわればぼたん

歩む姿がはや百合の花 あすはお初のお薬師参り  
 参り合わせた薬師の前で 一目見たとき花とも見たが  
 二目見るよりはや悪となる 鹿の巻き筆ようやく染めて  
 愛の使いは寺中間ちゅうげんよ 栄三郎様にと届けたところ  
 愚か言うなよ のうお伝殿 私は今年はお江戸の御番  
 主の言いつけきかねばならぬ 広いお江戸に赴くからは  
 狭い津和野に心は置かん そこで娘ごが腹立てられて  
 手ふり足ふり鍛冶屋に通い こんな鍛冶さん頼みがござる  
 何か言わしゃれかなえてしんじよ 帽子ない釘二十一頼む  
 親の代から鍛冶するけれど 帽子ない釘 のろいの釘よ  
 そんな釘をばこの鍛冶打たん そこで姫ごが言われしように  
 金はいくらもさし上げまする 金に目をかけたかの鍛冶さんに  
 打つてもろうて袂に入れて 手ふり足ふりわが家に帰り  
 腹に五本逆さに立てて 胸まなこに八本眼まなこに二本  
 残る釘をば我が氏神に 枕取り寄せ眠るがごとく  
 思う念力岩をも通す いさい語れば数々あれど  
 あまり長いは何れにおじやま ここらあたりで収めまする

浜田 21

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 浜田市内田町  
 伝 承 者 森 ナヲ M32年生  
 調査員氏名 小笠原好助

へ坊やおうちの柿の木に チュンチュク雀が巢をかけて  
 もろこし団子によう似てる お卵たまごを三つ産みました  
 母さん雀がだっこして 毎日腹はらに入れてます  
 雨こんこん降るな風吹くな かわいや坊やは泣こうもの

浜田 22

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 浜田市内田町  
 伝 承 者 森 ナヲ M32年生  
 調査員氏名 小笠原好助

へ一つ人々礼儀が大事 二つ二親孝行が大事  
 三つ皆さん辛棒が大事 四つ世の中開けて繁盛  
 五ついつまで養生が大事 六つ村里しらいが繁盛  
 七つ何より稼ぐが大事 八つ山には草木が繁盛  
 九つ子どもしは学校が大事 十でとやとしや五穀が繁盛  
 さてさておめでたや あやかりな あひかりな

江津 1

名 称 麦たたき歌(麦打ち歌)  
 伝 承 地 江津市和木  
 伝 承 者 今田さきの M29年生 他5名  
 調査員氏名 工通 忠孝

へ麦は熟れるし やたま衆は戻る 何を頼りに 麦たたく

へ船は見たが 船頭さんは見えぬ 船頭 おもてのやほの蔭  
 へ沖のかもめに 潮時間えば わたしや 立つ鳥 波に聞け  
 へ泣いてくれるな 出船のときは 沖でろかいが 手につかぬ  
 へ和木の真島は 田舎じゃ名所 出船 入り船 絶え間ない

江津 2

名 称 横槌歌  
 伝 承 地 江津市和木  
 伝 承 者 今田さきの M29年生 他5名  
 調査員氏名 工通 忠孝

へ仕事をナー 出したらナー 歌出せおなごヨー  
 仕事ナ 苦にするナ ヤンサー おなごめがヨー  
 へ江津ナー 沖田屋にヤナ 升で金量るヨー  
 升じゃナ 量らぬナ ヤンサ 斗ではかるヨー  
 へ浅利ナー ながら屋のナー 小庭の蘇鉄ヨー  
 やらいナ 外からナ ヤンサ 見たばかりヨー  
 へ和木のナー 小川のナー 雪舟の庭にヤヨー  
 鶴とナ 亀とがナ ヤンサ 舞い遊ぶヨー  
 へこれがナ 名残のナ しまいの庭だヨー  
 歌いナ 神楽でナ ヤンサ舞い上げるヨー

江津 3

名 称 臼つき(するぎ) 歌  
 伝 承 地 江津市和木  
 伝 承 者 今田さきの M29年生 他5名  
 調査員氏名 工通 忠孝

へ麦ついて 手痛 肩痛 夏機 織れば 腰痛  
 へ長浜は 働けどころよ 船頭さんに 豆売ろう  
 へ豆の釣りだと 追いつめ 追いつめ  
 女房焦がれた 五文の銭に 焦がれた

江津 4

名 称 鋤簾節  
 伝 承 地 江津市有福温泉  
 伝 承 者 大屋助四郎 M41年生  
 調査員氏名 工通 忠孝

へヤレ 鋤簾をしだしたら 歌出しなされ  
 ヤレ 鋤簾苦にやのて楽でする  
 ヤレ サイケ サイケ サイケ サイケ  
 へヤレ 歌をヨー 歌えと せきたてられて  
 ヤレ 歌は出もせぬ 汗が出る  
 ヤレ サイケ サイケ サイケ サイケ  
 へヤレ 歌をヨー 歌えや 声はりあげて  
 ヤレ 歌うてご器量が下がりやせぬ  
 ヤレ サイケ サイケ サイケ サイケ

へ歌をヨー 歌うて 器量が下がりがや

七一関の女郎衆はみな下がる ヤレ関の女郎衆はみな下がる

ヤレ サイケ サイケ サイケ サイケ

江津5

名称 江津船謡(祝い歌)

伝承地 江津市江津町

伝承者 木谷 宗清 M41年生 他9名

調査員氏名 工通 忠孝

(謡い出し)

へヤンラー めでたいノーエー

ノーエー ソーレー若枝もエー

栄える ノーエー 葉もエー

(新造)

へ新造降ろして 沖乗り見ればイナー

舳に大黒 表にや 恵比寿イナー 中に船魂 福の神

エー 七福神が ハー 乗り遊ぶ 祝うエー

(江津港)

へサラサラトー 江津港を漕ぎ出して

エー 主の神の 教えには 江津浜田を後に見て

須佐の高山伏し拝み お山おろしを帆に受けて

明日は長門の浦伝い 花の岬や角島を

すぐにやりましようヤー 下関までもイナー

下関から五十五里下のイナー

どれが平戸の九十九島やらイナー 祝うエー

(謡終)

へめでたいノーエー ノーエー ソーレー 若枝もエ栄える

ノーエー 葉もエー

江津6

名称 ヤンセ踊り(盆踊り歌)

伝承地 江津市二宮

伝承者 平川 繁美 S9年生 他1名

調査員氏名 工通 忠孝

へヤンセー 来るか来るかと川下見れば ヨー ネエサン

川原よもぎのヤレノーエーサ 影ばかり

へヤンセー 主はジャンギリわしや 投げ島田 ヨー ネエサン

早く 丸鬚 ヤーレノーエーサ 主のそば (以下略)

川本1

名称 三原小笠原流田植え囃子(祭り歌)

伝承地 川本町三原

伝承者 板根 多輔 M34年生

調査員氏名 山口 定夫

へのおばわらを手に持ちて 沖の三斗田にな

どうの田に方りようかと 沖の三斗田にな

アリヤ三田にや 米広がりて アリヤソオレヨノ  
 米広がりて 卯の花早女が 降りて苗取らばな  
 桜色の殿ばらも 降りてはやせかのせな アリヤ卯の花  
 七色咲いたり アリヤソオレヨノ 七色咲いたり  
 浜田の橋の下見れば こいかやふなかやはえの子が  
 こいかやふなかを漁師に問うたて  
 アリヤソオレヨノ漁師に問うたて 座頭京に上るなら  
 こんのうみもの ふきのと笹のと しゅんでなみの太鼓と  
 八つをのしゅらべし 錫杖に鉦 座頭京に上るなら  
 琵琶箱は置いて行け もしもてんねんどうでなら  
 つるりやつるりやてんつるりん ともしも慰みおろうや  
 琵琶ようよう 小琵琶ようよう 琵琶どこに置いてきた  
 ゆんべの泊まりの 東のでいのおでいの  
 太郎上に小琵琶めて とーがなかにけりやれ  
 アリヤ琵琶の弾くに弾かれぬ めんめいざらりと  
 アリヤそおれよー めんめいざらりと 小谷渡しの  
 つづかずらをば いとし殿御の締め緒のかずら  
 高山つづら 切り降ろせつづら 切り降ろいて何しよな  
 あじよだきよいをや すりの上手が我らが前で  
 えすらざるもな我らが前で 弟嫁にはなるがごふしよで  
 倉屋の筒ぼで アリヤそれよの倉屋の筒ぼで

邑智1

名 称 平佐口説(盆踊り歌)  
 伝 承 地 邑智町築瀬  
 伝 承 者 青木 一男 S11年生  
 調査員氏名 尾原 芳人

ハー 今度 津軽の城下の町の (A)ヨイヤセーコラセ

さきさんとて 侍育つ (B)ハーヨイ ハーヨイ ヨイヤナ

ハー 総領息子 平佐というて (A)

器量の良いこと 世に並びなし (B)

ハー 器量の良いこと 例えて言えば (A)

(以下略)

瑞穂1

名 称 白ひき歌  
 伝 承 地 瑞穂町市木  
 伝 承 者 横田アサヲ M35年生 他1名  
 調査員氏名 河野 頼人

ハヤレエ ヤーレ 白をひけひけ

ヨイヤレ ドーナラ ドーナラ だんごして食わすよ

白をひかねばまたまた おけじゃアアア

(注 米、大豆をいり、大根、ジャガイモ等一緒に炊いて食べる)

ハヤレヤレ ドーナラドーナラ

今晚やこの白引上げてしもうて(注 納めて)

鳥をさかそに出て忍ぶ

へヤールエ ヤール 白をひくには大輪に丸に

白のがくひきや 未<sup>すえ</sup>遂げん

瑞穂 2

名	称	木挽き歌
伝承地	瑞穂町市木	
伝承者	横田アサヲ	M35年生 他1名
調査員氏名	河野 頼人	

へヤール木挽きさんたちや 二<sup>げん</sup>間木の上で

とびやからすのま<sup>(まねを)</sup>によなざる

へヤール木挽き女房<sup>にようぼ</sup>にや行くなや妹

木挽き身をもむ 早よう死ぬる

へヤール木挽き女房にや行くなと言うたが

お前が行かねばわしが行く

へヤール木挽きさんたちや一<sup>めし</sup>升飯食うて 松の元木で泣いたげな

瑞穂 3

名	称	酒造り素摺り歌 (労作歌)
伝承地	瑞穂町市木	
伝承者	横田アサヲ	M35年生 他1名
調査員氏名	河野 頼人	

へ酒屋<sup>しやうじ</sup>杜氏<sup>ぢうし</sup>さんをヨー ねんごろにすればヨー

裏の窓から 粕くれる 粕くれる

へ酒屋前通りやヨー チロリが招くよ

チロリ招くな 金がない 金がない

へ酒は飲みたしヨー 酒屋は寝とるよ

起きとる酒屋ナー 借りがある 借りがある

瑞穂 4

名	称	祝入り (嫁入り歌)
伝承地	瑞穂町市木	
伝承者	太平 弘宣	T15年生
調査員氏名	河野 頼人	

(出立ち)

へわたしやナ行きます ハー二<sup>ふたおや</sup>親様よ

長しゆなア お世話に ハーなりましたがよー

(出立ち)

へ門をナー出るとき ハー後<sup>あと</sup>眺むれば

後はナー時雨の ハー雨<sup>あまもよう</sup>模様だよ

(道中)

へここはナー大坂<sup>だいさか</sup> ハー四<sup>しじゆし</sup>十四の曲がり

足がナーだゆかろう ハー重たかろノエー

(道中)

へ<sup>(あそこ)</sup>あん<sup>(あそこ)</sup>にナー見ゆるは ハー殿<sup>やかた</sup>ごの館

様のナー焚<sup>た</sup>く火か ハーともす火かノエー

(嫁の家について)



ハ松をナー迎えた ハー都の松を

しかもナー都の ハー若松だノエー

(荷降し)

ハ長のナー道中を ハー担いだ荷物

渡しナーまするうよー ハーこれ限りノエー

(受側)

ハ長のナー道中を ハー担いだ荷物

もらい受けます ハー床の間にノエー

ハ恋し小川の 鶉の鳥ごろじ 鮎をくわえて 瀬に上る

瑞穂5

名 称 盆踊りハンヤ口説

伝 承 地 瑞穂町市木

伝 承 者 大平イソノ M35年生

調査員氏名 河野 頼人

ハシイヤーホイ ハンヤエー ハンヤ入れてくれ

蚊が食うちゃならぬヨ 入れてあげましょ

ソーレ蚊帳の内へ

踊り踊り踊るならまんまる丸にヨ

空のお月のソーレイ 輪のごとくよ

そろたヨそろたそろたヨ 踊り子がそろたよ

稲の出穂よりヤソーレ よくそろたよ

踊り踊るには腰揺れ女子ヨ

腰を揺らねばソーレ しながいよ

踊り踊るならお寺か宮かヨ

踊る踊るもソーレ 後生願うよ

お月や山辺にすまる星や西にヨ

思う殿御はソーレ 真中によ

いつもヨ 十五日が盆ならよかるヨ

踊る振りしてソーレ さまに会うよ

去年八月おられたさまがヨ

今年灯笼でソーレ 灯がともるよ

盆が来たとてうれしゅはないヨ

組のかたびら着るじゃなしよ

あなた百までわしや九十九までヨ

ともに白髪のソーレ 生えるまでよ

今年豊年穂に穂が咲いてヨ 道のご草にソーレ 米がなるよ

さまが踊るなら踊りとてならぬよ

この子抱き取れソーレ 出て踊るよ

盆のヨ盆の十五日に踊らぬものはヨ

ねこかねずみかソーレ 空立つ鳥かよ

(前くどき)

されば東西静まり給え 静かまれとはごりよがえなれど

わしのくどきよあぶないくどき 声は悪いし節やゆきませぬ

声の悪いはもと生れつき 節の行かぬはご師匠がないで

竹の丸橋丸歯の下駄で かららからと渡るがごとし

どこで落ちるかこけやうかも知れぬ  
 もしか落ちたら音頭衆に頼む  
 頼みまするよ踊り子様よ さればこれからくどきにかかる  
 わしのくどきはもうこれまでよ(後くどき)  
 頼みまするよ次の御先生様よ

瑞穂6

名 称 シュッシュユ歌(座興歌)  
 伝 承 地 瑞穂町市木  
 伝 承 者 横田アサヲ M35年生 他1名  
 調査員氏名 河野 頼人

〽シュッシュユどころか 今日このごろはナントシヨ  
 五錢たばこも 買いかねるシュッシュ  
 五錢たばこも 一度にヤ 買わぬナントシヨ  
 二錢五厘で二度に買うシュッシュ  
 〽シュッシュユどころか 今日このごろはナントシヨ  
 五厘まんじゅも 買いかねるシュッシュ  
 五厘まんじゅも 一度にヤ 買わぬナントシヨ  
 二文五分ずつ二度に買うシュッシュ

石見1

名 称 苗取り歌  
 伝 承 地 石見町矢上  
 伝 承 者 森脇 芳一 M39年生 他3名  
 調査員氏名 吉田 健司  
 〽ヤールヤレ 苗をよう取る 木登り ヨーエ  
 (ヨイヨイヤール)

〽ヤールヤレ 今朝の朝草にヤヨー 鎌の柄が ヨーエ  
 (ヨイヨイヤール)

折れて三把遅れた 友達にヤ

〽ヤールヤレ 歌い出いたでヨー 朝草 ヨーエ  
 (ヨイヨイヤール)

刈りを鹿も寝声で ぼけぼけと

石見2

名 称 草取り歌  
 伝 承 地 石見町矢上  
 伝 承 者 森脇 芳一 M39年生 他3名  
 調査員氏名 吉田 健司

〽思案橋から 女郎町見れば 行くや戻るやの 思案橋よ  
 エーイエーイ コーローリトー ヤアールモードン

石見3

名 称	白ひき歌
伝 承 地	石見町矢上
伝 承 者	森脇 芳一
調査員氏名	吉田 健司
	M39年生 他3名

〱白をひく夜にや 必ず来なれ

重か手ごしよと 言うて来なれ

〱白をひくには まんまる丸に 十五夜の 月の輪のように

〱白の頭取りかしらどや 眠りやりやいやよ 白の周りも みな眠るねぶ

〱あなたみたまな ぼたんの花が

咲いちゃいました 来る道に

〱花とよばれりや 咲かねばならず

咲けば実がなる 恥ずかしや

〱来るか来るかと 待つ夜に(注)や来いで

待たぬ夜にや来て 門かどに立つ

(注) こいで≡来ないで

石見4

名 称	木挽き歌
伝 承 地	石見町矢上
伝 承 者	森脇 芳一
調査員氏名	吉田 健司
	M39年生 他3名

〱ヤール 大工さんよりや 木挽きさんがいとし

花の盛りは 笹小屋に

〱ヤール 白いシャツ着て 枝はらかけて

木挽きなざるが わしが殿

三日にや三間食うても怒らぬ きれいな商売

〱木挽き女房いもとにや 行くなや妹

木挽きや身をもむ はよ死ぬる

じやりんこぼっさり 十日に十間

食うて余らぬ きれいな商売

桜江1

名 称	苗取り歌／田植え歌
伝 承 地	桜江町山中
伝 承 者	山下治郎市
調査員氏名	山下 陸男
	T2年生

〱苗の取り始めは先ずさんばいよ

エーンカーレノヤ 先ずさんばいヨ

今朝とうに小がらすが露にしょんぼりぬれてな

うらうらと鳴いて通る露にしょんぼりぬれてな

なんと小がらす 露こぎわけて

エーンカーレノヤ 露こぎわけて

〱苗代にすま行く水をば 舟受けてうるめを乗せてよ

舟を受けてはうるめを乗せてよ

エーンカーレノヤ うるめを乗せてヨ

この苗は若苗たもとに手を入れてな

元のうらにかい投げて元<sup>もと</sup>に手を入れてな

元<sup>もと</sup>に手を入れ取り置きなされ

エーンカーレノヤ 取り置きなされ

朝日さす妻戸う開いてよ 沖見れば黄金のまさじゃよ

朝日さすのは東の山から エーンカーレノヤ 東の山から

日はそそるらつきよなるが 四石まきの苗をば

いつまた もみあぎよか 四石まきの苗をば

この苗をもみあげようにや苗の子稲子はな

どこどこにありようが苗の子稲子はな

苗の子稲子は丹後の島よ エーンカーレノヤ 丹後の島ヨ

稲子十八丹後の島よ エーンカーレノヤ 丹後の島ヨ

(昼出)

植えてすだろうや手に持つ苗を

エーンカーレノヤ 手に持つ苗を

そろたよ そろたよ いち笠がえそろうた

いち笠に 薩摩笠に 大山笠<sup>だいせん</sup>そろうた

なんとそろうた大山笠が エーンカーレノヤ 大山笠が

昼出の笠をばろくに着られ早乙女<sup>そうとめ</sup>

のうばらの蔭になるろくに着られ早乙女<sup>そうとめ</sup>

ろくに着られやのうばの蔭に

エーンカーレノヤ のうばの蔭に

はんえの子うか 浜田の橋の上 下見れば 鯉やら鮒やら

鯉か鮒かと漁師に聞けば

エーンカーレノヤ 漁師に聞けば

早乙女<sup>そうとめ</sup>のできるの<sup>は</sup> からからこそな

笠にかたびらに たすきかけてこそな

たすきかけては はやおがひとつ

エーンカーレノヤ はやおがひとつ

今日植える田の上に渦が舞いそうな

千石もできるようにや渦が舞いそうな

なんと舞います 世にや千石よ

エーンカーレノヤ 世にや千石ヨ

(さんばえの歌)

神にまいろか まずさんばえよ

エーンカーレノヤ まずさんばえヨ

ちはやふるとヤレ神世の昔田の初め

田の初め ヤレこげ石河原を田と名づけ

田と名づけヤレ出雲の鎌で打ち開く

打ち開くヤレ 五穀の苗を植え広め

植えて広めた三把<sup>ば</sup>の苗を エーンカーレノヤ 三把<sup>ば</sup>の苗を

植え広めヤレ 高天<sup>たかま</sup>が原で昼寝した

昼寝したとヤレ 思いの殿を夢に見た

夢に見たかや思いの殿を エーンカーレノヤ 思いの殿を

夢に見たとヤレ つわりの病<sup>びょう</sup>何好む

何好むヤール 西瓜に紅に梅好む

これ好むヤール たなまる月を尋ぬれば

九の月とヤール 十月になれば生まれ来る

生まれ来たかや大和の国に エーンカーレノヤ 大和の国に

生まれ来るとヤール 取り上げばばい どこばばい

どこばばいヤール 大和の国の千代が母

千代が母とヤール 産湯のたらい何だら

何だらいヤール 白金たらいと金びしゃく

金のたらいは大和の国よ エーンカーレノヤ 大和の国ヨ

金びしゃくヤール 産湯の水はどこ清水

どこ清水ヤール 大和の国の岩清水

岩清水ヤール 産湯の小袖 何小袖

何に小袖ヤール 白もく小袖に綾の紐

生まれ来たかや大和の国に エーンカーレノヤ 大和の国に

着せて喜ぶ 五月の端午 エーンカーレノヤ 五月の端午

へさんばいはヤール 今こそ神名を受けられる

受けられるヤール ひみこの宮に移られる

今で神名はまずさんばえよ エーンカーレノヤ まずさんばえヨ

へさんばえのさいばい髪 中を結わねばナ

都目にしたつ 中を結わねばナ

中を結わねば びんだれ髪よ

エーンカーレノヤ びんだれ髪よ

へさんばえの来なるにゃ 綾のこばかまでナ

綾をはいては錦を飾り

綾をはいては 錦を飾り エーンカーレノヤ 錦を飾り

へさんばえはヤールどちから来なる宮の方から

宮の方からヤール 芦毛の駒に 手綱揺りかけ

手綱揺りかけ 早いのが駒よ

エーンカーレノヤ 早いのが駒よ

へさんばえの来なるには 築山飾れナ

築山飾れば えんのちり取りやれ

えんのちり取りやら 畳ざらり敷きやれ

畳ざら敷きやれば なになほれさんばえ

さてもみごとな 高麗べりよ

エーンカーレノヤ 高麗べりよ

へ座頭京に上るが おんもりものはさい

ふきのとう ささのとうしゅんでなみの太鼓と

やつのうらべし

小琵琶べに 小琵琶べに 小琵琶どこにけ

琵琶ひよいひよい 小琵琶ひよいひよい

小琵琶どこに置いてきた

ゆうべのところのからいたびよしのをでんで

琵琶を降ろすはからいたびよしよ

エーンカーレノヤ からいたびよしよ

(田主の歌)

へ今日 田主の門のかかりごろうち

棟は八つ 棟ひはだよしぶぎな

ひはだよしぶぎや みごとなものよ

エーンカーレノヤ みごとなものよ

へ 今日田主のおふる間を見ればナー

十二のちようしに玉の御湯入れてナー

田主様に参らしようか 玉の御酒入れてナー

酌を取らせて参れやかかの

酌を取らせてまひとつ参れ

エーンカーレノヤ まひとつ参れ

たんとさかなにまひとつゆけや

エーンカーレノヤ まひとつゆけや

酒をついで 帝釈天よ エーンカーレノヤ 帝釈天よ

飲んで勇めばしようこの殿よ

エーンカーレノヤ しようこの殿よ

へ 今日のヤール 田主の背戸の泉水池

泉水池ヤール 鯉、鮒、すずき、ますの魚

ますの魚くるさんざの波よ

エーンカーレノヤ さんざの波よ

田主様の背戸の倉ざり開けて見ればナー

光輝く 明星ほしか 螢か

光輝く 明星のほしよ エーンカーレノヤ 明星のほしよ

へ 今日 田主の田のさご植えてナー

八棟の倉を立て徳を招いたよナー

徳を招けば四方に倉よ エーンカーレノヤ 四方にや倉を

(京の町)

京の町神にや参ろや 三者の神に

エーンカーレノヤ 三者の神に

へ わしは京に上るが連れはござるまいかナー

わしがもとの佐伊太郎連れて上れしやんせナー

連れて上りて 京清水に エーンカーレノヤ 京清水へ

京に上る言うて 扇落としたよナー

唐傘道の飾り 扇や夏のものやれ

夏が過ぎたら扇を戻せ エーンカーレノヤ 扇を戻せ

へ 殿様の馬乗り止めてヨ 聞き召す さ声の良い男

なんと 白馬よう乗りとめた

エーンカーレノヤ よう乗りとめた

へ 京の町の乙姫さんははかま裁てが上手な

やおやぬい やよにや裁て やよにやへら といてナー

やおやはかまにや へら九つヨ

エーンカーレノヤ へら九つヨ

へ 殿は京から戻られたが おかか何もち

京で京ぐし 京髪飾りたといがみをもらった

京の土産にたといのかみを

エーンカーレノヤ たといのかみを

(はすま持ち)

へ はすま持ちの来なるのが 赤いかたびらでナー

びらりだらりと赤いかたびらでナー

赤いかたびら 五貫で買うやら

エーンカーレノヤ 買ったがやすい

へはすまどころに はしの台忘れた

御膳元にと はしの台を忘れた

アーヤレ 忘れた 御膳の棚に

エーンカーレノヤ 御膳の棚に

へ酒は来る さかなにやなながよい

ちしやの葉を酢あえにあえてヨ

酒のさかなにや 大鯛七かけ

エーンカーレノヤ 大鯛七かけ

へさんばいの飯炊きに 綾の小ばかまにナー

綾の小ばかまに 綾の紐つけてナー

綾をはいたり 錦のたすき

エーンカーレノヤ 錦のたすき

へさんばいに御酒あげ 混じるにやよひ提げ

やおやひ提げヤレ長柄の銚子で やよい提げ  
御酒をあげるに長柄の銚子で

エーンカーレノヤ 長柄の銚子で

(さんばい上げ歌)

へ今日植えた田友達や 名残惜しや早乙女

ひわいがわらで文書いて 参らしよ

名残惜しやと言うては袖を

エーンカーレノヤ 言うては袖を

へ代じは上りたが 駒はどこへつないだ

うねを越し 谷を越し 下がり松につないだ

うねを越しては 下がり松に

エーンカーレノヤ 下がり松に

へさんばいはヤール 今こそ上がる田主さんへ

田主さんとヤール よい苗植えて福授け

福の種なら三合まいた エーンカーレノヤ 三合まいた

へ洗い川の中の瀬で稚児が笛を落とした

やなせけ やなせけ やなに笛が止まった

なんとやなせけ やなにと笛が

エーンカーレノヤ やなにと笛が

へさんばえはヤール 今こそ上がる西の池

西に池とヤール 西には二つの池がある

池のほとりにかんぼし鳥よ

エーンカーレノヤ かんぼし鳥よ

羽を飾りて さんばえ様に

エーンカーレノヤ さんばえ様に

(日暮れ歌)

へ日暮れの早乙女と春のうぐいすはナー

忍び音を出す春のうぐいすはナー

忍び音を出すうぐいす鳥よ

エーンカーレノヤ うぐいす鳥よ

へ日暮れが闇ならどりよどれ知らいで

光輝く どれをどれと知らいで

光輝く 明星の星は エーンカーレノヤ 明星の星ヨ

へ日も暮れるヤール 西山見れば鮮やかな

鮮やかなヤール 日輪様が舞いよれる(舞っておられる)

お日の入あいすごいなものよ

エーンカーレノヤ すごいなものよ

桜江2

名 称 白ひき歌

伝 承 地 桜江町山中

伝 承 者 山下トシヨ

調査員氏名 山下 陸男

T3年生 他2名

へ白を挽くには まんまるにまるに

空のお月さんの輪のごとく

へ白を挽くには ざんざと挽かれ 白のだま挽きや 末遂げぬ

へ白も車も挽きやこそ回る 挽かで回るは水車みずぐるま

桜江3

名 称 木挽き歌

伝 承 地 桜江町山中

伝 承 者 大場 万市

調査員氏名 山下 陸男

M37年生

へヤレ 木挽きさんたちや 山小屋かけて

ひくはお上の御用の板

へヤレ 鋸が切れませぬ 兄弟子様よ

情けあるなら ひとじゃくみ

へヤレ かしの大木切るのがつらい

鋸の目立ては なおつらい

桜江4

名 称 祝入り(嫁入り歌)

伝 承 地 桜江町山中

伝 承 者 山下治郎市 T2年生

調査員氏名 山下 陸男

へ今日はナー 日もよし 天気もよいし

結びナー 合わせて アー縁となるよ

蝶よナー 花よと育てた娘

今日はナー 他人のアー 嫁となるよ

わたしやナー 行きます 二親様ふたおやよ

長のナー お世話にアー なりましたよ

わたしやナー 行きます 皆々様よ

長のナー お世話にアー なりましたよ

祝いナー みかもつ預かりました

納めナー 置きます アーおきの間によ

連れてナー 行きます 若君様を

納めナー 置きます アー納戸どこ



もだれナー ばなれの宿出のときは  
 ちやーとナー 泣いたよ アー鶴の声よ  
 わたしやナー行きます 若い衆様よ  
 後でナー 立つ名も アー立たぬように  
 ここはナー 大坂 四十四の曲がり  
 足がナー だいかる ハー だんなさまよ  
 だんなさまなら 馬にも名称が  
 足がナー だいかる アー 徒歩かちの人よ  
 瀬田のナー 唐様唐かめぎーごーし  
 水にナー 映りし ハー水鏡よ  
 内(注3)をナー 出るときや 涙で出たが  
 今はナー 我が家の アー さた(注4)もいやよ  
 あれナー うれしや館が見えた  
 見えたナー 館のあーし棟がよ  
 これのナー 御門にや懐かしやないか  
 御門がくぐれば アー懐かしやヨー  
 門にやナー 門松 小庭にや蘇鉄  
 嫁御ナー 祝いのアー 姫小松よ  
 門にやナー橋 お庭にや蘇鉄  
 中のナー 様子をアー 聞きますよ  
 祝いナー みかもつお渡しいたす  
 納めナーください アー 奥の間にヨー  
 連れてナー来ました 花嫁様を

納めナーください アー納戸どこヨー  
 アヤレナー うれしや花嫁様を  
 納めナー 置きます アー納戸どこヨー  
 祝いナー みかもつ受け取りました  
 納めナー 置きます あー奥の間にヨー  
 (注1) ちやーとちやんと(注2) だいかるは体が疲れるだらう(注3) 内家  
 (注4) さたは噂

桜江5

名	山崎三左(盆踊り口説)
伝承地	桜江町山中
伝承者	大場 万市 M37年生
調査員氏名	山下 陸男

へみおこれささくれから イヤサッサイ  
 このお傘もろて イヨイヨイ  
 今日の音頭さんのたばこのなか  
 ああおよ 少々ばっかりの コラサッサイ  
 アラ 声継ぎ頼む ヤーコラヤー ヨイヨイ  
 ヨホエー 今の音頭さんは コラサッサイ  
 アラ いづくのどなた イヨイヨイ 声がよいよい細谷川  
 アーアノヨー うぐいすの声 コラサッサイ  
 アラ あらさのや おもしろや ヤーコラヤー ヨイヨイ  
 ヨホエー わしが声とて

あのあのよにゃないが イヨイヨイ

み声を継ぎましょ 二声 三声を

ヤレコリヤコヤと コラサッサイ

アラ 踊り子様よ セーコラヤノヨイヨイ

ヨホエー 調子そろえて コラサッサイ

アラ 品よく踊れ イヨイヨイ

去年このごろ踊った人もよ 今年お墓のコラサッサイ

アラ 主となりて セーコラヤー ヨイヨイ

ヨホエー だれがその身に コラサッサイ

あらゆるかも知れぬ ヨイヨイ 踊りなされや 踊り子様

アーヨー こちらで合い間をコラサッサイ

アラ ちよつと おいでましょうか セーコラヤーヨイヨイ

はんやよ はんや 入れてごせ コラサッサイ

蚊が食ちやならぬよ 入れてあげましょサーマ

蚊帳の中よ コラサッサイ

これのやー これのお背戸にゃ コラサッサイ

さんざさ よざさよ この後隠しのサマ よいささだよ

これにゃよ これにゃ降りたよ コラサッサイ

表の庭のよ 若い衆ぞろいでサマ

おもしろいよ コラサッサイ

若い衆よ 若い衆ぞろいは コラサッサイ

けんかのもとだよ 早くお帰りサマ 宿屋へ

金城1

名 称 苗取り歌

伝 承 地 金城町波佐

伝 承 者 小林キクヨ M38年生

調査員氏名 岡本 義則

この苗や 若い苗 元<sup>な</sup>に手を入れてよ

元<sup>な</sup>に手を入れて取ろうや この若い苗

金城2

名 称 白ひき歌

伝 承 地 金城町上来原

伝 承 者 井原 セキ M28年生

調査員氏名 岡本 義則

白をひくなら まんまる丸に 空のお月の輪のごとく

白をひくなら相手のよいに 相手替えまい明日の日も

金城3

名 称 木挽き歌

伝 承 地 金城町上来原

伝 承 者 岡本 義一 M40年生

調査員氏名 岡本 義則

ハヤール 鋸も やすりも ばんじうの金も

置いてお帰り末代に

ハヤール 木挽きさんたち 芸者の習い

ひいて歌うて 金まくる

ハヤール 歌をうたえば楽げに見える

楽でないのが 苦の余り

ハヤール 木挽き女房にょんぼにゃ行なよ妹

木挽きや 息うひく早死はよぬる

金城4

名称 木遣り歌(労作歌)

伝承地 金城町上来原

伝承者 毛利 数源 T10年生

調査員氏名 岡本 義則

ハ寄って来い来い 集まれヨイト

皆さん この子に手をかけ ヨイトサノ

山中地蔵が 都をさしてぞ 出かけることだぞヨイトサノ

皆さん頼むぞ 今日の日もよし 天気もよいし ヨイトキタ

吉野の桜香りは 紅葉の色よい笑顔で ヨイトモロタヨウ

腕にゃこぶ出して ひょうたんこぶような

足元しつかり ヨイトキタ

踏みしめましてぞ口頭のたぶさが

地につくほどによ ヨイトサー ふんぞり返りて

これしき小物に 手に汗するよじやヨイトサー

おかかまんまと言はれはせんぞよ ヨイトサー

しつかり頼むぞ あちらのお方は ヨイサノ

見物人かよ 見物人ならヨイサノ

お出いでなされ そんなことでは 上賃取れんぞ ヨイトキタ

ハ寝たり起きたり 芸者じやあるまいし

楽げな 商売じや ヨイトコリヤ

そろこそ動くぞ 引いたりこねたり

まんじや屋の親父か ヨイトサデノ

寿司屋の娘か うまいことやりよる ヨイトコリヤノ

そらこそ上りだ 片カギはからは

じんたの昼寝 ヨイトコサーノ

坂手口小張よ 付添いものよ

どんと挿さいて 持ちやげて ヨイトコサーノ

パット挿さしてこいよ 今日けふは一月二十日はつかさえ

九日この 突きつめまして ヨイトサーノ

お寺がねのつり鐘 ごとんと言いうたぞ

こころあたりで ヨイトコサー お別れします

日暮れの馬車馬 ヨイトコサーノ

ヨイヤーコリヤ ヨイトサノ

金城5

名称 祝入りと褒め口上(嫁入り歌)

伝承地 金城町入野

伝承者 井川 春夫 S6年生

調査員氏名 岡本 義則

へ荷物 ご荷物 御主人様よ 粗末はきよに 収めます  
へわたしや行きます 二親様よ 永のお世話 なりました  
へこれの御門の おかごの上で 千代と鳴いた 鶴の声  
へわたしや行きます 本国後に 地下の若衆にいとま乞え  
へ古きお里が お名残惜しや 青き柴家を 後に見て  
へここは川端 川端柳 水の流れを 見て暮らす  
へ宿を出るときや 涙で出たが 瀬田の唐橋 歌で越す  
へさてさてあなたに参り来て 褒める口上知らねども  
式端ばかりと褒め申そう  
沖の大川 岸河の<sup>が</sup>かり 岸河手すりに腕をかけ  
手をはるかに眺むれば 鯉と鮒とが舟ゆるぎ  
さて心ばかりを褒め申そう 築地<sup>ついで</sup>の<sup>ついで</sup>かりを褒め申そう  
縦石横石流れ石 三づに築んだるとかげ石  
君に心は尽せ石 心ばかりを褒め申そう  
御門の<sup>か</sup>かりを褒め申そう  
立てたる立石 抜いたる抜き石 差いたる差し石  
心ばかりを褒め申そう 御家<sup>の</sup>か<sup>かり</sup>を褒め申そう  
銀の柱が三十三本 黄金の柱が三十三本 白銀柱が三十三本  
合わせて九十九本の柱を 当たり立て巻き立て  
組まれに様子を申すれば  
上から組んだる <sup>かみ</sup>上<sup>かみ</sup>たが番匠 <sup>ばん</sup>下<sup>しも</sup>から組んだる下たが番匠  
中から組んだ 飛驒<sup>ひんだ</sup>の匠<sup>たくみ</sup>の八棟<sup>やつむね</sup>作りと褒め申そう  
ふかれた様子を申すれば 千羽のかや 万羽のかや

裏うち 基うち からす羽  
とびの鳴きを からすのぬれ色 石田千年  
河魚万年とも ふかれましたげに候  
さて 山寝間の様子申すれば  
七、八十のじいさんが 金の火鉢を前にして  
さて 今晚のお客が千あろうか 万あろうか  
御案内なされるげに候 さて 御茶間の様子を 申すれば  
七、八十の姉さんが 金のようじに 髪飾り  
金の杯 すつつ 磨いっ  
さて 今晚のお客が千あろうか 万あろうか  
御勘定なされるげに候 さて お庭の様子を申すれば  
東が下り 西下り 南が下りて 北下り  
四方下りて 中高な  
さて 下に下りて 御田尾の様子を申すれば  
七間の四尾に 七尾の駒 かもにかしげにかもかわらげに  
ぜひ ぜひ 芦毛に とらひばる 中に立ったる 龍の駒  
龍の駒とは申すれば 夜に三度 日に三度の前がきをいたす  
さて お上の御客様には 下手な 長口上を申し上げ候

金城6

名 称 相撲甚句(祝い歌)

伝 承 地 金城町波佐

伝 承 者 小林キクヨ M38年生

調査員氏名 岡本 義則

へ相撲にや投げられ 女にや振られ <sup>おやま</sup> コウコイコイ

これじゃ男が ホイ どこへ立つよ

ハア ドッコイドッコイ

へ今度このたび 御大帝についてよ 昭和三年秋半ば

昇る朝日は空高く 世界を照らす大君の

めでたきもの即一日に 改国二千六百年

歴史は古き日の本の 天命ここに新たなる

宮の行末頼もしや

へ祝えや 歌えや ノーホイ 万々歳よ

ハア ドッコイドッコイ

金城7

名 称 婦村歌(座興歌)

伝 承 地 金城町波佐

伝 承 者 小林キクヨ M38年生

調査員氏名 岡本 義則

へ夏は木の蔭 ヨー 霜夜はこたつ

離れともない 君のそば アリヤアリヤ

へ伊勢十八 ヨー わしや寅の年

参る薬師は とら薬師 アリヤアリヤ

へ音頭取りめが ヨー 落ちて ヨー

橋の下から コリヤ 音頭取るよ アリヤ アリヤ

(注) 出かせぎから帰った人が歌い初めたものと言われる。

旭 1

名 称 田植え歌

伝 承 地 旭町都川

伝 承 者 宮本 均 T12年生 他

調査員氏名 新井 卯市

(道中ばやし)

へヒーヒーヒッヒリホホ ヒヒホホ シャン

ソーリヤ トンチリリッ ツ トンチリリッ ツ トンチリリッ ツ シャン

ソーリヤ ヒーヒー ヒッヒリホホ ヒヒホホ

ホッホロホホ ヒヒホホ ホロホッホ ヒヒホホ シャン

(畦付)

へここで一調子やろうではないか 一調子やろうではないか

へさんばいという神は三度変わる神やれ

歳徳に七夕 春はさんばい

へ三度変わって よい七夕よ 変わって よい七夕よ

へ今日の田の先 牛の角の巻きを見れば

八重にかけ 八重に千鳥 八重にふさお

へなんとあのふさ 真紅なふさよ あのふさ 真紅なふさよ

〱昨日植えて 今日見れば かどの町が高いぞ

高いこそ 道理よ 徳が勝る

〱徳が勝りて 四方に倉を 勝りて 四方に倉を

〱おもしろい声をする あれは何の声やら

恵比須大黒が 俵まくる

〱俵まくるにゃ えんやの声で まくるにゃ えんやの声で

〱たすき花笠そろってここに 花笠そろってここに

〱さんばいはヤーレ どうちから 来なるやら 宮の方から

〱宮の方からヤーレ 芦毛の駒に 手綱揺りかけ

〱オーレ 手綱揺りかけ 早いが駒よ 揺りかけ 早いが駒よ

〱いかに早乙女よ 今日の代のよしろいのは

だれががいたやら 今日の代

〱オーレ なんとようかけ 代田にゃよい稲を

ようかけ 代田にゃよい稲を

〱上るやら下るやら 鮎の三つ連れかな

瀬にいろいろや瀬い 住もうや鮎の三つ連れかな

〱なんと濁すな 鮎取る川へ 濁すな 鮎取る川へ

〱わたしや京へ上るが ときはござるまいやら

わたしがもとの才太郎を連れて上る

〱連れて上りて 京を見ず 上りて 京を見ず

〱大琵琶にも 小琵琶にも 琵琶中にて

琵琶 ヒョウ ヒョウ アラ 琵琶 ヒョウ ヒョウ

アラ 琵琶 どこに置いてきた

夕べのところまで たらどよし 琵琶を弾くには えんやで  
弾くには えんやで さらりと

旭 2

名 称 白ひき歌

伝 承 地 旭町本郷

伝 承 者 岩谷 伍市

調査員氏名 新井 卯市

M 28年生

〱白も車も ひきやこそ回る

ひかで回る風車 白をひくには円く 円く

盆のようにひきやれ 円くひかねば出ちゃこない

〱これの嫁女よめじよよ 歌声こゑよー 聞けば

高いもり木のせみの声 深山ぜみほど 高木の裏で

声をよらべる虫はない

〱焦がれ焦がれてヨー 泣くせみよりも

泣かぬ螢が身を焦がす

焦がれて抱きつきヨー あの大木に

泣いて別れた 夏のせみ

白をひくには 子つればばは いやよ

寝せつ 起おこいつらちゃ あかん

## 旭 3

名称 草刈り歌  
 伝承地 旭町本郷  
 伝承者 岩谷 伍市  
 調査員氏名 新井 卯市  
 M28年生

〱思案橋からよ 女郎街みれば ハーヨー

行くかよ ヤレ 戻るかよ ヤレ 思案橋

ヨー歌はよいものよヨーイ ところで変わる

アヨー 変わすまいものヨーイ 我が心

去年盆までヨーイ 踊りたさまが

今年や燈籠で灯がともる

## 旭 4

名称 木挽き歌  
 伝承地 旭町木田  
 伝承者 渡辺 末広  
 調査員氏名 新井 卯市  
 M44年生

〱ヤーレ 木挽き女房にや なるなよ妹いと

木挽きや 息ひく 早うはや 死ぬる

〱ヤーレ 若いときから 板小屋育ち

宿にや子もおる 母かかもおる

〱ヤーレ 堅いこの木も 挽きやあこそ 下がる

挽かにや 下がらぬ 弱木やおでも

## 旭 5

名称 木挽き歌  
 伝承地 旭町市木  
 伝承者 梅田 文作  
 調査員氏名 新井 卯市  
 M32年生

〱ヤーレ 木挽きさんたちや 二間木の上で

とびやからすのま(ま)によなざる アーシャリンコ ベッサリ

〱ヤーレ 木挽きさんなら お泊まりなされ

わしの殿御も木挽きする アーシャリンコ ベッサリ

〱ヤーレ 木挽きさんとして 嫌(ことば)なこたあないが

繩のかばんが わしや嫌よ

アーノコミチ サンズン(三寸) ヒキヌケ ヒキヌケ

## 旭 6

名称 木挽き歌  
 伝承地 旭町本郷  
 伝承者 岩谷 伍市  
 調査員氏名 新井 卯市  
 M28年生

〱ヤーレ 木挽き女房にやいくなや妹

木挽きや身をもむ 早う死ぬる ザリッコ ザリッコ

〱ヤーレ 女房持たせにや対州にや行くよ

親が死んでも 戻りやせぬ ザリッコ ザリッコ

〱ヤーレ 女房持たしよか 五万石やろうか

抱いちゃ寝られぬ 五万石 ザリッコ ザリッコ

〱ヤール 木挽き女房にヤ行け行けよ妹

われが行かねば わしが行く ザリッコ ザリッコ

〱ヤール 大工さんよりヤ 木挽きさんはいやよ

仲のよい木を挽き分ける ザリッコ ザリッコ

旭 7

名 称 地づき歌

伝 承 地 旭町木田

伝 承 者 渡辺 末広 M44年生

調査員氏名 新井 卯市

〱今日お家のめでたい地づき ついて固めて やれ降ろせ

ヤンサ ヤンサ

〱一番柱が大黒柱 締めて 終わった大工さん

サンヤ サンヤ

〱建てた大黒 四方を眺め 笑う家には福も来る

ヤンサ ヤンサ

旭 8

名 称 鋤簾歌

伝 承 地 旭町木田

伝 承 者 渡辺 末広 M44年生

調査員氏名 新井 卯市

〱朝ま はよから カンテラつけて

苦勞するの親のため

〱行李をたて負い 初出<sup>ういで</sup>の職場

背な口預けて勤めます

〱盆にヤヨ 帰るヨ 両親さまよ

行李と給金たて負い

旭 9

名 称 そどり歌(勞作歌)

伝 承 地 旭町木田

伝 承 者 渡辺 末広 M44年生

調査員氏名 新井 卯市

〱鳴くな鶏 まだ夜は明けぬ 明けりやお寺の鐘が鳴る

まだ夜は明けぬ 明けりやお寺の鐘が鳴る

〱そどりするには 夜中が夜食 焼いて出したか てんこ餅

夜中が夜食 焼いて出したか てんこ餅

〱からで破した障子の紙も こうぞが変わって 紙で貼る

破した障子 こうぞが変わって 紙で貼る

旭 10

名 称 舟子節(勞作歌)

伝 承 地 旭町市木

伝 承 者 梅田 花子 T15年生

調査員氏名 新井 卯市

〱ヤール 船頭押せ押せ 大阪が見えるヨエー

大阪天王寺のノイヤール 五重<sup>じゅうご</sup>の塔がヨ



ハヤール 舟は帆任せ 帆は風任せヨエー

わたしやあなたのノヤレ 気任せにヨ

ハヤール 舟の帆柱 船頭さんが立てるヨエー

親の石塔はノヤレ 子が建てるヨ

旭 11

名 称 祝入り(嫁入り歌)

伝 承 地 旭町都川

伝 承 者 宮本 広喜 M35年生

調査員氏名 新井 卯市

ハア ！ これのナ ！ お家のおかごの上で

きよと泣いたが 鶴の声を

娘ナ ！ よく聞け われ出すからにや

たんす 長持ち 鉄箱よ

行くとナ ！ 戻ろうと思わぬだよ

何うナ ！ 様かた 殿しだい

さてもナ ！ 美しいア ！ 御門の飾り

門にヤア ！ 白藤ア ！ 舞い下がるよ

おいでナ ！ ましたか待ち受けました

どんとア ！ どんとと ハーノ ！ 納戸までよ

お受けナ ！ まするぞ お荷物様を

奥の納戸にア ！ 納めますよ

荷物ナ ！ 調べよ 歩役の者よ

後でナ ！ 忘れがなきようにノ

歌ってナ ！ 立とうよ宿場の代わり

花の都もハア ！ 近くなり

うれしナ ！ ハーめでたで花嫁様よ

お荷物そろえてハー 玄関づけでよ

持ってナ ！ きましたお荷物様を

奥のナ ！ 納戸に納めた荷物 二度とこの場に出さぬよに

旭 12

名 称 酒盛り歌(祝い歌)

伝 承 地 旭町本郷

伝 承 者 岩谷 伍市 M28年生

調査員氏名 新井 卯市

ハうれしめでたい若松様ヨ

枝が栄えて 葉も茂る ヨイヤナア

枝が栄えて葉が茂つかば

命ながかる 姫ご松 ヨイヤナア

ハこれのお背戸に茗荷と落と

茗荷が めでたや 落や繁盛 ヨイヤナア

茗荷がめでたで 落や繁盛でヨ

末は長かる 幸せに ヨイヤナア

ハこれのおせとに二股榎

榎の実やならいで金がる ヨイヤナア

榎の実なる木を一枝ほしや

植えて育ててならせたい ヨイヤナー

旭 13

名称 ハンヤ歌(盆踊り歌)  
伝承地 旭町都川  
伝承者 宮本 広喜 M35年生 他  
調査員氏名 新井 卯市

へそろたそろたよ 踊り子がそろたよ

稲の出穂よりソーレよくそろたよ

アラもう一つどもあよかるよ

稲の出穂よりソーレよくそろたよ

へ桜三月 あやめは五月よ 咲いて年取る 梅の花よ

へ踊り踊るのは お寺か宮か 踊るふりして 後生願う

へ娘よいのは お家の飾りよ

牡丹 しゃくやく お家の飾りよ

へこれのお背戸の 千だん椿 花が千咲きや 実の一つ

へあなた百まで わしゃ九十九まで ともに白髪を生ゆるまで

アラ ゆらりと戻そよ ともに白髪を生ゆるまで

へ今年は豊年 穂に穂が咲いてよ 道の小草も 米がなるよ

アラ ゆらりと戻すか 道の小草も 米がなるよ

へ去年の盆にゃ 踊りた様が 今年や 燈籠の下よ

へわしとあなたは 硯の水だよ

すればするほど 濃ゆくなるよ

へわしとあなたは羽織の紐よ 固く結んで 胸にある

アラ ゆらりと戻そよ 固く結んで 胸にある

へさあさ歌います 踊りてくだされ 年に一度の盆踊りよ

踊りてくだされ 年に一度の盆踊り

へはんや入れくれ 蚊が食うてやならぬよ

入れてあげましよ 蚊帳の中

へ恋し恋しと 鳴くせみよりも 鳴かぬ螢が身を焦がす

へ思ってきたのに 水かけられて 会わず帰るが 情けない

水かけられて 会わずに帰るが 情けない

へこれのお背戸の 千だん椿 花が千咲きや 実の一つ

へお月は山端に すまる星は西に 思う殿御は 真ん中に

旭 14

名称 磯節(座興歌)  
伝承地 旭町市木  
伝承者 新井 卯市 T4年生  
調査員氏名 新井 卯市

へ磯で名所は 大洗いさまよ アサイシヨネ

松が見えます ほのほのと 松がネー ドンドン

見えます ヤレコリヤドッコイ ほのほのと

へ水戸を離れて 東へ三里 アサイシヨネ

波の花散る 大洗い 波のネー ドンドン

花散る アレコリヤドッコイ 大洗い

浜田ちよいと出て 今福・今市・都川に市木 アサイシヨネ

大朝・新庄・蔵迫・十日市・本地

鈴張 可部のうち チョイト出て 広島終点地

旭 15

名称 こだいじゅ(座興歌)

伝承地 旭町本郷

伝承者 岩谷 伍市 M28年生

調査員氏名 新井 卯市

ハヨエ 出せというたら ころりとナー 出した

それじゃござらぬヨ 歌のことノーエ

アーヨエ ヨエ なんと こだいじゃにや

猫の皮きせて ありやあねずみを

取れとはナーア そりや無理だノーエ

なんと大夫様ヨオ 舞いならにや

いぬる(帰る) ありやあ長のたばこでナー

夜がヨ 明けるノーエ アーヨエ ヨエ

押さば押せ押せヨオ 下関までも

ありやあ押さば港に近うなるノーエ アーヨエ ヨエ

なんと こだいじゃにや虎の皮 着せて ありやあ千里

走れとは そりやヨ 無理だのヨ

(注) 神楽を見物するときや、座興の席でよくうたわれた。

旭 16

名称 手まり歌

伝承地 旭町木田

伝承者 岡田ヨシノ M39年生

調査員氏名 新井 卯市

つきつき法師のかんてらわん なして日向照らんか

親がないか 子がないか 親は新町酒屋敷

ゆんべもろうた花嫁じょう 花の屋敷になおらして

きんだんどんすを縫わすれば

しっこ かつこと泣かしやんす 何が不足で泣かしやんす

何も不足じゃないけれど 針がきしんで縫われんぞ

そんな嫁ならいんでくれ <sup>(帰って)</sup> 境筋まで見送って

もうし もうし 子供様 ここは何というところ

ここは信濃の善光寺 善光寺様に願たてて

梅と桜とあげたなら 梅はすいと戻された

桜はよいと 褒められた ちよつと一貫つきました

旭 17

名称 手まり歌

伝承地 旭町木田

伝承者 岡田ヨシノ M39年生

調査員氏名 新井 卯市

かいやかいや 押せばお兼が泣いている

泣いて涙を船に積み 船は静かに櫓をこがね

たんだ押せ押せ都がね 都土産に何もろた  
 一にこうがい二に鏡 三度さるしの帯もろた  
 足袋はもろたが またくけの  
 のすけてやんさい あねごさん のすけてやろうと思えども  
 切つてきりもち はりおつて 西も東も だいさんで  
 あんな柱で こーちこち こんな柱で こーちこち  
 ちよつと 一貫いっかんつきました

旭 18

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町今市  
 伝 承 者 田村 綾子 M40年生  
 調査員氏名 新井 卯市

へ一番はじめに一ノ宮 二でまた日光東照宮  
 三また 佐倉の宗五郎 四では信濃の善光寺  
 五つ 出雲の大社おおよしろ 六つ 村々鎮守様  
 七つ 成田の不動様 八つ やかたのせんがん寺  
 九つ 高野こうやの弘法様 十で 東京の泉岳寺  
 これまで神願たてたのに 浪子の病気は治りやせぬ  
 武男が 戦地に向かうとき 浪子は白いハンカチを  
 うち振りながら ねえあなた 早く帰ってきてちょうだいね  
 ポッポッポッと出る汽車は 武男と浪子の生き別れ  
 二度と会わぬ汽車の窓 泣いて血をばく ホトトギス

旭 19

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町今市  
 伝 承 者 田村 綾子 M40年生  
 調査員氏名 新井 卯市

へうちのお背戸のお茶の木に 雀が二、三羽止まって  
 一羽の雀の言うことには  
 わしの弟の千松が 京へ上つて行ったきり  
 金を掘るやら 死んだやら 一年待っても状が来ず  
 二年待っても状が来ぬ  
 三年ぶりの一日ついたちに兄に來いとて 状がきた  
 状の上書き 読んで見りや  
 千松死んだと書いてある 書いてある

旭 20

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町今市  
 伝 承 者 田村 綾子 M40年生  
 調査員氏名 新井 卯市

へとんとん 隣のおかみさま 嫁にもろうておくれんか  
 はいはい行きましよう 参じましよう  
 朝まとうから 早よ起きて  
 障子の小蔭で髪結うて おしろいつけて 紅つけて  
 きれいな着物を着飾って 喜びいさんで行きました

旭 21

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町重富  
 伝 承 者 岡本ユキノ T5年生  
 調査員氏名 新井 卯市

向こう通るは与市兵衛じやないか

鉄砲てつぱかついで火縄をさげて きじのお山にきじ打ち行ける

きじはけんけん泣く涙 泣いた涙を舟に積む

舟は白金 櫓は黄金 三で押せ押せ都まで

都土産に何もろた

一にこうがい 二に鏡 三でさるしの帯もろうた

帯をもろうたが まだくけぬ くけてみれば 帯にゃ短かし

たすきにゃ長かし 今度 生まれたややのひも

ややのひも ヤレ一貫貸しました

旭 22

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町重富  
 伝 承 者 岡本ユキノ T5年生  
 調査員氏名 新井 卯市

へとんとん隣のおばさん 子がなくて

はつかねずみを捕まえた 髪結うてやって 紅つけて

まんじゅう買いに出したなら 猫がとってつみ食った

ヤレ 恐ろし チューチューと 治る薬はないかいな

治る薬はあるけれど 深山の奥の黒山椒くろさん

あれで治らにゃ わたしがの わたしがの

ヤレ 一貫貸しました

旭 23

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町重富  
 伝 承 者 二宮 信子 M39年生  
 調査員氏名 新井 卯市

へお正正月を松立てて 竹立てて 祝わぬ者は昔より

きれいなだんなのお店は いちいち上がれば元旦に

にしのおつきと申します ひいやーふーみー

みーやよーいつやむー ななやーこのナ とんから

落としたお芋屋さん お芋はおひとついくらかね

少し負からんがちょこらかね 一銭五厘に負けておけ

まずまず 一貫貸しました 貸しました

旭 24

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 旭町重富  
 伝 承 者 二宮 信子 M39年生  
 調査員氏名 新井 卯市

へこれから どっちに回そうにゃ ○○さんの小袖の下から

上にとんとん 下にとんとん それ百ついた チョウソレ

旭 25

名称 お手玉歌  
伝承地 旭町木田  
伝承者 岡田ヨシノ  
調査員氏名 新井 卯市  
M 39年生

おさら お一つおいて お二つおいておさら  
おみんのおさら おてしゃみおさら  
おちりんこおいておさら お左 お左 大左  
なかよし つなよし さらり  
やっちょない やっちょない 落としておさら  
お馬さんの乗せがり 乗せがり落としておさら  
でんでん虫かぶった 痛じ 離せ  
おおひだしかけておさら  
おてまたしか けて 落として おさら  
大袖 落として おさら こう橋くぐれしかけて  
さらりこ とっあん これやんさい  
おひとつやの むっけ おふたつやの むっけ  
おみやのむっけ およやのむっけ  
おいやのむっけ おむやのむっけ  
おなやのむっけ おおやのむっけ  
おおこのやのむっけ おとうやのむっけ  
おさら これで一貫貸しました

旭 26

名称 舟の船頭さん(手遊び歌)  
伝承地 旭町重富  
伝承者 二宮 信子  
調査員氏名 新井 卯市  
M 39年生

セッセッセ 舟の船頭さんで さらし三尺もろたね  
何に染みょうか(染めようか)紺屋に問えばね  
一に橋 二でかきつばたね 三で下がり藤 四で獅子牡丹ね  
五つ井山の 千本桜ね 六つ紫色よく染めたよね  
七つ南天 八つ山桜ね 九つ小梅さん 十で殿様  
お馬にお乗り お金がないから よう乗らん

旭 27

名称 しりとりの歌  
伝承地 旭町木田  
伝承者 岡田ヨシノ  
調査員氏名 新井 卯市  
M 39年生

陸軍の乃木さんが 凱旋す すずめ めじろ  
ろしや 野蛮国 くらばたき  
金玉 まかろーふ ふんどし  
しめたたん切り りっこうしょう(李鴻章)のはげ頭  
負けて逃げたか チャンチャン坊 坊主のひげは短かい毛  
けつは三角十文字 地獄の釜へ 真逆し

しわんぼうは柿の種 猫もひぎに抱かれたり

(これでまたもとに戻る)

弥栄2

名 称 木挽き歌  
伝 承 地 弥栄村三里  
伝 承 者 今谷 員繁 T11年生  
調査員氏名 杖田 昌通

弥栄1

名 称 田植え歌(三宝神)  
伝 承 地 弥栄村  
伝 承 者 河野 勝己 S3年生 他  
調査員氏名 河野 勝己

ハヤアール 木挽きさんたち 二間木の上で

薦や鳥のまねをする

ハヤアール 今日もこれ挽きや 二間二分五厘

晩にや島田を抱いて寝よう

ハヤアール 若い盛りを山小屋暮らし

ハヤアール 山に伐る木は数々あれど 想い切る気は更にならない

ハヤアール 三十二枚の荒齒の鋸で引くは お上の御用板

弥栄3

名 称 餅つき歌(祝い歌)  
伝 承 地 弥栄村三里  
伝 承 者 今谷 員繁 T11年生  
調査員氏名 杖田 昌通

ハハアール 餅をつくなら一石二石 ハアール

二斗や三斗はだれもつく ヤンサヨ ヤンサヨ

ハハアール 庭で餅つく 表でちぎるヤンサ

奥の五畳半じゃ 金量る ヤンサヨ ヤンサヨ

ハハアール これのだんなは団子か餅か ヤンサ

餅は餅だが ヤンサ 金持ちじゃ ヤンサヨ ヤンサヨ

(練り歌) ハサアール 歳徳も七夕も元をただせば稲の神

サアール 稲が稲 ご繁盛 米なる稲が ご繁盛

(親歌) ハさんばいさんばいと三度祭る神はな

(子歌) ハ歳徳も七夕も三度祭る神なりよ

(親歌) ハさんばいさんばいと三度祭る神はな

(子歌) ハ歳徳も七夕も三度祭る神なりよ

(親歌) ハさんばいさんばいと三度祭る神はな

(揚げ歌) ハソリヤール 祭る神なり神輿に乗せて勇みましよう

(練り歌) ハサアール 田主様の背戸蔵に よい澄み酒が有るとな

ハサアール 桶で桶で汲みあげて 長柄の銚子でまいらしよう

(親歌) ハ田の神の御酒をば 代掻きに参らしよう

(子歌) ハエブリ差しに苗持ちも飲んで勇んだよな

(揚げ歌) ハハアール 飲んで勇もや 植え田の神の酒をば

〱だんな大黒 おかみさん恵比寿ヤンサ

中にいる子が福の神 ヤンサヨ ヤンサヨ

〱ハアー これのお背戸ふたまたのきに二股榎えハ一

榎の実ならずえにヤンサ 黄金みよががなる ヤンサヨ ヤンサヨ

〱ハアー これのお背戸みよがに茗荷ふきと路みちとハ一

茗荷えめでたや路みち繁盛 ヤンサヨ ヤンサヨ

〱ここの嫁女の歌声聞けば ヤンサヨ

高い森木の蟬せみの声 ヤンサヨ ヤンサヨ

〱ヤンサモンサで何が出よも知れぬ ヤンサヨ

今朝もひょうたんから駒こまが出た ヤンサヨ ヤンサヨ

〱ハア一 祝いめでたや若松様よ ヤンサヨ

枝えだが栄さかえて葉はが茂さかる ヤンサヨ ヤンサヨ

〱枝えだが栄さかえてお庭にわが暗くい ヤンサヨ

〱一の枝えだより二の枝えだよりもヤンサヨ

三の枝えだが影かげをさす ヤンサヨ ヤンサヨ

〱三の枝えだが影かげをさすからは ヤンサヨ

お家鶴かづらひ亀かめ 五葉ごはの松 ヤンサヨ ヤンサヨ

〱今のよい声こゑゆらりししゃんと戻かへせ ヤンサヨ

末すえは鶴かづらひ亀かめ五葉ごはの松 ヤンサヨ ヤンサヨ

弥栄 4

名 称 安珍清姫(盆踊り歌)

伝 承 地 弥栄村三里

伝 承 者 今谷 員繁 T11年生 他3名

調査員氏名 杖田 昌通

〱今度奥州白河郡 花の都の安珍様は

年に一度は熊野に参る 熊野権現願立ねんたてていたす

往むかきし戻かへしは庄司しやうじが方で 心安こころやすきの吸す付けけたばこ

それが高たかじて寝泊ねどまりまりなさる 奥おくの一間いっけんで休やすんでおれば

お家清いへきよ姫ひめひそかに忍しのぶ 安珍あぢんお寝間ねまをさらりと開ひらけて

安珍あぢん様さまよと小聲こゑで起おこす 安珍あぢん夢覚ゆめさめ枕まくらを上げて

だれかどなたか迷まよいの君きみか 見みればお家の清きよ姫ひめ様さまだ

嫌いやでござるぞ清きよ姫ひめ様さまよ 我われが身みはまた御山ごさんに登のぼる

処女ぢよきすいと身みはまた処女ぢよ 所で清きよ姫ひめ恥ぢじかかされて

直ただちに安珍あぢん夜よ拔はけをなさる 日高川ひたかきにとはや急いそぎつゝ

渡わたしてくれよと舟端ふねはたたたく 所で安珍あぢん細こかに語かたる

熊野くまの参まゐりのかの山小屋やまごやで 後あとを追おい来きる女おんなが一人

早はやく渡わたして助たすけておくれ そうもあるかや哀あはれな者ものだ

早はやく乗のり上のりて道成寺みちなるでらで 夜よのことなら大門だいもん閉しまる

これが安珍あぢんさすさすさがの男おとこ 裏うらに回まわりて八重垣やえがき越こえて

和尚おしょうお寝間ねまをサラリと開ひらけて 和尚おしょう様さまよと小聲こゑで起おこす

和尚おしょう驚おどきはや眼まなこを覚おぼす 迷まよいものかや変へん化けしたものか

迷まよいものなら助たすけてやろうに



変化たものなら救うてやろうに

そこで安珍は細かに語る 熊野権現願立っていたす

後を追いかる女が一人 はやく隠して助けておくれ

そうもあるかや哀れな者だ 何で隠そかかて隠そか

鐘を降ろして隠してやろか 鐘の下にと隠してもろて

右の清姫日高に急ぐ 日高川にはや急ぎつき

渡してくれよと船頭を頼む 世間このごろ渡しは出来ぬ

渡すことなら叫びも出来ぬ 渡してくれねば自力で渡る

渡りかなえんこの川くらい 着たる衣裳は柳にかけて

履いた雪駄を柳の根とに 髪をさばいて飛びこんで

浮きつ沈みつ二、三度すれば 髪が逆立ち眼がうるうると

うろこ生えます角戴いて 火炎吹き立て水押しわけて

向うに上がりて百尋ばかり のらりのらりと道成寺でらへ

門にかかりてはっばとねらう さてもこの寺大きな寺だ

寺の太さにや驚きやせぬが 鐘というものつりあるものだ

鐘の降りたはこれやまた不思議 中に安珍いるではないか

鐘に向いてはっばとねらう 鐘を巻く巻く七巻まいて

火炎吹き立て尾末でたたく 中で安珍鐘もろともに

焼けて火となる灰となる

三隅 1

名 称	苗取り歌
伝 承 地	三隅町岡見西の谷
伝 承 者	源田 ソメ T3年生
調査員氏名	田中 幸雄 他1名

ナーヨー 青苗を取るには 元<sup>(もと)</sup>に手を入れて

ナーヨー うらのかたになびかして 元<sup>(もと)</sup>に手を入れて

ナーヨー 日はそぞり高<sup>(たか)</sup>なるが 四石<sup>(しやく)</sup>まきの苗

ナーヨー いつまた取りあ<sup>(あ)</sup>ぎようか 四石<sup>(しやく)</sup>まきの苗

ナーヨー ほとり苗をとくに取れ ほとり苗にこそ

ナーヨー 千石<sup>(せんごく)</sup>の米がなる ほとり苗にこそ

ナーヨー 朝おの子がらすが 露にしよぼぬれて

ナーヨー うろうろと鳴いて通る

露にしよぼぬれて ナー

三隅 2

名 称	田植え歌
伝 承 地	三隅町岡見西の谷
伝 承 者	源田 ソメ T3年生
調査員氏名	田中 幸雄 他1名

五月<sup>(ごん)</sup>は国の寄り合い かちんで染<sup>(そめ)</sup>みようや前かけ

前かけをかちん黒染め 紺屋<sup>(こんや)</sup>の嫁<sup>(よめ)</sup>ごか娘か

代<sup>(代)</sup>かきがくろにおわれて きり<sup>(代)</sup>鉾<sup>(ぼ)</sup>がきで早めた

早めたきり鉾<sup>(ぼ)</sup>がきで早めた

このまちはいかい<sup>(田んぼの一枚)</sup>まちだよ 今日このま<sup>(天)</sup>ちで日が暮<sup>(暮)</sup>りよう

日が暮<sup>(暮)</sup>れりや戸<sup>(戸)</sup>をたてまわりて しんしろ<sup>(仲よくするよ)</sup>様となごむよ

以上「長歌」

植えて三尺 穂<sup>(穂)</sup>に出て五尺 さてもみごとなはや早<sup>(お)</sup>稲<sup>(稲)</sup>は

はや早稲は さてもみごとな はや早稲は

〱仕事出しゃるなら 歌出せおなご(おなご)

仕事苦にする おなごめが

おなごめが 仕事苦にする おなごめが

〱仕事苦にするおなごじやないが これのおしゅうさま(じゅうとめ)歌嫌い

歌嫌い これのおしゅうさま 歌嫌い

〱歌を出してもつけてはくれぬ 歌をよしるか まんじるか

まんじるか 歌をよしるか まんじるか

以上「小歌」

### 三隅 3

名	称	草取り歌
伝承地		三隅町岡見西の谷
伝承者	源田 ソメ	T3年生 他1名
調査員氏名	田中 幸雄	

〱横田エー 西条柿 木のうらの熟柿(ずくし)

アラ欲しうは エー 欲しうはエー あれども

ヨイ サーテノ 手が アラ 屈とわぬエー

〱夏はエー 木の蔭 霜夜にや ことつ

アラ 離れ エー 離れヨイ ともない(たくなじ)

ヨイ サーテノ 主のそば エー

戻せヨイ ともない

ヨイ サーテノ 主のそば エー

〱わたしやエー (掃ります) いにます この月限り

アラ 後にや エー 後にや エー 来なれよ

ヨイ サーテノ 縁の人 エー

戻せよ 来なれよ

ヨイ サーテノ 縁の人 エー

〱縁のエー 人とは 言葉の先よ アラ 後は エー

後は エー 野となれ ヨイ サーテノ 山となれ ヨー

後は エー 野となれ ヨイ サーテノ 山となれ ヨー

### 三隅 4

名	称	白ひき歌
伝承地		三隅町岡見西の谷
伝承者	源田 ソメ	T3年生 他1名
調査員氏名	田中 幸雄	

〱ヤール 白をひけひけ だんごして食わしよ

ひかにや 冷や飯 また茶漬け

ヤール 冷や飯ひかにや ひかにや冷や飯 また茶漬け

〱ヤール 白をひく夜にや 必ず来なれ

重かてごしようと言うて来なれ

ヤール てごしようと言うて 重か

重かてごしようと言うて来なれ

〱ヤール 白はひきよで 回しよで軽い

物は言いよで 角が立つ

ヤール 言いよで物は 物は言いよで角が立つ

三隅5

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 三隅町河内  
 伝 承 者 福原 季美 M43年生  
 調査員氏名 田中 幸雄

〱ヤーレー 木挽きさんたちやヨー 米の飯食ろうて

〱の柄のような糞たれる ゴッシン ゴッシン

〱ヤーレー 木挽き女房にやヨー なるなよ妹

木挽きや息よひく早よ死ぬる ゴッシン ゴッシン

〱ヤーレー 山で伐る木はヨー 数々あれど

思い切る気はさらさない ゴッシン ゴッシン

〱ヤーレー 木挽き女房にやヨー なるなよ妹

仲の好い木も引き分ける ゴッシン ゴッシン

〱ヤーレー 大工女房か ヨー 早よ行けや 妹

おまえ行かねばわしが行く ゴッシン ゴッシン

三隅6

名 称 地つき歌  
 伝 承 地 三隅町岡見須津  
 伝 承 者 山本 ステ M39年生  
 調査員氏名 田中 幸雄

〱ヨーオイ ヨーオイ ヨーイヤナ アリヤリヤ コリヤリヤ

ナンデーモセー ヤンサヨ ヤンサヨ

花と咲ばれりや ヨイヨイ 咲かねばならぬ ヨイヨイ

咲けば実がなるアノ恥ずかしや

〱ヨーオイ ヨーオイ ヨーイヤナ アリヤリヤ コリヤリヤ

ナンデーモ セー ヤンサヨ ヤンサヨ

梅と桜を ヨイヨイ 両手に持ちて ヨイヨイ

どちが梅やらアノ桜やら

〱ヨーオイ ヨーオイ ヨーイヤナ アリヤリヤ コリヤリヤ

ヤンサヨ ヤンサヨ 明日はお発ちか ヨイヨイ

おなぐれ惜しや ヨイヨイ 雨の十日も アノ降ればよい

三隅7

名 称 紙すき歌  
 伝 承 地 三隅町古市場  
 伝 承 者 倉井桃太郎 T12年生  
 調査員氏名 田中 幸雄

〱こうぞそぞりでよし悪し決まる 握る包丁に血が通う

〱紙をすくには身をゆりかけて かけたたすきの回るよに

〱紙をすく人しんからかわい 朝まとうから手を冷やす

〱真心こめてしあげた紙は かわいい娘を出す気持ち

三隅8

名 称 餅つき歌(祝い歌)  
 伝 承 地 三隅町岡見西の谷  
 伝 承 者 源田 ソメ T3年生  
 調査員氏名 田中 幸雄

へ餅をつきやるなら 一石どまあよかる

アラ 二斗や三斗は白よごし

三斗や二斗は アラ 二斗や ナー

三斗は白よごし ヤンサヨ ヤンサヨ

へ白取りさんと杵取りさんと

仲の良さ見なれ アラ だれも 妻持ちちゃ あのごとく

妻持ちちゃだれも アラ だれもナー 妻持ちちゃ あのごとく

ヤンサヨ ヤンサヨ

三隅9

名 称 舟おろし歌(祝い歌)

伝 承 地 三隅町湊浦

伝 承 者 中村 淳一 T4年生

調査員氏名 田中 幸雄

へめでたいなあ めでたいなあ 年のはじめの初夢に アエイ

みするぎ山の松の葉を 折りて飾ると夢を見た アエイ

その夢夢があうなれば 四角四面の倉を建て アエイ

長者になるとは さてもめでたいなあー

五葉はエー めでたしの ノノエーイ

ソレワカエー 枝も栄ゆる ノーエー 葉もエー

へ新造降ろして 浮きなりよ見ればなー

艦に大黒 表にゃ 恵比須ナー

中に舟魂 福の神 アエイ 大福神が乗り遊ぶ アエイ

上から鶴が舞い下がる アエイ 下から亀が舞い上がる

鶴と亀とが舞い遊ぶ 鶴は千年 亀はまた アエイ

万年末代までもナー 五葉はエー めでたしのー エーイ

ソレワカエー枝も栄ゆる 葉もエー

三隅10

名 称 祝入り(嫁入り歌)

伝 承 地 三隅町岡見西の谷

伝 承 者 源田 ソメ T3年生

調査員氏名 田中 幸雄

(生家を出る時)

へハー さらばナー 行きますヨー

ハー両親様よ 長のナー お世話にヨー

ハーなりました ナーエー

(相手方に着いたとき)

へハー御門ナー 入りてヨー

ハーうちよ(家を)眺むれば さてもナー みごとなヨー

ハーお家様 ナーエー

(座敷を褒めるとき)

へハーこれのナー じゃしき(座敷)はヨー

ハー祝いのじゃしき 鶴とナー亀とがヨー

ハー舞い遊ぶ ナーエー

(荷物を渡すとき)

ハハめでたナー めでたでヨー

ハハこれまで来たが 渡しますぞえナー

ハハこの品を ナーエー

(荷物を受け取るとき)

ハハ渡しナー なさるなら

ハハ受け取りますエー 供えナー ますぞえヨー

ハハ床の間に ナーエー

(途中でうたう)

ハハ今日はナー 日もよしヨー

ハハ天気もよし 結び合わせてヨー

ハハ縁となる ナーエー

ハハ蝶よナー 花とヨー

ハハ育てた娘 今日他人のヨー

ハハ手に渡るナーエー

ハハわれにナー 受けたるヨー

ハハこの長持が いつがお江戸にヨー

ハハ着くじややら ナーエー

ハハ今がナー お発ちかヨー

ハハお名残惜しや 笠の締め緒にやヨー

ハハわしがなるナーエー (以下略)

三隅 11

名 称 相撲甚句(祝い歌)

伝 承 地 三隅町岡見須津

伝 承 者 山本 ステ M39年生 他9名

調査員氏名 田中 幸雄

ハ大阪エー ヨイヨイヨイ 大阪大勝利でして来なれ

アーチンチロリン

ハ伊勢はヨー ヨイヨイヨイ 伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ

ハ尾張ヨー ヨイヨイヨイ 尾張名古屋は城で持つ

アーチンチロリン

ハアー運勢開くか開かぬか 待ち人来ると開かぬか

コラドッコイ ドッコイ

ハそろたヨー そろいましたヨーオ 加賀越前のー

コラドッコイ ドッコイ

ハ富士のヨー 白雪やヨーオ 朝日で溶ける

コラドッコイ ドッコイ

娘ヨー 島田はヨーオ 三晩寝りや解ける

コラドッコイ ドッコイ

ハアラ大々神楽が八百両 高尾の身受けが三百両

手前のおかか 天保で八文

こりやまた少々 じゃ取つとけ取つとけ

コリヤ ドッコイ ドッコイ

ハ相撲はヨー (終わるの意味) 相撲取りや帰る

コラドッコイ ドッコイ

後にヨ一 残るのはヨ一 土俵と砂ヨ一

コラ ドッコイ ドッコイ

へアラ七間四面の家倉売つても

よいかか持ったが一生の得だよ

コラ ドッコイ ドッコイ

へさあさヨ一 これからヨ一 甚句を止めて

コラ ドッコイ ドッコイ

当世ヨ一 流行のヨ一 節やりましょヨ一

コラドッコイ ドッコイ ハイ

へエーお春伝兵衛に暇状やるとエー

お春やわれには暇をやる 夫の暇ならぜひもない

三下り半を書かしやんせ 三下り半はけた過ぎる

子どもが三人ある中を それに暇状出すからは

背戸の小棚の破れ傘 それを暇状にやるからは

広げて挿しやがれ ノーホホイ

破れ傘エー コラ ドッコイ ドッコイ

へエー 相撲取りさんには どこがようてほれたヨ一

けいこもどりのノーホホイ みだれ髪ヨ一

コラ ドッコイ ドッコイ

へアラ相撲取りさんには女房がない

女房があつても親方女房でしかたがない

コラ ドッコイ ドッコイ

へエー須津はよいとこ大島前にヨ一

いかな人でも ノーホホイ

行きたがるヨ一 コラドッコイ ドッコイ

へアラ引割御前の炊きおきは 一時さませば

パラリー パラリー

### 三隅 12

名 称 後生口説(盆踊り歌)

伝 承 地 三隅町古市場

伝 承 者 山本 武志 S 32年生

調査員氏名 田中 幸雄

へ今日は御祖師の命日なれば 皆がゆるりと茶を飲むまいか

あまり渡世のせわしきゆえに 大慈大悲の御思のほども

懈怠だらけで日々暮らす 今日のお慈悲があるまいならば

死出の山路や山途の川も 一人泣く泣く行かねばならぬ

多い仏や諸仏のお手に 余り余りし大悪人を

阿弥陀如来は助けんために 阿鼻の水や紅連の炎

剣刃にからせられて 飢饉飢渴のひだるきつらさ

畜生三界修羅道苦患 わたし一人のお身代わりに

汗や脂や血の御涙 流したまえしその御血汁

四大海より多しとござる 死んず生きつつその御骨折(以下略)

(四) 益田地区

益田地区の民謡

益田地区は、益田市、美濃郡美都町・匹見町、鹿足郡津和野町・日原町・柿木村・六日市町の一市五町一村である。

益田市は那賀郡三隅町境から山口県田万川町境までは日本海に面し、六日市町から流れる高津川と美都町から流れる益田川がここで日本海へ注いでいる。この流域に平地が開けたあとは農山村である。もと美濃郡で明治二十二年町村制施行時には益田町、吉田・高津・安田・鎌手・種・北仙道・豊川・真砂・豊田・高城・小野・中西・美濃・二條の一町一四か村に分かれており、同じく美都町は都茂・東仙道・二川の三か村、匹見町は匹見上・匹見下・道川の三か村、鹿足郡津和野町は津和野町・小川・畑迫・木部の一町三か村、日原町は日原・須川・青原の三か村。柿木村は柿木一か村。六日市町は六日市・蔵木・朝倉・七日市の四か村に分かれていた。

このたび採集された民謡は別表のとおり、益田市四一、美都町八、匹見町三三、津和野町八、日原町二三、柿木村二、六日市町三三、計一四八で、分類別にみると次のとおりである。

美 益		市 町 村		
都 田				
3	5	a	A	
1	2	b		
	5	c		
1	4	d		
		e		
1		a	B	
	3	b		
2	15	a	C	
	2	a	D	
1		a	F	
	4	a	G	
8	41		計	

計	六日市	柿木	日原	津和野	匹見
38	21		5		4
8	3		1		1
5					
10	2				3
2	1				1
2					1
4					1
51	3	2	13	6	10
12	2		3	1	4
4	1		1		1
12				1	7
148	33	2	23	8	33

すなわち、Aの労作歌は五種六三、Bの祭り歌祝い歌は二種六、Cの踊り歌舞謡は五一、Dの座興歌一二、Fの子守り歌四、Gのわらべ歌一二である。

## A 労作歌

### a 農耕に関するもの

田植え歌は益田・美都・匹見・日原・六日市にあり、六日市には一三ある。苗取り歌は匹見に一、六日市に二、田の草取り歌は益田と六日市にあり、日原のにし節も田の草取り歌である。白挽き歌は益田に二、美都・日原・六日市に各一ある。益田の糶摺り歌、匹見の粉挽き歌も同じものである。

麦搗き歌は匹見と日原に各一あるが詞型も古く、節ももともと古い。田植え歌の中に同じ詞型のものがある。草刈り歌は美都に一、田打ち歌が六日市に一。山どおしは日原に一、六日市に二あるが長く長く歌う歌で、日原では山へ行くときや木を樵るとき、日が暮れて山から帰るとき、柵の実をもぐとき、楮うむしの夜が更けて眠いときの眠気

ざましなどに歌ったという。

### b 山樵に関するもの

木挽き歌は益田・匹見・日原・六日市にあるが節はほとんど同じである。

### c 漁撈に関するもの

舟歌は益田市の海岸部のみにあつて石見舟歌は有名である。ほかに舟おろし祝い歌、舟の謡いなどがある。

### d 諸職に関するもの

酛もとすり歌が益田に二、酒屋歌が匹見にある。地搗き歌は益田と六日市に、楮へぎ歌が美都と匹見に、金山歌が匹見にある。

### e 交通運輸に関するもの

木遣り歌が匹見と六日市にある。

## B 祭り歌祝い歌

### a 祭りに関するもの

匹見に神楽せぎ歌がある。神楽のとき見物席から歌うものである。

### b 祝儀に関するもの

祝入り歌が益田と匹見にある。美都の長持ち歌もこれと同じものである。このほか益田に元日祝い歌と棟上げ歌がある。

## C 踊り歌・舞謡

### a 踊り歌・舞謡

神楽歌は益田に三、日原に二、柿木に一、六日市に一ある。日原の柳神楽と六日市の抜月神楽が六調子といわれる、神職によって行われた在来の神楽で、このほかは明治のはじめ、在来の神楽を改良した八調



子神楽である。

盆踊りはくどき踊り一九と小歌踊り一一がある。

くどき踊りは益田五、美都一、匹見四、津和野二、日原四、柿木一、六日市二で、いずれも七七調の物語をくどき手がくどき、踊り子のはやして踊る。節も囃子もそれぞれ違い、踊りも違っている。ここに収録したくどきは鈴木主水、石童丸、佐倉宗五郎、三太くどき、お初心中、志賀団七、いろはくどき、那須与一、平左くどきなどであるが、この他各地に残っているくどきは相当の数にのぼっている。この内平左くどきは津和野の佐々木平左と榎屋おでんの恋物語でこの地方を舞台とし、西日本に広く流布している。

小歌踊りは七七五型の小歌を音頭とりが歌い、踊り子のはやして踊るもので、節も囃子もそれぞれ違い踊りも違っている。美都に一、匹見三、津和野二、日原五があるが、中でも津和野踊りは独特の装束による優雅な古い踊りで有名である。美都のは願力踊り、匹見のは願力踊り、アイヤ節、あんや、ヨイヤナー、あんさ、津和野は直地ヨイヤナー、日原のはきそん、いそやーれ、けつたたき、こぬか踊り、ようそれで、直地ヨイヤナーといそやーれは同じである。

田植え囃子は大田植えの芸能化したもので、田囃子ともいい囃子田ともいう。祭りのにぎおいや祝賀行事などによく行われる。益田に三、匹見に三、津和野に一、日原に二あるが、歌詞も囃子もそれぞれ違っている。

この他の踊り歌では津和野弥栄神社の鷺舞の歌がもっとも古い独特のもので、益田に餅つき歌、角力甚句、向横田節、曾我兄弟などがあ

る。

## D 座興歌

a 座興歌

高い山が匹見・日原・六日市に、こちや節が津和野・日原・六日市にあるが、これはもっとも古い座興歌である。日原ではこちや節をめでたいものといっている。「めでたいものは芋の茎」という歌をはじめに歌うからである。日原の「よいやなア」は津和野踊りの歌の座興歌になったもので歌詞も多い。節はだいぶ違っている。益田に村木節、大成浜節、匹見にさんこ節、筏節、パッサーパッサなどがある。

## F 子守り歌

a 子守り歌

益田、匹見、日原、六日市に各一つある。

## G わらべ歌

a 遊戯歌

手まり歌が益田に一、匹見に五、津和野に一。お手玉歌と絵かき歌が匹見に各一、じゃんけん歌が益田に一つある。

この他わらべ歌では益田に「お月さん」、「螢こい」がある。

(大庭良美)

参考資料一覽

- 農村の民謡 島根県農会 昭和三  
 水まさ雲 大庭良美 昭和一一  
 西石見の民俗 和歌森太郎 吉川弘文館 昭和三七  
 石見の民謡 西岡光夫・酒井董美 今井書店 昭和四一  
 日本民謡大鑑(中国編) 日本放送協会 昭和四四  
 三葛の譜 渡辺友千代 昭和四八  
 奥石見の芸能と民謡 秀浦昇・渡辺友千代 昭和五〇  
 水まさ雲(増補版) 大庭良美 石見郷土研究懇話会 昭和五二  
 日原町史(近代下) 大庭良美 日原町教育委員会 昭和五四  
 足あと(第三号) 六日市町教育委員会 昭和五七  
 盆踊くとき集 美都町教育委員会 昭和五九

益田地区調査民謡

益田1

名 称 下波田田植之歌  
 伝 承 地 益田市波田町  
 伝 承 者 中村 和子 S16年生  
 調査員氏名 石川 寿保

〱上のまちから 下のまちまで 揺り広がれや 苗の葉

苗の葉 エノオ 揺り広がれや 苗の葉

〱このまちは いかい大まち 今日このまちで 日が暮りよう

日が暮りよう エノオ 今日このまちで 日が暮りよう

〱代かきが 代に追われて 切鋏がきで 早めた

早めた エノオ 切鋏がきで 早めた

〱畦を枕に 月の出を待って 月が照る照る 夜明けまで

夜明けまで エノオ 月が照る 夜明けまで

益田2

名 称 横田節  
 伝 承 地 益田市金山町  
 伝 承 者 三浦 定夫 T4年生  
 調査員氏名 石川 寿保

〱横田エー 西条柿 木の上の 熟柿

欲しうはエー 欲しうはエー あれども ヨーイサテノー

手がとわぬエー

夏のエー 炎天 田の草 とるな

見かきヤエー 見かきヤエー 楽げで ヨーイサテノー  
苦がござるエー

三星エー 女は 嫁には むかぬ  
うちのエー うちのエー 嫁女は ヨーイサテノー  
よそでとるエー

益田 3

名 称 真砂臼挽き歌  
伝 承 地 益田市真砂地方  
伝 承 者 中村 和子 S 16年生  
調査員氏名 石川 寿保

臼を挽け挽け 団子して食わしよ

挽かにか冷飯また茶漬け 冷飯 挽かにか  
挽かにか冷飯 また茶漬け

臼を挽く夜にや 必ず来なれ

重かてごしょよというて来なれ てごしょよと 重か  
重かてごしょよ というて来なれ

小麦団子を たもとに入れて

思う殿御と寝てかじる 殿御と 思う  
思う殿御と 寝てかじる

うちを出るときや お月さんと二人

お月山端にわしゃここに 山端に お月  
お月山端に わしゃここに

あなた野中の いばらの花よ  
暮れて帰ればひきとめる 帰れば 暮れて  
暮れて帰れば ひきとめる

月のひよいと出に 見鳥が見える

見える見鳥がなつかしや 見鳥が 見える  
見える見鳥が なつかしや

死ねば夏死ね 虻蚊も泣くに

蠅も手を擦る後生願う 手を擦る 蠅も  
蠅も手を擦る 後生願う

益田 4

名 称 臼挽き歌  
伝 承 地 益田市向横田  
伝 承 者 横田タミヨ M 32年生  
調査員氏名 石川 寿保

臼のナーアア 頭挽き<sup>かしら</sup>ヤヨー 肩とる手とる

わしのナー わしのナーアア 殿御にヤヨー オーサテノー  
挽かしやせぬ ヨー

〱白はナーアア 挽きたしヨー さまとは寝たし

挽かにヤナー 挽かにヤナーアア 冷飯ヨー オーサテノー

また茶漬け ヨー

〱白をナーアア 挽くならヨー 十石どま挽かれ

二石ナー 二石ナーアア 三石かヨー オーサテノー

白よごしヨー

〱今年ナーアア 豊年どしヨー 穂に穂が咲いて

道のナー 道のナーアア 小草にもヨー オーサテノー

米がなるヨー

〱道のナーアア 小草にヨー 米がなるなれば

山のナー 山のナーアア 木の葉にもヨー オーサテノー

米がなるヨー

### 益田5

名 称 籾摺り歌

伝 承 地 益田市鎌手地方

伝 承 者 三浦 定夫 T4年生

調査員氏名 石川 寿保

〱歌のうたい出しや頭かしらにたのむ あとはおいらが引きうけた

〱今年や豊年穂に穂が咲いた 畑田もよい豆もよい

〱今宵や白挽くかならず来なれ 重かてごしょというて来なれ

〱白は挽きよじや回しようで軽い ものはいいよで角がたつ

〱白を挽け挽け団子して食わしよ 挽かにや冷飯また茶漬け

〱白の調子もよりよくなつた 二百二十で四斗挽いた

〱酒も飲んだし団子も食ろうた 白の回りも早くなる

### 益田6

名 称 木挽き歌

伝 承 地 益田市大草

伝 承 者 岡 義一 T12年生

調査員氏名 石川 寿保

〱ヤーレ山で切る木は数々あれど 思い切る気はさらにない

〱ヤーレなんぼ挽いてもこの木は切れぬ どこのお山の守り木やら

〱ヤーレ来るか来るかと川下見れば 河原よもぎの影ばかり

〱ヤーレ大工木挽きがこの世になけりや 神も仏も雨ざらし

〱ヤーレ山でかけすの鳴く声聞けば 里のあの子を思い出す

〱ヤーレ木挽き女房にやなるなよ娘 木挽きや息よひく早よ死ぬる

息よひく木挽きや 木挽きや息よひく早よ死ぬる

〱ヤーレ何が死なりよか木挽きは山で 今日もうれしや木挽き歌

うれしや今日も 今日もうれしや木挽き歌

〱ヤーレこまい子が泣く木挽きの小屋で 木挽きや子がのこない鋸のこの音

子はない木挽きや 木挽きや子はない鋸のこの音

〱ヤーレ山で切る木は数々あれど 思い切る気はさらにない

思い切る気は 思い切る気はさらにない

益田7

名称 木挽き歌  
伝承地 益田市横田地方  
伝承者 山本 玉勝 T4年生  
調査員氏名 石川 寿保

ハヤレ木挽きさんたち 板さえ割けば きざみ煙草にや米の飯  
ハヤレ山で子が泣く木挽きの子じゃろ ほかに山師がおらぬもの  
ハヤレ山の中でも三軒家でも 住めば都じゃわが里じゃ  
ハヤレ大工さんよりや木挽きが憎い 仲のよい木を挽きわける  
ハヤレ木挽き女房にや行くなよ妹 木挽きや息をひく早よ死ぬる  
ハヤレ木挽きさんにはなるなよ息子 若いさかりを山小屋で

益田8

名称 石見舟歌  
伝承地 益田市周辺  
伝承者 中村 和子 S16年生  
調査員氏名 石川 寿保

ハハー ドンド ドンド とエー  
波高島でヨー ソレホイ お伊勢呼ぶ声なつかしやヨー  
トコホイ トノエーナニヨエーソレソレ  
ハハー ドンド ドンド とエー  
櫓の音はヨー ソレホイ 石見男子おのこの腕だめし ヨー

トコホイ トノエーナニヨエーソレソレ  
ハハー ドンド ドンド とエー

鳴る瀬がござるヨー ソレホイ あれは網引あなまきの寄せ太鼓ヨー  
トコホイ トノエーナニヨエーソレソレ

ハハー ドンド ドンド とエー

錨に綱にヨー ソレホイ 情かけたや 今一度 ヨー

トコホイ トノエーナニヨエーソレソレ

ハハー ドンド ドンド とエー

鴨山恋しヨー ソレホイ 石見郎女いらつめ深情 ヨー

トコホイ トノエーナニヨエーソレソレ

ハハー ドンド ドンド とエー

打ち寄す波にヨー ソレホイ かわい乙女が網を引く ヨー

トコホイ トノエーナニヨエーソレソレ

益田9

名称 舟歌  
伝承地 益田市高津町緑ヶ丘浜  
伝承者 安野 一夫 T12年生  
調査員氏名 石川 寿保

元歌(進水式祝歌)

ハあらたまの 年の始めの 初夢に ハエー  
きさらぎ山の 松の木を とりて飾りた 夢を見た ハエー

その夢夢が 合うならば ハエー

見島港の 盃を ひと旗受けて 眺むれば ハエー

四角四面の 倉を建て 長者になるとは

さてもめでたい 夢じゃナ

ア うれしいナ めでたいノ ノ エー

イ それはカー エイ 枝もエ栄ゆるノー エイ エイ

葉もエー

(注) イのとき繫船の綱を切断するという。

応用歌(一般祝歌)

今日の お祝いに 鶴と亀とが舞い遊ぶ ハエー

鶴は千年 亀はまた 末代までも めでたうに ハエー

うれしいナ めでたいノ ノ エー

イ それはカー エイ

枝もエー栄ゆるノー エイ エイ 葉もエー

益田10

名称 舟歌

伝承地 益田市飯浦町

伝承者 長野 定義 S3年生

調査員氏名 石川 寿保

(進水の儀)

あめでたいナー めでたいナ 年の始めの初春に

きさらぎ山の楠木を 舟に造りし 今降ろす 新造降ろして

浮きなりゆ 見ればナ 鯉に大黒 船にやえびすナ

中に舟玉 福の神 七福神も乗り遊ぶ 上から鶴が舞い下がる

下から亀が舞い上る 何を舞うかと眺むれば

こなたの繁昌と舞をまう 鶴は千年 亀はまた

万年末代までも御栄あれ めでたいなうエイ はあうエイ

益田11

名称 舟おろし祝歌

伝承地 益田市小浜町

伝承者 上浜筆太郎 M36年生

調査員氏名 石川 寿保

めでたいナー めでたいナ 年の始めの 初夢に

ハエーイ 三揃木山の松の枝 おろして飾ると夢を見た

その夢夢が合うなれば 西や東に蔵を建て 長者になるとは

さてもめでたい夢じゃナ 御祝いめでたのーエー

ノーエイ それ若 枝もエー 栄える ノーエー 葉もエー

めでたいナー めでたいナ きさらぎ山の樟の木を

切りつ並めつ板に割き 船に造りて今おろす ハエーイ

銀柱を押し立てて 黄金のセミをくくませて

み縄手縄を整えて 綾や綾や錦を帆に巻いて

千里の灘も一走り 万里の灘も一走り ハエーイ

宝の島にと乗り込んで 数の宝を積み受けて

益田港に積み入れて こなた御蔵に納めおく

めでたいナー めでたいナー お祝いようわ

ハエーイ 枝もエ 栄ゆる ノーエーイ 葉もエー

ハサラサラと 宇竜港うりゅうこうを漕ぎ出だし ハーエーイ

さいの明神伏拝み 温泉津浜田を磯に見て

高津の嵐を帆に受けて 須佐の高山こうやまあとにして

すぐにやりましょう 下関までもナー

お祝いよわ めでたのエー ノーエーイ それ若

枝もエー 栄ゆる ノーエー 葉もエー

益田12

名 称 舟の謡い

伝 承 地 益田市沿岸一帯

伝 承 者 中村 俊夫 T8年生

調査員氏名 石川 寿保

ハこんちのーオ お祝いに 鶴と亀とが舞い遊ぶ ハエーエ

鶴はナ千年 亀はまた ハエーエ

末代までもめでとうに ハエーエ うれしいナ めでたい

ノーエー

ハそれはカ 枝も栄ゆる ノーエー 葉もエー

益田13

名 称 酩すり歌

伝 承 地 益田市益田地方

伝 承 者 福原 静雄 M39年生

調査員氏名 石川 寿保

ハ祝いめでたや若松様ヨー 枝が栄えてノーヤレ

葉もしゆげるヨー

ハ一の枝よりヤ二の枝よりもヨー 三の小枝がノーヤレ

じゃまをするヨー

ハ酒屋蔵の衆は乞食よりやむごいヨー

乞食や夜寝てノーヤレ昼乞食くヨー

益田14

名 称 酩すり歌

伝 承 地 益田市旧益田地方

伝 承 者 小寺 勝己 T4年生

調査員氏名 石川 寿保

ハヤレ酒屋酒屋と好んでは来たがヨー

ヤレ勤めかねますノーヤレこの冬をヨー

ヤレかねますかねます つとめヨー

ヤレ勤めかねますノーヤレハアこの冬をヨー

ハヤレ宵にヤ酩すり夜中のこしきヨー

ヤレ朝の洗場がノーヤレつるござるヨー

ハヤレ朝の洗場はつらいこたあないがヨー

ヤレ一人丸寝がノーヤレハーつるござるヨ

ヤレ酒屋蔵の衆は大名の暮らしヨ

ヤレ五尺六尺のヤレハーたてならべヨ

ヤレ五尺六尺何の木でつくるヨ

ヤレ杉や松のヤレハー神酒みきづくりヨ

ヤレ花は二度咲く若さは一度ヨ

ヤレ若さ恋しやノーヤレハー二度はないヨ

ヤレ桜三月あやめは五月ヨ

ヤレ咲いて年とるノーヤレハー梅の花ヨ

ヤレ酒屋蔵の衆は花ならつほみヨ

ヤレ今日も酒酒ノーヤレ明日も酒ヨ

ヤレ梅と桜を両手に持ちてヨ

ヤレどれが梅やらノーヤレ桜やらヨ

益田15

名 称 つつみ搦ぎ歌

伝 承 地 益田市遠田町

伝 承 者 高橋 ナツ M33年生  
調査員氏名 石川 寿保

ヤレ ハー ヤンサガ ドーカイ ソーレモ ヤーレ

ソーレ ヤーレ まだア まだ まだ

ヤーレ ソーレ ヨーイ トコ

もひとつ ヤーレ ソーレ ヤーレ

まだ もひとつ やろかい ソーレ

ヤーレ また 今度は かわそじゃ

ないか ソーレ ヤーレ トコ

まだまだヤーレ ソーレ ヨーイ

トコ もひとつやろかい ソーレ ヤーレ

また まだまだ やろかい

ソーレ ヨーイ トコ かわそじゃ

ないかい ソーレ ヤーレ トコ

もひと締めようじゃ ヨーイ ソーレ ヤーレ ヤレヤレ

まだヤーレ ソーレ ヨーイトコ

かわそじゃ ないかい ソーレ ヤーレ

まだ もひとつやろかい ソーレ

ヤーレ トコ まだまだ やろかい ソーレ ヤーイ トコ  
かわそじゃないかい ソーレ (以下必要に応じてつづく)

益田16

名 称 さんよう歌

伝 承 地 益田市向横田町

伝 承 者 椋 雪太 M32年生  
調査員氏名 石川 寿保

ヤレ ハー 祝いめでたの若松さまにヤ ヨーイ

枝はサ ヤーレ 栄えて ノーヨ 葉も 葉も しゅげる

ヤンサヨ ヤンサヨ ヤンサヨ



ハヤ一の枝よりヤニの枝よりも ヨーイ

三のサ ヤーレー 小枝が ノーヨー 影 影をなす

ヤンサヨ ヤンサヨ ヤンサヨ

ハヤ一めでためだが三つ重なりて ヨーイ

末はサ ヤーレー 鶴亀 ノーヨー 五葉 五葉の松

ヤンサヨ ヤンサヨ ヤンサヨ

ハヤ一これのご門にヤ白羽の鷹が ヨーイ

お家サ ヤーレー ご繁盛と ノーヨー 巢を 巢をかけた

ヤンサヨ ヤンサヨ ヤンサヨ

ハヤ一これの親方団子か餅か ヨーイ

餅はサ ヤーレ 餅じゃが ノーヨー 金 金持ちじゃ

ヤンサヨ ヤンサヨ ヤンサヨ

### 益田17

名 称 祝入り歌

伝 承 地 益田市鎌手地方

伝 承 者 三宅 定夫 T4年生

調査員氏名 石川 寿保

ハハア 祝いナー ハア めでたや ハア 若松さまよ

ハア 枝がナー ハア 栄えてヨー ハア 葉もしげるなり

ハハア 枝がナー ハア 栄えてよ ハア 葉がしげるなら

ハア おろせナー ハア 小松のヨー ハア 一の枝よ

ハハア 今日がナー ハア 日もよしよ ハア 天気もよいし

ハア めぐりナー ハア あわせてヨー ハア 縁となるなり

### 益田18

名 称 元日祝い歌

伝 承 地 益田市飯浦町

伝 承 者 長野 定義 S3年生

調査員氏名 石川 寿保

ハアあめでたいナー めでたいナー 年の始めの 初春に

きさらぎ山の 松の枝を 折りし飾るを 夢に見る

この夢夢が あうならば 見島の方に 乗りうけて

一旗あげて 西や東に蔵をたて 長者になるとは

さてもめでたい ことじゃのう 御栄あれ

めでたいノー エイ めでたいノー

### 益田19

名 称 棟あげ歌

伝 承 地 益田市鎌手町

伝 承 者 三浦 定夫 T4年生

調査員氏名 石川 寿保

ハ祝い目出たや 若松さまよ ヤレ 枝も栄えて

ヤーレ 葉もしげる

ハこれの御門に 鶴が巢をかけて ヤレ お家ご繁盛と

ヤーレ いうて鳴いた

へこれが今日の日のしまいの槌よ ヤレ 槌にゃかぐらを  
ヤーレ 舞い納め

益田 20

名 称 高津餅搦ぎ歌  
伝 承 地 益田市高津町  
伝 承 者 吉村 要一 S22年生  
調査員氏名 石川 寿保

こぶり歌

へ鮎は瀬に住む 鳥は木の枝に 人は情の下に住む

アリヤ ヨーヨー ヨイヨイヨイ

アリヤリヤン コリヤリヤン ヨーイトナー ヨイヨイ

へ沖の瀬の瀬の また瀬のあわび

わしが取らなきあノー人が取る

(以下囃子略)

へヤンサヤンサで沖乗る船は 見かきや菜でもノー苦がござる

へゆこか益田よ 戻るか高津 ここが思案の 吉田原

もちつき歌

へこれの親方 団子か餅か アリヤ 餅は餅でも

ナント 金持ちよ ヤンサヨ

へ庭じゃ餅よつく 表じゃちぎる アリヤ 奥の四畳半じゃ

ナント 金はかる ヤンサヨ

へこれの座敷は めでたい座敷 アリヤ 鶴と亀とが

ナント 酌をとる ヤンサヨ

へ白どりさんと 杵どりさんの 仲のよき見れば

アリヤ わしも妻とりや ナント あのごとく ヤンサヨ

へこれがこの家の 祝いのしまい アリヤ 白に飾りを

アーア あげましよう ヤンサヨ

益田 21

名 称 角力甚句  
伝 承 地 益田市種地方  
伝 承 者 岡 一枝 S13年生 他  
調査員氏名 石川 寿保

女 そろうたトー 踊子がそろうた

男女 トコドッコイ トコドッコイ

女 稲エーエイヤーエー

男 トコドッコイ

女 アリヤ出穂よりさまよくそろうた

男 トコドッコイ

女 トコドッコイ サノサ エー エー これから

甚句どもやめて

男 トコドッコイ

女 当世ヤーエー

男 トコドッコイ

女 アリヤ はやりの

男

ストトコ節でもやるかい姉さん 一軒二軒三軒の  
四軒目の木の家の端でも 一本差したが町人さん  
二本差したが侍さん 三本差したが宮川名物  
でんがくさん 四本柱は角力とりさん 角力とりさんなら  
やってくるやとノーホホホイ 言われたときにヤア  
トコドッコイ

女  
ところは上州館林たてばやし

ひきわり飯まんまの台置きで いつときさませば  
パラリ パラリ

益田22

名 称 向横田節  
伝 承 地 益田市向横田町  
伝 承 者 増野 松男 T9年生  
調査員氏名 石川 寿保

へ来るか来るかとヨー 川下見ればヨーソレホイ  
河原よもぎの影ばかりヨー ソレホイ何をエー ソレソレー  
へ小石小川のヨー 鶺鴒の鳥見ればヨーソレホイ  
小鮒くわえて瀬をのぼるヨー ソレホイ何をエー ソレソレー  
へ土手の向うにヨー 白帆が見えるヨーソレホイ  
あれは帰りの高瀬舟ヨー ソレホイ何をエー ソレソレー  
へ横田平野をヨー 流れる川にヤヨーソレホイ

黄金産み出す鮎が住むヨー ソレホイ何をエー ソレソレー  
へわしの在所はヨー 向かいの横田ヨーソレホイ  
気立てやさしい娘こがござるヨー ソレホイ何をエーソレソレー  
へ山が高うてヨー あの家見えぬヨーソレホイ  
あの家恋しや山憎くやヨー ソレホイ何をエー ソレソレー

益田23

名 称 曾我兄弟仇討ちの歌  
伝 承 地 益田市下種町  
伝 承 者 奥田 五郎 T2年生  
調査員氏名 石川 寿保

へハア 見上げる空に赤々と ドッコイ 銀壁閃光照らしつつ  
ハア 白影高こうたり芙蓉峯 ドッコイ 伏しては深き太平洋  
蒼海まんまん限りなし (その峯よりもいや高く)  
(その海よりもなお深き) 父の御恩に報いんと  
コリヤ 十八年の辛酸に 磨きあげたる腕冴えて  
(げにや孝子の鏡とぞ) (芳ばしき名を後の世に)  
(残して散りし桜花) (曾我兄弟の勲しを)  
(ともに語らん世人) さても二人の兄弟は  
ドッコイ 母の賜いし小袖をば たすき十字にはや取りて  
ドッコイ 互いに炬火たいまつ振りかざし (仇工藤の仮屋をば)  
(捜せどさらに人もなし) (いかかはせじとたたずめば)

(向こうに見える灯の) 陰に二人は身をひそめ

見れば仇たる美人なり ハア 波にさまよう沖つ舟

ドッコイ ねぐらに迷う群千鳥

ハア しるべの道はこなたぞや

ドッコイ いざこなたへと招かれる

(声をしるべに兄弟は) (祐経いずこを分けて行く)

(知るや知らずや左右衛門は)

ハア 前後も知らず伏している こりゃ天の恵みと伏し拝み

(十郎五郎に討てという) (五郎は兄にゆずりけり)

ハア 十郎躍って肩を切る

ドッコイ つづいて五郎が胸を刺す 十八年の父の仇

コリヤ 千辛万苦に今宵今 仇工藤を討ち取りぬ

われと思わん人來たれ

(語り) ヤーヤー遠からん者は音にも聞け

近くは寄って目にも見よ

われこそは川津三郎祐康が忘れ形見

曾我の十郎祐成同じく第五郎時宗 日ごろ仇とつけねらう

憎つき工藤左右衛門討ち取ったり われと思わん方々は

出合って功名いたされよ 兄弟相手にやなり申さん

出合え出合えという声は 幾千年の後までも

ドッコイ 富士の高嶺に伝わりて

尽きぬことこそめでたけれ

#### 益田 24

名 称 白上田植え囃子

伝 承 地 益田中西

伝 承 者 橋本 茂 S 15年生 他

調査員氏名 石川 寿保

ハア松に竹に柳にわが上 会式はなよ極楽は

君が代でわが上 会式はな

ハアやよのひっさげこー そ長柄の銚子で千代の

御盃こし参らしよ

ハア田主さまに参らしよやアー 今日のお日はええ日よ

白銀の銚子盆に 玉の御酒を入れてな

ハア向かいが迷う葦毛いの さあ駒によ手綱縫りかけー

て駒参らしよ

ハアラ西に行けえ西にいの さあ行けがよあんるが

さんもうしいげこうそ さあ ふたつ

ハ(落とし)池の鴛鴦思いをつれて 立ちやれの

サ思いをつれて 立ちやれの

ハアあらちしろのじん紫に馬皮の 饅頭笠に黒木の数珠

手にかけて小太刀差したが 乙女子よ若い衆が三人

通るがどれがこれの乙女子

ハ(落とし)長柄の銚子で三度の盃 差していのサ三度の盃

差していの

ハア築うてや築うてヨ 築に笛がとまるとよ

御洗川の中の瀬で 稚児が笛を落とした

へ(落とし) 千代もへすへす大黒のおすで 詣でやの

サ大黒のおすで 詣でやの

益田25

名	称	美濃地田植え雛子
伝	承地	益田市美濃地地方
伝	承者	竹内 勝 S18年生 他
調査員氏名		石川 寿保

へ何と一調子 苗を取りましようや

エイエーイ 一調子 苗を取りましようや

(苗とり拍子)

へアラ この苗は 若苗で もとに手を 入れてな

上の方に かいなびけて もとに手を 入れてな

へアラ おもしろい ものぞや 富士の 巻狩りは

弓矢を そろえて 富士の 巻狩りは

へアラ 先牛の 角まきに とまる鳥は 何鳥

口は錦にとうれんげ 羽根の白い鳥でな

へアラ 若殿の 田島どんは 小草刈りが 名人で

石菖に ごま萱に 茅萱に 小草を刈りませ

へアラ この谷川を 渡るとき ケヨセン つんがに 落とした

見いはせんかよ つんがにを あしもがれて もがれ

一寸小刀で 眼抜かれ でも知らぬ つんがにを

この谷川に 住まいせんぞよ 見いはせんぞえ つんがにを

へアラ 昨日来て 今日見れば 門の松が 高いな

高いことは 道理ぞえ 徳の笠で 招いた

へアラ 清盛と いう方は 所々に名を 残した

兵庫の つきしまと 音戸の瀬戸を 切り抜いた

へアラ 今朝夜明け ほのぼのに 山の方を 見たれば

霧やら 霞やら 山の方を 見たれば

へアラ おもう様の ごでるやら 背戸の 車戸はな

エン キリキリとなく 背戸の車戸はな 毎夜車戸鳴かずと回れ

エイエーイ 車戸鳴かずと回れ

(植え拍子)

へ千早振る ヤーレ 神代の昔 田の始め 田の始め

ヤーレ こげい 石川をたたみあげ

へさんばへの ヤーレ 産湯の水は どこ水か どこ水か

ヤーレ 大和の国の 石清水

へ天竺の ヤーレ 高天の原に 昼寝をして 昼寝をして

ヤーレ 想いの女郎を 夢にゃ見た

へこびはにも こびはにも こびは 中に けて

えびいは ヒョーヒョー えびいは ヒョー ヒョー

えびいは どこに置いて来た

シヨ ゆんべの ところの 手しら拍子に

へ日が暮れる ヤーレ 西山見れば あざやかに あざやかに

ヤーレ 日輪さまの 舞いござる

舞いやござるぞ ああ雲先に

エイテーイ ござるぞ あの雲先に  
(注) つんがに川つがに、蟹の一種。

益田 26

名 称	梅月田植え囃子
伝 承 地	益田市横田地方
伝 承 者	石川 正夫 T9年生 石川 久子 S28年生 石川 寿保
調査員氏名	

(八調子)

男 何と一調子や植えおやかすかに  
女 エーンエーンやーれこりや植えおやかすかに  
男 一調子や植えおやかすかに  
女 エーンエーンやーれこりや植えおやかすかに  
男 おもしろい声をするあれは何の声やら  
女 えべす大黒の俵まくる声やら  
男 昨日見て今日見れば前の松が高いの  
女 高いことはどうりどうり徳の笠で招いた  
男 ひぐらしの雀めが笠のふちを回るの  
女 回りよて回りよて笠のふちを回るの  
男 笹の葉がそろたよ何笠がそろうた  
女 京笠に伊勢笠に東笠あずまがそろうた  
男 昼ま持ちがござるやら赤いかたびらでの  
女 ちらりしゃらりと赤いかたびらでの

男 今朝とおりやごん鳥が露にしょんぼりぬれての  
女 うらうらと鳴いて通る露にしょんぼりぬれての  
男 おもしろいことやら富士の巻き狩は  
女 弓矢をそろえて富士の巻き狩は  
男 清盛という人はよい名を残した  
女 兵庫のつくしまと音戸の瀬戸を切り抜いた  
男 向こう通るおやじどんのへこの前が長い  
女 ひっからげてはさんだらも少し道も早かろう  
男 手綱揺りかけ早いが駒よ  
女 エーンエーンやれこりや早いが駒よ  
男 揺りかけ早いが駒よ  
女 エーンエーンやれこりや早いが駒よ  
男 ハースッサーハースッサー

(六調子)

男 宮島さまの御普請にはどなたが棟梁なされた  
女 飛弾ひんだが匠たくみに竹田の番匠兩人棟梁なされた  
男 京へのぼれ京へのぼれ京で何を習うた  
女 一に太鼓二には笛三にささら手拍子

(一部歌詞省略)

打ち上げ  
男 どんどらどんと打ちあげてたたく太鼓の音やら  
女 も一つどんと打ちあげてたたく太鼓の音やら

益田 27

名 称 向横田盆踊り  
伝 承 地 益田市向横田町  
伝 承 者 横田 豊 S 16年生 他  
調査員氏名 石川 寿保

(鈴木主人)

へソレナイイソーユセー 花のお江戸のはかたの浦に

アリヤヨイサーヨイヤサー (以下略)

へさても珍し心中の話 所は四谷の新宿町の

紺ののれんに桔梗の紋は 音に聞こえし橋本屋とて

あまた女郎衆のあるその中に お職女郎の白糸こそは

年は十九で同性そだち 愛敬よければ皆人さんが

われもわれもと名指しであがる

わけてお客をどなたと聞けば 春は花咲く青山辺の

鈴木主人という侍で 女房持ちて二人の子供

三つ五つのいたずらざかり 二人の子供のあるその中を

今日も明日もと女郎買いばかり 見るに見かねて女房のお安

ある日わが夫主人に向かい これさわが夫主人さまよ

わたしや女房で焼くのじゃないが

子供二人はだてには持たぬ 十九二十の身じゃあるまいし

人に意見もいう年ごろで やめておくれよ女郎買いばかりや

金のなる木を持ちゃしゃんすまい

どうせ切れるの六段目には 連れて逃げるか心中するか

一つ二つの思案と見える しかし二人の子供がふびん

子供二人とわたしが身をば 末はどうする主人さまよ

言えば主人は腹立ち顔で 何のこしゃくな女房の意見

おのが心でやまないものが 女房くらしいの意見じゃやまぬ

愚痴なそちより女郎がかわい それがいやなら子供をつれて

そちのお里へ出て行かしゃんせ あいそつかしの主人さまよ

そこで主人はこやけになりて いでて行くのが女郎買い姿

後でお安は聞くくやしやと いかにか夫のわがままじゃとて

死んでしまおと覚悟はすれど 五つ三つの子にひかされて

死ぬに死なれぬなげいておれば

五つなる子がそばへとよりて

これさかかさんなげ泣かしやんす 気分悪けりやお葉あげよ

どこぞ痛くばさすりてあげよ

ぼんが泣きます乳くだしやんせ 言えばお安は顔ふりあげて

どこも痛くて泣くのじゃないが

おさなけれどもよう聞けほんや あまり父さん身持ちが悪い

意見いたせばこしゃくな奴と

たぶさつかんでちようちやくなさる さても残念夫の心

自害しようかと覚悟はすれど それじゃ二人の子供がふびん

どうせ女房の意見じゃやまぬ さればこれから新宿町の

女郎に頼んで意見をしよう 三つになる子を背中に負うて

五つなる子の手をひきまして

いでて行くのがさもあわれなる 行けばほどなく新宿町よ

店ののれんに橋本屋とて 見れば表に主人が草履

それと見るより小女中招き わたしやこちらの白糸さんにと  
どうぞ会いたい会わしておくれ

はいと小女中は二階にあがり これさあねさん白糸さんよ  
どこの女中か知らないけれど お前に何か用ありそうに  
会うてやりやんせ白糸さんよ 言えは白糸二階からおりる  
わたしを訪ねる女中というは お前さんかえご用でござる  
言えはお安は初めて会うて わたしや青山主人の女房

お前見かけて頼みでござる 主人身分は勤めの身分  
日ごろ勤めをおろかにすれば 末はお扶持も離れるほどに  
ここの道理を聞きわけまして どうぞわが夫主人さまに  
意見なされて白糸さまよ せめてこの子が十にもなれば  
昼夜あげづめなさりとままよ

またはわたしが去られた後で お前女房になりゃんすとて  
どうぞそのうち主人さまに 三度来たなら一度はあげて  
二度は意見をしてくださいんせ 言えは白糸言葉につまり  
わたしも勤める身の上なれば 女房持ちとは露ほど知らぬ  
ほんに今までこんじんなれど さぞや憎かるお腹が立とう  
わしもこれから主人さまに 意見しましうお帰りなされ  
言うて白糸二階にあがる 後で二人の子供を連れて  
お安わが家へ早や帰られる ついに白糸主人に向かい  
お前女房が子供を連れて わしを頼みに来ましたほかに  
今日はお帰りとめてはすまぬ いえは主人はにこりと笑い  
おいておくれや久しいものと

ついにその日も居つづけなさる

待てど暮らせど帰りはしない お安子供を相手にいたし  
もはやその日も早やあけくれれば 支配所よりのお使いありて  
主人身持ちが不埒な故に 扶持もなんにも召しあげられて  
後でお安は途方にくれて 後に残りて子供がふびん  
思案しかねて当惑いたし 扶持に離れて長らえおれば  
馬鹿よたわけと言わりようよりは

武士の女房じゃ自害をしようとして 子供二人を寝かしておいて  
硯ひきよせ墨すり流し 落ちる涙が硯の水よ

涙をとどめて書き置きいたし 白の木綿でわが身を巻いて  
二人子供の寝たのを見れば かわいかわいで子にひかされて  
思い切る刃を逆手に持ちて グズとしかえし刃の下に

二人子供は早や目がさめて 三つになる子がお乳にすがる  
五つなる子が背中にすがり これさ母さんこれ母さんと  
幼な心ではや泣くばかり 主人それとは夢にも知らず  
女郎屋立ちいでほろほろ酔いで こようじらしの小唄で帰り  
表口より今帰りと 子供二人は駆けいでながら  
もうし父さんお帰りなるが なぜか母さん今日にと限り  
物も言わずに一日およる ほんに今日までいたずらしたが  
御意にそむかぬのう父さまへ  
どうぞ詫びしてくださいませと 聞いて主人は驚き入りて  
間の唐紙さらりと開けて 見ればお安は血潮に染まり  
おのが心が悪いがゆえに 自害したかよふびんなことと



涙ながらに二人の子供 膝に抱きあげかわいやほどに  
いえば子供は死骸にすがり もうし母さんなぜそうなった  
わたし二人はどうしましょうと

なげく子供をふりすておいて 檀那寺へと急いで行きて  
戒名もらってわが家に帰り あわれなるかや女房の死骸  
こもに包みて背中に背負い 三つになる子を前にと抱え  
五つなる子の手をひきつれて 行けばお寺で葬りすます

ぜいも泣く泣くわが家に帰り 女房お安が書き置き見れば  
あまり勤めの放埒ゆえに 家も何にも取りあげられる

または門前払いとなりて さても主人は仰天なして

子供泣くのをそのままおいて 急ぎ行くのが白糸方へ

これはおいでか主人さまよ したが今宵はお帰りなされ

言えは主人はその物語り えりにかけたる戒名出して

見せりや白糸手にこれかけて われが心の悪いがゆえに

お安さんも自害をさせた さればこれから三途の川も

お安さんこそ手をひきましょ

いえば主人はしばしとどめて われとお前と心中しては

お安さまへの言訳たためぬ お前死なずと長らえしやんせ

二人子供を成人させて 回向たのむよ主人さまよ

いうて白糸下門へ入りて あまた朋輩女郎衆を招き

譲り物とて櫛こうがいや やれば小春は不思議に思い

これさねえさんどうしたわけか

今日に限ってゆえりをいたし それにお願もすぐれもしない

言えは白糸よう聞け小春 われは幼い七つの年に  
この身売られて今この里へ 幸い勤めも早や十二年  
勤めましたよ主人さまに

それにつけてはわしや声どまり

声が出ません蚊の鳴くほどに 声を止めてまた出て話す

あとの先生はご仕度をたのむ 仕度よければま近かにおいで

わしが替わる時アきりこで替わる

#### 益田28

名 称 願力踊りの歌

伝 承 地 益田市東部一帯

伝 承 者 岡 義一 T12年生 他

調査員氏名 石川 寿保

今の音頭の名人さまは だれかどなたかわしや知らねども

声はよい声細谷川の 鶯鳴く声ノーおもしろや

お声休みで煙草の間 わしが少しく声継ぎします

わしが声とてよいのじゃないが 声の悪いはもと生まれつき

節のできぬは師匠ないからよ とかく音頭は囃子が大事

囃子ぬるけりや口説かれませぬ

口説ぬるけりや囃されませぬ 踊るご連中や側の衆さまは

声をそろえてお囃子を頼む わしが音頭はこの山奥の

鹿の横跳びかしこやこや 竹の丸橋渡ろがままよ

落ちたところはご免を願う

(石童丸)

ハヤレコイ サコイ 昔語りを聞くより今は

哀れなるかや石童丸は ヤレコイ サコイ

小さいうちから神妙な者で 父を尋ねる思いとなりて

ヤレコイ サコイ (以下略)

母を連れ出し高野にのぼる 聞けば高野にや女人はご無用

母は籠の玉屋が茶屋に 預けおくのは哀れなけれど

すぐにその身はみ山にのぼる 九万九千のおん寺々を

訪ねめぐれど行方がしれぬ さてはぜひない父親さまは

お国通らせたまいしときに おりふし父親刈萱御僧

花の御番に当たらせ給い 花の御籠御手に持ちて

下にさがりしたまいしときに 音に聞こえし無明の橋で

両方互に行きあうけれど 親は子知らず子は親知らず

親と子の縁切れぬが不思議 問うて見ばやと衣の袖を

しかととらまえこれ御僧さま 物の問いたいことこそあるわ

わしが父親今道心で 昨年剃りたも今道心で

今年剃りたも今道心で 剃りて間もない今道心の

このや御山にきまりはないが もしも御山にごさんすならば

会わせたまいと涙で語る さてはおろかな稚児こそ来たれ

そんな尋ねをしたくらいでは

会えなものではないぞや稚児や 国はどこそこ名は何右衛門

書いて高札立ておくならば 五日七日か十日にや知れる

会おと思えばそう書きなされ さてはお情御僧さまよ

書いてくだされその高札を 書いてやるのはいとやすけれど

ここは無明の橋なかなれば 筆に事かき墨紙持たぬ

萱加堂まで来れや稚児や 萱加堂まで連れ返されて

硯とり出す墨すりにごす 右の御手に御筆持ちて

左御手に高札持ちて 書いてやるから名乗れや稚児や

名乗り名乗るは恥ずかしけれど さればそのとき筑紫の国の

松浦藤三の御惣領の 加藤左衛門名は重氏の

十と三年以前のころに 一家親類より集まりて

花の遊びをなさんすときに 父の持ちたる御盃に

花が一輪吹き入りたまい 薔花なら祝いのものよ

落花した花世は捨て花よ それが菩提のお種となりて

都方なる奥黒谷に 髪をこぼして出家となりて

今はお山にましますと聞く 父はそのとき二十三歳で

母はそのとき十九歳なり 姉の千代鶴三歳の年で

私が胎内七月半で 見捨てられたるみどり子なれど

今は成人名は石童と すすり余りし涙で語る

いえば御僧筆をば投げて 見るにわが子かあら不思議やと

御僧さまこそ筑紫でないか 筑紫言葉によう似た言葉

そこで御僧が申されようには そちが尋ねる父親さまは

同じお寺で兄弟子となる 去年三月死ねたと聞くが

日こそ多けれ今日命日の お墓所を教えて進上

お墓所は大通りなる 何の縁ない他人の墓を

墓の前にと立ちふさがりて 声も惜しまず大声あげて

年は享保十三年よ 遂に散り行くのや散りにける

へだれかどなたかお代わりを頼む

わしが音頭じゃ踊りにゃならぬ

代わり御先生にゃお支度なされ

わたしや音頭はもうやめました

ヨイサうれしや御先生が見えた 渡しまするぞこの唐傘を

代わり御先生にゃごひいきを頼む

わたしややめますこの声限り

### 益田 29

名 称 真砂盆踊り口説歌

伝 承 地 益田市真砂地区

伝 承 者 三浦 敏治 S5年生 他

調査員氏名 石川 寿保

にがたり(前おき)

へにがたヨー にがた踊りにゃ太鼓はいらぬ

足が太鼓でサーマエ 手が踊る

盆はヨー 盆はうれしや別れた人がヨ

晴れてこの世へサーマエ 会いに来るヨ

佐倉宗五郎

へこれは過ぎにしその物語 アーヨイヨイ 国は下総印旛の郡こわり

佐倉領にてアーヨイヨイヨイ 岩橋村よ

アリヤヨイヨイヨイヨイヤネ

アリヤリヤイコリヤリヤイ (以下略)

名主総代宗五郎というて 心正直利発の者よ

このや由来を尋ねて聞けば 国の役人おごりに長じ

年貢課役を厳しくなさる 下の困窮目もあてられず

今は暮らしもできがたければ 組の村々相談極め

年貢課役の御免を願う されど役人よこしまなれば

背くやからはお仕置なりと なおも厳しき取立てなれば

百姓残らず思案にくれて 組や隣村始めといたし

二百二十のその村々へ 回状いだして相談なせば

宗五郎をば始めとなして 名主惣代残らず合わせ

お江戸屋敷へ願いをあげる またも今度も取り上げられず

宗五郎心で思案を定め 諸人一同の身の苦しみを

わが身一人の命に替えて いっそお上へ願わんものと

国の妻子によくよく頼み 暮れの二十日のお成りの場所は

花のお江戸の三枚橋の 下に忍んで待ちかけまする

そのや折柄將軍さまは お成り相すみ還御となりて

橋の袂へお駕籠はかかる かねて用意の宗五郎こそは

竹の端へと願書を挟み 橋の下よりたち出でながら

おそれ多くもお駕籠の中へ 願書さし入れ平伏いたす

それと見るよりお供の衆は すぐに宗五郎にはや繩かけて

お奉行所へとお渡しなさる されば佐倉の御領主さまは

国の宗五郎が將軍さまへ 直の願いをあげたるゆえに

すぐに上よりいい渡されて 年貢課役もご免となれば

国に残りし百姓どもは、心落ちつき安心いたし  
 下の騒ぎは鎮まりたれど、ここに哀れは佐倉宗五郎  
 上へ直訴のとがめとなりて、国へひかれて獄舎の住まい  
 殿の憎しみ昼夜の責苦、今は裁許もきわまりまして  
 親子六人仕置きき場所へ、力なくなく引きいだされて  
 宗五郎夫婦の見るその前で、子供ならべて成敗いたす  
 修羅の太鼓が合図の時刻、げにも地獄の牛頭馬頭なるか  
 未だ二つの三之助より、首を切らんと大刀ふりあげる  
 これを見るより母親こそは、心も身も世もあられぬ思い  
 わが身夫婦は責苦にあうて、いかに苦しみたせばとても  
 いといたけれどさてむごらしや、頑是<sup>がんせ</sup>なき子の何とがありて  
 殺したもうぞ無惨な人よ、鬼か天狗のしわざであるか  
 もの報いはあるものなるぞ、思いしらせん覚悟せよと  
 ハットつき息火炎のごとく、なげき苦しむ早そのうちに  
 五つの喜八をはじめといたし、中は九つ源之助より  
 惣領十一宗吉までも、なさけ容赦もあらみのかたな  
 子供四人は両手を合わし、これや父さんあの母さんよ  
 先きへ行くから後より早く、急ぎたまえとけなげな言葉  
 南無という声この世のいとま、首は夫婦の前へと落ちる  
 これにつづいて夫婦の者を、台にかけおき大身の槍で  
 あわれ無惨や成敗いたす、あまた諸人のその見物は  
 わつと声たてみな一同に、嘆きたてたる音すさまじく  
 天地に届きてあら恐しや、身の毛いよ立ち見る人々も

共に心も消え入るばかり、さればその後夫婦の者は  
 こりし一念この世に残り、そのや霊魂現れいでて  
 国のやかたのお庭が先きの、月見灯籠の小蔭に立ちて  
 細き声さえいとわがれて、殿のおんためお国を思い  
 苦勞苦患の年月つもり、おそれながらも將軍さまへ  
 直きのお願いいたせし罪よ、これも非道の役人がたの  
 上をあざむく偽りなれば、なおも怨みの数重りて  
 ここに現れ怨みをはらす、聞いて殿さま役人はじめ  
 国の百姓みな一同に、宗五郎魂魄神へとあがむ  
 思いはらして豊作守ろ、今に佐倉の鎮守と祭り  
 後の世までも大明神と、たたえまつりておろがみまする  
 国の守りとその名は残る

益田 30

名	美濃地益踊り口説
伝承地	益田市美濃地地方
伝承者	森脇 博文 S17年生 他
調査員氏名	石川 寿保

三太くどき

一番

へさては東西静まり給え  
 ソレサーノヤットシヨイ  
 歌は節々所で変わる

アラヨイヤサーヨイヤナー（以下略）

竹の節さえ世が世で変わる それにつれても哀れなことよ  
よめり返りか枯木に花か 咲くといえどもまたまれなこと  
島の始めは淡路が島よ 国の始めは大和の国で  
大和の国では山崎三太 年は十九ですみ前髪で  
器量吉野の桜木育ち 時代三太の生まれを聞けば  
元はよしある侍なれど 今は世に落ち哀れな暮らし  
幼少折にて父子に離れ 母を一人を養いかねて  
貧はつれない世の情ない 身をば大和のさかい屋さまに  
小判千両でその身を売りにて 主の御意なら月夜も闇も  
雨の降る日もまた風の夜も 寒の師走も日の六月も  
駒の手綱で月日を送る はいしどうどと駒追い立てて  
京都上りの伏見の町を あまた朋輩打ちつれ立って  
駒はいさめく歌つてのぼる その日三太の歌いし歌は  
ここは照る照る鈴鹿はくもる 間の土山いざ雨が降る  
止めて止まらぬ色の道 伏見町なる代官さまの  
筑紫判官家人さまに 一人もちたる玉代の姫が  
つもるおん年十六歳で 綾と錦に巻かれて育ち  
姫子なれどもあれいとおしや 向こう通るは大和の馬子か  
さてはよい声大和の馬子か 声がよいよにご器量もよかろ  
ご器量よいよに心もよかる 一目見たいぞこの馬方を  
なれどやたかな侍なれば 門に晴れ出て見ることならぬ  
それがふじつの病となりて 一日二日も床にとつかれ

親の煩惱子のかわいさよ 医者は町医者御典医までも  
せいっ尽しつ養生なざる およそ日本六十余州の  
大社大社に立願立てて ほしのお祭りいたしてみれど  
愛宕さまへも日参まいり なれど玉代は平癒がのうて  
医者も下女衆も二親さまも 次の間に出てお控えなざる  
姫は寝の間にうただ一人 そこで一筆残さんものと  
重きこうべをようようとあげて 硯ひきよせ墨すり流し  
鹿の巻筆小すじの紙に 鹿の巻筆よろしく染めて  
身から持ち出た病であれば 神や仏の御利益ホリやくもあるが  
医者や薬で快方もなかる わしの病は恥ずかしながら  
馬子の三太の歌いし歌に 焦がれ死にぞやふた親さまよ  
わしの死んだるその後々は 千部万部の弔いよりも  
とかく三太の馬方節を 位牌前でも歌わせたまえ  
書いて姫君相果てなざる 秋の稲妻川辺の螢  
うつらうつらと消え行くごとく  
寝入るごとくに相果てなざる あとで二人のふた親方が  
親に夢ほど知らしたなれば なんぼいやしき馬方なれど  
末はめでたく添わするものに 何をいうても皆あごとよ  
姫の葬礼いざいたさんと 棺は金襴八方棺で  
四方棺にはつがにを這わせ 四つのすまには燕の鳥よ  
天まく内まくその四方まく なげしぼたんにあのぜんの綱  
旗や天蓋竜たつまでも 風に吹かれてすじょうなものよ  
姫の葬礼相整える

二番

へ日にちたつのも間もないものよ 姫の七日にそのあたる日に

馬子の三太はそれとも知らず 京都もどりか歌うてもどる

その日三太の歌いし歌は 竹に雀は品よくとまる

とめてとまらぬ色の道 それを代官はや出て見やる

あんにもどるは大和の馬子か 姫が焦がれた三太じゃないか

あれを呼べとの御意が下る 一人御家来そりよ聞くよりも

三太御用とのたまりければ そこへ三太は立ちとどまりて

幼少折りより馬方すれど 身には落度の覚えもないが

わしに用とは不思議なことよ 御用筋なら寄らねばならぬ

門の柱に駒つなぎとめ いざまア恐し御庭を急ぐ

玄関口にと両手をついて いかか御用と伺いければ

それを代官早よ出て見やる さてもきれいなすみ前髪で

馬子をするよな人相じゃないが

聞いてくたされ恥ずかしながら 一人持ちたる玉代の姫が

そなた歌やる馬子歌聞いて 焦がれ死にぞやこれ三太殿

阿呆言やんす代官さまよ わしのようなるいやしき者に

焦がれ死にとはあの姫さまは 雲にかけ橋霞に千鳥

及びないことこの空恋に 言うが嘘ならこれ見給えと

姫の書きおきさらばと出して 三太手に取りつらつら見れば

さてもそうかいあの姫さまは 脚絆ひも解き草鞋脱いで

すぐに三太は仏に参る 仏参りて礼拝いたす

樞一節馬方三節 回向唱えて三太の礼儀

すぐに三太は御前を下る 御前下りておいとま申す

そこで代官申されように 姫のお墓は新松原よ

行くも戻るも道筋なれば 駒の蹴あげたその水なりと

姫のお墓に手向けてくしゃれ

姫のためなりその身のためじゃ 門の晴れ出て物案じする

今日はお墓に参らんものと 手には数珠さげ花たごさげて

伏見町をばひそかに通る 忍び忍んでお墓に参る

上に置いたるうわ屋をのけて まずはもうれい頓証菩提

御じょう御墓頓証菩提 おつとめでたし掘りつきなさる

一鍬掘りては南無阿弥陀仏 二鍬掘りては念仏となえ

三鍬掘りては馬子節を 四鍬掘りては馬子歌歌う

五鍬目にこそ掘りつきまして 棺をひきあげそれ眺むれば

さても十五夜有明月と 月のあかりにすかして見れば

美女か美人かすぐれた生まれ さても生きやんせさもその姿

言うて三太は涙を流し 姫の口中に落ちいりまして

三太涙が気つけとなりて そこで姫君かすかな声で

今の声したどなたかだれか わしが焦がれた三太じゃないか

あなた屋敷にお帰りなれば 負うてお帰れそれ三太殿

いだしおそろし背中をすけて 右の玉代を背中に負うて

すぐに三太は屋敷に帰る それを代官早よ出て見やる

あんに戻るは玉代じゃないか 死んだ玉代が戻りはすまい

めうじ名残と二人の者に 三太この世の物語りする

姫は未来の物語りする 法事なかばが祝いとなりて

一の祝いに元服なさる 二なる祝いに名をさげなさる  
三の祝いにこの上なしの 衣服大小かみしも御免  
三太母親連れよせなさる 五色車で連れよせなさる  
元は三太は馬方なれど 今は世に出て伏見の町の  
末の代官つとめて行きやる 末は鶴亀のう五葉の松

益田 31

名 称 益田盆踊り口説歌  
伝 承 地 益田市益田地区  
伝 承 者 中村 秀夫 T 15年生 他  
調査員氏名 石川 寿保

益田盆歌

ソレソレヤットナー ヨーイヤセー  
サヨイサーヨイヤナーベ 音頭ヨエもろた  
ソレソレヤットナー ヨーイヤセー  
それがさよなら すぐさまほんで  
ソレソレヤットナー ヨーイヤセー 古く栄えた益田の町は  
ソレソレヤットナー ヨーイヤセー (以下略)  
お宮お寺が昔を語る 七尾み山の昔を問えば  
益田城跡未だに残る 今は住吉お宮とともに  
春は桜の落ち花吹雪 夏は緑の山々越しに  
名勝七尾のその名も高い 清き流れの益田の川の  
諸寺の鐘の水澄み渡る 雪舟ゆかりのその寺々は

染羽医光寺また万福寺 昔の面影そのまま残る  
苔蒸す岩のその切れ間より 落ちる滝津瀬石勝社  
天正十年築造されし いまだに当時の面影残す  
秋葉山より見おろすところ 稔り果てない沖田の原は  
机崎宮 大元社 古き昔の努力の跡と  
今の世までも伝わり残る 益田城主のなきその跡は  
城下町より姿を変えて 商家の町にと変わりきて  
右田宗味の計らいにて 月に二七の市が立ちて  
海の幸やらまた山の幸 互に品を助け合いて  
これが益田の宗味の市よ 年の瀬の瀬の餅つき音頭  
調子そるえてつく杵の音 くる年豊年また万作と  
清め喜び歌いけりよ 今に伝わる盆踊り  
今夜一夜は皆さまともに 歌いましょうよさあ盆踊り  
踊りましょうよ盆踊り 祖先の霊を慰めましょうよ

益田 32

名 称 須子石見神楽歌  
伝 承 地 益田市一円  
伝 承 者 益田 忠孝 M 40年生 他  
調査員氏名 石川 寿保

塩 祓

サイヨ サイヨサアト 睦月花待つ 空もかすみて  
如月うぐいす 弥生さくらの 岩戸山 神楽催馬楽

太鼓の音は 聞きおもしろし ハリヤトオ

〱サイヨ サイヨサアト 卯月卯の花 五月さみだれ

水無月橋 岩戸山 神楽催馬楽

太鼓の音は 聞きおもしろし ハリヤトオ

〱サイヨ サイヨサアト 文月七夕 葉月明月

長月白菊 岩戸山 神楽催馬楽

太鼓の音は 聞きおもしろし ハリヤトオ

〱サイヨ サイヨサアト 時雨神無月 霜月朝霜

師走雪霜 岩戸山 神楽催馬楽

太鼓の音は 聞きおもしろし ハリヤトオ

〱万代と浪はヨ 寄せて洗えどもヨ

変わらじものはヨ 石の色かや

〱幣立つるここはヨ 高天の原なればヨ

集まりたまえヨ 四方の神たちヨ

鍾 馗

〱君が代は千代にヨ 八千代にさざれ石のヨ

巖となりてヨ 苔の蒸すまで 苔の蒸すまでヨ

〱千早ふる荒ぶるものを払わんとヨ

出で立ちませるヨ 神ぞ尊き 神ぞ尊きヨ

〱目に見えぬ神のヨ 心の神事はヨ

かしこぎものぞヨ おおにな思いそ おおにな思いそヨ

〱世の中のおよぎもヨ 悪しきもことごとくにヨ

神のヨ 心の仕業にぞある 仕業にぞあるヨ

〱世の中を安からしめん 千早ふるヨ

荒ぶるものを やらいましける やらいましけるヨ

益田 33

名	久城石見神楽歌
伝承地	益田市一円
伝承者	吉村 律男 T5年生
調査員氏名	石川 寿保

四 神

〱ここやここ ここは高天の原なれば

集まりたまえ 四方の神々 四方の神々(以下返し略)

〱久方の天の香久山 神代より 霞にそめつ 春は来にける

〱降りたまえ 降居の庭には綾を敷き

錦をならべ 御座と踏ましょや

〱剣山おりつのぼりつ またおりつ

袴のすそは 露にぬれつ

胴の口

〱サイハイヤ 幣紙の育ちはいづく播磨なる

播磨なる こそがたけの育ちなりぬる

〱サイハイヤ 幣串の育ちはいづく奥山の

奥山の高山の奥のあやめ杉の木 杉の木

〱サイハイヤ しめわらの育ちはいづく日の本の

日の本の豊葦原の育ちなるもの



日本の本の 日の本の豊葦原の育ちなるもの

〱サイハイヤ 出雲なる 出雲なる杵築の宮のヨ

禰宜がないはじむ

出雲なる 出雲なる杵築の宮の 禰宜がないはじむ

袖に紅いハリヤート

益田 35

名 称 村木節

伝 承 地 益田市喜阿弥町

伝 承 者 岩崎孝之進 T9年生

調査員氏名 石川 寿保

益田 34

名 称 種石見神楽歌

伝 承 地 益田市種地方

伝 承 者 野村 政一 S9年生 他

調査員氏名 石川 寿保

神 楽

〱千早ふる玉のみすだれ巻きあげて

神楽の声を聞くぞうれしき

真 神

〱神葉を折りとり手に持ちさしあげる 謹請東方と拝むには

四方の神も花とこそ 三度拝めば神降る

〱神葉を折りとり手に持ちさしあげる

四方の神も花とこそすれ

〱神葉をみ舟にさして沖に浮け 櫂棍をろえて神迎えしよう

八 幡

〱弓矢とる人を守りの八幡山 誓いは深き石清水かな

〱石清水今も流れの末たえて にごりなき世や君を守らん

〱サイヨーサアート 色のよきも 柑子橘 濃い紫の

〱お前百まで わしや九十九まで ノーエーエー

ともに白髪の ヤッコラヤーノヤー

トコヤッサノ エー 生ゆるまで バイトコズイズイ

〱かよい仙崎 いかとる舟は ノーエーエー

いかもよとらず ヤッコラヤーノヤー

トコヤッサノエー 夜もよう寝ず バイトコズイズイ

〱こんな姉まの 腰元見れば ノーエーエー

どうもたまらぬ ヤッコラヤーノヤー

トコヤッサノエー 柳腰 バイトコズイズイ

〱こんな姉まの 腰から下を ノーエーエー

一夜借りたい ヤッコラヤーノヤー

トコヤッサノエー 夜明けまで バイトコズイズイ

〱お前さんさえ その気があれば ノーエーエー

わたしや納屋でも ヤッコラヤーノヤー

トコヤッサノエー 木小屋でも バイトコズイズイ

益田 36

名 称 大成浜節 たいせい  
 伝 承 地 益田市木部町大浜  
 伝 承 者 大庭 将吉 M40年生  
 調査員氏名 石川 寿保

ハハア 歌うなら 何がよいかと 問うたなら

磯節 二上り 三下り

米山甚句も よけれども 五島自慢の さのさ節

ハハア 十五夜の 月はまんまる 冴ゆれども

わたしの心は 真の闇

まして今宵の 訪れに 一声聞かせよ ほととぎす

ハハア 思いきれ 他家に縁づき してくれと

きいて驚く 初菊は 夫の討死 遊ばすを

妻が知らないで 何としよう 二世も三世も 夫婦じゃと

思っていたのに 情なや

益田 37

名 称 坊やはよい子  
 伝 承 地 益田市一円  
 伝 承 者 増野 松男 T9年生  
 調査員氏名 石川 寿保

ハ坊やはよい子だ ねんねしな

ねんねんころりよ おころりよ

坊やのお守りは どこへ行った あの山越えて 里へ行った

里の土産に何もろた でんでん太鼓に笙の笛  
 たたいて聞かしょか でんでんと  
 吹いて聞かしょか ピーヒョロロ  
 坊やはよい子だ ねんねしな  
 ねんねんころりよ おころりよ

益田 38

名 称 まりつき歌  
 伝 承 地 益田市一円  
 伝 承 者 中村 和子 S16年生  
 調査員氏名 石川 寿保

ハ一奴の一助さん 一の字が嫌いで

一万一千一億 一ト一ト一ト万で

お倉に収めて 二奴に渡した

ハ二奴の二助さん 二の字が嫌いで

二万二千二百億 二ト二ト二ト万で

お倉に収めて 三奴で渡した

ハ三奴の三助さん 三の字が嫌いで

三万三千三百億 三ト三ト三ト万で

お倉に収めて 四奴に渡した

ハ四奴の四助さん 四の字が嫌いで

四万四千四百億 四ト四ト四ト万で

お倉に収めて 五奴に渡した

〱五匁の五助さん 五の字が嫌いで  
 五万五千五百億 五ト五ト五ト万で  
 お倉に収めて 六匁に渡した  
 〱六匁の六助さん 六の字が嫌いで  
 六万六千六百億 六ト六ト六ト万で  
 お倉に収めて 七匁に渡した  
 〱七匁の七助さん 七の字が嫌いで  
 七万七千七百億 七ト七ト七ト万で  
 お倉に収めて 八匁に渡した  
 〱八匁の八助さん 八の字が嫌いで  
 八万八千八百億 八ト八ト八ト万で  
 お倉に収めて 九匁に渡した  
 〱九匁の九助さん 九の字が嫌いで  
 九万九千九百億 九ト九ト九ト万で  
 お倉に収めて 十匁に渡した  
 〱十匁の十助さん 十の字が嫌いで  
 十万十千十百億 十ト十ト十ト万で  
 お倉に収めて 十一匁に渡した

益田 39

名 称 じゃんけん歌  
 伝 承 地 益田市一円  
 伝 承 者 中村 和子 S 16年生  
 調査員氏名 石川 寿保

〱一かけ二かけ三かけて 四かけて五かけて六かけて  
 石の欄干腰をかけ はるか向こうを眺むれば  
 十七八のねえさんが 片手で花持ち線香持ち  
 オイオイねえさんどこへ行く わたし九州鹿児島  
 西郷隆盛の娘です 明治十年九月二十四日  
 切腹なされた父上様の お墓参りに出かけます  
 お墓の参りは手を合せ 南無阿弥陀仏と拝みます  
 拜んだ後から幽霊が フウワリ フウワリ  
 ジャンケンポン

益田 40

名 称 お月さん  
 伝 承 地 益田市一円  
 伝 承 者 増野 松男 T 9年生  
 調査員氏名 石川 寿保

〱お月さん なんぼ 十三 九つ それにしちゃあ若いな  
 若いことア道理 紅かねつけて 白粉塗って  
 お寺のかどで どんぐり孫を拾うた お千に抱かしよ  
 お千はいいやや お方に抱かしよ お万はいいやや

隣の婆さん ちよつと来てたもれ

益田 41

名 称	ほたる来い
伝 承 地	益田市一円
伝 承 者	中村 和子
調査員氏名	石川 寿保
	S 16年生

「ホーホー螢来い あつちの水はにがいぞ  
こつちの水はあまいぞ ホーホー螢来い

美都 1

名 称	草刈り節
伝 承 地	美都町山本
伝 承 者	檜谷 幸人
調査員氏名	加藤 茂
	M 30年生

「昨日北風ヨー今日は東風ヨー南  
明日は浮名のヨーあらたつみ風  
「声が出ませのヨー田の声ヨー子ども  
声を取られたヨー川風ヨー

美都 2

名 称	臼挽き歌
伝 承 地	美都町宇津川
伝 承 者	酒井 栄
調査員氏名	加藤 茂
	S 11年生 他

「臼をひけひけ団子して食わしよ ひかにゃ冷飯また茶漬  
「臼をひく夜にゃ必ずござれ わしがてごしよというてござれ  
「ござりやそれでよしござらんとて ゼひにござれと手は下げん  
「臼が嫌さに豆腐屋を出たが 生まれあいかな饅頭屋に  
「饅頭屋にゃこそよい嫁娘 どれが嫁やら娘やら  
「嫁と娘は一目見りゃわかる 娘や白歯で振袖で  
「臼をひくにはまんまるまるく 臼のがくびぎや末やとげん  
「わしとあなたは羽織のひもで しかと結んで胸に抱く

美都 3

名 称	木挽き歌
伝 承 地	美都町宇津川
伝 承 者	大橋 倉信
調査員氏名	加藤 茂
	T 4年生 他

「ヤール九州戻りの夕暮れの木挽き 辛抱なされやこの小屋で  
「ヤール三十二枚のあら歯の鋸で ひくはおかみの御用の板  
「ヤール木挽きさんたち芸者の暮らし ひいて歌うて金を取る  
「ヤール何の因果でこの職習うた 花の盛りを山小屋で

〱ヤーレ木挽き女房にやなるなよ妹

木挽きや息よひく早よ死ぬる

〱ヤーレ木挽きさんならお泊まりなされ うちの殿御と相の職

〱木挽きさんちゆていやなこたないが 松松枝のかざがいや

十日に十間 食うても残らん きれいな商売

美都4

名 称 田植え歌

伝 承 地 美都町山本

伝 承 者 齋藤 卯一 M36年生

調査員氏名 加藤 茂

〱ター玉ぐさを結んで 流れの川の瀬につけた

サーといわせにいわせに 流れの川の瀬に住む

ターといわせにいわせに住む 流れの川の瀬に住む

ヨ一あい川の中の瀬に稚児が笛を落とした

ヨ一築うてや築うてや築に笛がとまるぞ

ヨ一あい川の中の瀬に稚児が笛を落とした

ヨ一築うてや築うてや築に笛がとまるぞ

(調子が早くなる)

ヨ一あい川の中の瀬に稚児が笛を落とした

ヨ一築うてや築うてや築に笛がとまるぞ

ヨ一あい川の中の瀬に稚児が笛を落とした

ヨ一築うてや築うてや築に笛がとまるぞ

(つづく、くり返し)

美都5

名 称 楮へぎ歌

伝 承 地 美都町

伝 承 者 三沢次郎一 M35年生

調査員氏名 加藤 茂

〱山を下ればいばらがとめる いばらとめるなよ日が暮れる

〱山を通れば山桃ほしや 大阪通れば女郎ほしや

〱これのお背戸にや茗荷と露と 茗荷めでたや露や繁盛

〱明けるそうなぞ東が白む お寺方には六つの鐘

美都6

名 称 長持ち歌

伝 承 地 美都町都茂

伝 承 者 榎谷 幸人 M30年生

調査員氏名 加藤 茂

門立ちの歌

〱わたしやナー行きますヨ一 アー御両親様ヨ一

永のナーお世話にやヨ一 なりましたナーヨ一

道中歌

〱家をナー出てからヨ一 アーまだ肩替えぬ

肩をナー替えますよナー ハーこの坂でナーヨー

ハこはナー大坂ヨー ハー四十二の曲がり

駒がナーいさめくよハー 旦那様ヨー

ハあれに見えるがヨー ハーわが行く先が

縁のナー障子を 開けて待つよナー

ハヤンサのモンサでヨー ハー門<sup>かど</sup>まで来たが

渡しますでヨー ハー家<sup>ごかもつ</sup>荷物をナーヨー

受け入れ方の歌

ハ渡しナーなさればヨー ハー受け取りまして

収めナーますでヨー ハー床の間にナーヨー

美都?

名	称	盆踊り口説
伝承地		美都町都茂
伝承者		加藤 茂
調査員氏名		加藤 茂
		S 8年生

ハありやうれしや今年もここでアラヨーイヨイ

今宵ここに音頭をもろた

どうか皆様アラヨーイヨイごひいき頼む

ソリヤーヨーイヨイヨイヤナ

アリヤリヤイコリヤリヤイ (以下離子略)

わたしヤもとより声のない生まれ

声も出なけりヤご節も出来ぬ

こんなわたしが今宵はここで

わしのくどきは桶の輪のように

側がしまらにヤがらりとくえる 側がしまりて踊れるならば

だれもどなたも早出し頼む わしのくどきが悪いがゆえに

さぞや皆様踊りにくからが わしもこれより文句にかかる

調子そろえて品よく踊れ それじゃ皆様よろしく頼む

那須与一くどき

ハ那須の与一の誉れの次第 背は小兵で御座候えど

那須与一は弓矢の先生 同じ当町の代官様の

ある日与一と呼ばれたほかに すぐに与一は御前へ参り

そこで代官言われるように 聞けばそなたは弓矢の先生

三里沖にも立ちたる的を あれを与一よ射落とせ与一

かしこまりたと御前の前で すぐに与一はお家に帰り

馬をひき出す名馬の駒を 与一その日の御いでたちは

赤い錦の御ひたりで 五人張りにて矢は十五束

小松原にと早駆けりつく 沖の的をば眺めて見れば

波ははげしく風高けれど 沖の的をばあらたに知れぬ

すぐに与一は心願立てぬ 四国讃岐と那須明神を

沖の立願あらたなものよ 沖の的をば眺めて見れば

風は静まり的静まりて 沖に立ちたる扇の的が

すぐに与一にあらたに知れる 的の扇もあだのう見える

引いて離せば要のところ 要ぎわよりもんずと射切る

沖の平家は船場をたたく 上陸の源氏はえびらを鳴らす

与一くどきはまずこれまでよ わしもどうやら声かれました  
後のご先生にお次を頼む わたしややめます早出て頼む  
ありやうれしや御先生が見えた  
逃げるわたしにごひいきいらぬ 後のご先生にごひいき頼む  
それじゃこれより御先生と替わる どうか皆様よろしく頼む  
永のごひいきに相成りました 下手な文句は時間のじゃまよ  
止めよ止めよといわれぬうちに  
わたしややめますこの声限り

美都 8

名	願力おどり
伝承地	美都町都茂
伝承者	加藤 茂 S 8 年生
調査員氏名	加藤 茂

〽だれもどなたも踊るじやないかヨ  
当世はやりのチヨイト願力を  
ヤレコソリヤコイセッセノセ ハイハイハイ  
〽だれもどなたもどなたもだれもヨ  
だれもどなたも踊るじやないか (以下囃子略)  
〽だれもどなたも一花やるやヨ  
当世はやりのチヨイト願力を  
〽姉もさしやるなら妹もさしやれヨ  
同じ蛇の目のチヨイト唐傘を

〽今年ア豊年年穂に穂が咲いてヨ  
道の小草にチヨイト花が咲く  
〽あなた百までわしや九十九までヨ  
ともにや白髪にチヨイト生えるまで  
〽竹の切り口たまりた水はヨ  
澄まず濁らずヤレ出ず入らず  
〽そろたそろたよ踊り子がそろたヨ  
稲の出穂よりチヨイトよくそろた  
〽だれもどなたさまも手がだいかろがヨ  
足もだいかろが手もだいかろが  
〽足もだいかろが手もだいかろがヨ  
しばしの間よろしゅうに頼む  
〽何はなくとも美都町へござりやヨ  
心づくしのチヨイト盆おどり  
〽来るか来るかと川下見ればヨ 川原蓬のチヨイト影ばかり  
〽鐘が鳴るかや榎木が鳴るか 鐘と榎木のチヨイト間がなる  
〽歌いなされやお歌いなされヨ  
歌でご器量がチヨイトさがりやせぬ  
〽梅もいやだが桜もいやだヨ  
ももともとのチヨイト間がよい  
〽芸者買おうよりや桃買うて食やれヨ  
桃にや毛もあるチヨイトさねもある  
〽あなた百までわしや九十九までヨ

ともに白髪のチヨイト生えるまで

ともに白髪のチヨイト生えるまで

ともに白髪のチヨイト生えるまで

横に寝かせて枕をさせてヨ 指で楽しむチヨイト琴の音

あなたみたよな牡丹の花がヨ

咲いておりますヨ来る道に

咲いておりますヨ来る道に

咲いておりますヨ来る道に

花は二度咲く若さは一度ヨ

若さ二度ないチヨイト花と咲け

来るか来ると川下見ればヨ 川原蓬のチヨイト影ばかり

かわいがられて寝た夜もござるヨ

泣いて明かしたチヨイト夜もござる

かわいがられてまた憎まれりヤヨ

かわいがられたチヨイトかいがない

恋し恋しと鳴く蟬よりもヨ 鳴かぬ螢がヤレ身を焦がす

様は三夜の三日月様でヨ

宵にちらりとチヨイト見たばかり

声はすれども姿は見えぬヨ

様は深野のチヨイトきりぎりす

来いと言われて行く夜のうれしヨ

足の軽さがチヨイトおもしろい

姉もさすなら妹もさしやれヨ

同じ蛇の目のチヨイト唐傘を

だれもどなたさも足もだいかろに

ここらあたりでいかがで候か

長のごひいきにごひいきに長のヨ

長のごひいきに相成りました

だれもどなたさも足がだいかろでヨ

ここらあたりでチヨイトやめまする

長のごひいきにごひいきに長のヨ

長のごひいきに相成りました

匹見1

名 称 苗取り歌

伝 承 地 匹見町道川

伝 承 者 佐々木小百合

調査員氏名 渡辺友千代

S7年生 他

今朝夜のほのほのに雉子が鳴いたをシラリヤンカア

キンチャク拍子にスコポポボンと

ギャンギャンと鳴いたを知ららんか

今朝夜のほのほのに雉子が鳴いたを

宮島の御回廊はどなたが建立なされた

飛弾が工匠に竹田が番匠清盛建立なされた

宮島の御回廊はどなたが建立なされた



飛弾が工匠に竹田が番匠清盛建立

匹見2

名	田植え歌
伝承地	匹見町紙祖七村
伝承者	吉田 花子
調査員氏名	渡辺友千代
	T5年生

長歌

このまちはいかい大まぢ 小歌でざんざと植えよう

いかい大まぢ 小歌でざんざと植えよう

小歌

あいの川の中の瀬に稚児が笛ヲ落とした

築打てや築打てや築に笛がかかるノ

さこえ

日は暮れるゆくやごで駒はどこへつないだ

ア尾越え谷よ越え下がり松につないだ

匹見3

名	麦搗き歌
伝承地	匹見町道川
伝承者	三浦シズヨ
調査員氏名	渡辺友千代
	M40年生

姑は天の雷 小姑さんは稲妻

稲妻を光りまわせば いかなる嫁もたまらない

聳とりて今年三年 笑うた顔を今朝見た

今朝見たとても仇じゃ笑わぬ お飯の盛りが高いので

つく麦は三斗三升 出てくる涙は五斗五升

つく麦に水はいるまい 出てくる涙でつきあげる

匹見4

名	粉ひき歌
伝承地	匹見町道川
伝承者	中川千恵子
調査員氏名	渡辺友千代
	T9年生

白をひくにはまんまるるに 物は言いよで角がたつ

言いよで物は 物は言いよで角がたつ

ハーキッコウカイ キッコウカイ

わしの心はあら木の松よヨ つかのながいのがお目当てヨ

ながいのがつかのながいのがお目当て

ハーキッコウカイ キッコウカイ

ヤレ白ひけ粉ひけ ひかにや冷飯また茶漬け

冷飯ひかにや ひかにや冷飯また茶漬け

ハーキッコウカイ キッコウカイ

ヤレわしが若いときは歌でも様を 門に立たせた夜もござる

立たせた門に 門に立たせた夜もござる

ハーキッコウカイ キッコウカイ

ハヤレ十四になりヤ背戸に垣なされ 豆の初なり人が取る

初なり豆の 豆の初なり人が取る

ハキッコカキ キッコカキ

ハ声にヤ迷わぬ姿にヤほれぬ 心気前にわしヤほれた

気前にヤ心 心気前にヤわしヤほれた

ハキッコカキ キッコカキ

### 匹見5

名 称 木挽き歌

伝 承 地 匹見町道川

伝 承 者 落田 武志 T4年生

調査員氏名 渡辺友千代

ハヤレイヤじヤいヤじヤヨ 木挽きさんはいヤじヤ ハー

仲のよい木を挽きかける ハーズイコズイコ

ハヤレ松のうら木に尺六あててハー

鋸が切れません兄弟子さまヨ ハー

一寸とたばこでひと鋸<sup>やすり</sup> ハーズイコズイコ

ハヤレ女房持たしようか 五万石やろか ハー

同じことには五万石 ハーズイコズイコ

ハヤレ山の中でも一軒家でもヨ 住めば都よわが里よ

ハーズイコズイコ

ハヤレ若いときから山小屋住まいヨ

小判ならべて女郎買うよ ハーズイコズイコ

ハヤレ三十三枚の荒刃の音がヨ

聞こえますよわが寝間に

ジャンジャンなるのは雨かい風かい

いとし殿ごの荒刃の音だよ

ジャリンコヤッサー ジャリンコヤッサー

ハヤレ向こう三枚目のかかり刃が折れたヨ

いかがしましうかお師匠さま ハーズイコズイコ

ハヤレ木挽き木挽きと名はよいけれどヨ 松の裏木の下で泣く

ハーズイコズイコ

ハヤレ木挽きさんたちは一升の飯くろうてヨ

松の元木じゃ泣いたげな ハーズイコズイコ

ハヤレ山が高うて山里見えぬヨ 山里恋しや山憎や

ハーズイコズイコ

ハヤレ山が高うて十九が見えぬヨ 十九恋しや山憎や

賃金あがれよ鋸道下がれよ

こうがい買おうかかんざし買おうか

ジャリンコヤッサー ジャリンコヤッサー

ハヤレ木挽き女房になるなよ妹ヨ

山がみてたら捨てられる ハーズイコズイコ

ハヤレ木挽きやいぬるちゆうて丹波行李てねるヨ

娘は行くちゆうて髪てねる

三日に三間十日に十間 食うても残らんきれいな商売

ジャリンコヤッサー ジャリンコヤッサー

匹見6

名 稱 楮はぎ歌  
 伝 承 地 匹見町元組  
 伝 承 者 小倉 ヒチ  
 調査員氏名 渡辺友千代  
 M 25年生

〱住まえる家が藁屋でも 着ている着物が粗末でも  
 暮らしが楽で安心で まめでかせいで長生きで  
 国の宝と言われるは 米麦作る田舎人

〱ヤーレ住まえる家が藁屋でも 着ている着物が粗末でも  
 暮らしが楽で安心で 国の宝と言われるは

米麦作る田舎人

〱ヤーレ声が出ません蚊の声ほども

声を取られた川風に 川の風ちゆうて声取りやせぬが  
 声は初寝の殿が取るヨ

匹見7

名 稱 酒屋歌  
 伝 承 地 匹見町元組  
 伝 承 者 関口 孝雄  
 調査員氏名 渡辺友千代  
 T 8年生

〱祝いヨオーめでたヨオ若松様ヨオー

枝がヨオ栄えてナント葉も茂るしゅげ

〱枝がヨオー栄えて葉が茂るなれば

おろせヨオー小松のナント一の枝

〱一のヨオー枝よりナント二の枝よりも

三のヨオー小松がナント蔭をなす

匹見8

名 稱 金山歌  
 伝 承 地 匹見町日ノ里  
 伝 承 者 三浦 徳男  
 調査員氏名 渡辺友千代  
 T 14年生

〱ハアーアーアー 先生お上手だアもう一つ頼む

石が固いのか手の業か アッキタコラードッコイサノ

ドッコイサ

〱ハアーアーアー 何んぼたたいてもエーこの石や固い

石が固いかアー手の業か アッキタコラードッコイサノ

匹見9

名 稱 木遣り歌  
 伝 承 地 匹見町元組  
 伝 承 者 大畑 唯之  
 調査員氏名 渡辺友千代  
 M 35年生

〱ヨイトウ生まれ ヨイトウコヤレ

仕事始めにヨイトウコヤレ

利口に化けてヨイトウコヤレ

匹見で名高いヨイトウコヤレ 三坂の大神ヨイトウコヤレ

麓の娘よヨイトウコヤレ 姉が二十二でヨイトウコヤレ

妹が十八ヨイトコヤレ 妹ほしさにヨイトコヤレ

大願かけたヨイトコヤレ 伊勢に七度ヨイトコヤレ

熊野に三度でヨイトコヤレ 愛宕様にヤヨイトコヤレ

日参かけたよヨイトコヤレ

願いかのうたらヨイトコヤレ

お礼まいりはヨイトコヤレ 二人づれだよヨイトコヤレ

引くならこの木よヨイトコヤレ

ドーンと打った鳶口ヨイトコヤレ

握りしめたらヨイトコヤレ

負けるなこの木にヨイトコヤレ

引けばおしまいヨイトコヤレ

さよなら言うよヨイトコヤレ

匹見10

名 称 神楽せぎ歌

伝 承 地 匹見町落合

伝 承 者 秀浦 穰 M36年生

調査員氏名 渡辺友千代

〱 押さば押せヨ一 下関ヤレまでもヨ一

押さば港にヨ一 近くなるヨ一

ホイヤレ押せ ソリヤ押せ

〱 娘十八チャア一 声はりあげて

声の出るのもア一 若いときヨ一

ヤレ一 押せ ソリヤ押せ

〱 娘さしよいうて帯まで解いたヨ一

親がじゃましてヨ一 できなんだヨ一

ヤレ一 押せ ソリヤ押せ

匹見11

名 称 祝入り

伝 承 地 匹見町道川

伝 承 者 佐々木小百合 S7年生 他

調査員氏名 渡辺友千代

〱 わたしやナ一 行きますヨ一 御両親さまヨ

永のナ一 お世話にヨ一 ハ一 なりましたヨ一

〱 かわいいナ一 わが子のヨ一 よだてるからは

門にナ一 時雨のヨ一 雨が降る

匹見12

名 称 願力踊り

伝 承 地 匹見町道川

伝 承 者 落田 武志 T4年生

調査員氏名 渡辺友千代

〱 花は二度咲く若さは一度エ一 若さ恋しやチヨイト二度はない

ア一 ヤレコイサ一 コイセツセトセ

〱 あなた百までわしや九十九までヨ一

ともに白髪のチョイト生ゆるまで  
アーヤレコイサーコイセッセトセ

今宵夜もよし嵐も強いヨー 露も降るまいナント笹山に

アーヤレコイサーコイセッセトセ

踊り踊るならお寺の庭でヨー 踊る片手にチョイト後生願う

アーヤレコイサーコイセッセトセ

盆の十五日踊らぬ様はヨー 猫か鼠かチョイト立つ鳥か

アーヤレコイサーコイセッセトセ

竹の切り口たまりし水はヨー

澄まず汚れずチョイト出ず入らず

アーヤレコイサーコイセッセトセ

あいやちよいと出た煙草の煙ヨー

しだいしだいにチョイト薄くなる

アーヤレコイサーコイセッセトセ

去年盆には踊りし様はヨー 今年や石塔のチョイト下で住む

アーヤレコイサーコイセッセトセ

### 匹見13

名 称 アイヤ節

伝 承 地 匹見町道川

伝 承 者 落田 武志 T4年生 他

調査員氏名 渡辺友千代

盆のエーエー盆の十五日にや踊らぬ様はヨー

猫か鼠かヤ アンレーエ 立つ鳥かヨー

竹のエーエー竹の切り口たまりし水はヨー

澄まずにこらずヤ アンレーエ 出ず入らずヨー

アイヤヨーエ アイヤちよいと出た煙草の煙は

しだいしだいにヤ アンレー薄くなるヨー

去年のエー去年盆には踊りし様はヨー

今年や石塔のヤ アンレーエ 下で住むヨー

### 匹見14

名 称 あんや

伝 承 地 匹見町三葛

伝 承 者 渡辺 豊 S2年生

調査員氏名 渡辺友千代

アンヤヨーにがたは川真中でヨー

あやめ咲くとはソーレサしおらしさヨー

そろったヨーそろうたヨー踊り子がそろうたヨー

稲の出穂よりソーレサーよくそろったヨー

去年ヨー盆には踊った様もヨー

今年や石塔にソーレサー火がとるもヨー

匹見15

名称 ヨーイヤナーヨイヤセー  
 伝承地 匹見町三葛  
 伝承者 渡辺 豊 S2年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

昔語りを聞き伝えれば ヨーイヤナーヨイヤセー

親に孝行二人の娘 ヨーイヤナーヨイヤセー

元を尋ねてエーあらあら聞けば ヨーイヤナーヨイヤセー

いふも哀れな次第でござる ヨーイヤナーヨイヤセー

匹見16

名称 あんさ  
 伝承地 匹見町三葛  
 伝承者 渡辺 豊 S2年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

いきな人は礼儀を尽せ アラヨイトナー

ろくな人じゃと見下げぬように アラーエエーンサーアンサ

腹がたつとて人目に出すな アラヨイトナー

にせをつこうて人あやめるな アラーエエーンサーアンサ

ほめてもろうてけん高ぶるな アラヨイナ

隔てせられて人うらやむな アラーエエーンサーアンサ

隣り座敷で喧嘩をするな アラヨイトナー

近い仲でも気がねをしやれ アラーエエーンサーアンサ

理屈あるともひとやりこめな アラヨイトナー

主の難儀は内輪よりおこる アラーエエーンサーアンサ

流浪者を側助で通れ アラヨイトナー

親を大事に孝行尽せ アラーエエーンサーアンサ

われも一度は親になるぞかわい アラヨイトナー

かわいがられたその恩送れ アラーエエーンサーアンサ

よきも悪しきも天地が悟る アラヨイトナー

たててもろうて高慢するな アラーエエーンサーアンサ

礼儀正して浮世を渡れ アラヨイトナー

粗略者じゃと言われぬように アラーエエーンサーアンサ

常の身持ちが大事でござる アラヨイトナー

寝てもさめても正直つくせ アラーエエーンサーアンサ

何がないとて迷惑かけるな アラヨイトナー

楽な身過ぎは一人もないよ アラーエエーンサーアンサ

村の人には下手に通れ アラヨイトナー

命あるまで辛抱なされ アラーエエーンサーアンサ

野良眩り者じゃといわれぬように アラヨイトナー

国を立つればわが身も立つよ アラーエエーンサーアンサ

役をする人えこひいきするな アラヨイトナー

曲げた腕先き使わぬように アラーエエーンサーアンサ

汚れ心を清めて通れ アラヨイトナー

不快な言葉を使わぬように アラーエエーンサーアンサ

これはこの世の道筋なれば アラヨイトナー

えらいことじゃと思わぬように アラーエエーンサーアンサ

天の日輪休みはないよ アラヨイトナー  
汗が出るほど仕事を励め アラーエエーンサーアンサ

匹見17

名 称 広島口説  
伝 承 地 匹見町三葛  
伝 承 者 渡辺 豊 S2年生  
調査員氏名 渡辺友千代

へ花のお江戸のそのかたわらに オイサーソラサイ

所四谷の新宿町よ ヤットセーヤットセー

店ののれんは橋本屋とて オイサーソラサイ  
あまた女郎衆のおるその中に ヤットセーヤットセー

匹見18

名 称 口説  
伝 承 地 匹見町萩原  
伝 承 者 齋藤 義夫 T14年生  
調査員氏名 渡辺友千代

へハー花のお江戸のそのかたわらに アラヨイヨイ

聞くも珍し心中ばなし ところ四谷のアラーヨイヨイ

新宿町のアラヨイヨイヨイヤナー

アリヤリヤイコリヤリヤイ

紺ののれんに桔梗の御紋 アラヨイヨイ

音に名高い橋本屋方 あまた女郎衆のアラーヨイヨイ  
おるその中でアラヨイヨイヨイヤナー  
アリヤリヤイコリヤリヤイ

匹見19

名 称 田囃子  
伝 承 地 匹見町道川  
伝 承 者 佐々木小百合 S7年生 他  
調査員氏名 渡辺友千代

道中ばやし

へここへここへと上手が笠で招いた 上手が笠で招いた  
へ調子そろうたら歌出せ胴取れ歌親 歌出せ胴取れ歌親  
おろし歌

へアーヤレめでたやまずサンバイをおろした  
ヤアーレまずサンバイを  
ヤアーヤレヤアーレまずサンバイをおろした  
小歌あげ歌

へ笠の葉がそろうたらどこ笠がそろうた  
つづきつぼみ京笠にゃ大和笠がそろうた  
笠の葉がそろうたらどこ笠がそろうた  
つづきつぼみ京笠にゃ大和笠が

あげ歌

へエーアーヤレめでたやまずサンバイを収めた

アーヤハアレ ヤハアレ まずサンバイを収めた

匹見20

名	田囃子
伝承地	匹見町澄川
伝承者	田囃子保存会
調査員氏名	渡辺友千代

神おろし

へ今朝の朝歌草紙に書いて流すや

へ今日の大田に先ずサンバイをおろした

さんばい

へサンバイサンバイと祭る神は

何にやれ芦毛の駒に手綱ゆりかけ

へ敵島の御回廊はどなたが建立なされた

飛弾が工匠に竹田が番匠清盛建立なされた

へあい川の中の瀬に稚児が笛を落とした

やなうてややなうてややなに笛がかかるの

へしだれ小柳が拍子木によいとな

削りそろえて拍子木によいとな

へ殿は京から戻れたが女郎にや何の土産が

京櫛京針京かんざしたこう紙が土産じゃ

へわが殿の母御どんはささらすりの名人で

すりあげすりおろし八つにや調子をそろえた

へ沖のろかいろの上にとまる鳥は何鳥

口は錦にそうれんげ羽根の白い鳥やれ

へ長者さまの門田の稲はのう 刈れどへらばや門田の稲はのう

上げ

へしだれ小柳やさも拍子木によいとな

匹見21

名	田囃子
伝承地	匹見町落合
伝承者	大谷 安男
調査員氏名	渡辺友千代

M41年生

おろし歌

へ今日の代田にまずサンバイを降ろいた

まずサンバイを降ろいた

植え囃子

へヨイヤサーの声がすりゃ沖に出て見たいノ

恵比須大黒の俵積みの声ヤレ

あげ歌

へ栗の花やら白うて山を照らいた ヤレ白うて山を照らいた

ヤレーヤレー白うて山を照らいた

お坊囃子

へ向かい通るおん坊は何売りのお坊か

一く二く三く四く七くの小竹を売り歩くおん坊じゃ



匹見22

名 称 高い山  
 伝 承 地 匹見町元組  
 伝 承 者 山本アヤメ M43年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

〱高い山の雪ア朝日で溶けるヨー ハリマーヨイヨイヨイヨイ  
 娘島田は寝て解けるヨー ハリマーヨイヨイヨイヨイ  
 〱高い山から焼飯まくりヤヨー 烏をれ見て羽根をらすヨー  
 ハリマーヨイヨイヨイ  
 〱高い山から高津を見ればヨー 瓜や茄子の花盛り  
 ハリマーヨイヨイヨイ

匹見23

名 称 さんこ節  
 伝 承 地 匹見町江田  
 伝 承 者 寺尾ハナヨ M42年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

〱さんこ節の鯛アおし置きアなれる  
 わしとあなたも寝てなれる  
 〱これのお背戸にヤ茗荷と露よ 茗荷めでたや露繁盛

匹見24

名 称 筏 節  
 伝 承 地 匹見町道川  
 伝 承 者 小笠原ミキヨ T3年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

〱いかだ節歌いながらに瀬をこぎ行けば  
 谷のうぐいすハー連れて鳴くヨイシヨ  
 いかだはハー矢のようにヨー 流れ行くよ  
 明日はまた チヨイチヨイ かんとうけにヤ近くなる  
 アラチヨイチヨイチヨイ チヨイヤナ チヨイチヨイ  
 〱梅干さん 年も取らんのに あらしわよせて  
 酒も飲まんに アラ赤い顔ヨイシヨ  
 元を正せばヨ 梅の花ヨ うぐいす鳴かせた節もある  
 アラチヨイチヨイチヨイヤナ チヨイチヨイ

匹見25

名 称 バッサーバッサー  
 伝 承 地 匹見町江田  
 伝 承 者 寺尾ハナヨ M42年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

〱バッサーバッサーを歌えば巡査が叱る  
 巡査の子が歌うかバッサーバッサー  
 〱バッサーバッサーは愉快げに見えて  
 下駄もちびるし足もだるかバッサーバッサー

匹見26

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 匹見町元組  
 伝 承 者 大畑ふさよ T2年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

へお月さん何ほか 十三七つ それにしちや若いナ  
 若いことア道理 紅かねつけて 白粉塗おしろいって  
 孫ひとつ拾うて お千に抱かしよ お千はいやいや  
 お方に抱かしよ お千もいやいや お万もいやいや

匹見27

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 匹見町元組  
 伝 承 者 山本アヤメ M43年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

へ一つとヤー 人の通らぬ山道を  
 太一さんとお千代さん 手をひいて 手をひいて  
 へ二つとヤー 二股大根は離れても  
 太一さんとお千代は 離りやせん 離りやせん  
 へ三つとヤー 見たい会いたい忍びたい  
 中戸の障子をちよっこりと ちよっこりと  
 へ四つとヤー 夜は女郎屋にのぼりやんしょう  
 昼は大阪通わんしょうノー 通わんしょう  
 へ五つとヤー いつ来て見てもこの川に

舟が一艘ありやすーノ ありやしよう ありやしよう

匹見28

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 匹見町匹見  
 伝 承 者 吉田 花子 T5年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

へわしの兄さん三人ござる 一人兄さん太鼓が上手じよんず  
 一人兄さん鼓が上手 一人兄さん馬乗り上手  
 馬に乗るちめて馬から落ちて 竹のすいばり手のはら突いて  
 医者にかげよか典者にかげようか  
 医者もいらんが典者もいらん わしがまめならこの山越えて  
 向うの川原で碁石を拾うて 紙に包んでこよりで締めて  
 締めたところに一筆書いて 右のたもとにちよろりと入れて  
 これが銭なら帯買うて結ぶ 帯にゃ短したすきにゃ長し  
 今度生まれたややのひもややのひも 千度とめ千度とめ  
 止めたらわれらごしよになろう ごしよになる

匹見29

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 匹見町江田  
 伝 承 者 榎山 トミ M35年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

へ ゲンゲツヤゲンゲツヤ 親もないが子もないが

ててごにはなれて今日七日 七日の法事をしようと思つて

畳を三枚借んに行つた あるものないちゆうて貸しやらん

やーれ腹たつ小腹たつ 小腹の背戸に機立てて

一反織れば日が暮れる 二反織れば夜が明ける

三反織ろして東の紺屋に持つて

赤土持てこい染めてやろう 黒土持てこい染めてやろう

匹見30

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 匹見町紙組七村  
 伝 承 者 吉田 花子 T5年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

へ 一にやいとさんこぶり下駄に頼るな

二にや庭はき箒に頼るな 三にや三味線芸者に頼るな

四つにや嫁じよは婿さんに頼るな

五つにや隠居さん炬燵に頼るな

六つ娘じよは若さに頼るな 七つ泣く子お母さんに頼るな

八つ闇夜は提灯に頼るな 九つ紺屋は染粉に頼るな

十で殿様家来に頼るな

匹見31

名 称 手まり歌  
 伝 承 地 匹見町道川  
 伝 承 者 佐々木小百合 S7年生 他  
 調査員氏名 渡辺友千代

へ 一番初めの一の宮 二また日光東照宮

三また佐倉の宗五郎 四では信濃の善光寺

五つ出雲の大社 おやしろ 六つ村々鎮守さま

七つ成田の不動尊 八つ八幡の八幡さま

九つ高野の弘法寺 十で所の氏神さま

匹見32

名 称 お手玉歌  
 伝 承 地 匹見町野入  
 伝 承 者 吉田 花子 T5年生  
 調査員氏名 渡辺友千代

へ おさら お一つ落としておさら お二つ落としておさら

お三つ落としておさら お皆おさら お手しゃみおさら

お挟みおーさら お左お左よう越えた さらり

やちやし落としておさら お鉄砲落としておさら

お手がついておさら お馬の乗せ替え乗せ替え招いておさら

おおひだおさら おたばけおさら  
 おー袖おさら お橋くぐれ 招いておさら  
 おさりつこ父さんくらやんせ  
 お一つやーのぶつけ お二つやーのぶつけ  
 お三つやーのぶつけ お四つやーのぶつけ  
 お五つやーのぶつけ お六つやーのぶつけ  
 お七つやーのぶつけ お八つやーのぶつけ  
 お九つやーのぶつけ お十やーのぶつけ  
 それで一貫貸しました

匹見33

名 称 絵かき歌  
 伝 承 地 匹見町道川  
 伝 承 者 佐々木小百合 S7年生 他  
 調査員氏名 渡辺友千代

へみみずが三匹はい出して 朝めし昼めし晩のめし  
 雨がじゃーじゃー降り出して あられがポチポチ落ち出して  
 ホウツとたまげたたこ入道

津和野1

名 称 驚舞  
 伝 承 地 津和野町後田  
 伝 承 者 三浦平次郎 T14年生 他  
 調査員氏名 西田 謙三

へ橋の上におりた鳥はなん鳥 かわささぎの かわささぎの  
 やーかわささぎ さぎが橋を渡いた さぎが橋を渡いた  
 しぐれの雨にぬれとおりとおり  
 へやーかわささぎ さぎが橋を渡いた さぎが橋を渡いた

津和野2

名 称 津和野踊り  
 伝 承 地 津和野町津和野  
 伝 承 者 井川浩 M39年生  
 調査員氏名 西田 謙三

へ松の葉越しに出る月見れば 見えつ隠れつ人目を忍ぶ  
 ササヤーレコナーサ 空にも恋路があるものか  
 ヨオイヤナア (以下囃子略)  
 へ富士や浅間の煙はおるか 衛士の焚く火は沼辺の螢  
 焼くや藻塩の身を焦がす  
 へさてもみごとや御手洗つつし 宵にしぼんで夜中に開く  
 夜明がたには散り散りと  
 へ汲みに来たれど伏井ふせいの清水 心あるかや二人づれ  
 星と螢の影残す

へお夏夏夏帷子を 何に染めよか清十郎に問えば  
浅葱に駒形紅鹿子

へ思い思われ梅ヶ枝源太 女郎に文書くかけ硯箱

やらんせ堀川の手代衆へ

へ僧正遍昭歌詠みなれば 雲の通路吹く風止めて

しばしとどめよ乙女の姿

へ空やは水か水やは空か 見わかぬかたに漂うは

かよいて澄める月の影

へひとりひそかに心を固め 君を救いしあの武士は

紋は角ある四つ目結い

へ王舎城裡のあの殿様は こわいようでも情が深い

深いはずだよ亀井様

### 津和野3

名	直地ヨイヤナア
伝承地	津和野町直地
伝承者	米森 清人 S2年生 他
調査員氏名	西田 謙三

へ盆のナーヨ十五日に踊らぬ様は

竹のナーヨ根を掘れイソヤレ篠竹を (以下囃子略)

へ踊り踊るならお寺のかどで 踊る片手に後生願う

へ寺の門口に蜂が巢をかけて 坊さん出りゃ刺す入りゃ刺す

へ坊さんばかりに刺せばよいけれど 娘出りゃ刺す入りゃ刺す

へ音頭取るなら宵から取りやれ 夜明け音頭はだれも取る

へ親は子というて尋ねるけれど 親を尋ねる子はおらぬ

へかかよかかよと泣く子を連れて 行かにななるまいこのたびは

へ去年盆まで踊りた様は 今年石塔に灯がともる

へ泣くな嘆くな浮世は車 命さえありやめぐり会う

へ安芸の宮島回れば七里 浦は七浦 七えびす

へ奈良の春日の猿沢の池に 鯉が六分に水が四分

### 津和野4

名	踊りくどぎ
伝承地	津和野町内美
伝承者	青木登志夫 S24年生
調査員氏名	西田 謙三

### 志賀団七

へ国は備前の岡山在に

ソレ ヨイヤナーヨイヤナー (以下略)

父の与太郎という人ござる 姉の宮城野妹の信夫

親子三人に百姓でござる 時は七月あの半ばごろ

親子三人に田の草取りて 妹姉さに負けてはならぬ

姉は妹に負けてはならぬ 互い励みて取りたる草を

おきののうてにあの投げ捨てる 妹信夫の投げたる草が

ふこそねるこそ団七さまが 殿の御用でお通りなさる

小袖小褌に泥散りかかる 無礼者めとお怒りなされる  
すぐに与太郎両手をつけて 何も分からぬ子供のごことで  
どうぞお許しなしくだされと 言えど団七悪侍で  
腰の添えざしすらりと抜いて 無礼者めとただ一打ちに  
切つて捨てればあの世の人に 娘二人は死骸にすぎり  
泣けど叫べどその甲斐あらず 父の死体をわが家に運び  
父の葬儀もいとねんごろに 三十五日の菩提も過ぎて  
四十九日の法事も済まし 田地畑は皆売り払い  
やざい家財も皆売り払い 父の負債を相整えて  
残る金をばあの旅費として 巡礼姿に身を整えて  
父の墓前に両手をつけて 娘二人は涙を押さえ  
わたし二人は度胸を定め 江戸へのぼつて武術を習い  
父の敵の志賀団七の 敵を討つてさしあげますと  
言えれば位牌が動くというて 世にも稀なる話でござる  
父もいっしょにあの行きましょと 父の位牌を肌身につけて  
さして行くのは東海道で 五十三次あるその中  
幾多難所も数ある中で 鈴鹿峠も難なく越えて  
箱根八里もことなく越えて 着いたところはお江戸の町に  
江戸は丸橋忠弥の館 門にすがりて普陀落ながす  
これを見てとる二人の門弟 なにか子細のありそな女  
忠弥先生にこのてを伝え 忠弥先生のお言葉さがり  
忠弥御前に通されました 父の次第を細かく語る  
さては哀れな娘でござる 三年三月の修業をすれば

父の敵を討たしてやると 聞いて喜ぶ二人の娘  
朝は早よから夜は遅くまで 一生懸命武芸の稽古  
月日たつのはあの早いもの 三年三月の月日も満ちて  
忠弥先生が願書も作り 忠弥先生においとま告げて  
門弟二人をあの助太刀に つけて帰した岡山城下  
岡山城下に帰りて聞けば 父の敵の志賀団七が  
岡山城下におるとの噂 殿の御前に願書を出せば  
殿の認可が程なく下り 時は九月のあの末つ方  
三十二間の矢来の内 殿は高座にあの控えられ  
扶持の面々各座に控え 数多見物あるその中  
団七その日のあのいでたちは 鎖帷子その身にまとい  
卑怯者めと皆ののしらる 娘二人のそのいでたちは  
白衣姿にあの身を固め 紅のたすきをしっかりと締めて  
白の鉢巻しっかりと締めて 袴股立小高く取つて  
姉の宮城野持ちたる武器は 口に手裏剣手に大太刀を  
妹信夫の持ちたる武器は 忠弥自慢のあの鎖鎌  
娘二人は大音声で おのれ憎くき志賀団七め  
四ヶ年前を覚えておろう 父の敵じゃ勝負をいたせ  
いえば団七あのが笑い われら二人は不憚なやつじゃ  
返り討ちにとあのしてくる 双方構えてあのおるけれど  
ただの二人の隙間も見えず たじりたじりといや足踏めば  
姉の吹きたるあの手裏剣が 団七両眼たちまち閉じる  
めくらめつぼう大刀振りまわす 妹信夫の投げたる鎌が

団七猪首にきりりと巻けば 姉の手許にあのひきよせる  
姉の持ちたるあの太刀で 団七しら首ころりと落ちる  
めでためたたと皆手をたたき 殿も高座でおほめの言葉  
父の墓前にその首供え われら二人はお江戸に上り  
忠弥先生のお情受けて めでたく本懐遂げられました  
どうぞ安心なしくだされと 生きたる者に物言うごとく  
父の墓前に報告なして 殿も情をかけられまして  
殿の抱えと相成りまして 女武芸の達人として  
後の世までもその名を残す 姉の宮城野妹の信夫  
志賀の団七敵を討ちて めでたく本懐遂げられました  
志賀の団七あの物語 これぞ終わりとあいなりました

#### 津和野5

名	お伝くどき
伝承地	津和野町中曾野
伝承者	池森 広観 M39年生
調査員氏名	西田 謙三

へこは石州津和野の城下 字名申さば森堀内に  
佐々木与左衛門という武士ござる

そのせがれに平左というて 年は二十九ご器量のたちで  
髪の結いぶり天子の使い 刀さしぶり袴の着ぶり  
お城下町にはこれなる人よ 橋を渡れば高田の里に  
古い構えの櫓屋がござる その娘におでんというて

生まれついでのご器量おなご 顔は白うて卵に目鼻  
年は十八春咲く花よ ころを申せば水無月七日  
祇園みこしの下向の道で 平左姿をおでんは見染め  
一度二度見て恋路はつのもり 思い焦がれてその身も細り  
案じたとどが墨すり流し 鹿の巻筆小すじの紙に  
書くも書いたり七尋八尋 それを平左にさしあげます  
そこで平左が申されように これはおでんが逆さか文くれた  
わしが使うが本当の筋で おでん使うは逆さまごとよ  
言うておでんに戻されます すぐにおでんはういたち顔で  
針さす日々のたちゆくうちに 今年や平左も御馬役で  
江戸へお供で上らにゃならぬ  
江戸へたつときゃはなむけいたす 五尺手拭い中染めわけて  
家に伝えし定紋入れて おでん手もとに送られます  
そこで平左の申されように 遠いお江戸へ旅立つからにゃ  
せまい津和野に心は置かん 言うて月日のたちゆくうちに  
今日は吉日平左のおたち 向かい合わせの蕪坂峠で  
小枝引き分け木蔭で見れば 駕籠が三丁寺の尾上る  
先のお駕籠は平左じゃないう 後のお駕籠も平左じゃないう  
中のお駕籠が平左でござる 一の夜泊まりはいずこか平左  
一の夜泊まりは六日市お宿 二の夜泊まりはいずこか平左  
二の夜泊まりは廿日市お宿 廿日市まで飛脚をたてよか  
女飛脚はいらざることよ 言うておでんはわが家に帰り  
のぼりゃ小坂の鍛冶屋に行つて

何と鍛冶さんご無心ござる 帽子ない釘百本頼む

そこで鍛冶さん申されようは 親の代から鍛冶屋はすれど

帽子ない釘のろいの釘で そんな釘など打つ手は持たぬ

そこでおでんが申されようは 金がいるなら望みにやろう

貧な鍛冶屋は金に目がくらみ 帽子ない釘百本打てば

そこでおでんは受け取りまして 神じゃ鷲原氏八幡に

七日七夜の素足の祈り 前のきざはしさらさら渡り

前のお御戸をさらりと開けて 中のお身を逆さに立てて

平左のろいの釘打ちまする 胸に三本まなこに五本

鳥居三本み腰に五本 すこし下<sup>さか</sup>って八王子さまに

前の石段さらさら上がり 前のお御戸をさらりと開けて

中のお身を逆さに立てて 胸に三本まなこに五本

鳥居三本み腰に五本 残る釘をばお祇園さまへ

沖のうてのみんぶの淵に 髪をほだいて蛇体と化けて

川を伝うてお江戸に登る 江戸の手前の箱根の峠

八里峠のさるさの池で お江戸戻りの話を聞けば

今年ア平左もふらふら病 八卦をもてば女ののろい

やれうれしやなわが恋かのた 夜越し昼越しお江戸に着いて

屋形つとて屋中に下り やかみご免と心はもえて

平左お寝間を七巻き半に そこでお宿の申されように

鳥も通わぬ平左の寝間に 女声とは不思議なことよ

女声には不思議はないが わしは石州津和野の生まれ

筋も正しい榊屋の娘 恋がかのわで相果てました

おなご一念蛇体と化して 江戸に恋しい平左を追った

おなご榊屋のおでんでござる 江戸と津和野のおん物語

おでんくどきはこれまで限り

### 津和野6

名 称 噺し田

伝 承 地 津和野町田二穂

伝 承 者 青木 政之 T5年生

調査員氏名 西田 謙三

へア一調子や一植ようやかすかに

エイエイヤレコナ植ようやかすかに

へアラ今日の田の田主の屋形眺むればナ

アラ八ツ棟の倉を建て徳を招きたアよな

へアラ宮島様の御普請にはどなたが棟梁なされた

アラ飛弾が工匠に竹田が番匠兩人棟梁なされた

へアラ宮島様の御普請にはどなたが棟梁なされた

アラ飛弾が工匠に竹田が番匠兩人棟梁なされた

へアラ沖のろうかい帆の上に止まる鳥はなん鳥

アラ口は錦にとうれんげ羽根の白い鳥かな

へアラ桃色の玉ぶさを桐の箱に入れてな

アラ思う様に参らしょうや桐の箱に入れてな

へアラ桃色の玉ぶさを桐の箱に入れてな

アラ思う様に参らしょうや桐の箱に入れてな



へアラ京の町をのぼり下り物の値段を問えばな

アラ胡瓜の花の中のとうがとんと百奴したげな

へアラ清盛という人はよい名を残した

アラ兵庫の築島つぎに音頭の瀬戸を切り抜いた

へアラ清盛という人はよい名を残した

アラ兵庫の築島に音頭の瀬戸を切り抜いた

へアラ昨日見て今朝見ればかどの松が高いな

アラ高いことは道理だよ徳の笠で招いた

へアラおもしろい声をするあれは何の声やら

アラ恵比須大黒の俵を積みやる声やら

へアラおもしろい声をするあれは何の声やら

アラ恵比須大黒の俵を積みやる声やら

へアラ日は暮れるゆくやごでん駒はどこにつないだ

アラ尾を越し谷を越しさんがり松にやつないだ

へハア―清盛は夕日を招く エイエイヤールコーナ

夕日を招く いやさか

津和野7

名 称	めでたいものは
伝 承 地	津和野町後田
伝 承 者	林 アサノ M41年生 他
調査員氏名	西田 謙三

へめでたいものは芋の茎葉も茂る

畑でどんぐりもんぐり子が出来たコチャ

畑でどんぐりもんぐり子が出来た コチャエ コチャエ

へお前のものが長いとて長いとて

物干竿ではありやすまいコチャ

物干竿ではありやすまい コチャエ コチャエ

へお前のものが広いとて広いとて

野坂の堤じゃありやすまいコチャ

野坂の堤じゃありやすまい コチャエ コチャエ

へ姉さん抱いた子はだれの子か天竺の

七夕さまの申し子じゃ コチャエ コチャエ

七夕さまの申し子じゃ コチャエ コチャエ

へ姉さんさす気かさぬ気かさす気なら

緋の前かけチヨイトはぐれコチャ

緋の前かけチヨイトはぐれ コチャエ コチャエ

津和野8

名 称	手まり歌
伝 承 地	津和野町後田
伝 承 者	林 アサノ M41年生 他
調査員氏名	西田 謙三

(おんしょうしょうしょう)

へおん正正正月に 松立てて竹立てて

喜ぶものはお子供衆 嫌がるものはお年寄り

旦那の嫌いは大晦日 一夜明ければ元日で

年始のお祝い申しませう お煙草盆 お茶持てこい

吸物など早よ持てこい ひーやふーやみーやよーや

いーやむーやなーや

おここのとおまではやしておしろのさん

明日は恵比須でお奥に招ばれ 鯛の浜焼はまぐり吸物

一膳山のおすすいのすい 二膳山のおすすいのすい

(これのお背戸の)

へこれのお背戸のちしやの木に 雀が三羽止まって

一羽の雀が言うことにや ゆうべござった花嫁女

花の座敷に座らして 金らんどんすを縫わしやんす

一人しくしく泣きしやんす 何が悲しめて泣きしやんす

何も悲しゅうはないけれど わしが弟の千松が

七つ八つから金山かねに 金を掘るやら死んだやら

一年たつても状が来ん 二年たてどもまだ見えぬ

三年三月ちつきに状が来た 状の上書き読んでみりや

姉ごに來いとちつきの状じゃもの 姉ごはやらぬわしが行く

下はちんちんちりめんで 上は紺紺紺がすり

それほど仕立ててやるからにや あとに帰ると思うなよ

草刈りでつちと手を引くな 手を引くな

(みかんきんかん)

へみかん金柑なんぼきた お寺の屋根から三つきた

そのお寺はだれがとつた 八幡太郎のおた娘

おたが嫁女にいくときにや 金らんどんすに帯添えて  
しやなりしやなりと行きやしやんす

行きさきやどこかと聞いたなら

それは言われぬトツピンシヤ

#### 日原 1

名 称	田植え歌
伝 承 地	日原町横道
伝 承 者	山本ナツヨ
調査員氏名	大庭 良美
	M 43年生

へ植えて三尺穂が出て五尺 刈って取るときや 尋矢引ひろやひき

取るときや刈って刈って 取るときや 尋矢引

へ早苗植えましょま直ぐに植えよ 直ぐは神さまお喜びす

神さま直ぐは直ぐは 神さまお喜び

へあなた上からアノ下がり藤 わたしや下から抱き茗荷

下からわたしやわたしや 下から抱き茗荷

へわたしやどうでもあなたでなけりや

東ア白んでも夜は明けぬ 白んでも東ア東ア 白んでも夜は明けぬ

日原2

名 称 にし節  
 伝 承 地 日原町相模ヶ原  
 伝 承 者 村上 久太 M43年生  
 調査員氏名 大庭 良美

〱涼し風吹けこの六月に 思う殿御と伊勢参り

〱恋し小川の鶉の鳥オ見れば 小鮎くわえて浅瀬を上がる

〱夏は木の蔭霜夜にや炬燵 離れともない主のそば

〱好きなお方と田の草取れば 水の中でも手を握る

日原3

名 称 麦搗き歌  
 伝 承 地 日原町堤田  
 伝 承 者 大庭 良美 M42年生  
 調査員氏名 大庭 良美

〱麦ついて手見る女子は 一代親の留守もり

留守もりは仇な留守もり やまめの親の留守もり

〱山中へ娘やりたりや もてくる土産は煮もめら

煮もめらもじょうにやもてこぬ くずまの葉にこそ包んで

〱親里へ行くは街道 戻りの道は石坂

石坂へおしやおもむき 戻しやる親の心は

〱あの山に桃がなりたら しのびの殿ともぎ合おう

あの山に桃はなりだが しのびの殿に暇がない

〱あの山の白い菅笠 わが初妻うづまではないやら

わが初妻なら尋ね行きましよう 無明の橋のつめまでも

〱あの山のざざら材木 木の名は何と読むやら

木の名をば大工こそ読む 唐天竺の椏の木

〱山中の鶯が来るそな 三八笠がごとめく

愛らしや二人来るそな もろはにかけてごとめく

〱搗く麦は六斗六升 こぼれる涙は五斗五升

搗く麦に水はいるまい こぼれる涙で搗き干そう

〱びよびよと鳴くはひよどり 鳴かぬは小浜のおし鳥

〱我等われらは一の朋輩 殿御を一夜貸さぬか

かたびらは重ね貸すとも 殿御は一夜もよう貸さぬ

〱姑は天の鳴神 小姑どのは稲妻

稲妻が光り回せば いかなる嫁もたまらぬ

〱十七でこれにまいりて 十九の厄を孕んだ

厄々を孕み重ねて 死のうか殿御なつかし

これおかた殺しやすまいぞ 子安の神に願立てて

弓と矢と太刀と刀を 子安の神に納める

〱十七で立てた大願 ほどこやまではひとり寝

〱十七で忍びはじめて かかさも来てみなかどまで

われが年まで抱きや育てて 忍びの伽までようせぬ

日原 4

名 称 白挽き歌  
 伝 承 地 日原町堤田  
 伝 承 者 大庭 良美 M42年生  
 調査員氏名 大庭 良美

〱白のナ―頭びぎヤアヨ― 肩とる仕事思うナ―

思うナ―殿御にヤアヨ― オ―サテノ―挽かせまいナ―

〱白をナ―挽く夜にヤヨ― 必ず来なれ白がナ―

白がナ―重いかとヨ― オ―サテノ―言て来なれナ―

〱白のナ―挽き木がヨ― 様ならよかるついてナ―

ついてナ―回るかヨ― オ―サテノ―くるくとナ―

〱白がナ―いやさにヨ― そうめん屋を出たがナ―

生まれナ―ついたかヨ― オオサテノ―鰻頭屋に

〱白はナ―挽きたしヨ― 様とは寝たし来なれナ―

来なれナ―挽きましよヨ― オオサテノ―相挽きにナ―

〱白はナ―挽きよでヨ― 回しよで軽い物はナ―

物はナ―言いよでヨ― オオサテノ―角が立つヨ―

〱白をナ―挽くにはヨ― まんまるまるとナ―

角のナ―ついたるヨ― オオサテノ―白はないヨ―

〱白をナ―挽くにはヨ― 身を揺りかけて人がナ―

人がナ―見るよにヨ― オオサテノ―ほめるよにナ―

〱白はナ―挽きたしヨ― 靱はなしヨ―

隣ナ―婆さにヨ― オオサテノ―貸しなされナ―

〱これがナ―今宵のヨ― しまいの白で白にナ―

白にナ―かぐらをヨ― オオサテノ―まいらしよやナ―

白にナ―かぐらはヨ― 覚悟の前じやかせにナ―

かせにナ―かぐらをヨ― オオサテノ―まいらしよやナ―

日原 5

名 称 山どおし  
 伝 承 地 日原町相撲ヶ原  
 伝 承 者 村上チヨ子 M37年生  
 調査員氏名 大庭 良美

〱思う殿御と松坂越せば 松の露やらヨ―涙やら

〱わしとあなたは戸板の目釘 くされついてもヨ―離りやせぬ

〱遠く離れて切れさえせねば あげて慰さむヨ―凧の糸

日原 6

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 日原町須川  
 伝 承 者 石川菊太郎 M31年生  
 調査員氏名 大庭 良美

〱ヤーレ山で子が泣く木挽きの小屋で 木挽きヤ子はなぬ鋸の音

〱ヤーレ富田徳山榊で金をはかる せまい津和野じゃ斗ではかる

〱ヤーレ下関でもさんの津でも 食わにゃひだるに着にゃ寒い

〱ヤーレ山で床とりや木の根が枕 落ちる木の葉が夜着となる  
 〱ヤーレ馬が物を言た徳城の峠で 若い女郎なりや乗しよと言た  
 〱ヤーレあなた銅銭わたしは天保 二厘足らねど穴でもつ  
 〱ヤーレ木挽きさんたちやヨ米の飯を食ろうて 鋸の柄のよなヨ  
 糞を垂りやる

〱ヤーレ木挽き女房にやヨ行くなよ妹 木挽きや息をひく早よ死ぬる  
 〱ヤーレ木挽きさんたちやヨ芸者の暮らし 挽いて歌うて金をまくる  
 〱ヤーレ木挽き習うならかかりから習え かかりよ習うたら歯を習え

日原7

名 称 盆踊り歌  
 伝 承 地 日原町一ノ谷  
 伝 承 者 大庭フサヨ M44年生 他  
 調査員氏名 大庭 良美

きそん

〱母よ母よとヨ泣く子を連れて ヤーレ月に五反の布を織る  
 〱心見るちゆてヨ九夜さ通うた ヤーレ堅い女じゃ帯を解かぬ  
 〱堅い女じゃヨわしやないけれど ヤーレ妻と定めにや帯を解かぬ  
 〱踊り踊るならヨお寺のかどで ヤーレ踊る片手に後生願う  
 〱様と手とりてヨ松坂越せば ヤーレ松の露から涙やら  
 〱松の露でもヨ涙でもないが ヤーレ思い合わせの霧が降る

〱母のない子にヨ髪結うてやれば ヤーレ母はよろこぶ極楽で  
 〱寺の門口ヨ蜂が巣をかけて ヤーレ坊さ出りや刺す入りや刺す  
 〱盆は来たのにヨ背戸の早稲や熟れぬ ヤーレなんで盆としゃか  
 冷え盆じや

日原8

名 称 盆踊り歌  
 伝 承 地 日原町小直  
 伝 承 者 岸田 文子 T15年生  
 調査員氏名 大庭 良美

イソヤール

〱盆のナーヨ十五日に踊らぬものは  
 竹のナーヨ根を掘れイソヤール 篠竹を  
 〱わたしやナーヨろうそく芯から燃える  
 あなたナーヨ松明イソヤール うわのそら  
 〱想うナーヨ兄にいまと並んだよりは  
 一人ナーヨはだめてイソヤール 見るがよい  
 〱わたしやナーヨあなたに七惚れ八惚れ  
 あとのナーヨ一字がイソヤール 恥ずかしや  
 〱主がナーヨ来るかと川下見れば  
 河原ナーヨ蓬のイソヤール 影ばかり

へ肌にナーヨ添うたな一夜と言うたが

肌にナーヨ添わぬがイソヤール ただ一夜

へお寺ナーヨ門口に蜂が巢をかけて

坊さナーヨ出りや刺すイソヤール 入りや刺す

へ向かいナーヨ合わせて妻持ちやよかる

入りやナーヨうなずくイソヤール 出りや招く

へ思うナーヨ兄<sup>にい</sup>まと田の草取れば

水のナーヨ中でもイソヤール 手を握る

日原9

名	盆踊り歌
伝承地	日原町小直
伝承者	水津 梅子
調査員氏名	大庭 良美
	T1年生

けつたたき

へおけつたたいて踊る様ア見れば

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

中でよいのが主さんよ

へひとつ出しましよ簀から笹を

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

つけてくだされ短冊を

へ去年今日きて今年は身持ち

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

裏の小簀の梅ほしや

へ太鼓たたきが踊り子に迷うて

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

七つ拍子を八つも打つ

へ来いと言われて行く夜のうれし

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

足の軽さよ放ち鳥

へ想うた三年通うたな五年

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

肌上添うたなただ一夜

へ歌い声すりや様かと思うて

チヨイチヨイチヨイノチヨイチヨイ

仕事するのもやめて聞く

日原10

名	こぬか踊り
伝承地	日原町横道
伝承者	大庭 洋子
調査員氏名	大庭 良美
	S17年生

へそろたそろたよ踊り子がそろた

稲の出穂よりなおそろた デッチョンデッチョン  
へ来るか来るかと川下見れば

川原蓬の影ばかり デッチョンデッチョン  
へ思い出しては写真をながめ

なぜに写真がもの言わぬ デッチョンデッチョン  
へ去年の今夜は踊り子に出たが

今年ア石塔に灯がともる デッチョンデッチョン  
へお前百までわしや九十九まで

ともに白髪の生えるまで デッチョンデッチョン

日原11

名 称 ようそれ

伝 承 地 日原町堤田

伝 承 者 中島 巖

調査員氏名 大庭 良美

S2年生 他

へいつも七月ヨ一盆ならよかるヨ一ソレソレ

踊るふりよして様ア招くヨ一ソレソレ そりや来た

(以下囃子略)

へ今年ア豊年<sup>どし</sup>年穂に穂が咲いて 道の小草に米がなる

へ去年盆まで踊りた様が 今年ア石塔に油火で

へ踊よ踊らばお寺のかどで 踊よ片手に後生願う

へ踊ア音頭から雪駄は緒から おかた化粧しやりや殿御から  
へ踊りましようか踊らせましようか 年に一度の盆じゃもの

へ踊りやしゆんできた腰ヲ揺れ殿御 腰を揺らねばしおがない  
へ踊る中でも振りのよい様は さぞやその様うれしかる

へ盆の十五日に踊らぬ様は 竹の根を掘れ篠竹の  
へ始めよせんのはお寺のかどで 石の地藏さとわしばかり

へ会うてうれしや別れのつらさ 会うて別れがなかよかる  
へ歌を歌うて案じてみれば 歌は苦界の理をせめる

へ浮気心ははやめなされ 十九二十の身ではない  
へ思う殿御と松坂越せば 松の露やら涙やら

へ松の露でも涙でもないが 思い合わせの霧が降る

へお前ひとりか連れ衆はないか 連れ衆ア後から駕籠で来る  
へお月さまでも夜歩きよなざる 主の夜歩きや是非もない

日原12

名 称 踊りくどぎ

伝 承 地 日原町堤田

伝 承 者 石川 龍祐 S12年生

調査員氏名 大庭 良美

豆くどぎ(座つけ)

へ一つ人の豆あてになりたことなし

ソリヤーヨイヤサノエーヨイヤサノエー (以下囃子略)

二つふくれ豆しわのよりのことなし

三つ味噌豆に色のつかぬことなし

四つ選りた豆屑のありたことなし

五つ煎りた豆ひびのいらぬことなし

六つむいた豆皮のありたことなし

七つなりた豆莢さやのつかぬことなし

八つ焼いた豆灰のつかぬことなし

九つ買った豆金のいらぬことなし

十で飛んだ豆近所にありたことなし

平左くどぎ

今度石州津和野の城下 小名を申せば森堀内の

佐々木兵衛という侍の 髪の毛のつくり

年は十八器量の生まれ 髪かみの結びぶり

大小さしぶり袴着ぶり 並びなみござらぬ津和野の谷に

いかな都の絵描きじやとて 平左姿に似せ描きえならぬ

少し下りて榭屋せゐがござる 榭屋娘のおでんというて

これも平左に劣らぬ器量 ころは六月七日の祇園

祇園祭の下向の道で ちろと見る目は平左と見える

まだも見ゆる目は恋路と見える そこでおでんがわが家へ帰り

硯すずりひきよせ墨すりにごし 鹿の巻筆杉原紙に

思う恋路をさらさら書いて これを平左にさしあげます

平左手にとり拝見いたす わしは今年は江戸行き番で

親の御意ならそむきもなるが お上御用でそむきはならぬ

言うて平左がつき戻されて

お江戸行きやるならはなむきよいたす

紅絹もみの腕ぬきびろどの脚絆 五尺手ぬぐい中染めわけて

平左定紋三ところ入れて これを平左にさしあげます

そこで平左が申されように 広いお江戸へ行くからしめて

せまい津和野に心は置かん 言うて平左がつき戻されて

そこでおでんが腹立ちまぎれ 戻る道から鍛冶屋を訪ね

もうし鍛冶さんご無心ござる 帽子ない釘を七十五本

打ってくだされひとえに頼む 打つてもろうて懐中におさめ

すぐに驚原氏神さまに 前のぎざはしょんどと上がる

ごめんなされよ氏神さまよ 前のお御扉をさらりとひらき

中の御正体逆しに立てて 胸にや三本両手に二本

かのえかの年江戸行く夫 上るお江戸に上らぬように

かなえくだされひとえに頼む すぐに帰ってお祇園さまへ

ご免なされよお祇園さまよ 前のお御扉をさらりとひらき

中の御正体を逆しに立てて 肩にや三本両目に二本

かのえかの年江戸行く夫 上るお江戸へ上らぬように

かなえくだされお祇園さまよ すぐにおでんはわが家へ帰り

奥の間で一人の思案 人をのろうてわが身は立たぬ

もんず四郎の剃刀出して 髪をさばいて大蛇となりて

腹をたち割り亡者となりて 花のお江戸へ一夜にのぼる



平左屋形はどこじやと尋ね 青い格子に九曜の御紋

夜の九つ八半のころに 平左屋形を七巻きしめて

破風のほとりに頭をのぞけ 平左平左と玉ちさ声で

そこで平左も夢驚いて わしがお寝間にゃ猫さえ来んに

化けか変化か魔法のものか 苗字オ名乗れよ名乗らんれば

守り刀でただ一打ちに そこでおでんが申されように

おぼえござろう津和野の谷に お前恋した榎屋のおでん

いうて大蛇は消ゆるがごとし そこで平左は大病となりて

医者が三人典者が五人 そこでお医者 of 申されように

身の病なら薬もあるが 人ののろいの薬はないと

いうてお医者 は皆たちのけり そこで平左は眠るがごとし

日原13

名	称	踊りくどき
伝	承	地 日原町柳村
伝	承	者 竹内 信雄 T11年生
調査員氏名		大庭 良美 他

平左くどき

(堤田に同じ)

日原14

名	称	踊りくどき
伝	承	地 日原町須川
伝	承	者 石川菊太郎 M31年生
調査員氏名		大庭 良美

お初心中

へ今度大阪糸より町に ソリヤーヨイトサノエー

ヨイトサノエー (以下囃子略)

針屋矢方<sup>やかた</sup>という人ござる そのの妹のお初というて

年は十六ござ器量の生まれ やがて隣の呉服屋さんの

その息子の吉三<sup>きち</sup>というて それとお初は恋ある仲で

文をやるやる三十と二通 それに数々玉章そえて

それに一度の返事がないで 忍びかけつりや忍ばにやおかぬ

忍ぶその夜の御装束は 肌<sup>はだ</sup>に肌つく白むくじゅばん

上に召すのはかなきりこじま 帯は当世はやりのりんず

三重に回してりんりと締めて 長い刀を忍びとさして

そろり出て行く糸より町に 針屋矢方は威勢なものよ

三町沖には大門ござる 三町のぼれば裏門ござる

前の戸前をつもりてみれば 前の戸前が三十と二枚

後ろ戸前をつもりてみれば 後ろ戸前が三十と二枚

それ<sup>ら</sup>にゃ数々錠かけ金で いか<sup>に</sup>に魔法もこれにはならぬ

家の回りを三辺回り 倉のやだれの梯子を下ろし

二間梯子を三本ついで 屋根に登りて破風板起こし

垂木垂木を伝うて下りて ここはどこかと案じてみれば

もちと下りつりやお釜の上よ 神も仏もロッカー神も

御免なされや忍びでござる ようよう下にと静まり下りて

しもの女中のお玉を起こし お初お寝間はどこかと問えば

お初お寝間は七間の奥よ 一間一間と忍んで行けば

お初お寝間は威勢なものよ 四方四隅につり提灯で

うしる前には両親さまよ 後や先には腰元連れて

扇招きでその火を消やし お初細腰ゆり起こされて

そこでお初は夢驚いて わしがお寝間にゃ猫さよ来んに

蝶か魔法か生あるものか 名字名乗れや名乗らんれば

寝間の刀でただ一打ちに 名字名乗れば恥ずかしゅうござる

家号申せたいがとござる わしはとなりの呉服屋さんの

二番息子の吉三でござる 吉三さまかようこそおいで

締めつ緩めつ今宵は一夜 明ける六つには吉三はいぬる

後でかかさの申されように われは隣の永明寺（ようめんじ）から

幼少折から名乗りておいて いやと言われんお樽をもらい

嫁にもらわれ行かねばならぬ いつもお初は寝るよなふりて

どんす枕に夜具着せかけて とろり出て行く糸より町に

呉服買いましょ 絹買いましょと

言うてお初はにせ口だしやる

呉服売りましょ 絹売りましょと 言うて吉三はにせ口のぞけ

あとでかかさの申されように われは隣の永明寺（ようめんじ）から

幼少おりから名乗りておいて いやといわれんお樽をもらい

嫁にもらわれ行かねばならぬ 暇をくだされ嫁入りいたす

そこで吉三の申されように われはもつとの伊勢願かけた

伊勢に七度熊野にゃ三度 愛宕さまにはなお月まいり

罰をこうむるお暇はならぬ

そうも言われりゃ心中じゃものよ 小坂離れの十本橋の

橋の欄干に腰打ちかけて お初あれ見よ小坂が見える

こんな吉三やおろかなことよ 小坂見んと的心中じゃものよ

夜明け鳥が早やかおかおと しぼの葉をとり水盃で

さしつさされつ三どん目には 長い刀をさらりと抜いて

お初細首ちゃらりと落とし 返る刀でわが身を果てる

#### 日原15

名 称 踊りくどぎ

伝 承 地 日原町横道

伝 承 者 古森 保友 S6年生

調査員氏名 大庭 良美

#### 平左くどぎ

アラヨイヤーセー ヨーイヤナー

ヤーレ今度石州津和野の城下

アラヨイヤーヨイヤナー (以下囃子略)

西に城にあり東に青野 小名を申せば森堀内の

佐々木佐兵という侍がござる その息子に平左というて

年は十八器量の生まれ (以下堤田に同し)

日原 16

名 称 木ノ口神楽歌  
 伝 承 地 日原町木ノ口  
 伝 承 者 岸田 滋 S8年生  
 調査員氏名 大庭 良美

(鍾 馗)

〱千早ふる荒ぶるものを払わんと  
 いでたちませる神ぞ尊き 神ぞ尊き  
 〱目に見えぬ神の心の神事は  
 かしこきものぞおほにな思ひそ おほにな思ひそ  
 〱世の中のよきも悪しきもことごと  
 神の心のしわざにぞある しわざにぞある  
 〱よき人を世に苦しむるまがつひの  
 神の心のすべぞすべなき すべぞすべなき  
 〱千早ふる神の心をなごめずば  
 八十のまがごと何とのがれん 何とのがれん  
 〱世の中を安からしめんと千早ふる  
 荒ぶるものをやらいましける やらいましける

日原 17

名 称 柳神楽歌  
 伝 承 地 日原町柳村  
 伝 承 者 竹内 信雄 T11年生  
 調査員氏名 大庭 良美

塩祓神歌

〱幣立てるここも高天の原なれば集まりたまえ四方の神々  
 〱サイヨウエ サイヨウサット 謹請再拜勧請申す 東方から  
 は五万五千 南方からは六万六千 大小の神祇 おりいの御  
 座に 申しおろして御座清むるものは 神の森も山の神  
 百浦の潮ハリヤドンド  
 〱サイヨウエ サイヨウサット 謹請再拜勧請申す 西方から  
 は七万七千 北方からは八万八千 大小の神祇 おりいの御  
 座に 申しおろして御座清むるものは 神の森も山の神  
 百浦の潮ハリヤドンド  
 〱サイヨウエ サイヨウサット 謹請再拜勧請申す 中央から  
 は九万九千 おうりょうからは十万五ヶ所 大小の神祇 お  
 りいの御座に 申しおろして御座清むるものは 神の森も山  
 の神 百浦の潮ハリヤドンド  
 〱サイヨウエ サイヨウサット 謹請再拜勧請申す 伊勢の国  
 で祝われたもうは 内宮外宮七十末社 八十末社 百二十末  
 社 一社も残らず申しおろして御座清むるものは 神の森も  
 山の神 百浦の潮ハリヤドンド  
 〱サイヨウエ サイヨウサット 謹請再拜勧請申す 出雲の国  
 で祝われたもうは 杵築はなすまきな大明神 御崎の神社  
 ほんばさぐさ佐陀大明神 一社も残らず申しおろして 御座  
 清むるものは 神の森も山の神 百浦の潮ハリヤドンド  
 〱サイヨウエ サイヨウサット 謹請再拜勧請申す 石見の国  
 で祝われたもうは 一宮二宮三宮の神社 当社明神 おりい

の御座に 申しおろして御座清むるものは 神の森も山の  
榊 百浦の潮ハリヤドンド

〱おりたまえ おりいの御座にはやもはや 錦を並べて御座と  
踏ましよや

日原18

名	田植え囃子
伝承地	日原町相撲ヶ原
伝承者	村上 治美 T9年生 他
調査員氏名	大庭 良美

(道中囃子)

(歌なし)

(座つけ)

〱ヨ一色の白いくちなわが白がの米よねオクわえて

ヨ一お倉の口オ登るお倉の口アどこやら

〱ヨ一田主どんの背戸倉をさらに開けて見たれば

ヨ一光り輝く明星星か螢か

(中の拍子)

〱ヨ一朝日さくよな鴨川の観音さまの鼻はナ

ヨ一小僧殿が降りて参る観音さまの鼻はナ

〱ヨ一宮島さまのご普請にはどなたが棟梁なされた

ヨ一飛弾が匠に竹田が番匠兩人棟梁なされた

〱ヨ一伊勢の天照大神宮の飾り舟を見たれば

ヨ一金や銀の帆柱に綾の幕を張りてナ

(返りうち)

〱ヨ一田主どんの背戸倉をさらに開けて見たれば

ヨ一光り輝く明星星か螢か

〱ヨ一おもしろい音がするあれは何の音やら

ヨ一えべす大黒の俵まくる音やら

〱ヨ一京の町を上り下りものの値段を問うたなら

ヨ一胡瓜花の中のこがとんと百匁したげな

〱ヨ一日暮らしの小雀が笠のふちよ回るノ

ヨ一回わる言うて回らんでチョイサノホイサで回るのは

〱ヨ一田主どんの背戸倉をさらに開けて見たれば

ヨ一光り輝く明星星か螢か

(打ちあげ)

〱ヨ一昨日見て今日見りや庭の松は高いノ

ヨ一高いことア道理じゃとくの笠で招いた

〱ヨ一道ばたの竹の子が竿になるのが稀ナ

ヨ一人の女房を引き寄せて抱いて寝るのがまだ稀な

〱ヨ一ゆんべ来た夜ばいどは紅絹もみのへこを落といた

ヨ一落としたやら忘れたやら今夜も来るちゆて置いたやら

(まちごし)

〱ヨ一向こう馬乗りが三人通るとれがうちの聲やら

ヨ一十分手綱よりかけて中の那須の与一ナ

〱ヨ一京の町の乙姫さんは袴裁たちが上手でナ

ヨ一八重にたてて八重に縫うて後にひだをとられた  
〱ヨ一下関の船頭さんは京で何を習うた

ヨ一にや太鼓二にや笛三にやささら手拍子

〱ヨ一日は暮れる宿はなし駒はどこいつないだ

ヨ一尾を越え谷を越えさんがり松につないだ

(打ちあげ)

〱ヨ一田主ア喜べ一文長者と呼ばれた

日原19

名	田植え囃子
伝承地	日原町横道
伝承者	古森 保友
調査員氏名	大庭 良美
	S6年生

(てんがい) 道中囃子

(座つけ) 調子合わせ

(中の拍子)

〱ヨ一神の前の桜木にしとん鳥が止まった

ヨ一しとろうのごとろうのしゃくにかねをごとろう

〱ヨ一今日の田の農神さんはどちらの方からおいでた

ヨ一龍宮の駒に錦の手綱で東の方からおいでた ホイホイ

〱ヨ一田主どんの背戸倉をさらりと開けて見たれば

ヨ一光り輝く明星ほしか螢か

(返りぶち)

〱ヨ一宮島さまのご普請にはどなたが棟梁なされた

ヨ一飛弾が匠に竹田が番匠兩人棟梁なされた

〱ヨ一おもしろい声をするあれはたれの声やら

ヨ一恵比須大黒の俵積みの声やら ホイホイ

(畦ごし)

〱ヨ一相川の中の瀬に稚児が笛を落とした

ヨ一築<sup>やな</sup>うてや築うてや築に笛が止まりました

〱ヨ一浅草の観音お江戸に何を習いに

ヨ一にや太鼓二にや笛三にやささら手拍子

〱ヨ一代かきは上がりたに船出衆はどこにか

ヨ一沖の舟に飛び乗りてわかめ刈りかめ刈りか ハイサ

〱ヨ一日は暮れる行くやごで駒アどこにつないだ

ヨ一尾を越し谷を越しさんがり松につないだ

〱ヨ一猿が三匹ささらすりや狸鼓うつやら

ヨ一田主よろこべ一文長者と呼ばれて

〱ヨ一大阪の天王寺の破風の萱が足らいで

ヨ一それをしてんで刈らいで何をしてんでなされた

〱ヨ一奥山の刈る萱は昨日刈りか今日刈りか

ヨ一昨日刈りは品がようてただ今日刈り今日刈り

〱ヨ一奥山の杣音は何をする杣音

ヨ一三十三間大御堂の垂木を削るその音

〱ヨ一今朝の殿の朝がりには鶴がまきをおろした

ヨ一鶴まきばかりか弥生のやたけをおろした

〱ヨ一お伊勢天照大神宮の飾り舟を見れば

ヨ一金銀の帆柱に綾の幕をうちかけ

〱ヨ一沖のろかいの上の止まる鳥はなん鳥

ヨ一口は錦二そうれんげ羽の白い鳥やれ

日原20

名	高い山
伝承地	日原町堤田
伝承者	大庭良美
調査員氏名	大庭良美

M42年生

〱高い山から谷底見ればノ一

瓜や茄子の花盛りノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山からむすびをこかすノ一

烏アほしがる胸しわるノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山には愛宕さがござるノ一

身から浄めて参りやんせノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山から高津沖を見ればノ

高津ア白波帆かけ舟ノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山から低い山を見ればノ

高い山よりや低くござるノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山から日原を見ればノ

一步小判の花が咲くノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山から枕瀬を見ればノ

小さい子供の花踊りノハリワヨイヨイヨイ

〱高い山から谷底見ればノ

谷にやおさんが染分けたすきで布さらすノ

ハリワヨイヨイヨイ

〱高い山からほんぶらの花ども咲いていたかいな

何のこなさの瓜や茄子の花盛りハリワヨイヨイヨイ

〱高津沖には二つ瀬がござるノ

思い切る瀬と切らぬ瀬とノハリワヨイヨイヨイ

〱下へ下へと枯木を流すノ

枯木ア流れて花が咲くノハリワヨイヨイヨイ

〱めでためだが三つ重なりちやノ

祝いめでたの餅をつくノハリワヨイヨイヨイ

〱めでためだが三つ重なりちやノ

下のめでたが重たかるノハリワヨイヨイヨイ

日原21

名	めでたいもの
伝承地	日原町堤田
伝承者	大庭良美
調査員氏名	大庭良美

M42年生

〱めでたいものは芋の茎葉も茂るしゅげ

畑でどんぐりまんぐり子が出来たコチャ

畑でどんぐりまんぐり子が出来た

〱十七八は滝の水しやらしやらと

落ちるが女のならいじやコチャ 落ちるが女のならいじや  
〱お前さと知ったら戸はたてぬおいとしや

草葉の露に打たしたコチャ 草葉の露に打たした

〱十七八を抱いて寝て朝起きて

顔見るときのやさしさコチャ 顔見るときのやさしさ

〱姉さんこの月ア大か小かわしや知らぬ

お伊勢の曆に書いてあるコチャ お伊勢の曆に書いてある

〱姉さん穴鉢アいつ割れた三月の

菜種の花の咲くころコチャ 菜種の花の咲くころ

〱姉さん抱いた子はだれが子か天竺の

七夕さまの申し子じやコチャ 七夕さまの申し子じや

〱姉さん方の寺参り手には数珠

たもとにや恋の玉章コチャ たもとにや恋の玉章

〱姉さん髪さしや何ぼした広島で

見どり選どり十九文コチャ 見どり選どり十九文

〱太夫さんの夜歩きやよう知れる湯だすぎで

たもとにや鈴がじゃらじゃらコチャ たもとにや鈴がじゃらじゃら

〱坊さん夜歩きや闇がよい月夜なら

頭がふらりしやらりとコチャ 頭がふらりしやらりと

〱今宵はここに草枕明日の夜は

吉原女郎衆の手枕コチャ 吉原女郎衆の手枕

〱お前を待ち待ち蚊帳の外蚊に食われ

七つの鐘の鳴るまでコチャ 七つの鐘の鳴るまで

七つの鐘はまだおるか寺々の

明け六つ鐘の鳴るまでコチャ 明け六つ鐘の鳴るまで

〱お前となればもう一夜沖の瀬の

寄せ来る波の上でもコチャ 寄せ来る波の上でも

### 日原22

名 称 よいやなア

伝 承 地 日原町堤田

伝 承 者 大庭 良美 M42年生

調査員氏名 大庭 良美

〱お夏夏夏かたむら帷巾を 何に染めよかと清十郎に問えば

浅葱に駒形紅鹿子 ヨイヤナア

〱松の葉越しに出る月オ見れば 見えつ隠れつ人目を忍ぶ

空にも恋路のあるものか ヨイヤナア

〱花になりたい桜の花に 思う殿御のお庭に咲いて

散りても小袖に止まりたい ヨイヤナア

〱花になりたい鶏頭花に 思う殿御のお庭に咲いて

諸国諸大名に拜まれる ヨイヤナア

〱花になりたいだいでせん花に もとは小坂に葉は品川に

花はお江戸の城に咲く ヨイヤナア

〱花になりたいくれない花に 摘んで干されてもみしぼられて

若い姉さの肌うに添う ヨイヤナア

〱思う殿御の夏着る襦絆 何に染めよかと紺屋が問えば

竹に雀に品よく止まる ヨイヤナア

〱思う殿御の夏着る襦絆 竹に雀に品よくとまる

羽がよそろえてたつところ ヨイヤナア

〱眺め飽かぬは吉野の桜 宇治の螢に龍田の紅葉

冬は雪見の曾根の松 ヨイヤナア

〱安倍の保名はさかけの別れ さかきよ尋ねて信太が森に

さかけ花こそ血の葉 ヨイヤナア

〱これのお背戸の茗荷と露と

茗荷めでたや露繁盛 ヨイヤナア

〱これのお背戸の桑の木さまは 神か仏か氏神さまか

忍び夜夫<sup>つま</sup>をたち隠す ヨイヤナア

〱鶴になりたいあの舞鶴に 千里一羽あの君さまに

会うて羽交が合わせたい ヨイヤナア

〱常は飲めずと今宵はひとつ 酒はもろはく肴に小歌

ことにお酌は忍びさま ヨイヤナア

〱お夏夏夏帷巾の 風に吹かれて小袂がかえる

おもしろしろと吹かしゃんせ ヨイヤナア

〱紅いものなら紅唐子

南天珊瑚に梅もどき ヨイヤナア

〱伊勢の神風すえなが枯れる わしとあなたはあいでんさまへ

拝む心は行くもぐさ ヨイヤナア

〱冬の螢に夏降る雪に 女郎の誠に卵の四角

あらば晦日の月も出る ヨイヤナア

〱女郎が文才書く書け硯箱

やりゃんせ堀川の手代衆に ヨイヤナア

〱おぼろ月夜に空の月才見れば 梅の立木か色ある君か

花ふり袖のおぼろ月 ヨイヤナア

〱君は釣竿わしや池の鮒

釣られ心のうれしさよ ヨイヤナア

日原 23

名 称 子守り歌

伝 承 地 日原町堤田

伝 承 者 大庭 良美 M42年生

調査員氏名 大庭 良美

〱ねんねこようねんねこよう この子のよい子が寝た留子に

餅<sup>あんもつ</sup>つういてさあまいて 三歳べべこにかるわいて

あっちの山いおい越せよ こっちの山いおい越せよ

おい越せ峠で日が暮れて 先の小松に灯をとほせ

こっちの小松も灯をとほせ とほせどとほせど明らんで

暁起きて空見れば でんでん太鼓の音がする

ねんねこようねんねこよう



柿木↑

名 称 盆踊りくどぎ

伝 承 地 柿木村白谷

伝 承 者 村上 吉信 M39年生

調査員氏名 萬瀬 幸男

山崎三太

ハヤール歌のふしぶし所でかわる

ヨイセイヨイヤナー (以下囃子略)

ハ竹の節でも世が世で変わる これについては哀れがござる

歌に焦がれて死んだる姫が 冥路帰りも枯木に花が

咲くといえどもまた稀なこと 島の始まり淡路が島よ

仏の始まり信濃の国よ 信濃の国では善光寺様よ

神の始めは出雲の神よ 橋の始まり無明の橋で

国の始めは大和の国よ 大和の国では山崎三太

年は十九ですみ前髪で 器量吉野の桜木育ち

じたい三太の生まれと聞くに 元は由ある侍なれど

小まいときにて父親に離れ 母親一人ではぐくむために

わが身大和の酒井出様に 小判千両でその身を売って

貧はつらいよ子は情ない 主のためなら月夜も闇も

雨の降る日も風吹く夜も 暑さ寒さのいといなく

駒の手綱で月日を送る あまた朋輩うち連れだつて

京の並びへ伏見の町へ 駒をいさめて歌って上る

その日三太の歌いし歌は 法華経崩しの八の巻

人はもちろん鳥獣はじめ 歌う三太の姿が見たい

さてもよい声大和の馬子よ 声のよい人器量もよかる

器量よい人心もよかる 一目見たい大和の馬子を

なれど家久侍なれば 門に走り出見ることならぬ

姫の身体も自由にならぬ 地神天神龍神までも

あれを流れるお川の水も 瀬音しずめて聞きほれる

山の草木もほろりとなびく 澄んだ三太の歌声ほどに

伏見町なる代官さまの 築地判官家久様の

一人娘の玉代が姫よ それがひれつや病となりて

月日たつほど病は進む 親も驚くわが子の病氣

医師は町医者殿の医者 医術を尽して保養をなさる

およそ日本の六十余州 大社大社へ立願かけて

愛宕さまへは日参なさる なれど病氣は快方に向かず

伏した姫さまのたまう言葉 下女もお医者も二人親さまも

ここをしばらくお控えなされ 後で玉姫胸なで下ろし

重い枕をようやく上げて 思い一筆残さんものと

硯引き寄せ墨すり流し 鹿の巻筆ようよう染めて

身から出したる病であらば 神や仏の利益もござる

医師の薬で快気もならず わたしの病氣は恥ずかしながら

大和の国では山崎三太 馬子の三太が歌いし歌に

歌に焦がれて病となった どうせ今度は全快ならぬ

わたし死んだる後のちまでも 千部万部の弔いよりも

とかく三太の歌いし歌を 位牌前にて歌わせたまへ

頼みまするぞ両親さまよ 秋の稲妻沢辺の螢

うつらうつらと消えゆくごとく、ついに玉姫帰らぬ旅へ  
死んだ後では二親さまが 嘆きながらに書置き見やる  
親にこれほど知らしたなれば なんぼいやしい馬方なれど  
夫婦仲よく添寄せたものを 嘆く小言も返らぬ答  
姫の葬儀をいたさんものと 切って刻んだ旗天蓋に  
棺は立棺はつほし巻ぎで 四方棺にはつがいを合わせ  
中に立てたは孔雀の鳥よ 四方隅にはつばくる鳥よ  
羽を広げて今たつほどに 地ままたまそのほしのまえ  
旗や天蓋りゆうたつまでも 風になびかせ威勢なものよ  
姫のお墓は新松原へ やがて葬儀の後片付いて  
月日の流れは間のないものよ 姫の七日に当たったその日  
馬子の三太はそれとも知らず 京の帰りに歌うて戻る  
その日三太の歌いし歌は 坂は照る照る鈴鹿は曇る  
竹に雀は品よく止まる とめてとまらぬ色の道  
これや代官早や出て聞きやれ 向こう通るはよしある馬子よ  
さてもよい声大和の馬子は あれを呼べよと代官様は  
三太御用と言葉をかける それに三太は仰天顔で  
幼なときから馬方すれど 伏見町なる代官様へ  
言葉荒したことはない われに御用は不思議なことよ  
御用筋なら寄らねばならぬ 門の柱に駒つなぎおき  
おそるおそるに玄関のぞき お辞儀大きく両手について  
何か御用と頭を下げる そこへ代官言葉をかける  
三太殿とはそなたのことか いざやご免と座敷に通る

位牌前にて馬方節の 回向唱えて三度の礼儀  
すぐに三太は御殿を下がる 代官家久涙で送る  
またも馬方回向を頼む 上り下りの道筋なれば  
またも京都へついで節は 姫への馬子節歌うてたまえ  
回向頼むと願いの言葉 すぐに三太はおいとまいたす  
すぐにお墓に参らぬものと 門につないだあの馬頼む  
頼みまするよ門番様よ 手には花さげ線香持って  
左のその手ににし鍬持って 伏見町をばひそかに通る  
急ぎや間もなく新松原に 姫のお墓をようよう尋ね  
回向唱えて三度の礼を やかた組んだる石塔のけて  
仏も守れよ頓生菩提 さらばこれより掘りかけましよう  
一鍬掘っては回向を唱え 二鍬掘っては馬子節歌う  
三鍬掘っては南無阿弥陀仏 四鍬掘っては馬子節歌う  
涙ながらにようよう掘って 棺を掘り出しその中見れば  
さても十五夜有明の月 月の明かりにすかして見れば  
まこときれいな姫君さまよ 美女にすぐれた貴い生まれ  
死んだ姿がこのようなれば さぞや生きたる姿が見たい  
棺を押さえて涙を流す それが玉代の口中に入りて  
三太涙が気付けとなった 姫は蘇生しかすかな声で  
そなた回向のその声聞いて 二度の蘇生のわたしでござる  
そなた焦がれしこの人ならば 連れて屋敷へお帰りなされ  
飛び立つほどに喜ぶ三太 背負って参ろや姫君さまよ  
急ぎや早くも屋敷へ戻る 門に立ったは三太じゃないか

背に負うたは玉代じゃないか 下女も親子も不思議に思う  
 死んだ娘が戻りはすまい 魔法変化の性あるものか  
 そこで三太が委細を語る 姫も喜び子細を語る  
 法事半ばが祝儀となつて 一つ祝儀に元服させる  
 二つ祝儀にお名下された 三つ祝儀になか髪結われ  
 衣服大小の太刀許される 元が三太は馬方なれど  
 今は世に出た伏見の町で 夫婦豊かに仲よく暮らす  
 ゆかり久しき語り草

柿木 2

名	白谷神楽歌
伝承地	柿木村白谷
伝承者	萬瀬 幸男 T2年生
調査員氏名	萬瀬 幸男

八幡

八弓矢とる人を守りの八幡山  
 誓いは深き石清水かな 石清水かな  
 誓いは深き石清水かな 石清水かな  
 八石清水今も流れの末絶えず  
 濁りなき世や君を守らん 君を守らん  
 濁りなき世や君を守らん 君を守らん  
 八箱崎の印に植えし松なれば  
 幾千代までも栄え久しき 栄え久しき

幾千代までも栄え久しき 栄え久しき

八幡山前の外山が曇るとも

わが氏人に曇りおろさじ 曇りおろさじ

わが氏人に曇りおろさじ 曇りおろさじ

八幡をば都と拜む西は海

東はなぎさ思い松原 思い松原

東はなぎさ思い松原 思い松原

八万代と祈り治むるこの村に

悪魔はよせじとさよね降らしよや さよね降らしよや

悪魔はよせじとさよね降らしよや さよね降らしよや

六日市 1

名	苗取り歌
伝承地	六日市町下高尻
伝承者	河野タツヨ M44年生
調査員氏名	坂田 浩明

八恋し小川の鶉の鳥見やれ 鮎をくわえて瀬を上る

くわえて鮎を 鮎をくわえて 瀬を上る

八鮎は瀬に住む鳥や木の枝に 人は情の下に住む

情の人は 人は情の 下に住む

八どんどんど今鳴る神は ここは桑原落ちやすまい

六日市2

名	称	苗取り歌
伝承地		六日市町真田
伝承者		有田ヒサヨ M41年生
調査員氏名		坂田 浩明

山は焼けても 山鳥アたたぬ

子ほどかわいなヨ ものはない

六日市3

名	称	田植え歌
伝承地		六日市町幸地
伝承者		中村 友一 M39年生
調査員氏名		竹中 文雄

絹の幕に打たれたハア沖を通る飾り舟にや

どこの殿の舟やら越後さまの舟やら

絹の幕に打たれたハア沖を通る飾り舟にや

どこの殿の舟やら越後さまの舟やら

宮島さまのご普請はハアどなたが棟梁なされた

飛弾の匠竹田が番匠兩名してなされた

宮島さまのご普請はハアどなたが棟梁なされた

飛弾の匠竹田が番匠兩名してなされた

周防で名高い岩国のハアそろばん橋は五そりの

百間敷石錦の河原に三国一の橋といの

周防で名高い岩国のハアそろばん橋は五そりの

百間敷石錦の河原に三国一の橋といの

大田ア植えたお祝いにやハア晩にや植え手を直そりの  
直さいじや 直さいじや

六日市4

名	称	田植え歌
伝承地		六日市町田野原
伝承者		高田ユメヨ M31年生 他
調査員氏名		竹中 文雄

宮島さまのご普請はどなたが棟梁なされた

飛弾が匠に竹田が番匠兩人してめされた

代かきヤア上がりたやうなり衆はどちらか

沖の舟に飛び乗りてわかめ買に行かれた

六日市5

名	称	田植え歌
伝承地		六日市町田野原
伝承者		大庭徳次郎 M37年生
調査員氏名		竹中 文雄

歌いなされやお歌いなされ 歌で器量が下がりやせぬ

歌で器量が下がりがたなれば 買うてあげますはれ薬

歌は数ある八万四千 恋の混じらぬ歌はない

歌の先生が一人よりは 下手のつれ節アおもしろい

へ様はよう来る五里ある道を 三里笹山二里が峠

六日市6

名 称 田植え歌  
伝 承 地 六日市町田野原  
伝 承 者 大庭 ヒナ M33年生  
調査員氏名 竹中 文雄

へととうの前のこねろうがヤーサ 何をこねるこねろうの

われらおとどい四五人をこねくりだしたヤーサ

こねろうの苗代の太夫がヤーサ 豆の粥をみつめて

歌うたり舞うたり頭アたたいたヤーサ ターリーヤ

今日の田の田主はヤーサ 一本苗やおきらいの

ひとり飯ア食わなんすヤーサ 一本苗やおきらいのナー

代かきはあがりたヤーサ

うなり衆はどこいの沖の舟に飛び乗り

わかめ買いにヤーサ エー負いにーヤ

へ朝はかの農神さんどちらの方からおいでるの

竜の駒に錦の手綱に東の方からおいでるの

へ周防で名高い岩国の錦帯橋は五つ反りの

百間敷石錦の河原で三国一の橋といの

へお竹は十七つぼみの花よ河の風に誘われた

筑前博多の一郎衛さんの恋の風に誘われた

へ京から下りた馬喰さんに何を土産にもろうた

肌着の襦袢におしろい箱扇子一對

六日市7

名 称 田植え歌  
伝 承 地 六日市町立河内  
伝 承 者 尾崎ヤエ子 M43年生  
調査員氏名 坂田 浩明

へ朝はかの農神さまは どちらの方から ヨーサ おいでるの

竜の駒に錦の手綱で 東の方から ヨーサ おいでるの

へ宮島様のご普請は どなたが棟梁 ヨーサ 召された

飛弾の匠に竹田が番匠 兩人棟梁 ヨーサ 召された

へ周防で名高い岩国の そろばん橋や ヨーサ 五反りの

百間敷石錦の川原で 三国一の ヨーサ 橋といの

へ大阪天王まんなで 唐傘枕で ヨーサ やりおった

わしら見たが言わなんだ 正直者だと ヨーサ ほめられた

六日市8

名 称 田植え歌  
伝 承 地 六日市町真田  
伝 承 者 島田 忠子 T6年生  
調査員氏名 坂田 浩明

へ日暮れ方のはえの子 ヤーサ 親に何も問わいで ヤーサ

セイゴ瀬に住む 深い川の ヤーサ 瀬に住む

六日市9

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 六日市町下高尻  
 伝 承 者 河野タツヨ M44年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

へ 田主様の前田にやお庭に鶴が ヤーサ

舞い下りる 金銀ばらばら 両羽交えお庭に鶴が ヤーサ  
 舞い遊ぶ 田主様の前田にやお庭に鶴が ヤーサ  
 舞い下りる 金銀ばらばら 両羽交えお庭に鶴が ヤーサ  
 舞い遊ぶ

六日市10

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 六日市町抜月  
 伝 承 者 田中百合子 T8年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

へ おしどりの思い羽根をば 一羽ほしやたのために  
 たのために一羽ほしやたのために 一羽が千両するとも  
 たのために羽根はやるまい やるまいたのために羽根は  
 やるまい

六日市11

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 六日市町抜月  
 伝 承 者 村上シズヨ M38年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

へ 話ややめにして歌にしよじゃないか

話や 話や口説くまげの種となる  
 人はよいよいみなよいけれど 破れ車じゃ わが悪い

六日市12

名 称 田植え歌  
 伝 承 地 六日市町抜月  
 伝 承 者 田中百合子 T8年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

へ わが親の田島どんは 袴裁ちにや ヤーサ  
 名人の八幅裁って八針縫うて やよにひだ ヤーサ  
 取るとう

六日市13

名 称 田植え小歌  
 伝 承 地 六日市町立河内  
 伝 承 者 尾崎ヤエ子 M43年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

へ だれもどなたも歌おうじゃないか

声をアリヤそろえてしなやかに

そろえて声を声を アリヤそろえてしなやかに

〽歌の先生が一人いちにんよりも 下手なアリヤ連れ節やおもしろい

連れ節ア下手な下手な アリヤ連れ節やおもしろい

〽歌も歌います仕事もします 胸じゃアリヤ七重の苦もします

七重の胸じゃ胸じゃ アリヤ七重の苦もします

〽昔なじみとつまずく石は 恨みアリヤながらもふり返る

ながらも恨み恨み アリヤながらもふり返る

#### 六日市14

名 田植え小歌

伝 承 地 六日市町蓼野

伝 承 者 三浦スエ子 T5年生

調査員氏名 坂田 浩明

〽これおかた起きて髪結え 山田にや太鼓の音がする

音する山田にや 太鼓の音がする

〽山田には太鼓の音しよと 寝るほど寝ずは起きまい

起きまい寝るほど 寝ずは起きまい

〽あの山に白い萱笠 わが初妻が懐かしい

懐かしいわが初妻が 懐かしい

〽初妻と呼べど答えず 姿は蝶々のありさま

ありさま姿は 蝶々のありさま

〽このまちはいかい大まち 今日このまちで日が暮りよう

日が暮りようこのまちで 日が暮りよう

#### 六日市15

名 田植え小歌

伝 承 地 六日市町蓼野

伝 承 者 寺戸忠次郎 T8年生

調査員氏名 坂田 浩明

〽今日は殿御さんのしんがい田が植わる

植えてあげましようこまごまと

あげましょ植えて 植えてあげましょこまごまと

〽ここは道端よう植えなされ かわい主さんの水まわり

主さんのかわい かわい主さんの水まわり

〽歌いなされよお歌いなされ 話や口舌くぜつの種となる

口舌の話や 話や口舌の種となる

〽人の歌うに歌わぬ人は 歌のしよしりかご自慢か

しよしりか歌の 歌のしよしりかご自慢か

〽歌のしよしりでもご自慢でもないが

あなた立ち声わしゃ地声

立ち声あなた あなた立ち声わしゃ地声

〽声がよう出て節さえ回りや 歌の先生にはわしがなる

先生にや歌の 歌の先生にやわしがなる

〽お昼前やら背中が焦げる 笠の裏まで日が回る

裏まで笠の 笠の裏まで日が回る

六日市16

名 称 草取り歌  
 伝 承 地 六日市町抜月  
 伝 承 者 村上シズヨ M38年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

〱 鮎は瀬に住む鳥や木の枝に 人は情の下に住む

情の人は 人は情の下に住むヨ

〱 暑や苦しや手ぬぐいほしや 様の浴衣の切れほしや

様のヨ一様の 様の浴衣の切れほしや

六日市17

名 称 田の草取り歌  
 伝 承 地 六日市町幸地  
 伝 承 者 中村 友一 M39年生  
 調査員氏名 竹中 文雄

〱 暑や苦しや手ぬぐいほしや 様の 浴衣の切れほしや

〱 様の浴衣の切れならいらぬ 様の浴衣の袖ほしや

〱 思い出すよじゃほれよが浅い 思い 出さずに忘れずに

〱 思っちゃおれども言いかげにくい 心 やすいが玉に瑕きず

〱 青い松葉の心底見やれ 枯れて 落ちるも二人連れ

〱 お前百までわしや九十九まで ともに 白髪が生えるまで

〱 思い切れ切れ男が卑怯な 女 身でさえ思い切る

六日市18

名 称 田打ち歌  
 伝 承 地 六日市町田野原  
 伝 承 者 大庭徳次郎 M37年生  
 調査員氏名 竹中 文雄

〱 思て通えば千里が一里 会わずもどればまた千里

〱 思い切れ切れ男が卑怯な 女身でさえ思い切る

〱 思い切れとは死ねとのことよ 思い切りよか死なりやせぬ

〱 会うてうれしや別れのつらさ 会うて別れがなげにゃよい

六日市19

名 称 白挽き歌  
 伝 承 地 六日市町下高尻  
 伝 承 者 河野 政勝 T12年生  
 調査員氏名 坂田 浩明

〱 ヤーレ 子持ちゃよいものかこずけに

思いよらずの昼寝した

〱 主と別れてまる三年は 帯も解かずに丸寝した

〱 三十男も寝起きにゃ泣いた 様は泣くはず二十五六



六日市20

名称 山とおし  
伝承地 六日市町六日市  
伝承者 清水 タネ M37年生  
調査員氏名 坂田 浩明

山は焼けてもヨ 山鳥アヨ ヤレ山鳥アヨ立たぬ

かわいいなヨのものはないヨ

かわいいなヨ 子ほどかわいいなヨもの ものはないヨ

お前さんとならヨ わしやどこ ヤレわしやどこヨまでも

白髪ヨ生え 生えるまでヨ

白髪ヨ ともに白髪ヨ生え 生えるまでヨ

六日市21

名称 山とおし  
伝承地 六日市町朝倉  
伝承者 吉本 芳茂 T2年生  
調査員氏名 竹中 文雄

山で床とりヤヨ木の根が枕

落ちる木の葉がヨ 夜着 夜着となる

木の葉が落ちる 落ちる木の葉がヨ 夜着 夜着となる

暑や苦しヤヨ手ぬぐいほしヤ

さまの浴衣のヨ切れ 切れほしヤ

浴衣のさまの さまの浴衣のヨ切れ 切れ 切れほしヤ

六日市22

名称 木挽き歌  
伝承地 六日市町幸地  
伝承者 中村 友一 M39年生  
調査員氏名 竹中 文雄

ヤレ木挽きさんならヨお泊まりなされ

わしの主さと同じ職

ヤレ木挽き女房にヨなるなよ妹

木挽きヤ身をもむ早う死ぬる

ヤレあんだ思いにヤヨ三度の食が

胸につまりてヨ湯で落とす

ヤレ山は焼けても山鳥ア立たぬ

子ほどかわいいものはない

ヤレわしとあなたのこのよい仲に

だれが横矢を入れたやら

ヤレ山で床とりヤ木の根が枕

落ちる木の葉がヨ夜着となる

六日市23

名称 木挽き歌  
伝承地 六日市町下高尻  
伝承者 河野 政勝 T12年生  
調査員氏名 坂田 浩明

ヤレ 木挽きさんたちヤ米の飯くろうて

鋸の柄の様なふんたれる

〱ヤール 木挽きやいぬるちゆて丹波行李てねる

娘アおらも行くちゆて髪うてねる チートコパートコ

〱ヤール 木挽きや意地悪深山の奥で

仲のよい木を挽きわける

食うたら残らんきれいな商売 シャリンコバツサリ

六日市24

名 称 木挽き歌

伝 承 地 六日市町蓼野

伝 承 者 河野 薫 S4年生

査 調 員 氏 名 坂田 浩明

〱ヤール木挽きさんたちや一升飯くろうて

今日も毎日板を挽く チャリンコドツサリ (以下同し)

〱ヤールコラなんぼ新刃の齒細の鋸も

挽かになやさがらぬ柔木やおきでも

〱ヤール木挽きさんならお泊まりなされ わしの殿御と相の職

〱ヤールコラ鋸にかすがい番匠の金は

持ってお帰り木挽きさん

〱ヤール大工さんより木挽きが憎い 思う仲でも挽き分ける

〱ヤールコラ木挽きの女房にやなるなよ娘

木挽き身をめぐ早よ死ぬる

六日市25

名 称 地搗き歌

伝 承 地 六日市町幸地

伝 承 者 中村 友一 M39年生

査 調 員 氏 名 坂田 浩明

〱今日は日もよい ヨイヨイ 天気もよいで

コラコラヤートコセーノヨイヤナ

アレワイサツサコレワイサ ササナンデモセー

〱こちらさまなる ヨイヨイ めでたい地搗き

コラコラヤートコセーノヨイヤナ

アレワイサツサコレワイサ ササナンデモセー

〱音頭取りをば ヨイヨイ 頼まりました

コラコラヤートコセーノヨイヤナ

アレワイサツサコレワイサ ササナンデモセー

〱那須の与一の ヨイヨイ 扇的のを

コラコラヤートコセーノヨイヤナ

アレワイサツサコレワイサ ササナンデモセー

〱それじゃこれから ヨイヨイ 読みあげますで

コラコラヤートコセーノヨイヤナ

アレワイサツサコレワイサ ササナンデモセー

〱だれもどなたも ヨイヨイ おはやし頼む

コラコラヤートコセーノヨイヤナ

アレワイサツサコレワイサ ササナンデモセー

六日市26

名 称 地搗ぎ歌  
伝 承 地 六日市町下高尻  
伝 承 者 河野 政勝 T 12年生  
調査員氏名 坂田 浩明

ハハアエー地搗ぎが始まるサンヨーエー サンヨーエー  
ハアエーサンヨーつくにはサンヨーエー サンヨーエー  
ハアエー七五三なるサンヨーエー サンヨーエー  
ハアエー三つつくのはサンヨーエー サンヨーエー  
三宝荒神サンヨーエー サンヨーエー  
ハアエー五つつくのはサンヨーエー サンヨーエー  
五穀豊穰サンヨーエー サンヨーエー  
七つつくのはサンヨーエー サンヨーエー  
七福諸神はサンヨーエー サンヨーエー  
五穀豊穰サンヨーエー サンヨーエー  
ハアエーはらい清めてサンヨーエー サンヨーエー  
ハアエーサンヨーの神々サンヨーエー サンヨーエー  
くりやれてお疲れサンヨーエー サンヨーエー

六日市27

名 称 木遣り歌  
伝 承 地 六日市町幸地  
伝 承 者 中村 友一 M 39年生  
調査員氏名 坂田 浩明

ハハアヨイト始めた ヨイト来いやれ

ハアつるこいかぎこい ヨイト来いやれ  
ハアこいつ大物で<sup>だいまん</sup> ヨイト大物で  
ハア少々じゃ動かんど ヨイト動かんど  
ハア来い来い言うのは ヨイト言うのは  
ハア津和野じゃ今市 ヨイト今市  
ハア浜田じゃ外の浦 ヨイト外の浦  
ハア尾のない狐が ヨイト来いやれ  
ハア狐がおるといや ヨイト来いやれ  
ハア懐中じゃご用心ど ヨイト来いやれ

六日市28

名 称 吉賀音頭  
伝 承 地 六日市町立河内  
伝 承 者 宮本 幸 S 3年生  
調査員氏名 坂田 浩明

志賀段七

奥州仙台白石城の

アラヨイサー ヨイヤサー (以下囃子略)  
陸奥の守とは正宗公よ 家老片倉小十郎様は  
心貴敬な民哀れみの 人の鏡と世に聞こえたり  
ご領うちなる坂田が村の 小さい百姓与太郎こそは  
娘ばかりがおとどいござる 姉のおすぎに妹のこまん  
姉のおすぎが今年十四 妹こまんが今年十二

妻のお花が患いけるに ころは寛永三年の年の

寅の六月中旬のころよ 今日や明日かと病む母親を

おくもいなものおかねばならぬ 言うて姉妹父与太郎と

行くは川崎河原が島の 五十三次往来端で

親子三人田の草取るに 姉のおすぎの話の聞けば

いとどあわれな次第でござる わしら二人は貧苦の育ち

同じ世界に生まれてきても 衣服小袖に泣き暮らされて

あるが中にもまた恋風に 恋の心にそむむらさきは

いとどあわれな次第でござる やがて入会忙しけるに

心せかれて取る田の草を 土手に投げんとする折柄に

そのの縄手を志賀段七が 殿の御用で通るを知らず

ふこそ悪けれ彼の段七の 右の小脇の袴の裾に

少しばかりの泥散りかかり そこで段七立ちとどまりて

いとど短気ないたずら育ち 声も荒々目に角つけて

聞かぬ聞かぬと声すさまじく これを聞くなり父与太郎は

どうぞお旦那お慈悲をもつて 命ばかりはお助けあれと

申しあげたることをば聞かず すぐに引きぬく氷の刃

切っつかかれば彼の与太郎は

ここをはるかに逃げんとするに

老いの身なれば手足ももつれ

そうこうするうち切りつけられた そこで段七申されように

娘二人ものがしはせぬと 切っつかかれば二人の娘

命からがら立ちのきけるに 家に帰りて二人の娘

長の病で寝ている母の 枕元にとひそかによりて

かくと次第を細かに話しゃ 病つもりて彼の母親も

ついに母親相果てられた 母の枕に二人はすがり

嘆き悲しむその有様は いとど哀れな次第でござる

されば今宵の踊り子様よ までもこの先読みますなれば

長き文句に候いけるに わしの音声も限りがきたで

後の先生に声継ぎ願う またの機会にお願い申す

#### 六日市29

名 称 踊りくとき

伝 承 地 六日市町下高尻

伝 承 者 河野 政勝 T12年生

調査員氏名 坂田 浩明

#### 石童丸

アーアー月にむらくも花には嵐

アラヨイセイヨイヤサー(以下略)

散りてはかなき世のならい 山の桜も花盛りにて

眺め楽しむ桜の花が 散りてとび込む飲む杯に

加藤左衛門重氏殿は しゃばの無情を悟られまして

国に妻子をふり捨て置いて 諸国修行の旅にと出られ

時に御台の千里の姫は 身重なりしが程なく生まれ

玉の様なる息子が生まれ 石童丸と名をつけなざる

親はなくとも子は育つとか 後に残りし妻子の者は

思い待つことはや十四年 見たい会いたたい父上様に  
風の便りとうわさに聞けば 父は高野におわすと聞いて  
母ともろとも石童丸は 菅の小笠をかぶらねまして  
旅の疲れもおいといなくて 母の御台も手に手をとりに  
なれぬ旅路にお出かけなさる 紀伊の国をばお通られまして  
日々のつらさもお忘れなされ 日にち重ねる早や甲斐ありて  
遂に高野にお着きになりて 加室が宿にとお泊まりなさる  
明日はお山に登らんものと 旅の疲れもお忘れなされ  
母はわが子に打ち向かわれて 焦がれ慕いし父上様に  
今に会われる喜びなされ 必ず心を落とすじやないよ  
ここにふびんなまた物語り 宿の亭主が話を聞いて  
申し上げます御ふた方よ 申し上げるも気の毒ながら  
弘法大師の御いましめに 女人登るは禁じてござる  
聞いて御台は打ち驚かれ わが子の袖にとすがられまして  
情ないぞえ石童丸よ 母は高野に登られないと  
かわいそうなはこの子でござる  
そなた一人で尋ねてくりゃれ 父の人相教えてやるぞ  
父は人より背丈が高い 左まつげにはくろがござる  
それを頼りに尋ねて行きゃれ 涙ながらに石童丸は  
母にいとまを告げられまして 杖にすがりて不動が坂に  
登りつかれし石童丸は お日は西山暮れがた近く  
そこの不動に参られまして 南無や大悲のお不動様よ  
父の左衛門重氏殿に 会わせたまえと願かけなさる

いとも殊勝に伏し拜まれる 一夜御堂におこもりなさる  
脇を枕に笠をば屏風 泣く泣く眠れるあの哀れさよ  
三更四更と夜は更けわたる 五更の空もはや白みゆく  
鳴るは寺々ありや明けの鐘 そこで御堂を立ち出でなさる  
細い足にてお山に登る 峰の谷々そこかしこには  
九万九千の寺々ありて 七堂伽藍の隅々までも  
父のありかを尋ねて見れど 父上様なるお顔は見えず  
泣く泣く訪ねる奥の院さして 十八丁なるその間には  
右も左も五輪の仏 前も後も卒塔婆の波よ  
物のすごさはたとえがなないよ 音に名高き玉川ござる  
無明の橋にとさしかかれて はるか向こうを見渡すなれば  
苕萱道心重氏殿は 円空坊ぞと名も改めて  
左の御手に数珠をば持たれ 右の御手に花籠持たれ  
光明真言留まり経如来 唱えられてぞお帰りなさる  
ばったり会つたる目と目の会釈  
互いに親ともわが子と知らず 見上げ見下す親子のえにし  
袖と袖とが触れ合いまする 袖にすがれる石童丸は  
尋ねまするぞ御僧様よ これなるお山に今道心が  
おられますれば教えてくりゃれ いわれて苕萱不思議に思い  
見れば幼き一人の旅よ 腰に差したる脇差見れば  
それがし加藤を名乗りしときに 拝領いたせし脇差なれば  
煩惱わが身に起こされまして 声をかけんといや待てしばし  
これではならんと気を立て直し 石童丸にと向かわれまして

いかに若年なりとはいえど 物を尋ねに粗雑なことを

何千人の御僧がいるに 尋ね難しは必定なことよ

無理に会わんと欲するなれば 八方八口に貼り札なされ

聞いて石童涙にくれて 哀れお慈悲にその貼り札を

お書きなされて下さりませと 強いて頼めば苳萱殿は

われは途中で何れも持たぬ 筆も矢立も硯も墨も

われの屋形の尼堂にござれ 札をそろえて書いてぞあげよ

聞いて喜ぶ石童さんは お連れ下されお坊の屋形

苳萱道心手を取りあげて 草の庵に連れ行きなざる

草履ぬがして上にとあげて 硯ひきよせ墨すり流し

故郷は何処で名前は何か 筑前筑後肥後肥前

大隅薩摩のあの六カ国 加藤左衛門重氏殿と

治めたまいしわが父様は 聞いて驚く苳萱道心

持った筆をば取り落とされる しばし涙に袖をばぬらす

それを見るより石童丸は 左まひげの黒子が証拠

若しやわが父ととさまなれば 早く名乗りて下されませと

涙ながらに袖にとすがる 加藤左衛門重氏殿も

これがわが子か石童丸と 名乗り抱きたい親子の情も

深いえにしに邪魔されまして

抱くに抱けない名乗りもできず 旅の疲れで母上様は

呼んで帰らぬ冥路の旅へ 生ける父様名乗りもできず

哀れなるかな石童丸よ 読めばまだしくこの先長い  
声が出ませぬこのやつがれば しばし交代してこの先口説く

六日市 30

名 称 神楽歌

伝 承 地 六日市町抜月

伝 承 者 田中 勲 T 8年生

調査員氏名 坂田 浩明

(かけうた)

〱敷島の大和心を人問わば 朝日に匂う山桜花

〱この宮は八つに立てたる黄金柱に 垂木は椀もみの神のみすだれ

(悪鬼のかけうた)

〱七尾七溢八尾八谷 鬼の住家はあららぎの外

(舞うた)

〱梅は飛ぶ桜は枯るる世の中に 何とて松は常にやかるらん

〱東風吹けば匂いおこせよ梅の花 主なしとて春を忘るな

六日市 31

名 称 高い山から

伝 承 地 六日市町立河内

伝 承 者 尾崎ヤエ子 M 43年生

調査員氏名 坂田 浩明

〱高い山から谷底見ればノー 瓜や茄子の花盛りヨー

〱アレワヨイヨイヨイ も一つヨイヨイヨイ

〱高い山からむすびがこけるノー 鳥よるこぶ胸しわるノ

〱アレワヨイヨイヨイ も一つヨイヨイヨイ

へ高い山から低い山見ればヨー 高い山よりや低うござるノー

アレワヨイヨイヨイ も一つヨイヨイヨイ

へお前百までわしや九十九までノー ともに白髪が生えるまでノー

アレワヨイヨイヨイ も一つヨイヨイヨイ

六日市32

名 称 こちや節

伝 承 地 六日市町立河内

伝 承 者 尾崎ヤエ子 M43年生

調査員氏名 坂田 浩明

へあねさん抱いた子はだれの子じゃ

天竺の 七夕さまの申し子じゃ

コチャ七夕さまの申し子

へあねさん待ち待ち蚊帳の外

蚊に食われ 七つの鐘の鳴るまで

コチャ七つの鐘の鳴るまで

へあねさん抱いた子はいつ生れ

三月の 桜の花の咲くころ

コチャ桜の花の咲くころ

六日市33

名 称 子守り歌

伝 承 地 六日市町下高尻

伝 承 者 河野 政勝 T12年生

調査員氏名 坂田 浩明

へチーソーホンソー若旦那 こよいはとうからお寝ること  
みょうにち  
明日はとうからお目ざめで

にわとり蹴合けあいをお目にかきよ

ねんねん寝た子にやじょうにやろ

起きて泣く子にやそつとやろ ねんねんようおころりよ

ねんねん寝た子はどこの子か 起きて泣く子はどこの子か

ねんねんようおころりよ ねんねん寝た子の子守り歌

## (五) 隱岐地区

### 隱岐の民謡・概観

本土から最短距離にしても四〇キロメートル以上離れた隱岐である。日本海上に浮かぶこの島々は、二万人の住む島後（西郷町、布施村、五箇村、都万村）と一万人が三つの島に分かれて住む島前に大別される。そして、後者はそれぞれの島が一つずつの行政区画になっているのである。つまり、中ノ島（海士町）、西ノ島（西ノ島町）、知夫里島（知夫村）といったしだいで、この隱岐は無人の島を含めると約一八〇にもその数が及ぶ。

さて、周囲を海に囲まれた当地では、奈良朝の神亀元年（西暦七二五年）以降、遠流の地と定められ、後鳥羽上皇や御醍醐天皇をはじめ、多くの貴人が流されている。また、江戸期になって西回り航路が開かれ、さらに「沖乗り」と称する沖合航路が活発化すると、隱岐は風待ち港、避難港として大いに利用されることとなった。したがって、当地に残る民謡の多くは、これらの流人や船人の交流を通して定着して行ったものと推察してよいようである。

今日、代表的な隱岐民謡としてあげられる「どっさり」「しげさ」「キンニヤモニヤ」などの座敷歌にしても、祝い歌である「松前殿さん」や「高砂」などにしても、さきに述べた事情から、いずれもその源は他国に求められるようである。すなわち、「どっさり」は約二百年前、知夫里島のお松なる女が、北前船の船頭、大次から学んだのが元であるとか、新潟県「新保広大寺節」の流れであるとか言われ、「し



げさ」もまた、能登半島で歌われている「しゅげさ節」の系列に属するとする説が認められる。「キンニャモニャ」は九州、熊本県の「キンニョムニョ」。「松前殿さん」は三重県の「桑名の殿さん」。「高砂」は東北地方の「おいとこ節」などなど、その故郷はいずれも全国各地に比定されているのである。

右の源流問題を別にして、今回の調査の結果、隠岐の民謡の特色として考えられる点を列挙すれば、次の四点に集約できるようである。

一、「田植え歌」は当地の中でも島ごとにその詞型が異なり、しかも、本土の出雲、石見のものとも違った上、これらよりいっそう古風を示しているようである。

二、「盆踊り歌」では、西ノ島町に「坂田」「加茂」「イサノエ」「シヨイヤリ」「おしえばさ」「ヨーホイ」など多彩な種類のものが見られる。

三、漁業の盛んな当地ゆえ、漁業の守り神である恵比須さまにちなんだ正月十日の「十日恵比須」の歌、「お恵比須さん」はあるものの、島根半島に広く分布している大漁歌の類は、不思議と皆無のようである。

四、島と島との間には、共通する民謡ももちろん存在するものの、案外、孤立した形で伝えられているものが多いように思われる。

このことは島同士の間では、かえって関連が少ない場合もあるという島嶼の抱えている必然的な問題として、他の分野とも共通しているものではなからうか。

また、今回の調査では祭事歌としての「十方拝礼（シューハイラ）」（西ノ島町）、「庭の舞」（同）、「皆市踊り」（知夫村）などは、時間的な制約もあり、収録することができなかった。

なお、これらを含めて当地の民謡を詳しく知りたい方には、西郷町在任の近藤正氏によって昭和五九年に編まれた『隠岐の民謡』（A五判、四八六ページ、隠岐民謡協会刊）のあることを特に付言しておく。最後に今回収録した民謡の一覧表を分類にしたがって掲げておく。

計	知夫	西ノ島	海士	都万	五箇	布施	西郷	町村	
								A	B
13	1	1	3	2	3		3	a	A
7				1	1		5	b	
0								c	
2	1		1					d	
3			1	1			1	e	
5		1			1	2	1	a	B
21		1	9	2	2		7	b	
12	2	3	1	1	1		4	c	
27	4	9	2	1	1	2	8	a	C
24	4	2	4	5	3		6	a	D
0								a	E
1							1	b	
1			1					a	F
9		3	2	2		2		a	G
125	12	20	24	15	12	6	36		計

（酒井董美）

隱岐地区調査民謡

西郷1

名称 田植え歌  
 伝承地 西郷町釜  
 伝承者 木下 カネ M35年生  
 調査員氏名 酒井 董美

(午前の歌)

- ハハア 朝かね ねを入れ (音頭取りの早乙女が歌う) 以下同じ  
 ハア 鳶がねを入れて (他の早乙女が歌う) 以下同じ  
 ハハア とんとん とうぎりすは 何を持って来たよ  
 ハア 唐杵にとう添えて 俵持って来たよ  
 ハハア 苗をば何と取る 元へ手を入れて  
 ハア うらをばなぶかせて 元へ手を入れて  
 ハハア 昼飯ひるめしがござるやら 赤い帷子で  
 ハア びらりしやらりと 赤い帷子で  
 (午後の歌)  
 ハハア 編笠のちよつきりめが まらの音を聞けば  
 ハア 編笠のちよつきりめが まらの音を聞いたわ  
 ハハア ざんざん音がする 門もんの雨戸あまどが  
 ハア 夜這い人がどおござったらやら 門の雨戸が鳴る  
 ハハア 編笠のちよつきりめが まらの音を聞きに  
 ハア 抜きゃ ぼん 挿しゃ ぼん まらの音を聞きに  
 (夕方 田から上がるときの歌)

- ハハア 次郎も太郎も 中へお寄りそうろう  
 ハア おまえもわたしも 中へお寄りそうろう

西郷2

名称 木挽き歌  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 三浦 シゲ M27年生  
 調査員氏名 酒井 董美

ハエー ヤーレー 木挽き女房にやなるなよ妹

木挽きや身をめぐ はや死ぬる

ア 鋸のこの粉下ごがれ 挽みき賃上しがれ

西郷3

名称 べっちょべちよ (盆踊り歌)  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 三浦 シゲ M27年生  
 調査員氏名 酒井 董美

- ハ盆が来たらこそ アー 麦に米混ぜて  
 ささぎにしめて ハヤレー そえにしようや  
 ハ月は山越す アー 夜はほのぼのと  
 鳥もはらはら ハヤレー われも泣く

西郷4

名称 北方節(盆踊り歌)  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 三浦 シゲ M27年生  
 調査員氏名 酒井 董美

〽五箇の北方は 住みよいけれど 灘の風が顔にしむ  
 イヨー 顔にしむ 灘の風が顔にしむ

西郷5

名称 相撲取り節  
 伝承地 西郷町釜  
 伝承者 木下 カネ M35年生  
 調査員氏名 酒井 董美

〽ハーエー これの マタ お家は元から繁盛 ヨーハーハー  
 西の破風には鶴が住む 東の破風には亀が住む  
 鶴は千年生きるもの 亀は万年生きるもの  
 鶴と亀との盃に そこで小鳥が酌をして 金の銚子に銀の台  
 これほどめでたい ストトコドッコイ ことはない  
 ヨーハーハー

(注) この歌は臼挽きなどの労作歌としても歌われた。

西郷6

名称 相撲取り節  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 三浦 シゲ M27年生  
 調査員氏名 酒井 董美

〽ハーハー 明けて マタ めでたい元日の朝 ヨー

若水迎えに出たときに  
 橋の欄干に腰かけて はるか川上 眺むれば  
 白い小鳥が三つ連れで アー また三つ連れ 六つ連れで  
 羽がい帆にして身は船に 大判 小判をくわえ寄せ  
 これの館に舞いこんで 床の欄間に巢をかけて  
 十二の卵を生みそろえ それがいっしょに目を開けて  
 親と別れの盃で 羽がえをそろえて発つときは  
 この家ご繁昌と ノー 鳴いて発つ ヨー  
 (注) この歌は祝いの席だけでなく、杉の下刈り、山仕事、田の草取りなども歌った。

西郷7

名称 隠岐追い分け(労作歌)  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 三浦 シゲ M27年生  
 調査員氏名 酒井 董美

〽ア 沖は エー 寒かる エーエー  
 着て行きや エー しゃんせ エーヨー  
 アー わしの部屋着の エーエー この小袖  
 〽アー 月は エー 山越す エーエー  
 夜はほのほのと エーエーヨー  
 ア 鳥もはらはら エーエー われも エー 鳴く

へ元寇の エー 昔しのべば 黒木の エー 御所にヨ  
アー 波が エー 寄せます エーエー ざわざわと

西郷8

名 称 盆歌(盆踊り歌)  
伝 承 地 西郷町釜  
伝 承 者 木下 カネ M 35年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ踊りやれ 踊りやれ 跳はにやれ

年に二度ない ヤレノー 盆じゃもの

ドッコイ ドッコイ ドッコイナ

へことしや ナーサー 豊年だ 穂に穂が咲いて ナー

道の小草も ヤレノー 米がなる

ドッコイ ドッコイ ドッコイナ

へ竹に ナーサー 雀は品しなよに止まる

踊り上手は ヤレノー 目に留まる

ドッコイ ドッコイ ドッコイナ

西郷9

名 称 正月の歌  
伝 承 地 西郷町釜  
伝 承 者 木下 カネ M 35年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ正月つあん 正月つあん どこまでござった

大満寺の腰まで

土産なんは何かね 椎 茅 勝栗 蜜柑食って酔いかった

(注) 大満寺―隠岐での最高峰、大満寺山のこと。六〇七メートルある。

西郷10

名 称 春駒の歌(祝福芸の歌)  
伝 承 地 西郷町中村  
伝 承 者 三浦 シゲ M 27年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ春の初めの春駒なんぞを 夢に見たさえ よいとや申す

アー 白馬 千匹 赤馬 千匹 乗りこんだ 乗りこんだ

(注) 正月になると、貧しい家の男の子が二人連れで、薬馬をこしらえて、それを持って家々を回って来た。訪問を受けた家では「縁起が良い」と喜んで、かれらに餅を与えていた。

西郷11

名 称 亥の子歌  
伝 承 地 西郷町釜  
伝 承 者 木下 カネ M 35年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ今夜は亥の子 亥の子餅 ついて 祝わぬ者は

お蛇生じゅんべ 子生んべ 角つのの生はえた子生べ

(注) 男の子たちが、旧暦十月の亥の日に、家々の軒下をワラでたたきつつ回

った。

西郷12

名	稱	磯節
伝承地	西郷町釜	
伝承者	木下カネ	M35年生
調査員氏名	酒井 董美	

へ梅に鶯 竹には虎 牡丹に唐獅子 青菜に蝶々  
 わたしやあなたを 毎夜毎晩 松に鶴 (待つにつる)

へ間重治郎は妻子の別れ 赤垣源蔵は徳利の別れ  
 武男と浪子は上り下りの列車の別れ

へ雉子も鳴かねば撃たれはすまい  
 あのととき あなたに会いさえせねば  
 こんな苦勞をしもせにや あなたに アラ させもせぬ

西郷13

名	稱	しげさ
伝承地	西郷町中村	
伝承者	三浦 シゲ	M27年生
調査員氏名	酒井 董美	

へ桶屋さんの女房に もうならぬ

けさも肥たがの輪をかけて ア

その手をゆすがずと飯食べた

へ蝶やとんぼやきりぎりす お山 お山さんで鳴くのは ア  
 鈴虫 松虫 くつわ虫

へようよう求めたかんざしを 殿御 殿御さんに取られて  
 あすから おかさんに叱られる

西郷14

名	稱	どっさり
伝承地	西郷町中村	
伝承者	三浦 シゲ	M27年生
調査員氏名	酒井 董美	

へ忍び出よとすりや エー からすめがつける

アー まだ夜も アー 明けぬに

がお エ がおと エー サーノーエー

憎や コレワイ ドウジャナー 八幡の ナーエー

チョイト 森がらす サーノーエー

西郷15

名	稱	相撲取り節
伝承地	西郷町中村	
伝承者	三浦 シゲ	M27年生
調査員氏名	酒井 董美	

へいざり勝五郎 ヤーエー 車に乗せて

吹けよ初花 箱根山 箱根の山まで吹きあげて

もうし 勝つあん 勝五郎さん

あなた いざりの身の上で わたしや 女の身の上で

もしも敵と出会うたなら どうして敵を討たしやんす

そこで勝つあん 腰の矢立てを取り出して

矢立てで敵が討てますか 矢立てで敵は討てねども

中から筆助が コレワイ ドウジャナーとんで出てヨ

ちよいと敵を討つ サノエ

(注) この歌は「相撲取り節」と「どっさり」を合わせた感じである。

西郷16

名 称 木やり(労作歌)

伝 承 地 西郷町釜

伝 承 者 木下 カネ M35年生

調査員氏名 酒井 董美

ハハハ この木が浜へ出りや ヤーエ

ハハハ アー ヨーイヤナー

ア ヤットコナー ヨーイヤナー

お神酒に肴で ヨーイヤナー この木が浜へ出ら ヤーエ

アー ヨイサ ヨイサ ヨイサ ヨイサ ヨー

(注) 木や岩などを引いて運ぶおりに歌う。

西郷17

名 称 松前殿さん

伝 承 地 西郷町釜

伝 承 者 木下 カネ M35年生

調査員氏名 酒井 董美

ハ松前殿さん ヤーエー ヤットコナー ヨーイヤナー

松前殿さん 鯨のお茶漬け ヨーイートナー

ハハハハハ ハララノラー

ヨイイトーコ ヨーイートーコーセー

ハハハ 笑い笑い入れるは ヤーエ

ヤットコナー ヨーイヤナー

ハハ 笑い笑い入れるは 大黒さんの賽銭箱 ヨーイトナー

ハハハハハ ハララノラー

ヨイイトーコ ヨーイートーコーセー

(注) 祝言の席の余興に「セコの飯」が出たが、そのハンボを引っぱるおりに歌った。

西郷18

名 称 神楽しえぎ歌

伝 承 地 西郷町東郷

伝 承 者 田中 安宣 M34年生 他

調査員氏名 酒井 董美

ハハハハ さまざま さまざま ヨー ならぬ

エー ままになる身が持た ヤレシ ヨーオー せたや

へ届け届けと 末まで ヨー 届け

ハ一 末は鶴亀 五葉 ヤレシ ヨーオー の松

へうれしめでたの 若松 ヨー さま

エー 枝も栄えて 葉も ヤレシ ヨーオー 繁る

(詞章のみ伺ったもの)

へ加茂の太夫さん 神楽してみやれ

わたしや神楽見にこそ来たれ

へことしや豊年 穂に穂が咲いて 道の小草も米がなる

へいやじゃ いやじゃと畑の芋は 頭あたまふりふり 子ができる

へ姉が傘さしや妹も傘を 同じ蛇の目の唐傘からを

へ娘十六 蝶々がとまる とまるはずだよ 花じゃもの

へ思いかけられ かけてもみたが 滝のいちごで手がとわぬ

へ滝のいちごも つる引きやくるが わたしや縁ない つるもない

へ寺の御門に蜂が巣をかけた 和尚出りや刺す もどりや刺す

(注) これらは病氣平癒、豊作、雨乞の祈願、玉若酢神社の祭礼などに歌った。

西郷19

名 称 かか(座興歌)

伝 承 地 西郷町東郷

伝 承 者 田中 安宣 M34年生

調査員氏名 酒井 董美

へ原田初造は ノーエー カカ 宇屋うやの氏神さんの榎えのきから

上がりし大の字 そのままに

関屋の背戸へと ドント カカ 頭杖について逆落とし

(注) 宇屋は西郷町東郷にある地名。

西郷20

名 称 隠岐船方節

伝 承 地 西郷町東郷

伝 承 者 月坂 登 T13年生

調査員氏名 酒井 董美

へ海を ナーアー ゆさぶる 無情の風に ヨー

沖の鷗が なお辛い

へ鳴いて ナーアー くれるな 磯浜千鳥 ヨー

鳴けば鷗が なお辛いヨ一

西郷21

名 称 田の草取り歌

伝 承 地 西郷町東郷

伝 承 者 大橋 房男 T1年生 他

調査員氏名 酒井 董美

へ道のはたのたけのこと人の小娘

憎んでも憎まれぬ 人の小娘

へ夜よ這どい殿とがござるやら 背戸しえどの車戸が

ギーン ギーンと鳴る 背戸の車戸が

西郷22

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 西郷町上元屋  
 伝 承 者 茶山 儀一 M30年生  
 調査員氏名 酒井 董美

ハヤール 何の因果で木挽きさんを習うた

花の盛りを山小屋で

ハー 鋸<sup>のこ</sup>ノ粉下ガレー 挽<sup>ふ</sup>キ賃上ガレ

ハヤール 姉が十九で妹が二十<sup>はたち</sup> どこで算用<sup>ちひ</sup>が違<sup>ちが</sup>たやら

ハー ドッコイ ドッコイ

ハヤール 木挽きさん言うて 一升<sup>ますま</sup>の飯食<sup>く</sup>べて

鋸<sup>のこ</sup>の柄<sup>のこ</sup>のよな 糞<sup>のこ</sup>たれた

ハー ドッコイ ドッコイ ドッコイ ドッコイ

西郷23

名 称 相撲取り節  
 伝 承 地 西郷町上元屋  
 伝 承 者 茶山 儀一 M30年生  
 調査員氏名 酒井 董美

ハア 今度また元屋村が 葺<sup>き</sup>ぎについてよ

金<sup>かね</sup>もたくさんできま<sup>お</sup>した 大杖<sup>おおすえ</sup>さんの葺<sup>き</sup>ぎ替<sup>か</sup>えと

金毘羅<sup>こんぴら</sup>さんの新<sup>あらた</sup>建立<sup>たて</sup> ともに一度の御遷宮<sup>みつみやう</sup>で

大工手柄<sup>おおい</sup>か 金<sup>かね</sup>せぎか

他村の人々まで ノーササイ 大評判<sup>おほ</sup>だよ

(注) 金せぎ金<sup>かね</sup>がたくさんあること。

この歌は、現在の上元屋神社が、大杖神社と称していたころ、屋根の葺<sup>き</sup>ぎ替<sup>か</sup>えに歌った。

西郷24

名 称 正月さん  
 伝 承 地 西郷町上元屋  
 伝 承 者 茶山 儀一 M30年生  
 調査員氏名 酒井 董美

ハ 正月さん 正月さん どこまでござった

ジャアのそらまでござった 土産は何だ

椎 茅 勝栗 蜜柑<sup>せ</sup> こうじ 橘

(注) こうじは蜜柑のこと。

西郷25

名 称 からすの歌(祝い歌)  
 伝 承 地 西郷町上元屋  
 伝 承 者 茶山 清 S3年生  
 調査員氏名 酒井 董美

ハ からす からす 勘三郎 親の恩を忘れんなよ

茶山清氏の父、儀一氏(明治30年生)は次のように歌われた。

ハ からす からす 勘三郎 親の恩を忘れたか

この歌は、正月七日のトンド焼きのおり、小豆粥を川のはとりまで持って行き、からすを呼ぶときに歌う。



西郷26

名称 お染(盆踊り歌)  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 千葉ヨシノ M35年生 他  
 調査員氏名 酒井 董美

へお染こそよけれ コレワイシヨ

京や大坂のお染こそ (以上・歌・千葉ヨシノ)

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー(歌・他の人々)

へことしや豊年どし

穂に穂が咲いて コレワイシヨ(以上・歌・千葉ヨシノ)

藁が五尺に穂が二尺(歌・石井光伸・S6年生)

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー(歌・他の人々)

ヨ一 穂が二尺 穂が二尺 コレワイシヨ(歌・千葉)

藁が五尺に穂が二尺(歌・石井)

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー(歌・他の人々)

へ以下同じだが、記名を省略する

へ親と兄弟 鏡と妻は コレワイシヨ

見ても見飽かぬ 末飽きぬ

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

ヨ一 末飽かぬ 末飽かぬ 見ても見飽かぬ 末飽かぬ

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

へ月の丸さと恋路の道は コレワイシヨ

江戸も田舎も変わりやせぬ

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

ヨ一 変わらせの 変わらせの コレワイシヨ  
 江戸も田舎も変わりやせぬ

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

へ前の石橋のしわるほど待ちた コレワイシヨ

家をもめるやら 出てごさぬ

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

ヨ一 出てごさの 出てごさの コレワイシヨ

家をもめるやら 出てごさぬ

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

へ遠く離れて逢いたいときは コレワイシヨ

月が鏡になればよい

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

ヨ一 なればよい なればよい コレワイシヨ

月が鏡になればよい

ヤーレ ヤーハートナー ヤーハートナー

(注) 平井末広氏(S4年生)の太鼓の伴奏による。

西郷27

名称 ベッチヨベチヨ(盆踊り歌)  
 伝承地 西郷町中村  
 伝承者 千葉ヨシノ M35年生 他  
 調査員氏名 酒井 董美

へベツチヨベチヨーや アラ 三郎のかかは (歌・千葉)

肩にうちかけ ヤレノーオ うちかけて (歌・石井光伸)

サアー よーい そうだよ アラ 三郎のかかは

肩に手拭<sup>てのこい</sup> ヤレナ うちかけて (以上・歌・千葉)

へ親と兄弟 アラ 鏡と妻は (歌・千葉)

見ても見飽かぬ アレノーオ 末飽かぬ (歌・石井)

サアー よーい そうだよ アラ 鏡と妻は (歌・千葉)

見ても見飽かぬ アレノーオ 末飽かぬ (歌・石井)

へ以下同じ、歌い手略

へ心交わすな アラ よで妻持つな

わしがよそから アレノーオ もどるまで

サアー よーい そうだよ アラ よで妻持つな

わしがよそから アレノーオ もどるまで

へ親の意見と アラ なすびの花は

千に一つの アレノーオ 仇はない

サアー よーい そうだよ アラ なすびの花は

千に一つの アレノーオ 仇はない

(注) 平井末広氏 (S4年生) の太鼓の伴奏による。

歌い手の石井光伸氏は、S6年生。

西郷28

名 称 北方節 (盆踊り歌)

伝 承 地 西郷町中村

伝 承 者 千葉ヨシノ M35年生

五箇<sup>(注1)</sup>の北方は住みよい (歌・千葉)

ヤレ けれど 灘の (歌・石井)

嵐が顔にしょむ 灘 (歌・千葉)

顔にしょむ 灘 (歌・石井)

の嵐が顔にしょむ (歌・千葉)

へ以下・歌い手名略す。このように二人が交互に歌う

へコレ わしのたまだれかますに アラ 入れて怒る親衆<sup>おと</sup>に負わせたい

ヨー 負わせたい 怒る親衆に負わせたい

へ盆が来たらこそ 麦に米 ヤレ 混ぜて 中に小豆<sup>あずま</sup>がちらばらと

ヤレ ちらばらと 中に小豆が ちらばらと

へヤレ 殿の寝姿を窓から ヤレ 見れば

五月野に咲く 百合の花

ヨー 百合の花 五月野に咲く 百合の花

へ空の星さよ 夜遊び アリヤ するに

わしの夜遊び 無理がない

ヤレ 無理はない わしの夜遊び 無理がない

(注1) 五箇<sup>||</sup>五箇村のこと。

(注2) 北方<sup>||</sup>五箇村大字北方のこと。

(注3) たまだれ<sup>||</sup>放蕩すること。また、その人。

○太鼓伴奏は平井末広氏 (S4年生)

○詞章にも出ている五箇村大字北方には、この歌は伝えられていないという。

西郷29

名	高砂(祝い歌)
伝承地	西郷町中村
伝承者	千葉ヨシノ M35年生
	石井 光伸 S6年生
調査員氏名	酒井 董美

へ高砂の爺さんと婆さんと

小松の木蔭で掃除すること始まるそうな(以上一人で歌う)

ア オチャヤレ オチャヤレ(他の人々で囃す・以下同)

へ千両箱 やっこらざと抱えて行かねばなるまい

よういようにに そこらが大事

ア オチャヤレ オチャヤレ

へ正月や 爺さんと婆さんが こたつで酒汲む

裏のお蔵には俵の山だよ

ア オチャヤレ オチャヤレ

へ東雲しのめのつぼめときわの松の木 小枝に

雀百まで 踊られしやんしやん

ア オチャヤレ オチャヤレ

婚礼のおり、花嫁、花婿が座つてるところへ、嫁の両親が人形を抱いて踊りながら出てきて、それを花嫁に渡す。花嫁はさらにその人形を花婿に渡す。それから今度は、花嫁側の分家の夫婦が踊りながら、その人形を連れに行き、受け取って、踊りながら自分の席に帰る。

西郷30

名	与作(山仕事歌)
伝承地	西郷町中村
伝承者	石井 光伸 S6年生 他
調査員氏名	酒井 董美

へ橋の欄干に腰うちかけて 月星眺めて殿御を待ちる

あれに見えるは与作さん お駒じゃないかよ

まあよしよし

へお駒 わが家を発つときにや

二人のわが子をふとさしあげて これがこの世のいとま乞い

お駒じゃないかよ まあよしよし

へ与作、わが家を発つときは 二人の子供を両手にさえて

これがこの世のいとま乞い 成人せよと まあよしよし

西郷31

名	ここのかかさん(盆踊り歌)
伝承地	西郷町中村
伝承者	千葉ヨシノ M35年生
調査員氏名	酒井 董美

へここのかかさん いつ来てみても アー ヤットセー

朝は朝起き 朝髪あげて

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー

紺の前だれに茜あかねのたすき アー ヤットセー

それで港へ汐汲みなさる

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー  
 船の船頭さんがちゃらほらと招く アー ヤットセー  
 招く船頭さんに さらし三尺もろた

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー  
 帯にゃ短い たすきにゃ長い アー ヤットセー  
 何にしようかと紺屋へ問えば

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー  
 一に橘 二に杜若<sup>かきつばた</sup> アー ヤットセー

三に下がり藤 四に獅子牡丹

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー

五つ 井山の千本桜 アー ヤットセー

六つ 紫 色よに染めた

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー

七つ 南天 八つ 山桜 アー ヤットセー

九つ 小梅にちらりと染めた

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー

十で殿御さんの好いたよに染めた アー ヤットセー  
 ここらあたりで段切りまする

アラ ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー

(注) 囃子は他の人々でつける。

西郷32

名 称 しげさ(座興歌)  
 伝 承 地 西郷町中村  
 伝 承 者 石井 光伸 S6年生  
 調査員氏名 酒井 董美

しげさ しげさと声がする

しげさ しげさの御開帳 山里越えても参りとや<sup>まゑ</sup>

橋の向こうで ちよいと出逢うた

話せ 話せよ話せよ心にあること みな話せ

隠岐は絵の島 花の島

磯にゃ 浪の花咲く 里にゃ 人情の花が咲く

(注) 「隠岐は絵の島」の詞章は、安部勝氏の作詞になるのだが、あまりにも広く歌われているので、民謡化したものとみなし、入れておいた。

西郷33

名 称 相撲取り節  
 伝 承 地 西郷町中村  
 伝 承 者 千葉ヨシノ M35年生  
 調査員氏名 酒井 董美

ハハイー ハー 待つ待つづくしをちよいと申しますヨ

一本目には池の松 二本目には庭の松

三本目には下がり松 四本目には志賀の松

五本目には五葉の松 六本目には尾の上の松やらそねの松

七本目には姫小松 八本目には浜の松

九つ小松を植え並べ 十で尊い伊勢神宮の森き松

わたしとおまえさんは ノウ ササエー

逢お節を待つヨ

アア ドッスコイ ドッスコイ(他の人々で囃す)

ハイー イー 花々づくしをちよいと申しますヨ

アア ドッスコイ ドッスコイ(他の人々で囃す)

一月咲くのが梅の花 二月咲くのは桜花

チョイト(他の人々で囃す)

三月咲くのが桃の花 四月咲くのは梨の花

アア チョイト(他の人々で囃す)

五月咲くのが百合の花 六月咲くのは茄子 胡瓜

ハイト(他の人々で囃す)

七月咲くのが盆のはし 八月咲くのは稲の花

チョイト(他の人々で囃す)

九月咲くのが菊の花 十月咲くのは枇杷の花

ハイト(他の人々が囃す)

霜月 師走わす咲くのが ノウ ササエー 雪の花ヨ

ハア ドスコイ ドスコイ(他の人々で囃す)

西郷34

名	称	しげさ
伝承地		西郷町中村
伝承者		島崎健二郎
調査員氏名		酒井 董美
		M41年生

ハようよう求めた筈を ア ドッコイ

殿御さんに取りられて あすから おかかさんに叱られる

アラ ヤッシャーホ アラ イーヤーホ

ハ橋のたもつで ちよいと出会うて

話せ 話せや話せ 心にあること みな話せ

アラ イーヤーホ アラ イーヤーホ

ハ精進じゃ 精進じゃと 言わんすけれど

今朝も アア ドッコイ 托鉢帰りに

あわびの酔貝を食べても これでも精進か

アラ イーヤーホー アラ イーヤーホー

(注) 囃しことばは、他の人々がつける。

西郷35

名	称	木挽き歌
伝承地		西郷町中村
伝承者		亀山 タル
調査員氏名		酒井 董美
		M28年生

ハヤーレ 木挽き女房にや なるなよ妹

木挽きや身を挽く はや死ぬる

ア 挽キ質上ガレヤ 鋸ミチ下ガル 挽キ質上ガレバ

女房ト子供ニヤ 冷飯ひやめしや食ワセヌ ドッコイ ドッコイ

西郷36

名 称 おそめ(盆踊り歌)  
 伝 承 地 西郷町中村  
 伝 承 者 亀山 タル M28年生  
 調査員氏名 酒井 董美

へ京や大坂のお染こそ アー ヤーアトナー ヤーアトナー  
 へ踊り踊らば 二十四、五までも ドッコイシヨ  
 三十過ぎれば 子が踊る ア ヤーアトナー ヤーアトナー

布施1

名 称 石の地藏さん(盆踊り歌)  
 伝 承 地 布施村布施  
 伝 承 者 益崎 勝吉 S7年生  
 調査員氏名 酒井 董美

(前口上)

へさあさあ みなさま

ア ドッコイ ドッコイ(灘部修作・S23年生・囃し、以下①と略記)

踊るじゃないか

ア ヨイシエ(灘部・以下②と略記)

こげなことでは夜も明けられぬ

サー ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤシエー(灘部・以下③と略記)

老いも若きも ① みな出て踊れ ②

ちよいと若い衆や頼みのござる ③

わしの頼みは ① ほかではないが ②  
 はりやさ こりやさで 囃しはしゃんと ③  
 声の悪いは ④ ハ わしや生まれつき ⑤  
 ほどの悪いは師匠ないがため ⑥  
 お手がそろたら ⑦ ア 文句のまねを ⑧  
 お手がそろたら文句にかかる ⑨

(本口上)

へ石の地藏さんに エ からすが止まる ①  
 からす止まるから からすこそ仏 ②  
 からす仏なら ③ なぜ弓矢におそる ④  
 弓矢におそるから 弓矢こそ仏 ⑤  
 弓矢が仏なら ⑥ なぜに岩に立たぬ ⑦  
 岩に立たぬから 岩こそ仏 ⑧  
 岩が仏なら ⑨ なぜつたに巻かる ⑩  
 つたに巻かるから つたこそ仏 ⑪  
 つたが仏なら ⑫ なぜ刃物に切らる ⑬  
 刃物に切らるから 刃物こそ仏 ⑭  
 刃物が仏なら ⑮ なぜ水を切らぬ ⑯  
 水を切らぬから 水こそ仏 ⑰  
 水が仏なら ⑱ なぜ人に飲まる ⑲  
 人に飲まるから 人こそ仏 ⑳  
 人が仏なら ㉑ なぜ仏拝む ㉒  
 仏拝むから 仏こそ仏 ㉓

(後口上)

- へここらあたりで ① 交替頼む ②
- あとの先生は ほどよいお方 ③
- ここらあたりで ④ 声継ぎ頼む ⑤
- ここらあたりで交替頼む ⑥

布施2

名	このかかさん(盆踊り口説)
伝承地	布施村布施
伝承者	灘部 修作 S23年生
調査員氏名	酒井 董美

(前口上)

- へ今のハ先生の
- ア ドッコイ ドッコイ(囃し、益崎勝吉・S7年生・以下①と略記)
- 声継ぎましょや
- ハー ヨーイトシエー(益崎・以下②と略記)
- 今の先生は いずこのどなた
- サー ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤンエー(益崎・以下③と略記)
- ほどのよい方 ④ あの声のよさ ⑤
- わしが声とて些少ななものよ ⑥
- 声の悪いのは ⑦ わしや生まれつき ⑧
- ほどの悪いのは師匠ないためよ ⑨

- ありやさ こりやさの ① 囃しはしゃんと ②
- 囃しそろうたら
- アイ(益崎・以下の片仮名も同人の囃しである)
- 文句にかかる ③

(本口上)

- へこのかかさま オッ いつ来てみても ①
- 朝は早起き オッ 朝髪あげて ②
- 紺の前掛け ③ 茜あかねのたすき ④
- 掛けて浜へと オッ 汐汲み 行きやる ⑤
- 沖の船頭さんが ハイ はらこら招く ⑥
- 招く船頭さんに さらし三尺もろた ⑦
- 帯に短し オイ ア たすきにゃ長し ⑧
- 何にしようかと紺屋に問えば ⑨
- そこで紺屋の オイ 申すのには ⑩
- 一で橘 オイ 二で杜若 ⑪
- 三で下がり藤 オイ 四で獅子牡丹 ⑫
- 五つ井山の オイ 千本桜 ⑬
- 六つ紫 オイ 色よに染めて ⑭
- 七つ南天 オイ 八つ山桜 ⑮
- 九つ小梅こんめを オイ ちらりと染めて ⑯
- 十で殿御さんの好いたように染める ⑰
- (後口上)
- へなんとみなの衆よ オイ 夜もふけました ⑱

ここらあたりで打ちきりましょや ㉔  
 どれもどなたも オイ どの人さまも ㉕  
 ここらあたりで打ちきりました ㉖

布施3

名 称	神楽歌(祭り歌)
伝 承 地	布施村布施
伝 承 者	灘部 修作 S23年生
	益崎 勝吉 S7年生
調査員氏名	酒井 董美

(一) 内の詞章は益崎氏の歌ったところ。

へめでためでたの若(松さまは)

ハ一 枝も栄える葉も(ヤ一レ ショ一オー 繁る)

へ布施の姉らと春(日)の ヨ一 森は)

ハ一 ほかに木「気」はない 松「待つ」

(ヤ一レ ショ一オー ばかり)

へ届け 届けや す(えまで ヨ一 届け)

ハ一 末は鶴亀 五葉 (ヤ一レ ショ一オー の松)

へ布施はよいとこ 三(いつの ヨ一 谷に)

ハ一 千歳変わらぬ杉 (ヤ一レ ショ一オー の色)

(注1) 春日は布施村大字布施の大山神社のある地名。

(注2) 三つの谷川村にある北谷、中谷、南谷をいう。

布施村の大山神社の御神体として杉があり、それにマサキのつるを蛇の意で七巻半巻くため、山へ登るおりに道行きとして歌われる。この神は、山行きの

おり、よく暴れるが、それを鎮めるのにこの神楽歌は歌われるという。  
 なお、つるを木に巻くときには、次の「木遣り」を歌うことになっている。

布施4

名 称	木遣り(祭り歌)
伝 承 地	布施村布施
伝 承 者	益崎 勝吉 S7年生
	灘部 修作 S23年生
調査員氏名	酒井 董美

(一) 内は灘部氏の歌ったところ。

《》 益崎・灘部両氏の合唱部分。

へドードコー ドーットコセ (ア一エ一イヤア一)

ハ一ア一エ一イヤ一 (ア一エ一イヤア一)

エ一ヤ一ラ一 アア一ア一エ一イ一

(ヤ一ラ一エ一イ一ヤ一ラ一)

今は吉日 大吉日じや エ一イ一ヤ一ラ一

アア一エ一イ(ヤ一ラ エ一イヤ一ラ一)

今こそ大山神社の帯結めの祝いの糸のそろいじや

エ一エ一ヤ一ラ一 アア一エ一イ一

(ヤ一ラ一エ一イ一ヤ一ラ一)

ヨ一イ一サ一 (ホ一イ一) ヨ一イトナ一

(ホ一ラ一エ一イ一デモ アリヤ一リヤノリヤ)

アア ドッコイ (ヨ一イ一 ト一コ ヨ一イ ト一コ一ナ一)

ホ一ラ一ン一エ一 糸のそろいは ヤ一エ一



- (アーヤース トコシエー ヨーイヤナー)
- ハア 糸のそろいは琴三味線で ヨーイートナー
- (ハアーホランエーデモ アリヤリヤノリヤ)
- ハア ドッコイ (ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー)
- ホーランエー 重たいはずだよ ヤーンエー
- (アーヤストコシエー ヨーイヤナー)
- アー 重たいはずだよ 千両万両の金蔵じやもの  
しえん
- ヨーイートナー
- (アー ホーランエーデモ アリヤリヤノリヤ)
- アア ドッコイ (ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー)
- ホーランエー 山の奥に ヤーエー
- (アー ヤストコシエー ヨーイヤナー)
- ハアー 御山の奥に 鶴さん舞えは ヨーイートナー
- (ハアー ホーランエーデモ アリヤリヤノリヤ)
- ハアー ドッコイ (ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー)
- ホーランエー 春日の浜に ヤーエー  
注がすが
- (ハアー ヤース トコシエー ヨーイヤナー)
- ハアー 春日の浜に 亀さん遊ぶ ヨーイートナー
- (ハアー ホーランエーデモ アリヤリヤノリヤ)
- ハア ドッコイ (ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー)
- ドドコー ドーッ トコシエー (アーエーイー)

(注) 春日の浜に大山神社の近くにある浜の名。

布施5

名 称 石臼ごろごろ (わらべ歌)

伝 承 地 布施村布施

伝 承 者 米田 リン T7年生

調査員氏名 酒井 董美

石臼 ごろごろ 石臼 ごろごろ 石臼 ごろごろ

布施6

名 称 鬼決め歌 (わらべ歌)

伝 承 地 布施村布施

伝 承 者 大田 一徳 T9年生

調査員氏名 酒井 董美

テポ カポ よろずに おもさずよ

なかけて べんちゃん やつとん このつ とお

〔遊び方〕 仲間て輪になつて、一人一人が両手それぞれをつぎ出し、こぶしを作る。歌に合わせて、一人が「テポ」「カポ」「よろずに」……と、にぎりこぶしを手で当てる行き、……「とお」の部分の当たった者が輪から抜け、歌は、また初めから続けられる。そして、いよいよ最後まで残った者が、鬼に決定するのである。

五箇1

名 称 相撲取り節

伝 承 地 五箇村山田

伝 承 者 勝部 タケ M31年生

調査員氏名 酒井 董美

ハアア 明けてめでたい 元日の朝はヨ

若水迎えに出たときに 橋の欄干に腰をかけ  
はるか川上眺むれば 白い鷗が三つ連れで

また三つ連れで 六つ連れで

翼を帆にして身を船に 大判小判をくわえ寄しえ

これの館へ舞いこんで これのお家の御床の

床の欄間に巢をかける 十二の卵を生みそろえ

それが一度に目を開ける 親ともろとも発つときに

この家は御繁昌と コラヤノヤイ 歌で発つヨ

(注) 節をつけずに詞章だけをうかがったら、この部分は次のように変えて話された。「この家は御繁昌と末繁昌」

五箇 2

名 称 草取り歌

伝 承 地 五箇村山田

伝 承 者 勝部 タケ M31年生

調査員氏名 酒井 董美

ハことしや よい年 穂に穂が咲いてヨ  
丈が六尺 穂が二尺

五箇 3

名 称 田植え歌

伝 承 地 五箇村山田

伝 承 者 勝部 タケ M31年生

調査員氏名 酒井 董美

ハアア 道端のたけのこと 人の小娘はヨ

惜しんでも 惜しまれぬ 人の小娘はヨ

ハアア 山田のそらのかか ものが太鼓だと

ハアア 抜きヤポーン 挿しヤポーン ものが太鼓だと

五箇 4

名 称 七夕の歌(行事の歌)

伝 承 地 五箇村山田

伝 承 者 勝部 タケ M31年生

調査員氏名 酒井 董美

ハ今夜は七夕 星祭り 裏の畑になっている

なすびやきゅうりや供えもの

互いににぎやかいたしましよ

通れ 通れ 稲のむしや(虫は) 通れ

大人に浅敷を作ってもらった後、子供たちが飾りものを持って、そこへ集まり、供えものをしてこの歌を歌った。このとき、一方では鉦やドウをたたいた。

五箇 5

名 称 盆歌(盆踊り歌)

伝 承 地 五箇村山田

伝 承 者 勝部 タケ M31年生

調査員氏名 酒井 董美

ハ踊り踊らば 品よく踊れ 品のよい子は こちの嫁

こちの嫁 品のよい子は こちの嫁  
ア ドッコイ ドッコイ ドッコイサ

五箇6

名 称 どっさり  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 八幡スズミ M36年生  
調査員氏名 酒井 董美

へお客ナー 望みなら やり出してみましよう

ハアー 当世ナー イハー はやりの廣大寺を

イー サノエーエー ヤレ アーアー ダニ コレワイ

ドウジャナー 不調法ナヨー チョイトハ知ラレド

サノエー アー ヨウヨウ

(注) 後で詞章だけを伺ったおり、終わりの囃し言葉については、次のようであつた。「コナ歌ニ コレワイ ドウジャナー 不調法ナ ワシナレド」。  
また、村上重男氏(M42年生)より教えてもらった詞章を次にあげておく。  
大山お山だいせんから隠岐の島見れば 島が四島よに大満寺 中の小島に長者あり

五箇7

名 称 追い分け  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 村上 シズ M29年生  
八幡スズミ M36年生  
調査員氏名 酒井 董美

へままよ ままよで (が) なしえ ままならぬヨー  
アー ままになる身が持たせとや

ままよ ままよで なぜ ままならぬ  
ままになる身が持たせたや

村上重男氏(M42年生)が述べられた詞章を次に記す。

五箇8

名 称 神楽歌  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 村上 重男 M42年生  
調査員氏名 酒井 董美

へままよ ままよで なしえ ままならぬ

ままになる身が 持た ヤレ シェイヨーオー せたい

(注) アー ドッコイシヨ ドッコイシヨ

(注) 囃しは他の人々が歌う。

へ代(注)しろたゆうしよの太夫衆 神楽 ヤレ して見しやれ

神楽見にこそ わしや ヤレ シェイヨーオー 来たれ

(注) 代II五箇村大字代のこと。  
神楽を見に来ている人が、神楽を舞っている人に向かって歌いかける。

五箇9

名 称 与作(座興歌)  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 村上 重男 M42年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ橋の欄干に腰うちかけて 月星眺めて殿御を待ちる  
さきに見ゆるは与作さん  
お駒じゃないかと まあ よしよし

五箇10

名 称 田植え歌  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 八幡スズミ M36年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ昼飯ひるめしが来たやら 赤い帷子かたひらでよ

ひいらり しやらり 赤い帷子でよ  
へことしや豊年 穂に穂が咲いてヨーオー  
道の小草に米がなる アー ヨイシヨ ヨイシヨ

五箇11

名 称 木挽き歌  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 村上 重男 M42年生  
調査員氏名 酒井 董美

へヤー 木挽き女房になるなよ妹  
木挽きや息引く はよ死ぬる  
へヤー 鋸のこノ粉下ガレヨ 挽キ賃上ガレ  
へヤー 木挽きと ばかにはするな

みふり三度は 米の飯めし アー ドッコイ ドッコイ

五箇12

名 称 松前殿さん(祝い歌、酒盛り歌)  
伝 承 地 五箇村代  
伝 承 者 八幡スズミ M36年生  
村上 シズ M29年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ松前殿さん ヤーレ ヤストコシエーノ ヨーイヤーナー

アー 松前殿さん(は) 鯺にしんのお茶漬け  
アー ヨーイートナー コーレーノ ハララノラー  
ヨーイートコー ヨーイートコナー

都万1

名 称 田植え歌  
伝 承 地 都万村浜那久  
伝 承 者 安部 愛吉 M36年生  
調査員氏名 酒井 董美

へとんとん とんぎりすは 何を持って来たよな  
唐(き)柁(せ)に とかけて 俵持って来たよな  
(注) ここから他の早乙女がつける。

都万2

名 称 亥の子歌  
 伝 承 地 都万村浜那久  
 伝 承 者 安部コツギ M38年生  
 安部 立子 T5年生  
 調査員氏名 酒井 董美

へ亥の子餅 ついて 祝わの婆はばば

鬼よ生め 蛇生じやめ 角つの生えた子生んめ (歌・安部コツギ)

へ亥の子餅 ついて 祝った者は

西も東も 蔵建て 蔵建て (歌・安部立子)

四人の子供が大きな石を藁で縛って家々を回り、門でそれを搗く。後の歌は、家から餅などの祝儀をもらった場合に歌った。

都万3

名 称 木挽き歌  
 伝 承 地 都万村浜那久  
 伝 承 者 安部 愛吉 M36年生  
 調査員氏名 酒井 董美

へヤーレ 木挽き女房になるなよ娘

木挽きや身をめぐ はや死ぬる

都万4

名 称 追い分け  
 伝 承 地 都万村浜那久  
 伝 承 者 安部 立子 T5年生  
 調査員氏名 酒井 董美

へ母が聞かせた幼ないころにヨー

(注1) アー キタサイ キタサイト

習い覚えた隠岐追い分け

(注2) アー ドッコイサト

(注1・2) この雛子は安部コツギさん(M38年生)の歌ったもの。

都万5

名 称 どっさり  
 伝 承 地 都万村浜那久  
 伝 承 者 安部 立子 T5年生  
 調査員氏名 酒井 董美

へだいせん大山お山から隠岐の島見れば 島がよ四島に大満寺

サアー ノーエーエー

中に コレワイ ドウジャナー 小島に ナアーチヨイト

長者ある サアーノーエーエー

詞章だけをうかがったら、次のようであった。

大山お山から隠岐の島見れば 島が四島に大満寺 中の小島に長者あり

都万6

名 称 伊勢音頭(座興歌)  
 伝 承 地 都万村浜那久  
 伝 承 者 安部 千守 M40年生  
 調査員氏名 酒井 董美

へ伊勢は ナアー 津で持つ ナアー 津は伊勢で持つ

アリヤナー コリヤナー  
尾張名古屋は ヤンサー 城で持つ  
アマダマダ ヤートコーシエーノ ヨーイヤナー  
アリヤナー コレワイナー イシエー ナーndeモ  
シエーエー

都万7

名 称 螢狩りの歌(わらべ歌)  
伝 承 地 都万村浜那久  
伝 承 者 安部 千守 M40年生  
調査員氏名 酒井 董美

へほーほー螢来い あっちの水は苦いぞ こっちの水は甘いぞ  
ほーほー螢来い あっちの水は苦いぞ こっちの水は甘いぞ  
ほーほー螢来い

都万8

名 称 手まり歌  
伝 承 地 都万村浜那久  
伝 承 者 安部コツギ M38年生  
調査員氏名 酒井 董美

へこの後ののツヤの木に 雀が三羽 鳩三羽  
一羽の雀が言うことには ここは板屋で狭けれど  
中へこじえんと座らしえて

しつぷり かっぶり 泣かしやんす  
何が難儀で泣かしやんす 何だい難儀なこともない  
わしの弟の千松が 金を掘るやら 掘らぬやら  
一年たつても状が来ぬ 二年たつても状が来ぬ  
三年ぶりの一日に ようやく金を見つけ出し  
さあ 出うかいな さあ 出うかいな

都万9

名 称 木遣り  
伝 承 地 都万村浜那久  
伝 承 者 安部 愛吉 M36年生  
調査員氏名 酒井 董美

へ今日は日もよし 天気もよいし 大神丸の台さげじや  
ヨイトーコ ヨイトーコーナー  
この船がおりれば 万事はお祝い  
ヨイトーコ ヨイトーコーナー

(注) 嘩しは他の人々が歌う。  
これは「船おろし」、つまり進水式のおり、神官が拝み、餅投げが終わって  
から歌うものである。

都万10

名 称 山くずし(盆踊り歌)  
伝 承 地 都万村浜那久  
伝 承 者 安部 立子 T5年生  
安部コツギ M38年生  
調査員氏名 酒井 董美

へここと島前は 目で見りや近い アア ドッコイシヨ  
船で通えば ほど遠い

ア ヤーハートナー ヤーハートナー

ほど遠い アア コレワイナ 船で通えば ほど遠い

ア ヤーハートナー ヤーハートナー

へ瀬の瀬の七瀬のあわび アア ドッコイシヨ

海女が採らなきや 瀬で暮らす

サアー ヤーハートナー ヤーハートナー

ああ 瀬で暮らす アア ドッコイシヨ

海女が採らなきや 瀬で暮らす

サアー ヤーハートナー ヤーハートナー

へ娘島田に蝶々が止まる アア ドッコイシヨ

止まるはずよな ああ 花じゃもの

サアー ヤーハートナー ヤーハートナー

ああ 花じゃもの アア ドッコイシヨ

止まるはずよな ああ 花じゃもの

サアー ヤーハートナー ヤーハートナー

へここは大坂<sup>だいさか</sup> 一人は越さぬ アア ドッコイシヨ

せめて殿御さんに手を引かりよ

サアー ヤーハートナー ヤーハートナー

ああ 手を引かりよ アア ドッコイシヨ

せめて殿御さんに手を引かりよ

サアー ヤーハートナー ヤーハートナー

へ蝶や花やで育てた娘 アア ドッコイシヨ

今日は あなたの手に渡す

ヤーハートナー ヤーハートナー

ああ 手に渡す アア ドッコイシヨ

今日は あなたの手に渡す

ア ヤーハートナー ヤーハートナー

### 都万11

名 称 松前殿さん(松前木やり)

伝 承 地 都万村油井

伝 承 者 藤田 シナ M41年生

調査員氏名 酒井 董美

へ松前殿さん ヤーレー ヤットコセー ヨーイヤナー

ハアー 松前殿さん 鯨<sup>にしん</sup>のお茶漬け

アー ヨーイートーコーナー ソーレーモ

ハララガリヤー ヨーイートーコー ヨーイートーコーナー

へ千代に八千代に ヤーレー ヤットコセー ヨーイヤナー

アーアー 千代に八千代に苔むすまでも

アー ヨーイートーコーナー ソーレーモ

ハララガリヤー ヨーイートーコー ヨーイートーコーナー

へ笑い笑い入れるは ヤーレー ヤストコセー ヨーイヤナー

アア 笑い笑い入れるは 大黒さんの賽銭箱<sup>せんげん</sup>

アー ヨーイートーコーナー ソーレーモ

ハララガリヤー ヨーイトーコ ヨーイトーコーナー

神社の屋根葺き替えの餅を、大八車に入れて引っぱるおりに歌われる。十人も二十人も引っぱり、歌い踊りつつ引き出す。そして、着いたところで餅まきをする。

都万12

名 称 田植え歌  
伝 承 地 都万村油井  
伝 承 者 藤田 シナ M41年生  
調査員氏名 酒井 美董

ハアー 道端のたけのこと 人の小娘はヨー

惜しんでも惜しまれぬ 人の小娘はヨー

ハアー とんとん とんざりすが 何を持って来たぞや

唐柑にとかけて 俵持<sup>たあち</sup>って来たぞや

短い歌でも、何度もくり返して歌った。

都万13

名 称 どっさり  
伝 承 地 都万村油井  
伝 承 者 山田 勇 T2年生  
調査員氏名 酒井 董美

ハかのうたヨー かのうたヨー 思うことかのうた エー

鶴がノー 御門に巢を エー 掛けた エー

サノーエー エエエー コレワイ ドウジャノー

御繁盛と ナーエー ホンニ 巢を掛けた

サ メデタイコンダガ ノーエー

都万14

名 称 磯節(座興歌)  
伝 承 地 都万村油井  
伝 承 者 織田 競吉 S3年生  
調査員氏名 酒井 董美

ハ京の三十三間堂の 棟木<sup>むなぎ</sup>の由来

曳けよ 住吉街道筋を ヨイトナー ヨイトナー

木遣り音頭で アノ 曳きあげた

都万15

名 称 ハイヤ節  
伝 承 地 都万村油井  
伝 承 者 山田 勇 T2年生  
調査員氏名 酒井 董美

ハイヤーナー ハイヤー

権兵<sup>ごんべ</sup>のかか 曲がり金 飲んだナー

のどにナー 立てずとサー よう飲んだナー

詞章だけ伺ったら、次のようだった。

ハイヤーナー ハイヤーナー

権兵のおかか 曲がり金 飲みやたで

のどに立てずと まあよう飲んだ



海士1

名称 イッチャ節 (ホーラエッチャ)  
(祝い歌)

伝承地 海士町豊田  
伝承者 藤田 忠弘 S10年生  
調査員氏名 淀 重美

へ 惠比須 大黒 出雲の神は 西と東の ヤーレー 守り神

ヨイ ヨイ ヨイ ヨイ ヨイ ヨイ

アラリヤン コリヤリヤン ヨイ ヨイ ヨイ

ハー ヨーイトセー

へ ここのお家は もとから繁盛 今は若代で ヤーレ

なお繁盛

ハアー ヨーイヨイ ヨイ ヨイ ヨイ

アリヤリヤン コリヤリヤン ヨイ ヨイ ヨイ

ハー ヨーイトセー

(詞章のみ)

めでためだの若松さまよ 枝も栄えて葉も茂る

ここのお背戸の三葉のよのき <sup>(せ)</sup>よの実ならず金になる

高い山から谷底見れば 瓜やなすびの花ざかり

(注) よのき 榎のこと。

海士2

名称 おけさ (労作歌)

伝承地 海士町中里  
伝承者 村上重太郎 M42年生  
調査員氏名 淀 重美

へ おけさヨー おけさ

正直なら そばにも寝しょうが ヨーイ

お主や蛸の性で サーマー 寝せられぬヨ

へ とどけヨー とどけ 末までとどけヨー とどけ とどけ

末は鶴亀 サーマー 五葉の松ヨー

海士3

名称 隠岐追分

伝承地 海士町中里

伝承者 横山イツ子 T14年生  
調査員氏名 淀 重美

へ 駕籠で行くのは 助九郎じゃないかヨー

院 <sup>えん</sup>のお召しか 森の里

へ 森の南天 中良 <sup>なから</sup>の蘇鉄ヨー 大江 表の小庭松

(注) 助九郎 後鳥羽上皇に仕えたこの地の豪族、村上助九郎のこと。 院 後鳥羽上皇のこと。 森 村上家の屋号。 中良 中良 海士町大字崎の渡辺家

の屋号。 大江 知夫村大字大江。 表 知夫村の渡部家の屋号。

## 海士4

名称 シュウガイナ (踊り歌)  
 伝承地 海士町北分  
 伝承者 中山 カネ M42年生  
 調査員氏名 淀 重美

へしゅうがい習い 習いたかござる

酒の四、五丁も持てござる シューガイナ  
 酒の四、五丁も持てござる シューガイナ

## 海士5

名称 相撲取り節  
 伝承地 海士町北分  
 伝承者 中山 カネ M42年生  
 調査員氏名 淀 重美

へハアー かいかいづくしを申して見ればヨ

朝も粥なら晩も粥 茶粥しらに白粥 雑炊の粥

とろつと煮えたがめのはの粥

娘 お年はなんほかい 年は十七八なるかい

わたしはあなたに惚れたのかい

惚れてもあなたはいやなのかい 岸に願書したたを認たみよかい

島根県から岡山県まで逃にぎようかい

ついてまた行こうかいな どうしようかい

やめにしておこかいな

(注) めのはわかめのこと。

(詞章のみ)

朝間はよから川上見れば お花小女郎 菜を洗う  
 馬乗り旦那が通りかけ この子よい子だ 器量がよい  
 もう少し太けりや妻にしょに

これこれ旦那よ 何をいう 背は低くても 葛葛  
 下からもくれついたら

どうしても こうしても離りやせぬよ

## 海士6

名称 しげさ節 (祝い歌)  
 伝承地 海士町多井  
 伝承者 野沢 兵十 M37年生  
 調査員氏名 淀 重美

へしげさ しげさと声がする シーゲサー

しげさの御開日 山里越えても 拝みとや

オーサ ソーダ ソーダ 拝みとや シーゲサー

しげさの御開日 山里越えても 拝みとや

## 海士7

名称 じょんがら節  
 伝承地 海士町多井  
 伝承者 木野谷花子 T10年生  
 調査員氏名 淀 重美

へハアー 明けてめでたい元日の朝 注連しめのない出し七五三ヨ

ハ一 またも間へ もろむぎ挿して

またも間へ譲り葉を挿して

ハ一 またも間へ替え木の松を 二つ二日の夢見のよさは

ハ一 明けの方から七福神が 福を授けにおいでるさまは

ハ一 三つ 見たように違いはないよ

四つ よろずな宝を求め

ハ一 五つ いつまでも この家の宝

六つ むつまじ この家の家内

ハ一 七つ 何かの商いのよさ

八つ 山ほど銭金もうけて

ハ一 九つ 倉々に宝を積んで 十で 年々身上が勝る

ハ一 身上勝れば長者で暮らす 孫子榮えて末繁昌やれ

(注) もろむぎ＝裏白のこと。

海士8

名	称	手まり歌
伝承地	海士町保々美	
伝承者	井上 ヨシ	M35年生
調査員氏名	淀 重美	

へこっから上の川上の おたみ長者の乙姫が

一つで乳を飲みそめて 二つで箸を持ちそめて

三つや四つは遊ばしえて 五つになるから管をかく

六つで木綿をひきそめて 七つで機を織りそめて

八つで約束しておいて 九つこなたにもらわれて

十で殿御の持ちはじめ 十一なるとき そのときに

帷子織れとの仰せあり 芋んで紡いで棹にかけ

棹にかけたはよけれども 綜の返しをまだ知らぬ

お姑さんにと手をついて 教えてくださいお姑さん

産んだ親さえ教えのに わたしが何しに教えよかい

小姑さんにと手をついて 教えてください小姑さん

お姑さんさえ教えのに わたしが何しに教えよかい

殿御さんにと手をついて 教えてください殿御さん

人の嫁御になるものが 綜の返しを知らぬとは

綜竹文竹でどやさされて そこでねえさん わんと泣き

奥の一間にかけこんで こじゃんと結つたる高島田

根からさっぱり切り払い 殿御の膝にと投げつけて

わたしや帰れば花が咲く 後は乱れて妻がない

サア 妻がない

(注) 管をかく＝「かく」は「糸をつないで組み立てる」の意。  
どやさされて＝「たたかかれて」の意。

海士9

名	称	船おろし
伝承地	海士町保々見	
伝承者	井上 ヨシ	M35年生
調査員氏名	淀 重美	

へドリーツトコードー

今日は日もよい 天気もよいが 天神丸の進水式だよ

ヤーレー ハー ヤストコセー ヨーイヤナー

この船 重たい 重たいはずよな 千石 万両の宝船だよ

ヨーイトナー ハラエーエモ ハララガ

ドットコシエ ヨーイトコ ヨーイトコーナー

ハー エンヤー エンヤー エンヤー エンヤー

海士10

名 称 お駒節

伝 承 地 海士町保々見

伝 承 者 松下 アヤ M41年生

調査員氏名 淀 重美

お駒がわが家を発つときにや チリトテチン

二人の子供をちよいと抱き上げて

これがこの世の暇乞い 成人しんせいせよと なあ よし よし

橋の欄干に腰うちかけて 月星眺めて殿御を待ちる

向こうに見えるは与作さん お駒じゃないかと

なあ よし よし

海士11

名 称 土方歌

伝 承 地 海士町保々見

伝 承 者 徳山 千代 M37年生

調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

海士方殺すにナー アラ 刃物はいらぬ

雨の十日もナア ヤレ ヨイサデ 降りや死ぬる

ア 深いコトナイカラ ドントハマレ

海士12

名 称 田植え歌

伝 承 地 海士町保々見

伝 承 者 徳山 千代 M37年生

川西 ツギ M32年生

井上 ヨシ M35年生

調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

イヨイ 朝はか音をやれ ヨーオ 鳶がやおに鳴いたとな

ヨヨイ 早乙女さうとめの上手じょうずよ ヨーオ 下がるこそ上手よ

ヨヨイ 嫁をしょしるなかにに ヨーオ 縄で藁わら忘れた

ヨヨイ なぎがなけらにや とつばなせ

ヨーオ ばばの言ことばやるももつともだ

ヨヨイ 馬ま鋏くわつきよしえて ヨーオ こしをあらあらと

ヨヨイ 編み笠あまがさのちょんざりが

ヨヨイ わしに女房にやうぼうになれというた

ヨヨイ 腰こしが痛いたけりや のおさえて

ヨーオ のおさえて のおさえて

イヨイヨイ 日は何時なにどきだ イーヨ 七つななつの下がり

ヨヨイ 日ひぐらし鳥とりが ヨーオ 笠あまがさのはた回る

へイーヨーオ 上がりとうて しょうがない

ヨーオ 恥じのこたあ思わぬ

田植え歌には、歌う順が決まっているものがあり、ここにあるのもその順に従っている。特にはっきりしているものとして、最初の「朝はか音をやれ」は、田植えの始まりに歌い、「腰が痛けりゃ」は休憩の合図で、また、「上がりとうて」は田植えの終わりに歌われる。

なお、歌は、音頭取りの早乙女が前の節をまず歌い、他の早乙女が後半の節をつける形で歌われる。

海士13

名 称 コレワイナ (祝い歌)

伝 承 地 海士町保々見

伝 承 者 徳山 千代 M37年生

調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へ届け届けよ ナアー 末まで ヤアーアー 届けナー

サー コレワイナー アー

末はヨー 鶴亀 ナアー 五葉の松 ヨーイ

へおまえ百まで ナアー わしや九十<sup>くじゅう</sup> ヤアーアー

九までナー

サー コレワイナー

アー 共にヨー 白髪しらげのナーア 生えるまでヨー

海士14

名 称 正月つあん

伝 承 地 海士町保々見

伝 承 者 井上 ヨシ M35年生

調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へ正月つあん 正月つあん どこまでござった

三度<sup>みたべ</sup>のかべまで 酒飲み 飲み 餅食い 食い ござった

(注) 三度||隠岐郡西ノ島町の浦郷地区にある集落名。

海士15

名 称 手まり歌

伝 承 地 海士町保々見

伝 承 者 井上 ヨシ M35年生

調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へ子供衆 子供衆 花折り行かあや

花は何花 どこ花だ 地藏ぢぢの前の桜花

一本折っては ばんだじお 二本折っては ばんだじお

三枝が境で日ひが暮れて

兄あにの紺屋こんやで宿取らか 弟あにの紺屋こんやで宿取らか

兄あにの紺屋こんやで宿取って 朝起きて沖見れば

漁師いしやの子供が船ふねばた踏ふまえて 帆かをかけて

やっさほっさで ちんこのまんこの回船かいせんだ 回船かいせんだ

海士16

名 称 二つ拍子(益踊り歌)  
 伝 承 地 海士町保々見  
 伝 承 者 徳山 千代 M37年生  
 井上 ヨシ M35年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

〱二つ拍子ひよし 手拍子 足が足拍子 手が手拍子

〱松原 西や 女郎所じよらどころ あいの北分は下司所※げす

(注) ※で他の人々がつける。松原、西、北部は海士町にある地区名。詞章だけをあげておく。

〱二つ拍子 手拍子

〱松原 西や 女郎所 あいの北分は下司所

〱下司の子 下司こそよけれ 揚子くわえた殿御やら

〔「殿御やら」を「となえやら」とも言う〕

〱揚子くわえて 手にたかさげて 城を回るは わが殿よ

〱殿御の城番だやら 城の太鼓の音ねのよさよ

〱音ねのすりゃ 鼓つづみの音する 聞けば殿御の声もする

〱恋すりゃ死ぬると言うたね 身こそやつれて死にはせぬ

海士17

名 称 麦搗き歌  
 伝 承 地 海士町保々見  
 伝 承 者 井上 ヨシ M35年生  
 川西 ツギ M32年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

〱ハア 麦搗きや 何よりこわい

アラB やめにして寝るが楽

寝るは楽A 何よりこわい

アラB やめにして寝るが楽

〱アア 行きやるか いつもどりやるか

アラB 五月の中のころ

中ごろでA いつもどりやるか

アラB 五月の中のころ

(注) Aの詞章は音頭取りが歌う。Bの詞章は他の人々がつける。

海士18

名 称 子守り歌  
 伝 承 地 海士町保々見  
 伝 承 者 徳山 千代 M37年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

〱からす からす どこ行った わしや京へ麦刈りに

なんほほど刈ってきたほとけ 千石 万石 刈ってきた

仏の前で子を生んで

洗うこともできず すすぐこともできず

お寺の茶柄杓ちやがしやくで ちよちよとすすいで

油の火であぶった ねんねんや ねんねんや

海士19

名 称 ヨイヨイ(祝い歌)  
 伝 承 地 海士町北分  
 伝 承 者 宇野 ツギ T3年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へうれし めでたの若松さまは エー  
 枝も栄える 葉もし エヤー 茂る  
 葉も イヤー 茂る ナーアー ヨイヨイ 葉も茂る  
 枝も栄える 葉もし エヤー 茂る  
 この歌は、祝言の席などで歌う。

海士20

名 称 キンニヤモニヤ(座興歌)  
 伝 承 地 海士町北分  
 伝 承 者 宇野 ツギ T3年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へ清が機織りや キンニヤモニヤ あで竹 へ竹  
 殿に來いとの キンニヤモニヤ まねぎ竹  
 クラゲ チャカポン 持テコイヨ  
 へ届け 届けよ キンニヤモニヤ 末まで届け  
 末は鶴亀 キンニヤモニヤ 五葉の松  
 クラゲ チャカポン 持テコイヨ

海士21

名 称 米とぎオワラ  
 伝 承 地 海士町北分  
 伝 承 者 宇野 ツギ T3年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へ届けヤー 届けヤ 末まで届け 末はナー 鶴亀ナー  
 オーワラー 五葉の松  
 へうれしヤー めでたのナー 若松さまよ  
 枝もヤー 栄えてナー オーワラー 葉も茂る  
 へこのナー お家はナー 元から繁盛  
 今はナー 若世でナー オーワラー なお繁盛  
 詞章のみうかがったもの。

踊り踊るなら 品しなよく踊れ 品のよいのが こちの嫁  
 祝いの席の終わるころ、米をといで本膳を出すという意味をこめて、次のよ  
 うな所作とともに歌が出る。柄杓で水をついで米にかけ、米を洗ってソウキに  
 入れ、それを臼の上にあげる。そして、柄杓を洗って収め、ソウキを桶に乗せ  
 て帰る所作をするのである。

海士22

名 称 海士追分(祝い歌)  
 伝 承 地 海士町北分  
 伝 承 者 宇野 ツギ T3年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

へハー 沖じゃ寒かる エーエー 着て行かしゅんしえ  
 わしの部屋着の この小袖

海士 23

名称 伊勢音頭(祝い歌)  
 伝承地 海士町北分  
 伝承者 宇野 ッギ T3年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

伊勢は ハナー 津で持つナー 津は伊勢で持つ

ハ ヨイナー ソコナー

尾張名古屋はナー ヤーオサー 城で持つ

ササー ヤートコシエーノー ヨーイヤナー

ハーリヤナー コレワイナー イシエー

ナンデモシエー

海士 24

名称 磯節(座興歌)  
 伝承地 海士町北分  
 伝承者 宇野 ッギ T3年生  
 調査員氏名 淀 重美・酒井 董美

門松ばかりが 松ではないよ

朝に待つ 昼に待つ アラ 晩に待つ

わしとあなたの新婚旅行の アノ 月を待つ

西ノ島 1

名称 田植え歌  
 伝承地 西ノ島町赤之江  
 伝承者 扇谷 ゲン M36年生  
 調査員氏名 松浦 康磨・酒井 董美

花は咲けども遠山とおやまに咲くよ 人が取るやら 盗むやらないわ

花は二度咲く 若さは一度よ

若さ恋しや 二度とないようよ

田植えた晩には しえのもんだとな

抜きや ピョーン 挿しや ポーン しえぬもんだとな

田植えを備たら 下手備たげな

下手も下手だよ 鍋のへた備った

十九橘はたち 二十は煮花 明けて二十一や しおれ花だよな

二十にじゅうや二、三で しおれるなるばよ

花の盛りは ないものだよな

西ノ島 2

名称 山くずし(盆踊り歌)  
 伝承地 西ノ島町赤之江  
 伝承者 小桜 シゲ M42年生  
 調査員氏名 松浦 康磨・酒井 董美

ヤーレ 山崩しえ ハラシエー 山を崩して田にしましよ

サアー ヤーハートナー ヤーハートナーイ

ことしやよい年 穂に穂が咲いて ハラシエー

道の小草も 米がなる

サアー ヤーハートナー ヤーハートナーイ

おまえ百まで わしや九十九まで ハラシエー

共に白髪しらげの生えるまで



サアー ヤーハートナー ヤーハートナーイ

ハ届け 届けや 末まで届け ハラシエー

末は鶴亀 五葉の松

サアー ヤーハートナー ヤーハートナーイ

ハ親を大切<sup>たいしえつ</sup> 黄金の箱に ハラシエー

せめて持ちたや いつまでも

サアー ヤーハートナー ヤーハートナーイ

(注) 嘩しは他の人々がつける。

西ノ島3

名 称 さかた(盆踊り歌)

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 大西 トラ M35年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ハ親をナー 大切 ヤツソコナイ

※黄金の箱に入れて サーサイリヨガ 入れて

ヤー 持ちたい いつまでも トシエー

ハ親のナー 言うことナー ヤツソコナイ

※なすびの花は 千に サーサイリヨガ

千に ヤー 一つも仇がない トシエー

(注) ※印以下は他の人々でつける。

西ノ島4

名 称 加 茂(盆踊り歌)

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 扇谷 リエ M36年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ハ加茂がよいかや 坂田がよいか

※加茂も坂田も まだ加茂がよい

ハ盆の十六日や めでたい月で

※子持ちかからが サマ 出て踊る

ハここは大坂<sup>だいさか</sup>で一人で越しえぬ

※待ちて殿御に サマ 手をひかりよ

(注) ※印以下は他の人々でつける。

西ノ島5

名 称 イサノエ(盆踊り歌)

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 扇谷 リエ M36年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ハハアー イサノエーヤー

※盆だ盆だと待ちるときや花よ ノーエー

※井村お山のもやり柴買いに ノーエー

ハイサノエー

親と兄弟 鏡とさまよ ノーエー

※見ても見飽かぬ ノーヤリー 末飽かぬ ノーエー  
ㄨイサノーエーヤリー

※かわいがらされ わが子の嫁を ノーエー  
※かわいわが子も ノーヤリー 人の嫁 ノーエー  
(注) ※印以下は他の人々でつける。

西ノ島6

名 称 島後シヨウガエナ (盆踊り歌)  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 大西 トラ M35年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ㄨシヨガエナー シヨガエナーも 習いときやござる

酒の四、五升も持てごしやれ 持てごしやれ

酒の四、五升も持てごしやれ

ㄨ酒の四、五升は いとやすけれど どうで店屋に酒がない

酒は酒屋に よい茶は茶屋に 女郎は大坂の新町に

西ノ島7

名 称 ショーヤリ (盆踊り歌)  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 小桜 シゲ M42年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ㄨショーヤリー ショーヤリヤ

※むぎしま ショヤリ もろぎやにだんの さようもんめ  
※さようもんめ ころびや にだんの さようもんめ

ㄨ盆の十六日や めでたい月で 子持ちかからが出て踊る

※出て踊る 子持ちかからが出て踊る

ㄨわしの道楽 呷る入れて 叱る親衆に負わせたい

※負わせたい 叱る親衆に負わせたい

ㄨ今夜ここに寝ようか 青田の中に 青田 田の中 蛙枕

※蛙枕 青田 田の中 蛙枕

(注) ※印以下は他の人々でつける。

西ノ島8

名 称 なしえま (盆踊り歌)  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 大西 トラ M35年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ㄨなしえまま なしえままならぬ

※ままになる身を ヤレヨー 持たせたや

なしえままならぬ

※ままになる身を ヤレヨー 持たせたや

ㄨ寺の玄関先 蜂が巣をかけて

※和尚出りや刺す ヤレヨー もどりや刺す

蜂が巣をかけて

※和尚出りや刺す ヤレヨー もどりや刺す

〱赤之江よいとこ朝日を真受けお

〱山嵐がヤレヨ※ー そよそよと

朝日を真受け お山嵐※が ヤレヨー そよそよと

(注) ※印の詞章は他の人々でつける。

「お山嵐」の「お山」は焼火山を指す。この山に焼火神社がある。

西ノ島9

名 称 オシエバサ (盆踊り歌)

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 小椋 シゲ M42年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

〱オシエバサ オシエ オシエ 押さねば行かの

〱オシエーバサー

〱ハラ 押しえばさ 港が ヤンサー 近くなる

〱オシエーバサ

〱ハラ 人の ナー 算盤 内緒の馴染なじよみ オーシエバサー

〱ハラ そばにナー おれども ヤンサ よう知られぬ

〱オシエバサー

〱ハラ 虎は ナー 千里しえんの藪さよ越すに オーシエバサー

〱ハラ 障子一重がナー ヤンサー ままならぬ

〱オシエバサー

(注) ※印以下は他の人々がつける。

西ノ島10

名 称 ヨーホイ (盆踊り歌)

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 扇谷 リエ M36年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

〱ハアー ヨーホイ ヨーホイ ヨーイヤナー ヤー※トセー

〱盆の十六日や めでたい月で ハアー ヤー※トセー

子持ちかからが アノヤ 出て踊る

〱サア ヨーイ ヨーイ ヨーイヤナー

〱かわいがられて あと憎まれりや ハア ヤー※トセー

〱かわいがられた ヤンサ 甲斐がない

〱サアー ヨーイ ヨーイ ヨーイヤナー

〱おまやあ どこかの言葉が違う ハア ヤー※トセー

阿波か 讃岐か ヤンサ 広島か

〱サア ヨーイ ヨーイ ヨーイヤナー

(注) ※印の囃しは他の人々でつける。

西ノ島11

名 称 正月つあん

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 大西 トラ M35年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

〱正月つあん 正月つあん どけまでござった

〱三度の またべの かどまでござった 土産は何かの

椎茅 勝栗 弘法大根 神葉草しょうそう  
徳利とくに酒を入れ 重箱に餅を入れ  
トックリ トックリ ござった

西ノ島12

名 称 お恵比須さん(行事歌)  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 扇谷 ゲン M36年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

へお恵比須が岩の ヤーレー 木蔭で昼寝する アアコリヤ

ジュンニコイー ジュンニコイー 鯛を ヤーレー  
釣るような夢を見た コリヤ ジュンニコイー

ジュンニコイ 鯛を ヤーリー 釣るような夢を見た

コリヤ ジュンニコイー

※ ハアー 順に來い アア 養子に來い

アア 養子に來るから案ずるな

へ大黒は蔵の ヤーレー 木蔭で昼寝する

アア コリヤ ジュンニコイ ジュンニコイー

俵を ヤーレー 積むよな夢を見た アアコリヤ

ジュンニコイ

※ ハアー 順に來い アア 養子に來い

アア 養子に來るから案ずるな

へうぐいすが 梅の ヤーレー 小枝で昼寝する

アアコリヤ ジュンニコイ

※ ハアー 順に來い アア 養子に來い

アア 養子に來るから案ずるな

ジュンニコイー 花の ヤーレー 咲くよな夢を見た

アアコリヤ ジュンニコイ

(注) ※印以下の囃しは、他の人々でつける。

これは一月二日の「松直し」や、一月十日の「十日恵比須」の際の宴席で歌われたものである。関連する詞章がまだあった模様。

西ノ島13

名 称 神楽しえぎ歌(祭りの道中歌)  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 大西 トラ M35年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

へおまやあ 百まで わしや わしや九十九まで

ともに白髪しろ髪の生え ヤレヨー るまで

※ ヨー ヤッサ ヤッサ ヤッサ ヤッサ

へ空の星さよ 数 かぞ かぞえてヨー みたが

ハアー 四千ししえんここのつ 八つ ヤレヨー 一つ

※ ハアー ドッコイ ヤッサ ドッコイ ヤッサ

(注) ※印の囃しは他の人々でつける。

西ノ島14

名 称 手まり歌  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 扇谷 ゲン M36年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

へおしろべさん ほんさまさん

ほんさま在所のお留がお城で おぼこが いつふき

いっさま どん しなびか どん さいたか どん

どんだんがみさん どのがみさんや 格子のばに百二十四

ひーにほー みーにーよー いつもの姉さんお供がないか

お供 たんばに つけたらさまへ

お客が土産にや何々もろて 一に笄 二にやまた簪

三に挿し櫛 忍びの枕 六番簪 六番まえとし収めて

七番さいの帯 さいの帯 帯に短し たすきにや長し

正月は姉が手まりを 二階座敷でついて遊ぶは

本正月 本正月

(注) 五番ではなく六番と歌われている。本来「五」の語句に当たるところなので、演唱者の歌い違いかと思われる。

西ノ島15

名 称 手まり歌  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 扇谷 ゲン M36年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

へ一本目には池の上人 二本目には新田義貞

三本目には真田幸村 四本目にはシイ法匠衛

五本目には後藤まさつら 六つ昔の弁慶よ

おかじまなざるは牛若丸よ 七本目にはしちよせいこうで

蜂巣が減ぶ 九つ小松の重盛いこうで 十で徳川家康

ここの近年 むししょうの將軍 祝い収めて権現さまよ

白旗なめこは葵の御紋 又七戦さに負けましょか

さあ 負けましょか

西ノ島16

名 称 手まり歌  
伝 承 地 西ノ島町赤之江  
伝 承 者 扇谷 ゲン M36年生  
調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

へおしろべさん ほんさまさん

ほんさま大将のお留がお城で お駕籠がいつふけ

いっさま どん しまびが どん さいたか どん

どんだん がめさん 泥亀さんや 格子のばに百二十四

ひーにやふー みーにーよー いーつにむう ななにやー

このにとお とんとんたたくは だれさまだ

新松紺屋の奥さんだ 奥さん 何しにおいでたか

雪駄が替わって替えに来て あなたの雪駄はどんなんだ

お紺と紫 あいびろど あいびろど

芋 芋 芋 芋安い 小芋が一升でなんぼする  
 十四文よんもんでございます もひとつ負からか ちゃからかほい  
 あまふらし おじえんが枕まくらに血がついて  
 血ではないさな 紅べんださな こな婆さん 縁から見れば  
 手まりや ようつく あがらな言葉  
 あがる言葉のうれしけれども ここのごまがた  
 読んでごしえ 書いてごしえ

西ノ島17

名 称 相撲取り節(祝い歌)  
 伝 承 地 西ノ島町赤之江  
 伝 承 者 小桜 シゲ M42年生  
 調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ハハアア こここのまた奥山の そのまた奥山にヨ  
 ハアア 鹿が三匹 鳴きなんす  
 かんじが強うて鳴くかいな 腹がひもじゆて鳴くかいな  
 親に恋しゆうて鳴くかいな かんじが強うて鳴くじゃない  
 親に恋しゆうて鳴くじゃない 腹がひもじゆうて鳴くじゃない  
 こここの奥の その奥に 六十余りの老人が  
 肩には鉄砲てつぱうふりにない 腰には弾筒たまづつ一升ずつ  
 これがおぞうて鳴くわいな 助けてください 山の神  
 助けてくれれば礼をする 岩屋を崩くづいて宮建てて  
 宮の回りにごままいて 十二の燈籠とぼします

またえどころがしおらしや 助けてください  
 ノウ ホホー 山の神ヨヨヨイコラ ヨイコラ  
 (注)※印の囃しは他の人々でつける。

西ノ島18

名 称 追い分け  
 伝 承 地 西ノ島町赤之江  
 伝 承 者 扇谷 信子 T14年生  
 調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

ハうれし めでたの 若松さまよ コラサイ  
 枝も栄える 葉はも繁さかる ア ヤッサホー ヤッサホー  
 ハ母が聞かせた 幼いころにヨー ヤッシヨ ヤッシヨダ  
 習い覚えた この追い分け  
 ハどうか親さん ない子じやと思もて  
 ア ヤッシヨ ヤッシヨデ  
 捨てて添そわせてくださいやんせ  
 ハラ ヤッシヨ マタシヨ キタコラサイ  
 (注)囃しは他の人々でつける。

西ノ島19

名 称 伊勢音頭  
 伝 承 地 西ノ島町赤之江  
 伝 承 者 小桜 シゲ M42年生 他  
 調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

へ伊勢はナー 津で持つナー 津は伊勢で持つ

ア ヨイナー ソーコーナー

尾張名古屋は ヤンサー 城で持つ

ヤサー ヤートコーセノー ヨーイヤナー

アーリヤリヤ コレワイナー イセー ナンデモーセー

ア ヨイサコラー ヨイサコラー

へおまやナー 百までナー わしや 九十九まで

ア ヨイナー ソーコナー

ともにア 白髪のナー ヤンサー 生えるまで

マダマダ ヤートコーセノー ヨーイヤナー

アーリヤリヤ コレワイナー イセー ナンデモセー

ア ヤンサコラー ヤンサコラー

### 西ノ島20

名 称 亥の子搗きの歌

伝 承 地 西ノ島町赤之江

伝 承 者 松浦 康麿 T9年生

調査員氏名 松浦 康麿・酒井 董美

(餅やお金などをくれた家へ)

へ亥の子餅や搗きやらんか

搗き手がなけらにや 搗きましょか

へーとんだ はらとんだ

ここの父とつあん ぼくらになーれ ぼくらになーれ

(何もくれないところへ)

へ亥の子餅や搗きやらんか

搗き手がなけらにや 搗きましょか

へーとんだ はらとんだ

ここの父とつあん 貧乏になれ 貧乏になれ

子供たちが旧暦十月の亥の日、亥の子搗きをして家々を回ったが、この歌はそのおりに歌われたものである。

知夫1

名 称 しげさ節(踊り歌)

伝 承 地 知夫村仁夫

伝 承 者 中本 マキ M39年生

調査員氏名 長畑比古五郎

へ蝶やとんぼや きりぎりす

山で お山で鳴くのは 鈴虫 松虫 くつわ虫

オオサーソーダヤーレー きりぎりす

山で お山で鳴くのは 鈴虫 松虫 くつわ虫

知夫2

名 称 塩茶(座興歌)

伝 承 地 知夫村仁夫

伝 承 者 中本 マキ M39年生

調査員氏名 長畑比古五郎

へ沖の サー 暗いのに ナーヨー

とま  
苦取れ 取れと オーニーサイー  
苦が取らりよか ハヤシノヨイヤナーカーナーサー  
ヨーイーヤーナー 濡れ苦 アアー が サイー  
シオチャデ ガンブリ

知夫3

名 称 おわら(座興歌)  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎

へおわら ヤーハレーアー 行きやるか いつもどりゃんす  
おそし ナーハイアー 四月の オワテ  
なかばごろオイ

知夫4

名 称 伊勢音頭(座興歌)  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎

へ伊勢は ナーエー 津で持つ ナーエー  
津は伊勢で持つ ヨーイーナーソーコナー  
尾張名古屋は ナーア ヤンサー 城で持つ  
マダマダ ヤートコシエノ ヨーイヤナ

ハリヤリヤ コレワイナー イセイ ナンデモセー

知夫5

名 称 キソン(盆踊り歌)  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎

へぎそん殿かや イナーアー アイ ナーヨー  
ハー ヤーレ コモ あげにゃ伊達男よ ホーヨーイー

知夫6

名 称 おさか(盆踊り歌)  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎

へおさか  
大坂川口の でんだと鳴るが ハアー  
鳴るが芝屋の寄しえ太鼓  
ヤレ 寄しえ太鼓 鳴るが芝屋の寄しえ太鼓  
(注) 大坂Ⅱ大阪 芝屋Ⅱ芝居



知夫7

名 称 神楽歌(地搦ぎ歌)  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 長畑比古五郎 T10年生  
調査員氏名 長畑比古五郎

〱このお家は 元からヨ一繁盛  
今は若代で なお ヤレ 繁盛

知夫8

名 称 田植え歌  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎・酒井 董美

〱田植えの上手は すぎるこそ上手よ  
〱今朝歌た鳥は よう歌う鳥だの  
〱この田に千石もできるよにとよんだの  
〱ゆうべの夜這い人は そそくさな夜這い人  
枕こにつまづいて まらざいたとな  
〱今夜 ここに寝うや 青田の中に 青田 田の中 土手枕

知夫9

名 称 ショーガйна(盆踊り歌)  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎・酒井 董美

〱しょうがい婆 焼き餅好きで 今朝の茶の子に 百七つ

ショ一ガイナーエー 百七つ  
今朝の茶の子に 百七つ ショ一ガイナーエー

知夫10

名 称 正月さん  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎・酒井 董美

〱正月さん 正月さん どこまでござった 三度の端まで  
削り箸 餅よ挿いて ドンブリ カンブリ ござった

(注) 三度一隅岐郡西ノ島町浦郷地区にある集落名。

知夫11

名 称 亥の子の歌  
伝 承 地 知夫村仁夫  
伝 承 者 中本 マキ M39年生  
調査員氏名 長畑比古五郎・酒井 董美

〱亥の子の晩に 祝わぬ者あ

蛇生め 子生め 角の生えた子生め  
旧暦十月の亥の日、子供たちが石を縄で結わえて、それをドスンドスンと搦ぎながら歌って来た。

知夫12

名	称	追い分け
伝承地		知夫村仁夫
伝承者		中本 マキ
調査員氏名		M 39年生 長畑比古五郎・酒井 董美

へ 元日の エー 松の前から エーエー

夜がほのぼと エーヨーホイー

笑い顔する ヨーホイ 福の神

島根県の民謡

昭和六十一年三月三十一日

発行 島根県教育委員会

印刷 株式会社 報光社  
平田市平田町

これは、発行者の了解を得て当協会が増刷・頒布するものである。

島根県文化財愛護協会